

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第520集

よしだ だて
吉田館遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

2008

岩手県二戸地方振興局土木部
財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

吉田館遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査



吉田館遺跡全景（東上空から）

＊安比川対岸の高台が浄法寺城



吉田館遺跡 調査区全景



上段平場から浄法寺城（左奥）を望む

※中央遺量は稲庭岳



S D02虎口跡とS A01門跡



SC01平場（上段）のSD01空堀跡と柱穴群



SF01切岸跡・SD04空堀跡・SC02平場（下段）



S D04空堀跡 堆積土断面



S I 11竪穴住居跡 (縄文時代後期後葉)

序

岩手県には旧石器時代から近代までの数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しており、岩手県教育委員会のまとめではその数9,000箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護・保存していくことは、私たち県民に課せられた重責な責務であります。一方、豊かで快適な生活環境を実現するための地域開発もまた、県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和のとれた施策が今日の課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターはその前身である財団法人岩手県埋蔵文化財センターの創設から数えて30周年を迎えましたが、この間、岩手県教育委員会の指導および調整の下、埋蔵文化財保護の観点から、開発事業によりやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業に関連して、平成18年度に発掘調査を実施した二戸市浄法寺町に所在する古田館遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、中世の城館に伴う複数の平場・空堀・切岸・虎口・土橋などの普請跡、掘立柱建物跡や竪穴建物跡などの作事跡が検出されるとともに、中国産磁器や国産陶器、中国銭や模倣銭など中世の遺物が出土しました。特にも館跡の中心部分と推測される平場から多数の柱穴が検出されたことから掘立柱建物群の変遷が想定され、古田館が長期に亘って営まれた城館であることが推測されます。浄法寺地区には浄法寺城をはじめとする数多くの中世城館跡が存在していますが、調査が行われているものは少なく、今回の調査成果は中世における当地区の歴史を知るための貴重な資料となると思われれます。また、縄文時代の竪穴住居跡や土坑・陥し穴が確認されるとともに、早期から晩期の縄文土器、平安時代の土師器・須恵器、石器類や各種製品が出土しており、当遺跡が縄文時代・平安時代・中近世にも生活の場として利用された地であることがわかりました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深めることに役立つよう切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました二戸地方振興局土木部、二戸市教育委員会をはじめとする関係機関・関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田 牧雄

例 言

- 1 本報告書は岩手県二戸市浄法寺町大手9ほかにある吉田館遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 本発掘調査は、主要地方道二戸安代線緊急地方道路整備事業に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。二戸地方振興局土木部と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を担当した。
- 3 岩手県遺跡データベースにおける遺跡番号はJE37-0090、調査時の遺跡略号はYDD-06である。なお、野外調査時点では本遺跡を「吉田館跡」と称したが、本報告にあたって「吉田館遺跡」と改めた。
- 4 調査対象面積は3,345㎡である。
- 5 調査・整理期間および担当者は次のとおりである。
野外調査 平成18年5月16日～平成18年10月6日/千葉正彦・川又晋
室内整理 平成18年11月1日～平成19年3月31日/千葉正彦
- 6 出土遺物の鑑定および保存処理は、次の機関に依頼した。
石材石質鑑定 花崗岩研究会
金属製品の保存処理 岩手県立博物館
- 7 基準点測量、地形図作成測量および航空写真撮影は、次の機関に委託した。
基準点測量 株式会社測量設計
地形図作成測量 ㈲シン技術コンサル
航空写真撮影 ㈲東邦航空
- 8 掘立柱建物跡について佐々木浩一氏（八戸市教育委員会）、館の縄張について室野秀文氏（盛岡市遺跡の学び館）から多大な指導・助言をいただいた。
- 9 野外調査および室内整理・報告書作成にあたり、次の方々ならびに機関から指導・助言・協力をいただいた。（敬称略；所属は平成18年度当時）
本堂寿一（前・北上市立博物館長）、渡則子（八戸市教育委員会）、茅野嘉雄・佐々木雅裕・永嶋豊（青森県埋蔵文化財調査センター）、坂川進（八戸市立博物館）、岡本直久・金子健一・河合君近（瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター）、関巻・柴田知二・山口巖（二戸市埋蔵文化財センター）、高橋一浩・菅常久・羽柴直人（岩手県教育委員会）、八戸市教育委員会、瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター、瀬田名部建設、二戸市教育委員会、二戸市埋蔵文化財センター
- 10 野外調査では二戸市および一戸町・八幡平市の方々、室内整理では当センター期限付職員に協力していただいた。
- 11 本書の執筆は1章を二戸地方振興局土木部、他を千葉が担当した。編集は千葉が行った。
- 12 本書では国土地理院発行の以下の地形図を使用した。
1/25,000 地形図 浄法寺、稲庭岳、陸奥荒屋、上斗米、駒ヶ嶺
1/50,000 地形図 浄法寺、十和田湖、花輪、田山、田子、荒屋、三戸、一戸、葛巻
- 13 調査で得られた出土遺物および調査に関わる諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 14 吉田館遺跡の平成18年度調査成果については本書が最終報告である。調査成果の一部については既に現地公開資料および「平成18年度発掘調査報告書」（岩文振調報第505集）において一部公表しているが、本書の記載内容と異なる場合は本書が優先する。

凡 例

- 1 調査では遺構種別による略号と検出順の数字を組み合わせた遺構名を付した。

SA: 柱穴 SB: 掘立柱建物跡 SC: 平場 SD: 堀跡、溝跡 SF: 切岸
 SI: 竪穴住居跡、竪穴建物跡、竪穴遺構 SK: 土坑 SKF: フラスコビット
 SKT: 陥し穴 SKP: 柱穴 SN: 焼土遺構 SX: その他

- 2 本文中の註・参考文献は各節で一括して末尾に置いた。

- 3 図版における表現は、概ね下図のとおりとし、これに拠らない場合は各図版において付記した。

- 4 図版の縮尺は原則として次のとおりとし、各図版にはスケールを付した。

遺構 1/150 平場・空堀・切岸・虎口・柱穴群 1/100 掘立柱建物跡・門跡・柱穴列
 1/40 竪穴住居跡・竪穴建物跡・竪穴遺構 1/40 土坑 1/20 焼土遺構 1/10 剥片埋納遺構
 遺物 1/3 土器・陶磁器・礫石器等 1/2 剥片石器 2/3 古銭

- 5 遺構図版において示した柱間寸法の尺換算値は、1尺 = 0.303 m として算出した。

- 6 土層注記に際して、色名・面積割合・粒状構造については「新版 標準土色観」(小山・竹原 編著)を基準として、粘性および締まりについては主観的な判断により判定した。本書への掲載にあたっては、個々の細分層については注記を割愛して大別土層の特徴を主として示し、粘性・締まりは強弱疎密が特にある場合以外は記載していない。混入する火山灰については次のとおり略記した。

十和田 a 火山灰 To-a 十和田中郷火山灰 [中郷浮石] To-Cu 十和田南部火山灰 [南部浮石] To-Nb
 十和田二の倉火山灰 To-Nk 十和田八戸火山灰上層 To-H(U) 十和田八戸火山灰下層 To-H(L)

- 7 写真図版は、遺構については不定縮尺、遺物については概ね図版に準じた。

遺構図版の表現



遺物図版の表現



目 次

I	調査に至る経過	2
II	遺跡の環境	4
1	遺跡の位置と環境	4
2	地理的環境	7
3	地質的環境と基本層序	9
4	歴史的環境	11
III	調査と整理の方法	13
1	野外調査の課題と経過	13
2	野外調査の方法	14
3	室内整理の経過と方法	18
IV	遺構	23
1	概要	23
2	縄文時代	23
3	中世・近世	35
4	近代以降	102
V	遺物	104
1	概要	104
2	土器・陶磁器	104
3	石器	114
4	土製品	120
5	石製品	120
6	金属製品	120
7	銭貨	121
8	接合剥片	123
VI	総括と考察	132
1	縄文時代	132
2	古代	133
3	中世	135
4	まとめ	142
	報告書抄録	178

図版目次

第1図 遺跡位置と周辺地形図	1	第41図 建物跡集成 (2)	62
第2図 浄法寺工区の計画路線と調査遺跡		第42図 掘立柱建物跡配置 (2)	63・64
	2	S B 013~017	65
第3図 事業計画範囲と調査区位置	3	第44図 S B 018~023	67
第4図 調査区の呼称	4	第45図 S B 024~029	69
第5図 遺跡現況地形測量図	5・6	第46図 S B 033~034	71
第6図 地形分類と地質縦断面	8	第47図 S B 035~041	73
第7図 調査区の堆積土層断面	10	第48図 S B 042~047	75
第8図 周辺の遺跡	11	第49図 S B 048~054	77
第9図 調査区グリッド配置	15	第50図 掘立柱建物跡配置・建物跡集成 (3)	
第10図 試掘トレンチ位置	16		79・80
第11図 時代別遺構配置図	20	第51図 S B 055・056・058・059	81
第12図 遺構配置全体図	21・22	第52図 S B 057・060~062	83
第13図 S I 10	24	第53図 S B 063~065	84
第14図 S I 11、S X 01	25	第54図 掘立柱建物跡配置 (4)	86
第15図 S I 11、S B 101	26	第55図 掘立柱建物跡配置 (5)	87
第16図 S I 12・13、S X 02	28	第56図 建物跡集成 (4)	88
第17図 S I 14	28	第57図 S B 073~077	89
第18図 遺構別出土遺物 (1)	29	第58図 S B 073~077	90
第19図 土坑 (1)	30	第59図 S A 01~05	91
第20図 土坑 (2)	32	第60図 掘立柱建物跡重複関係	93
第21図 S N 08	33	第61図 S D 05~08	95
第22図 S X 04	34	第62図 S I 01・02	97
第23図 吉田館概略図	35	第63図 S I 03	98
第24図 縄張り図	36	第64図 S I 04	99
第25図 地籍図	37	第65図 S I 05・06	100
第26図 S C 01-a	39	第66図 S I 07~09	101
第27図 S C 01-b	40	第67図 遺構別出土遺物 (4)	102
第28図 S C 01-c	41	第68図 S N 01~07	103
第29図 S C 02	42	第69図 出土遺物 (1) 縄文土器	105
第30図 S C 03	43・44	第70図 出土遺物 (2) 縄文土器	106
第31図 S D 01・03、S X 05	46	第71図 出土遺物 (3) 縄文土器	107
第32図 S D 04	48	第72図 出土遺物 (4) 縄文土器	108
第33図 S F 01	49	第73図 出土遺物 (5) 縄文土器	109
第34図 S D 02	50	第74図 出土遺物 (6) 土師器・須恵器	111
第35図 遺構別出土遺物 (2)	51	第75図 出土遺物 (7) 陶磁器	112
第36図 遺構別出土遺物 (3)	52	第76図 出土遺物 (8) 陶磁器、土師質土器、 瓦質土器	113
第37図 掘立柱建物跡配置・建物跡集成 (1)	55・56	第77図 出土遺物 (9) 石器	115
第38図 S B 001~004	57	第78図 出土遺物 (10) 石器	116
第39図 S B 005~008	59	第79図 出土遺物 (11) 石器	117
第40図 S B 009~012	60	第80図 出土遺物 (12) 石器	118

第81図	出土遺物 (13) 土製品、石製品	119
第82図	出土遺物 (14) 金属製品	121
第83図	出土遺物 (15) 銭貨	122
第84図	S X04剥片接合関係	124
第85図	出土遺物 (16) 接合剥片	125
第86図	出土遺物 (17) 接合剥片	126

第87図	堅穴住居跡が集成	132
第88図	桜松遺跡のデボ	133
第89図	縄文土器分類集成	134
第90図	鎌部郡の中世城館・遺跡の分布	138

表 目 次

第1表	遺物観察表 (1) 縄文土器	127
第2表	遺物観察表 (2) 土師器・須恵器	129
第3表	遺物観察表 (3) 陶磁器	129
第4表	遺物観察表 (4) 石器	130
第5表	遺物観察表 (5) 土製品	130

第6表	遺物観察表 (6) 石製品	131
第7表	遺物観察表 (7) 金属製品	131
第8表	鎌部郡の中世城館跡 (1)	139
第9表	鎌部郡の中世城館跡 (2)	140

写真図版目次

写真図版1	遺跡俯瞰・近景ほか	144
写真図版2	S I 10	145
写真図版3	S I 11	146
写真図版4	S I 11	147
写真図版5	S I 11・12、S X01・02	148
写真図版6	S I 13・14、S K F01	149
写真図版7	S K02・03、S K T04~07	150
写真図版8	S N08、S X04	151
写真図版9	S X04、S C01ほか	152
写真図版10	S C01	153
写真図版11	S C01	154
写真図版12	S C01	155
写真図版13	S C01・02	156
写真図版14	S C02、S D01	157
写真図版15	S D01・03	158
写真図版16	S D04	159
写真図版17	S F01、S D02	160
写真図版18	S D02・05~08、S A01・02	161

写真図版19	S I 01・02	162
写真図版20	S I 03・04	163
写真図版21	S I 01・05・06	164
写真図版22	S I 06・07・08	165
写真図版23	S I 07・08・09、S N01・02	166
写真図版24	S N03~07ほか	167
写真図版25	出土遺物 (1)	168
写真図版26	出土遺物 (2)	169
写真図版27	出土遺物 (3)	170
写真図版28	出土遺物 (4)	171
写真図版29	出土遺物 (5)	172
写真図版30	出土遺物 (6)	173
写真図版31	出土遺物 (7)	174
写真図版32	出土遺物 (8)	175
写真図版33	出土遺物 (9)	176
写真図版34	出土遺物 (10)	177

I 調査に至る経過

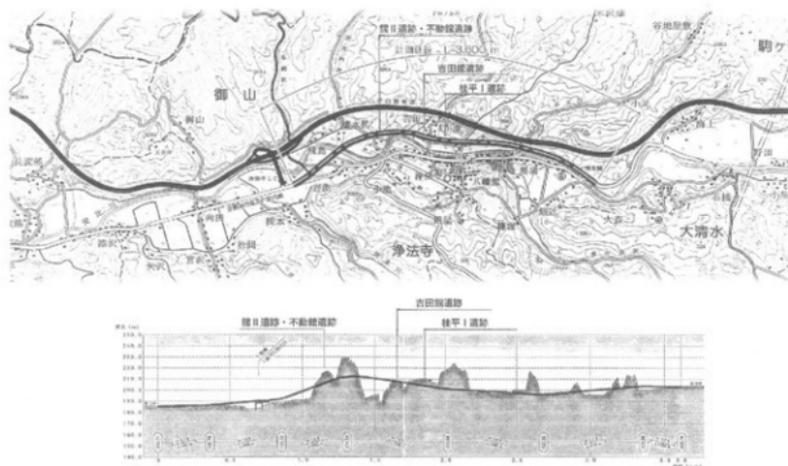
吉田館遺跡は、「主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業」工事に伴い、事業計画区間に存することから発掘調査を行うことになったものである。

主要地方道二戸五日市線は二戸市南西部に位置し、二戸市と八幡平市を結ぶ道路であり、その機能は東北縦貫自動車道八戸線の並行路線としての代替可能な幹線道路である。事業対象区域である「浄法寺工区」においては、浄法寺の中心地に位置しており、車道の幅員が狭い上に歩道がなく、さらに見通しの悪いカーブが多いことから、危険な状態となっている。そのような中、安全・安心に暮らせる地域の実現を目指して平成8年に「新交流ネットワーク道路整備事業」により事業着手したものであるが、平成16年度に新たに「緊急地方道路整備事業」の採択となり早期完成を目指すものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸地方振興局土木部から平成17年4月26日付け二地土第123号「緊急地方道路整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた県教育委員会では、平成17年8月9日と同年8月18日に試掘調査を実施し、工事に着工するには吉田館遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成17年9月2日付け教生第848号「緊急地方道路整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は県教育委員会と協議し、平成18年度に財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結して発掘調査を実施することとなった。

(岩手県二戸地方振興局土木部)



第2図 浄法寺工区の計画路線と調査遺跡



第3図 事業計画範囲と調査区位置

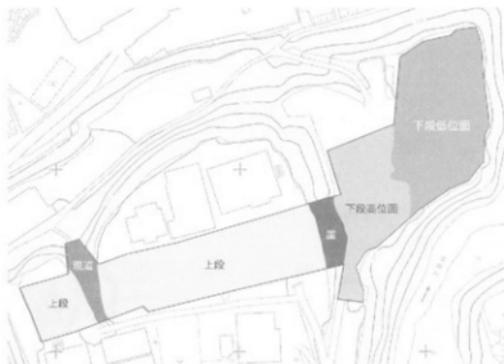
II 遺跡の環境

1 遺跡の位置と環境

吉田館遺跡は岩手県二戸市浄法寺町大土地内に所在し、旧浄法寺町役場から東約0.5km、安比川右岸の海拔198～208mの台地およびその周辺部分に立地する（巻頭図版1、第1図、写真図版1）。その位置は国土地理院発行の地形図1/25,000「浄法寺」NK-54-18-15-2図幅に含まれ、北緯40度10分56秒、東経141度9分40秒付近である。遺跡は、西岳・七時雨山から続く山稜裾の舌状台地末端部に広がっている。遺跡の東側は安比川支流の吉田川〔赤平沢〕の形成した谷によって画される。現況では遺跡中央部分を弧状に縦貫する市道春日碓平線が敷設されているが、この市道部分は東西の曲輪を画する空堀跡だった可能性が高い。前述の谷と市道に挟まれた、複数段の平坦地をもつ小高い丘が城館跡「吉田館」の中心部分にあたるものと推測される。一方、遺跡の西辺境界は現況地形では判然としない。しかし本遺跡の西側に位置し、平成18年度に調査が行われた桂平Ⅰ遺跡の調査区東端部で堀が検出されており（川又2007）、当該堀跡が吉田館西側を区画する外堀と思われる。遺跡の上位平坦面と安比川との比高は32～39mである。岩手県教育委員会が作成した遺跡データベース〔平成18年度版〕によれば、遺跡総面積23,300㎡、遺跡範囲外周0.62kmである。現況では遺跡の大部分が宅地となっており、一部は畑地として利用されている。今回の調査区は道路建設範囲に該当する、谷と市道の間の丘陵部分を東西に横断する3,345㎡であり、遺跡全体の14.36%にあたる（第3図）。上位平坦地は宅地造成により激しい攪乱を被っている。一方、下段平坦地は一部宅地化されていたが畑地が多く、上段ほどの攪乱は受けていなかった。なお、以下の記載においては、調査区の西～中央部の高位平坦面部分を「上段」、東部の低位平坦面部分を「下段」とする。また「下段」は僅かな段差により2面に分たれるため、西側を「下段高位面」、東側を「下段低位面」と便宜的に呼称する。一方、「上段」と「下段」を画する急斜面を「崖部」、現況で北側から「上段」へと登る小道部分を「現道」とする。

二戸市は岩手県の北部に位置し、平成18年1月に旧・二戸市と二戸郡浄法寺町の合併により成立した。市域総面積は420.31km²、西に八幡平市、南に一戸町、東に九戸村・軽米町と境を接し、北は青森県三戸町・南部町・田子町等との県境を接する。平成17年10月時点で総人口31,480人、人口密度74.9人/km²、岩手県北においては沿岸部の久慈市と並ぶ内陸部の中心市である。二戸市福岡付近では年平均気温10℃前後と県内でもかなり冷涼な地帯にあたり、年平均降水量は1000mm程で県平均よりもかなり少ない。

遺跡が所在する二戸市浄法寺町〔以下、単に「浄法寺町」と略す〕は二戸市西部にあたり、



第4図 調査区の呼称

吉田館跡現況地形図



第5図 吉田館遺跡現況地形測量図

旧行政区分における二戸郡浄法寺町である。旧・浄法寺町は明治22年に浄法寺、駒ヶ嶺、大清水、漆沢、御山の5村合併の後、昭和15年に町制施行により成立した。これらの旧村名は二戸市との合併までは大字として残っており、合併後の現在でも一部地名に名残を残している。遺跡はこのうち御山に属している。鉄道路線は東の旧二戸市内をJ R東北本線、西は八幡平市を花輪線がそれぞれ走るが、旧浄法寺町内は通っておらず、道路交通網に頼る状態である。主要な道路は県道二戸五日市線であり、安代で国道282号、二戸で国道4号へ連結して盛岡市や秋田県鹿角市、青森県八戸市の各方面へと続く。産業別就労人口で見ると農林業の比率が圧倒的に高い。また、山稜が大部分を占めて耕地が少ないこと、気候が冷涼なこと等に起因するものであるが、耕種別生産額では米作よりも畑作物の比重が高くなっている。とりわけ工芸作物の生産比率が50%弱と高率であるが、これは葉タバコの生産等に起因するものである。昭和30年頃から、二戸・九戸地方での葉タバコ栽培が開始されたが、以後作付面積は300～400haに増加し、全国有数の生産地となっている。現在、浄法寺町の第一次産業所得に占める葉タバコの割合は60～70%に及び、町の基幹産業となっている。また、浄法寺の漆生産はその起源が判然としなが、藩政時代以降、良質な漆の生産供給地となっている。浄法寺の漆は世界的にも有数の良質なもので、鹿苑寺金園の再建など重要文化財・国宝の復元・修理等にも用いられている。この浄法寺漆を用いた漆器碗生産も行われ、「浅沢五郷」を主産地として生産・流通されて「南部碗」などとも称された。また、遺跡の所在する御山地区には、八葉山天台寺がある。天台寺は、「桂泉天台寺縁起」によれば、聖武天皇により陸奥へ遣わされた仏僧行基が神亀5（728）年に仏堂を建てたことが縁起であるとされている。実際の創建時期は、発掘調査の成果から平安時代後期の10～11世紀頃と推測されている。

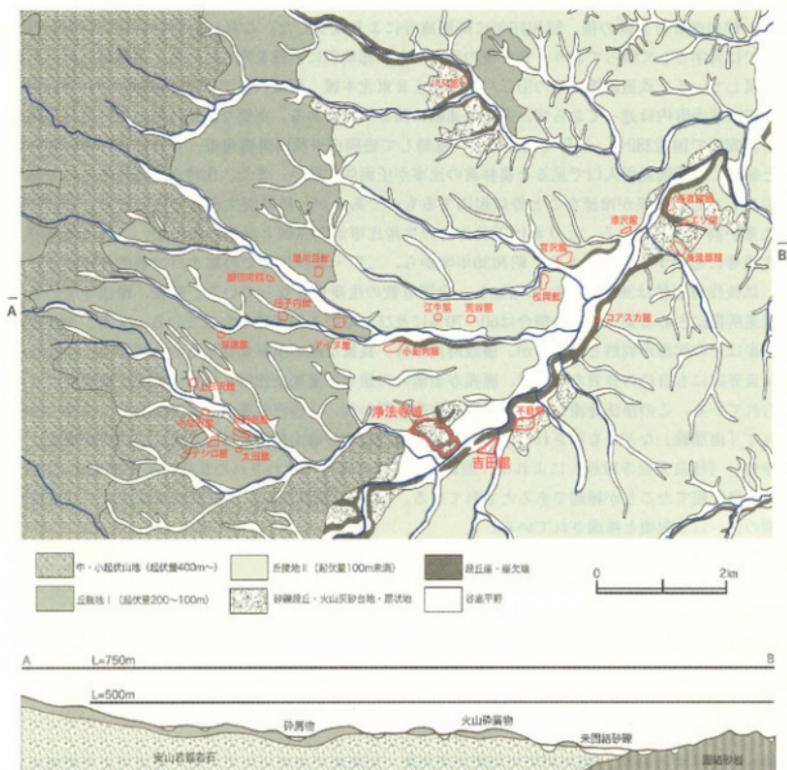
参考文献

- 川又 晋 2007 「耕平1遺跡第1次調査」（概報）『平成18年度発掘調査報告書』第505集、岩手県埋文
 浄法寺町 1997 『浄法寺町史（上巻）』
 浄法寺町教委 1976 『浄法寺町史（資料編）』

2 地形的環境

第6図に示すとおり、浄法寺町の大部分は山地・丘陵地で占められている。安比川より西側は、稲庭岳 [1,078m] を頂点とする中・小起伏山地 [起伏量400m以下]、それに続く丘陵地 [起伏量200m以下] が広く分布しており、東に向かって高度を下けている。稲庭岳は火成岩により構成される火山であるが、風化浸食によりその原型を殆ど残していない。一方、安比川の東・南側も様相は同じであり、西岳 [1,018m] や七時雨山 [1,060m] から続く丘陵地によって占められている。八幡平市に源流を持つ安比川が浄法寺町の中央を蛇行しつつ北東に流れ、東西双方から小河川が山地・丘陵を下刻しつつ安比川へと流れ込んでいる。安比川およびその支流の流域には谷底平野や台地 [段丘] が形成されている。高位から砂礫段丘Ⅰ・火山灰砂台地・砂礫段丘Ⅱ・砂礫段丘Ⅲの「台地」各面、扇状地・谷底平野の「低地」が分布しているが、しかしその分布は断続的かつ狭小であり発達は良好ではない。図ではこれらの台地が狭小であるため、台地各面と扇状地を一括して示した。浄法寺の中心部は、安比川沿いの狭い谷底平野に形成されている。本遺跡を含めた浄法寺の城館の多くは、平野を一望に見通せる高位の砂礫段丘面に立地する点で共通している。本遺跡の周辺は台地に分類され、安比川右岸の中位段丘面にあたる。

なお、近世に作成された絵図（註1）によれば、安比川の流路は現在とは違っており、段階的に流



第6図 地形分類と地質縦断面

路が変遷していたらしい。現在の安比川は谷底平野東縁をやや蛇行しつつ北東方向に流れ、本遺跡東側の吉田川対岸に位置する不動館の載る段丘に突き当たり、それを侵食しつつ一旦北へと流れを変えている。そのため、本遺跡の東側に隣接する不動館は安比川により北～西部分を抉り取られた状態となっている。

註

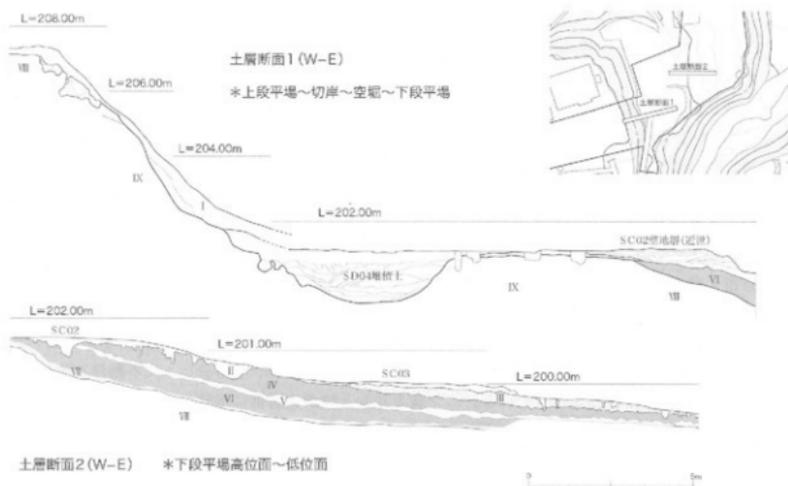
1) 元文4年の絵図「御田領之内福岡通絵図」(盛岡市中央公民館・蔵)では、安比川は緩く弧を描いて流れているように描かれている。一方、制作年代不明の絵図「岩手県管轄陸奥国二戸郡御山村」では、安比川が現在と同様に蛇行している様子が描き込まれている。前者が描き手のデフォルメによるものという可能性はあるものの、安比川が順繁に氾濫を繰り返す川であることを考えれば、首肯できないことではない。両図は第II遺跡調査報告書(岩手県埋文2006)の巻頭図版に掲載されているので参照されたい。

3 地質的環境と基本層序

「土地分類基本調査」(岩手県1979)によれば、浄法寺の表層地質は第6図の断面模式図に示すとおりである。東西の山稜部分は更新世の凝灰岩質石膏や固結砂岩を基底とし、その上位に完新世の火山砕屑物や安山岩質石膏が載っている。安比川およびそれに流れ込む小河川の下刻・堆積作用により細かな谷底地形が形成されて未固結の砂礫や砕屑物が堆積している。吉田館遺跡の所在する御山地区付近は、更新世の固結砂岩岩体の分布域にあたり、地質的には比較的古い様相を示している地域である。

二戸市・軽米町・九戸村などの県北内陸部では、ローム質火山灰・浮石凝灰岩・スコリア質火山灰などの火山砕屑物が層をなして堆積している。これらのテフラ群は十和田系の火山噴出物に起源をもち、一般的には上位から、十和田a火山灰[To-a]、十和田b火山灰[To-b]、中振浮石[To-Cu]、南部浮石[To-Nb]、二ノ倉火山灰[To-Nk]、八戸火山灰[To-H]、大不動浮石凝灰岩[To-O]という層序が確認されている。二ノ倉よりも上位が完新世に堆積した火山灰である。本遺跡の調査区内では複数のテフラ層群が観察される。これらのテフラについては自然科学的分析を実施していないが、その特徴や近隣遺跡での成果から見て、中振浮石、南部浮石、二ノ倉火山灰、八戸火山灰に相当するものと推定される(註1)。

中振浮石"アズナ"は調査区下段東縁付近でのみ見られる。粗粒の砂状バミスで、浮石純層および上下層への混在が観察される。降下年代は約5,400年B.P.と推測され、縄文時代前期中葉に相当する。南部浮石"ゴロタ"は黄褐色～赤褐色を呈する粗粒浮石で、旧二戸市内では発泡の良い拳大の浮石が場合によっては1mを超える厚い層をなしているが、浄法寺町では堆積は顕著ではない。本遺跡の場合は径5mmほどのバミス粒が厚さ3～5cm程度の薄い層(V層)を形成していることが観察されるにすぎず、その上下の黒色土層に疎らに混入する形で存在している。¹⁴C年代は8,600±250年とされており(生田・中川・蟹沢1989:p.147)、降下年代は縄文時代早期に相当する。一方、二ノ倉火山灰は本遺跡の場合は赤褐色スコリア質バミス粒で、土壌化した八戸火山灰層の上位にごく薄い混入層が見られる。降下年代は概ね10,000～12,000年B.P.と推測され、当テフラの直上には縄文時代前期中葉の文化層が存在することから早期前葉～中葉に相当するものとされている。八戸火山灰は更新世のローム質火山灰であり、AMS¹⁴C年代では14,500～17,000年B.P.とされ、噴出時期はおおよそ15,000年前と考えられている。本遺跡の場合、八戸火山灰は土質・色調の違いから上下2層に分かれている。上層は黄褐色を呈し、その上位は土壌化して黒褐色化している。なお、上段調査区の遺構底面や壁で確認したところでは、本層下位に不整合な細砂層が介在している。この細砂は一見して山砂で、中振浮石が如き火山性のものとは思われない。S F 01切岸の法面などでは砂層の存在を確認できないことから局所的に存在しているのかもしれない。当細砂層の起源・堆積メカニズムについては不明である。一方、その下位には灰白色凝灰岩層が存在している。層中に炭化した樹幹や粒度の大きい軽石が混在している。この灰白色凝灰岩層の様相は大不動浮石凝灰岩(32,000年B.P.)に類似しており、大不動である可能性もあるが、ここでは八戸火山灰の下層と捉えておく。本層は一見堅固な岩盤であるがいわゆるシラス層であり、上層の黄褐色ロームに比して粘性・しまりに欠け、水分を含むと脆く崩壊しやすい。実際、調査期間中の降雨の際、雨水の流出によりS D 02やS F 01の堅い法面に容易く雨裂が生じる様が見られた。なお、S D 04堀の法面の観察ではさらに下位の複数のローム層が観察される。褐色～赤褐色の粘性に富むロームで高窟火山灰や天狗岱火山灰に相当するものかもし



第7図 調査区の堆積土層断面

れないが、深掘りを行っていないため詳細は不明であり、基本層序としては把握していない。

本遺跡の調査区内に限ると、中世の普請の影響の多寡により各地点で土層堆積様相が異なるが、模式的な層序は次のとおりである。

- | | | |
|-------|-----------|----------------------------------|
| I層 | 表土、耕作土、盛土 | |
| II層 | 暗褐色土 | |
| III層 | 明黄褐色浮石 | 砂状浮石の純層。中掬浮石。 |
| IV層 | 黒褐色土 | 上位に中掬浮石、中～下位に南部浮石を含む |
| V層 | 黄褐色バミス | 南部浮石を主体とし、マトリクスは暗褐色土。 |
| VI層 | 黒色土 | 南部浮石含む。 |
| VII層 | 暗褐色シルト | 赤褐色バミス＝二ノ倉火山灰を含む。 |
| VIII層 | 黄褐色ローム | 八戸火山灰上層。遺構検出面。層厚2～3m。下位に不整合な細砂層？ |
| IX層 | 灰白色凝灰岩 | 八戸火山灰下層。最終の遺構検出面。層厚不明。 |

II～VII層は調査区東側の低位部分〔S C 03平場相当部〕でのみ観察される。それ以外の調査区西～中央部ではI層直下がIII層ないしはIX層となり、VIII層以上が普請に伴う削剥により消失している。

註

1) 中掬浮石より上位のテフラは本遺跡では確認されていないが、本遺跡西側に隣接する林平I遺跡では十和田aテフラ〔降下年代西暦915年頃〕および白頭山苦小牧テフラ〔B-Tm：降下年代10世紀中頃〕が堅穴住居跡の覆土中に堆積している（川又2006）。

参考文献

- 岩手県 1979 「北上山系開発地域 土地分類基本調査 浄法寺」
 生田慶司・中川久夫・沢沢史編 1989 『日本の地質2 東北地方』 共立出版（東京）

II、太田向館について、当センター・県教委生文課および旧浄法寺町教委による発掘調査が行われており、遺跡の内容を知ることができる。

縄文時代：飛鳥台地 I、安比内 I、大久保 I、館 II、桂平 II、沼久保 I で遺構・遺物が検出されている。飛鳥台地 I では早期 2・前期 6・後期 3・晩期 5 棟の堅穴住居跡が検出され、押型文を特徴とする早期の日計式、前期の早稲田 6 類、後期初頭～前葉、晩期前葉の大洞 B 式の縄文土器が出土している。後期の堅穴住居跡は岡幅中では桂平 II・沼久保 I で検出された。

弥生時代：沼久保 I で堅穴住居跡 1 棟が検出され、弥生土器は桂平 II でも出土した。

平安時代：飛鳥台地 I、大久保 I・桂平 I・II、沼久保 I で平安時代の集落跡が確認された。

中世：城館跡としては北東約 0.5km の吉田川対岸に不動館遺跡・館 II 遺跡（註 2）、西約 0.8km の安比川対岸に浄法寺城跡が存在している。浄法寺城については平成 9 年以降、内容確認のための発掘調査が継続的に行われており、掘立柱建物跡や堅穴建物跡、空堀跡、多数の柱穴等が検出されている（浄法寺町教委 1999～2005）。本遺跡東方に位置する館 II 遺跡は不動館の東郭にあたり、平成 17 年度に調査が行われた。空堀・大溝によって区画された複数の平場を調査し、掘立柱建物跡・堅穴建物跡等が検出され、館の縄張変遷の様相が確認された。また城館ではないが、飛鳥台地 I と沼久保 I では中世の堅穴遺構が検出されている。該期の陶磁器類は安比内 I・桂平 II・沼久保 I で出土した。

近世：浄法寺城南西に隣接する福蔵寺経塚があるのみで、本遺跡周辺では希薄である。

註

1) 岩手県教委「岩手県遺跡情報検索システム」(平成 18 年版)のデータによる。また第 8 図は河システムで検索した画像データをもとに一部改変したものである。

2) 岩手県教委の遺跡台帳および遺跡検索データベースにおいては不動館と館 II 遺跡は別個の遺跡として登録されており、館 II 遺跡は古代の遺物散布地となっている。平成 17 年度、本遺跡調査原因と同一事業にともなう試掘により館 II 遺跡の範囲は拡大され、当センターが当該部分の調査を行った。その結果、館 II 遺跡は中世城館跡であることが判明した(岩手県文 2006)。不動館と館 II 遺跡は現市道を挟んで東西に隣接する館跡であり、本来は一つの城館である可能性が高い。実際、岩手県教委がまとめた「岩手県中世城館跡分布調査報告書」(岩手県教委 1986)では不動館について「4 郭。北側 2 郭は空堀に囲まれ北から東にかけては 2 重堀」(同書：p.80)としており、「館 II 遺跡」とされている部分が不動館東郭に相当するものと解される。何故、分布調査において郭として確認された部分にもついで台帳の遺跡範囲を修正しなかったのかわからないが、このことが遺跡名やその範囲の混乱を招いたことは事実である。また、同様のことは吉田館についても云える。前掲「分布調査報告書」では吉田館に関して「東西 2 郭。中央に道。西に空堀跡」(同書：p.80)と記載している。前述のとおり、平成 18 年度、吉田館西側に位置する桂平 I 遺跡第 1 次調査で大規模な土器研ぎが検出された(川又 前掲書)が、この堀が上述の「空堀跡」であろう。なお、平成 19 年度の桂平 I 遺跡第 2 次調査では、この堀以东も桂平 I 遺跡として調査が行われたものの、本来的には吉田館の遺跡範囲「西郭」とすべきであろう。

参考文献

- | | | |
|--------|--------|--------------------------------------|
| 岩手県教委 | 2006 | 「岩手県遺跡情報検索システム(平成 18 年版)」CD-ROM 版 |
| 岩手県文 | 1986 a | 「沼久保遺跡発掘調査報告書」第 109 集 |
| 岩手県文 | 1986 b | 「桂平遺跡発掘調査報告書」第 110 集 |
| 岩手県文 | 1988 | 「飛鳥台地 I 遺跡発掘調査報告書」第 120 集 |
| 岩手県文 | 2006 | 「館 II 遺跡発掘調査報告書」第 497 集 |
| 浄法寺町教委 | 1991 | 「岩手県二戸郡浄法寺町 遺跡詳細分布調査報告書 I (大字浄法寺地区)」 |
| 浄法寺町教委 | 1996 | 「浄法寺町遺跡地図(1995 年版)」 |
| 岩手県教委 | 1986 | 「岩手県中世城館跡分布調査報告書」岩手県文化財調査報告書第 82 集 |

Ⅲ 調査と整理の方法

1 野外調査の課題と経過

(1) 調査の課題

吉田館遺跡は中世城館跡として周知されていた遺跡であり、館主は吉田氏であると伝承される。しかし吉田館についての文献記載は皆無であり、かつ館主＝吉田氏と云う点についても不確かな伝承の域を出るものではない。当遺跡については沼館愛三氏、築部普次郎氏らの現地地形調査（縄張調査）が行われていた（沼館1981、築部1971）。また岩手県教育委員会による全県的な中世城館分布調査が実施され、分布調査報告書では吉田館についての記述が見られる（岩手県教委1986）。平成17年には浄法寺町教育委員会〔当時〕により、今回の調査区西側隣接地〔ボックスカルバート設置部分〕について発掘調査が実施され、堅穴建物跡、欄跡、柱穴群が検出された（註1）。これらの縄張調査・分布調査および発掘調査では遺物が乏しいことや、発掘調査面積が限られた狭い範囲だったことから、館の構造や館主・存続期間等について推測を裏付ける資料を欠いたままであった。これらの点について幾許かの情報を得ることが、今回の調査の主たる課題であった。かかる課題の下、野外調査によって得られた情報のみならず、館全体の現地踏査にもとづく縄張の把握、周辺住民からの聞き取り、絵図・地籍図・航空写真の判読など、調査と併行して広範な情報を収集することを目指した。

(2) 調査の経過

野外調査は平成18年5月16日に開始され、当初予定〔8月10日まで〕を超過した10月初旬までの延べ93日〔作業日数86日・降雨による作業中止7日〕を費やし、従事した作業員の延べ人数は1,259人であった。

5月：16日、調査機材搬入・現場設営を行い、8月10日までの約3ヶ月間の予定で調査を開始した。調査員2名、作業員16名。17日、二戸市埋蔵文化財センター・山口巖主事〔旧浄法寺町教育委員会〕、来跡。平成17年度に浄法寺町教委が行った発掘調査について、調査範囲と調査成果の教示をいただく。19日、シン技術コンサルに委託した現況地形図作成測量が行われた。22日、調査区中・下段全体へ計10箇所ものトレンチをいれた（第10図：T1～10）。また並行して吉田川に面する東側崖面についてもトレンチを設定して掘り下げた。調査範囲外ではあるが、この崖が人工的な崖地形（＝切岸）なのか、途中に犬走り等の遺構がないか等、確認するためである。トレンチの状況からはこの崖は自然地形であり、かつ遺構は確認されなかった。24日、重機による表土除去、粗掘りを開始。調査区への進入路が狭いことから、パワーショベル0.2、キャリアダンプ3tを使用した。29日、作業員1名増員〔登録17名〕。31日、下段中世面の精査開始。調査区上段で試掘を行い、表土下の八戸火山灰上層面で複数の柱穴を検出。

6月：5日、作業員2名増員〔登録19名〕。切岸の精査を開始。下段北半部の柱穴をほぼ完掘し、中段の遺構検出・精査へ移る。7日、作業員3名増員〔登録22名〕。9日、この日以降16日頃まで、天候不順となり降雨が続き、作業は捗らず。12日、作業員1名増員〔登録23名〕。23日、柱穴精査を終了した範囲から順次、平面実測を開始した。2名が専従し、必要に応じて最大8名が実測にあたった。26日、上段平場の表土除去を開始。過日のトレンチ内の落ち込みが堅穴ではなく、大溝状の遺構であることが判明。

7月：上段平場の柱穴検出・精査に着手した。予想に反して柱穴等の遺構が多数遺存していることが判明。試掘で一部確認していた遺構が空堀であり、北東部でL字状に屈曲していることが判明した〔SD01堀〕。一方、現況地形で虎口と推測される「現道」に法面にトレンチを設定して掘り下げた。結果、小道の西側法面は厚さ1.5m以上の盛土層であり、盛土下が堀状に深く落ち込むことがわかった〔SD02堀と命名したが、後に虎口と判明→SD02虎口〕。10日、作業員1名退職〔登録22名〕。中旬、SD01堀と虎口に挟まれた部分〔SC01-b平場〕の表土を除去したが、夥しい柱穴が存在していることが判明した。また、当該部分の南側調査区境において、SD01堀と上橋？を挟んで対になる堀を検出した〔SD03堀〕。一方、SD02の底面で大径の柱穴が複数検出された〔SA01門跡〕。27日、中世遺構について現地公開を開催（地元浄法寺や八幡平市の35名参加）。

8月：1日、下段平坦地部分の中世面調査について、二戸地方振興局土木部の立会のもと、県教育委員会生文課による部分終了確認を受ける。当初予定では8月10日終了予定であったが、当初予想よりも多数の遺構が検出されたこと、およびこの時点で未了である下段平坦地の縄文時代遺構精査に時間がかかることから、今後検出が予想される遺構の種類・数量、実際の調査進捗状況を踏まえて、調査を9月15日まで延長することとなった。8日、東邦航空による遺跡全体の航空写真撮影を実施した。17日、本遺跡西側に隣接する桂平I遺跡の調査を並行して進めることとなり、調査員1名・作業員11名体制へ。18日、盛岡市遺跡の学び館・室野秀文氏、来跡。縄張り、個々の遺構について教示をいただいた。下旬、上段の堀・竪穴遺構・柱穴の精査がほぼ終了し、下段平場面下層の遺構検出・精査に入った。31日、下段平坦地の縄文面〔IV層面〕で竪穴住居跡を検出。

9月：縄文時代遺構の精査を進めた。11日、二戸地方振興局土木部の立会のもと、県教育委員会生文課による調査終了確認を受ける。当初の作業予定では埋め戻しは考慮されていなかったが、安全対策上の理由から調査区の埋め戻しを実施することとなり、埋め戻し終了時点で調査終了とすることとなった。以降、中塚浮石面以下の遺構精査を進めた。19日、調査区の埋め戻し作業開始。精査・実測の終了した部分から順次埋め戻した。作業員1名退職〔登録10名〕。25日、精査終了。上段の柱穴群の実測が未了だったことから実測員4名のみを残し、作業員6名を桂平I遺跡へ登録替え。26日、北上市立博物館の前館長・本堂寿一氏、来跡。28日、県教委生文課・菅常久文化財専門員、来跡。

10月：2日、実測作業終了により、作業員4名を桂平I遺跡へ登録替え。調査員1名が残留し、重機による埋め戻し作業を進め、6日に埋め戻し作業を終了。野外調査の一切を終了した。

註

1) 調査成果は未報告であり詳細不明であるが、概要について二戸市教委の山口巖氏にご教示いただいた。なお、山口氏には参考として図面等の調査記録を提供していただいた。一部、掘立柱建物等の検討に町教委調査分の「柱穴」を使用したものもある。未報告資料という性格上、当該調査の「柱穴」は未だ柱穴として確定していないものであるが、千葉の判断で引用したものであり、誤謬ある場合は総て千葉の責任である。

参考文献

- 岩手県教委 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
 沼館愛三 1981 『南郡諸城の研究』伊吉書院（八戸）
 塚部善次郎 1971 『二戸郡・九戸郡古城址考』東北民俗研究会（二戸）

2 野外調査の方法

(1) グリッド設定

調査開始時点で委託者から示された事業計画図面は日本測地系によるものであり、かつ同一事業で前年度調査を行った館Ⅱ遺跡が日本測地系にもとづくグリッド設定を行っていたため、今後図面の合成等を行う際の便宜を考慮し、旧・日本測地系第X系によるグリッドを設定した後、世界測地系〔日本測地系2000〕に座標変換することとした。よって調査座標原点は端数を含む数値となっている。任意の基点〔日本測地系座標：X=20,050、Y=28,100 → 世界測地系座標：X=20,401.2007、Y=27,818.0090〕を調査座標原点として、旧・平面直角座標系に載り、この点で直交する東西・南北の軸線をそれぞれ設定し、それぞれの軸線を基点から50m刻みに分割、西から「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」、北から「A・B・C」の記号を付して、調査区全体を覆う算用数字とアルファベットの組み合わせにより呼称される50m四方のグリッドを設定した〔ⅠA～ⅣC〕。さらに各グリッドの東西・南北軸線をそれぞれ10分割して、西から「1～10」（全体ではⅠ1～Ⅳ10）、北から「a～j」（全体ではⅠa～Ⅳc j）の記号を付して、5m四方の小グリッド100区画を設定した〔ⅠA1a～ⅣC10j〕。

調査区内に設置した基準点座標値は次のとおりである（〔 〕内は旧・日本測地系座標値）。

基点1	X=20,277.2589	Y=27,906.3742	H=207.264m	[X=19,970 Y=28,205]
基点2	X=20,317.2580	Y=27,941.3750	H=200.887m	[X=20,010 Y=28,240]
補点1	X=20,277.2594	Y=27,871.3744		[X=19,970 Y=28,170]
補点2	X=20,292.2586	Y=27,906.3746		[X=19,985 Y=28,205]
補点3	X=20,297.2580	Y=27,941.3748		[X=19,990 Y=28,240]
補点4	X=20,317.2576	Y=27,961.3752		[X=20,010 Y=28,260]

（2）試掘

事前に県教委生文課の試掘調査が行われており、本遺跡における事業対象部分に15箇所のトレンチ



第9図 調査グリッド配置

が設定され(第10図 文T1~14)、柱穴・焼土が検出されている(註1)。調査開始時点では生文課の試掘トレンチは埋め戻されており位置も判然としなかったことから、新規にトレンチを設定して試掘することとした(第10図)。調査区下段に10(T1~10)、上段に6(T11~16)、計16箇所を試掘を行った。またこれとは別に、本来調査範囲外であった調査区東端に隣接する崖部分について、普請の痕跡の有無を確認するために試掘を行っている(T17~19)。

(3) 粗掘りと遺構検出

調査区は基本的に表土が平均的には20cm程度と薄く、特に調査区西半部分(調査区上段)は表土直下が「地山」である八戸火山灰面であった。パワーショベルとキャリアダンプを用いて表土を大まかに除去した後、芝鋤鎌や両刃鎌で表面を削って人手により遺構検出を行った。調査区までの進入路が狭いため、パワーショベル0.2~0.3、キャリアダンプ3t、ダンプトラック2tと小型の重機しか使用できなかった。掘削に伴う残土は、当初は調査対象外の隣接部分への仮置きおよび調査区内での反転処理を想定していたが、予想よりも残土量が多くなったため、調査後半は隣接する桂平1遺跡の調査対象外部分へと排出・仮置きした。残土を長距離運搬しなければならないことや重機自体の規格が小さいこと等から、通常の場合に比して作業効率は良くなかった。検出は表土直下の中世面(Ⅱ~Ⅴ層面)で全面に行い、以後、層位的に掘り下げながら順次検出を行った。中近世の遺構識別は比較的易しいが、縄文時代の遺構は南部浮石や中振浮石泥じりの黒~黒褐色上面で検出するため「黒に黒」で識別しづらかった。検出した遺構に対しては、その種別に応じた略号と検出順の数字を組み合わせた遺構名を付した。なお整理段階で検討し、現場で命名した遺構名の変更・登録抹消を行った。

(4) 遺構の精査

遺構は種別・規模に応じた方法で精査を行った。竪穴住居跡・竪穴建物跡・竪穴状遺構は状況により4分法と2分法を選択して行った。また、土坑・焼土遺構は2分法により、堀跡・溝跡・切岸等は任意の土層ベルトを適宜残して掘り下げた。今回の調査で多数検出された柱穴については、検出段階



第10図 試掘トレンチ位置

で5~10cmほど段下げを行って柱痕跡を確認して、柱痕跡が無いものについては段階的に底面まで掘り下げた。従って柱穴断面は円化を一切行っていない。柱穴の平面的なプラン・重複関係の把握を意図したものである(楸原2001)。しかし実際には堆積土が似ているものが大部分だったため平面で重複関係をはっきり捉えられたものは僅かであり、中途半端なものになってしまった。柱痕跡が段下げ段階で確認できなかったものでも、底面で柱アタリが確認できたものは平面図に記録した。柱穴堆積土は概ね地点により似通っており、特徴的なもののみ記録して、他は地点全体の傾向を把握するに止めた。中世遺跡調査に不慣れた調査者にとって、眼前に広がる多数の柱穴群をどのように調査すべきか迷うところであったが、結果として非常に雑な調査方法をとってしまった。また、個々の柱穴を掘ることに追われて建物の検討ができず、現場中には孤立柱建物と殆ど認識できなかった。

(5) 実 測

現場作業員には幸いにして実測経験者が多く含まれており、最大4班稼働した。6月中旬以降、終了間際まで常時1~2班が柱穴の平面実測に従事した。実測は簡易造り方測量を主としたが、堀や切岸等、造り方測量が困難ないしは煩雑な遺構の平面図については調査員が光波トランシットを用いた座標計測から作図を行った。

(6) 写 真 撮 影

主に中判(6×7判)フィルムカメラを使用してモノクロフィルム撮影を行い、補助的に35mmフィルムカメラによるモノクロフィルム撮影を行った。従来撮影していた35mmリバーサルフィルムは使用せず、主にデジタル一眼レフカメラによるRAWモードでの撮影を行った(註2)。

(7) 調 査 条 件

調査区上段部分に民家2件が隣接しており、かつそれぞれの進入路が調査区内にあった。この民家はもともと調査区内に建っていた民家を新築・移転したものである。民家の位置が上段北側(台地縁側)にあたり他に進入路がなく、道の付け替えの必要が生じた。また、安全性確保および民家侵入の便宜を図らざるを得なかったため、民家に隣接する部分についてはその都度埋め戻さなければならない。従って上段については分断した形で調査せざるを得ず、遺構の分布を面的に把握することができづらい状況であった。また調査区内に、前述の民家へ続く新しい上下水道管等が埋設されていた。特に上段から下段を経て吉田川まで続く下水管は、SF01切岸やSC02平場などの調査で支障物件となった。一方、現況で上段への出入りに使われていた小道部分はやや強い雨が降ると付近の雨水が集まって流れ込み、下方へと流れて簡易排水溝へと導かれて落ちる形となっていた。調査により表土を剥いだ後は雨裂に弱いシラス面が露出したため、流水の勢いが増して民家まで溢れる危険性が懸念されたため、土嚢・ブルーシートにより流路を補強して民家への被害を防止する作業を行った。

(8) 情 報 の 公 開

調査の開始以降、二戸市教育委員会を通じて浄法寺地区の学校を対象に情報の提供を行うとともに、理解と協力を求める意味で調査区近隣の住民へも随時情報を提供した。また、前述のとおり調査中盤の7月27日、現地公開を行った。この時点では中世面の精査が中心であり、該期の遺構・遺物についての調査結果を公開したものである。公開以降、縄文面の精査が進んで、堅穴住居跡・剥片埋納遺構等、該期の良好な遺構も検出されたが、日程的な要因等から開催を見送った。

註

- 1) 第10図の生文課試掘トレンチの位置は岩手県教委2007による。なお試掘報告では西郭部分についても「吉田館」として調査が行われているが、本調査段階で西郭部分が「杜平」遺跡の範囲となったことは既に述べたとおりである。
- 2) この「デジタル化」試行の対象は遺構写真で、フィルムからデジタルデータへと保存形態/媒体の転換を企図したものである。それにもとまって報告書作成ワークフローの一部変更は生じるものの、必ずしもそれを主眼とするものではない。なお、今回は遺構写真図版についてはデジタルデータ化することが前提であったが、調査員の独自の判断の下に、他の部分を含めた全体をデジタルデータとして作成することを試みた。

参考文献

- 岩手県教委 2007 「岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成17年度)」岩手県文化財調査報告書第124集
佐々木浩一 2001 「柱穴群から建物跡へ」東北中世考古学会編「獨立と堅穴-中世遺構論の課題-」高志書院
榊原滋高 2001 「柱穴の調査方法を考える」東北中世考古学会編「獨立と堅穴-中世遺構論の課題-」高志書院

3 室内整理の経過と方法

(1) 整理期間と体制

平成18年11月1日～同19年3月31日の5ヶ月間に調査記録および出土遺物の整理作業を行った。整理作業は調査員1名が担当し、11月は3名、12月～3月には4名の期限付職員が遺物接合・実測・トレース等に従事し、遺物写真撮影については期限付職員1名が随時行った。

(2) 遺構の整理

遺構の実測図を遺構毎に分類・整理した後、各遺構の平面と断面を合成して第二原図を作成。調査区全域の柱穴群の合成、遺構配置全体図の作成等を併せて進めた。第二原図を縮小したものをA4版スキャナで読み込んで画像データを作成した後、ドロー系ソフトウェアでトレースした。

(3) 掘立柱建物の検討

柱穴が予想以上に多数検出されたため、実測・平面図作成が追いつかず、現場で建物を検討できなかった。掘立柱建物については、殆どが整理段階において図面上の検討で建てたものである。当初は調査員が独自に検討して40棟弱を抽出したが、担当者が中世の建物について知識・経験が乏しいため、抽出した建物に妥当性あるものか、確信が持てなかった。そこで、八戸市教育委員会の佐々木浩一氏に依頼し、建物について指導・助言をいただいた。結論的にはそれまで抽出した建物の殆どが怪しいものであり、再検討が必要であることが判明した。再検討の結果、抽出した建物跡は78棟となり、遺構図の組み直しを行った。

(4) 遺物の整理

調査員が11月前半まで野外調査に従事していたため、約半月は調査員不在となっていたが、遺物の水洗と大まかな仕分は野外調査期間で終了していたことから、この期間に土器の注記・接合作業を進めた。土器については、現場で取り上げた袋毎に付した袋番号を注記し、袋毎の重量計測を併せて行った。前述のとおりの上出状況を反映して接合状態が悪く、立体として実測できる個体は少なかった。土器以外の遺物については選別個体毎に袋を分けて登録することとし、個々の注記は行っていない。接合作業を11月下旬まで行った後、実測・採拓する土器を段階的に選別し、他の遺物

と併せて登録を行った。12月からは遺物実測・採拓・トレースを行った。実測図は原寸で作成し、一部を除いて原寸でトレースした。出来上がったトレース図を遺構同様にスキャナで読み込んで画像データを作成し、グラフィックソフトウェアにより画像解像度やコントラスト等を適宜調整した。

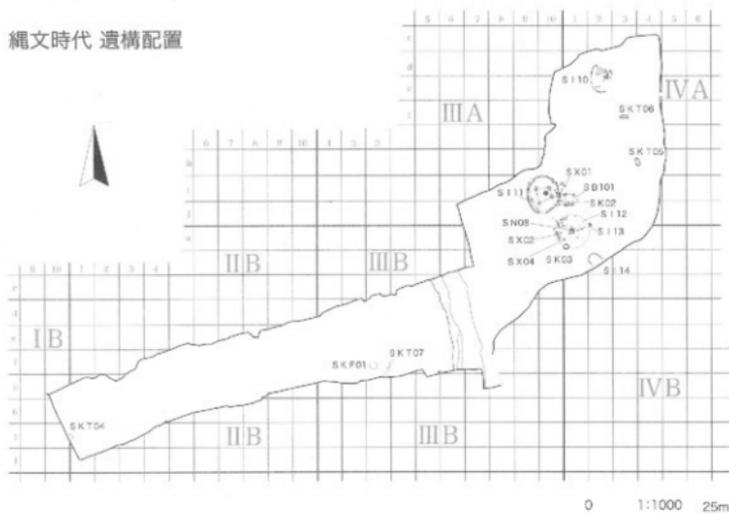
(5) 写真の撮影・整理

遺物写真は1月からデジタル一眼レフを使用して断続的に撮影を行った。撮影した画像データは遺構・遺物ともに据置型の大容量ハードディスクに保存・収納するとともに、作業用にポータブル型ハードディスクへも保存して写真図版作成を行った。

(6) 割 付

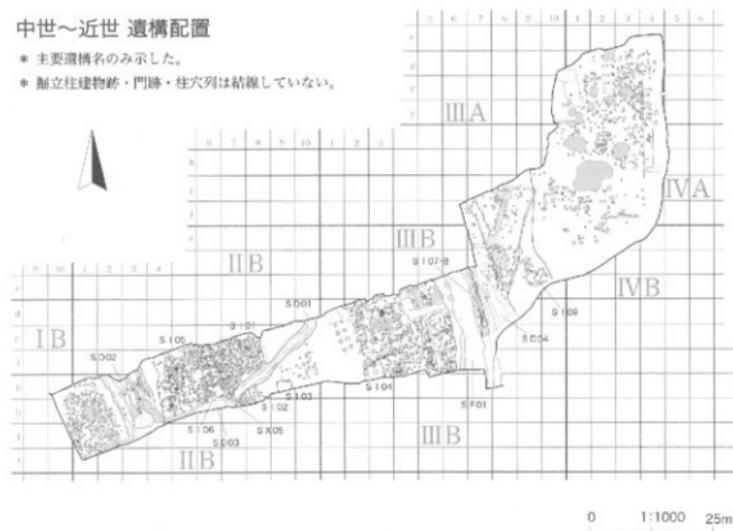
割付はレイアウトソフトウェアを使用し、本文テキストファイルの流し込み、遺構・遺物の画像データ配置、キャプションの打ち込み等を行って印刷用組版データを作成した。

縄文時代 遺構配置



中世～近世 遺構配置

- * 主要遺構名のみ示した。
- * 竪立柱建物跡・門跡・柱穴列は結線していない。

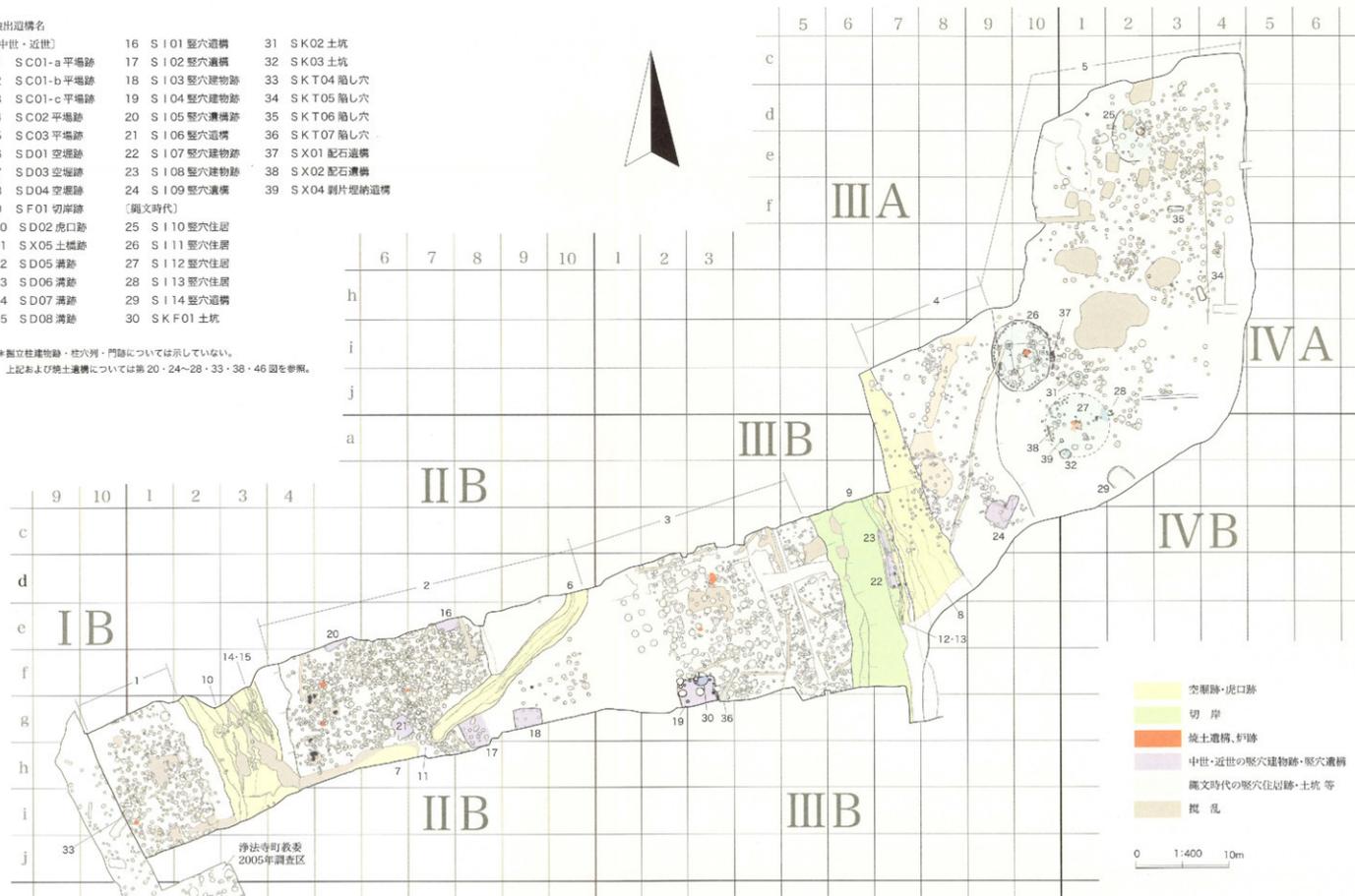


第11図 時代別遺構配置図

検出遺構名

- | | | |
|---------------|-----------------|-----------------|
| (中世・近世) | 16 S I 01 竪穴遺構 | 31 SK 02 土坑 |
| 1 SC 01-a 平場跡 | 17 S I 02 竪穴遺構 | 32 SK 03 土坑 |
| 2 SC 01-b 平場跡 | 18 S I 03 竪穴建物跡 | 33 SK T 04 陥し穴 |
| 3 SC 01-c 平場跡 | 19 S I 04 竪穴建物跡 | 34 SK T 05 陥し穴 |
| 4 SC 02 平場跡 | 20 S I 05 竪穴遺構跡 | 35 SK T 06 陥し穴 |
| 5 SC 03 平場跡 | 21 S I 06 竪穴遺構 | 36 SK T 07 陥し穴 |
| 6 SD 01 空堀跡 | 22 S I 07 竪穴建物跡 | 37 SX 01 配石遺構 |
| 7 SD 03 空堀跡 | 23 S I 08 竪穴建物跡 | 38 SX 02 配石遺構 |
| 8 SD 04 空堀跡 | 24 S I 09 竪穴遺構 | 39 SX 04 割片埋納遺構 |
| 9 SF 01 切岸跡 | 〔縄文時代〕 | |
| 10 SD 02 虎口跡 | 25 S I 10 竪穴住居 | |
| 11 SX 05 土橋跡 | 26 S I 11 竪穴住居 | |
| 12 SD 05 溝跡 | 27 S I 12 竪穴住居 | |
| 13 SD 06 溝跡 | 28 S I 13 竪穴住居 | |
| 14 SD 07 溝跡 | 29 S I 14 竪穴遺構 | |
| 15 SD 08 溝跡 | 30 SK F 01 土坑 | |

* 竪立柱建物跡・柱穴跡・門跡については示していない。
上記および竪土遺構については第 20・24～28・33・38・46 図を参照。



第12図 遺構配置全体図

IV 遺 構

1 概 要

縄文時代、中世～近世、近代以降の遺構を検出した。

縄文時代：主として東側の調査区「下段」部分で確認された。上段部分でも該期遺構は検出されたものの、中世の普請にともなう削剥により少ない。種別は、竪穴住居跡4棟（炉のみの1棟含む）、竪穴遺構1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2基、フラスコビット1基、陥し穴4基、焼土遺構1基、配石遺構2基、剥片埋納遺構1基である。

中世～近世：調査区全域に分布する。大部分が館跡に関わる遺構と推測される。普請に係る遺構は、平場3面、空堀跡2条、切岸1箇所、虎口跡1箇所、土橋1箇所である。また、作事に係るものは、竪穴建物跡・竪穴遺構9棟、掘立柱建物跡67棟、門跡3棟、柱穴列3条、溝跡4条、焼土遺構7基である。ただし、これらの遺構は出土遺物を欠くものも多く、具体の時期を確定できない。出土遺物には舶載磁器や美濃大窯産陶器など16世紀代に比定される陶磁器、北宋銭・明銭や模鑄銭がある一方、肥前系陶磁器や寛永通寶など近世以降へ下る遺物も出土している。共存する遺物から判断することが難しく両者を分離しかねるため、近世以降の遺構が含まれている可能性がある。

近代以降：調査区「下段」部分で掘立柱建物跡1棟、土藏跡1棟を検出した。

2 縄 文 時 代

(1) 竪穴住居跡・竪穴遺構

S110 竪穴住居跡

遺構（第13図） [位置・検出状況] 調査区北東部のIV A1d～1eグリッドにおいて、暗褐色シルトの広がりとして検出した。本住居跡付近は削剥を被っており、表土直下で地山ロームが露出する状況であった。かかる状況ゆえ本住居も大部分が削平されており、斜面上方である西側で壁を確認できたに過ぎない。〔重複関係〕柱穴群、北側の倒木痕が当住居を截っている。〔形状・規模〕遺存状態が悪いので全体の形状が不明であるが、残存部分から推測すれば円形〔または楕円形〕を基調とするようである。〔堆積土〕確認できた部分では上位は炭化物を含んだ暗褐色シルト、下位はバミス混じりの灰褐色シルトで構成される。〔壁・床面〕壁は全体の1/3程度しか残存していない。残存する西側では壁高12cm程である。床面には攪乱によるものか、やや凹凸がある。〔炉〕石囲炉を確認したが、新期の柱穴により著しく破壊されており遺存状態が悪く、焼土も殆ど残っていない。検出時点では礫4個が残存するのみであったが、南～東側で礫が設置されていた痕跡が確認できた。一方、北西側では攪乱により礫設置の痕跡も確認できなかった。本遺跡における他住居跡の石囲炉の形態を見ると、北西部で炉石を欠く馬蹄形の石囲炉だった可能性もある。〔柱穴〕炉周辺を中心に12個を検出したが、小径かつ浅いもので主柱穴とは思われない。

遺物（第18図） [土器] 堆積土から口縁部破片1点、胴部破片8点、合計約0.2kg分が出土した。

1・3は後期、2は前期に比定される。〔石製品〕砥石1点（213）。

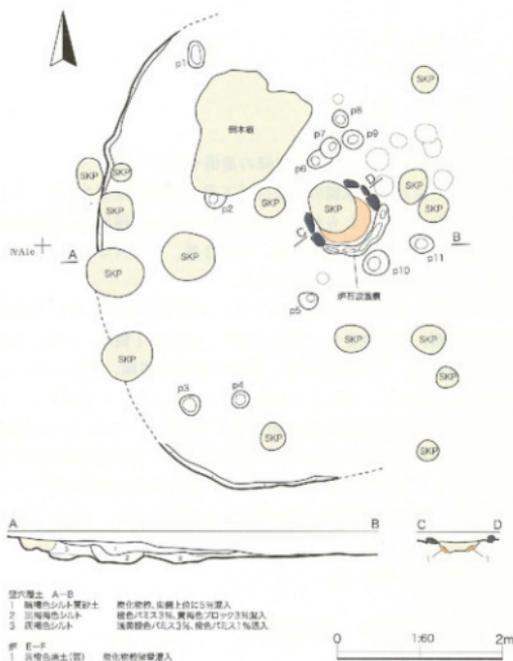
時期 削剥により残存状況が悪く、確実な共存遺物は殆どない。時期決定の根拠としては弱いが、

少量の後期土器片が出土していることから、後期に属する可能性があると思われる。

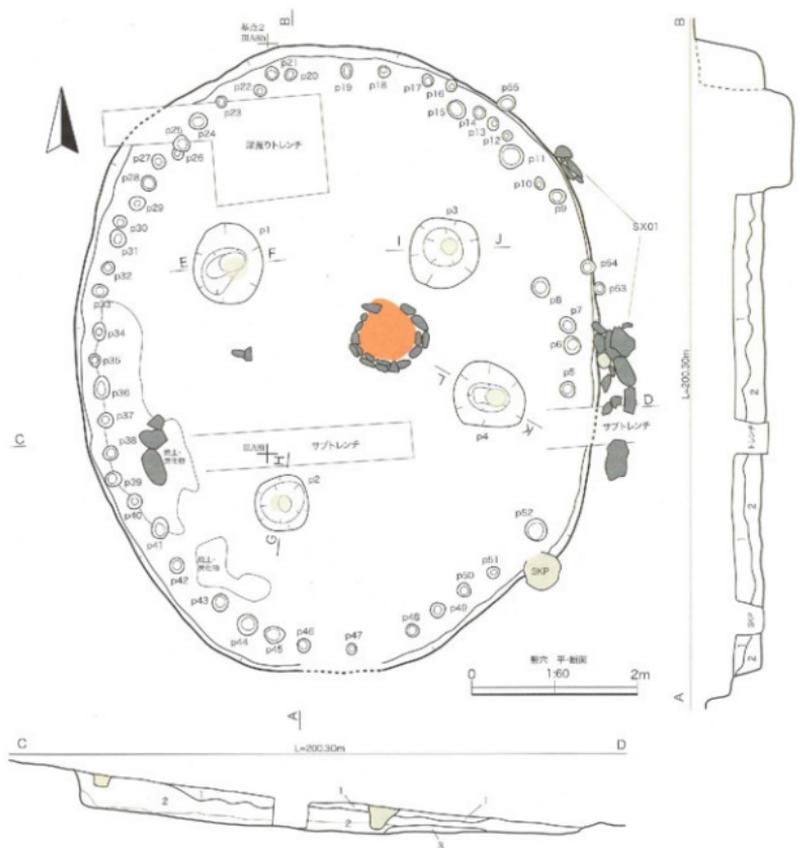
S111 竪穴住居跡

遺構（第14・15図）〔位置・検出状況〕東側調査区Ⅲ A9i~10j グリッド付近のⅣ層面で検出した。当該グリッドにおいてSX01配石および柱穴の精査していたところ、柱穴底面で石囲炉を検出した。そこで、炉を中心にトレンチを設定して掘り下げた結果、西側で壁の立ち上がりを確認し、竪穴住居跡と認定した。〔重複関係〕中近世の柱穴群に載られている。〔形状・規模〕平面形は南北に長径をもつ楕円形を呈しており、長径7.6m、短径6.2mである。〔堆積土〕上位層は黒色シルト、下位層は黒褐色シルトで構成され、全体にオレンジバミスが微量混入している。精査段階では分層したもの

の、上層と下層はきわめて似ており、図では一括した。堆積土と地山〔Ⅳ層：南部浮石混じりの黒色土〕の区別がつきづらかったため、炉周辺の床面は下げ過ぎており、また南側の壁や南半部の床面は掘りすぎているかもしれない。また、3層は主柱穴pit2の掘り方埋土である。〔壁・床面〕壁は床面から外傾して立ち上っており、最も残りの良い西壁では70cm、斜面下方の東壁では15cmである。床面は南北方向ではほぼフラットであるが、東西方向では西から東へと緩く傾斜している。原地形の傾斜に制約されたものと思われる。また西壁際の床面において、焼土・炭化物細粒の集積層および礫3個の纏まりを検出した。集積層の厚さは約1cmと薄い、その周辺床面で完形・準完形の壺・鉢4個体、潰れた状態の一括土器2個体、動物形土製品1点が出土している。〔炉〕床面中央よりやや東へ寄ったpit3・4西側の床面に位置する。礫を円形基調に配した石囲炉であり、礫の並びは南西側では二重となっているが、北側では礫が無く、全体として馬蹄形状である。焼土は石囲内に最大14cmの厚さで形成されている。〔柱穴〕床面および壁で55個を検出した。主柱穴と推定されるものはpit1~4である。これら4個のpitは他の柱穴に比して大径かつ深いものであり、緩斜面下方である東側へ寄った台形状に配置される。開口部は65~95cmで、深さは1.1~1.3mである。掘り方埋土は地山ロームの黄褐色土ブロックを含んでおり、床面で円環状に確認できた。4個ともに断面でも柱痕跡がわかり、底面には硬化した柱アタリ部分が確認できた。pit4では平面・断面ともに確認した柱

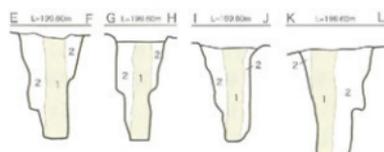


第13図 S110



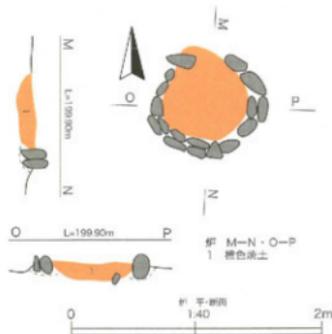
型穴遺土 A-B・C-D

- 1 黒色シルト 遺物/灰土【To-Cu?】5割混入
- 2 黒褐色シルト 遺物/灰土【To-Cu?】3割混入
- 3 黄褐色ローム 黒褐色シルト20%混入 【柱穴掘り方埋土層上硬】



柱穴 E・F・G・H・I・J・K・L

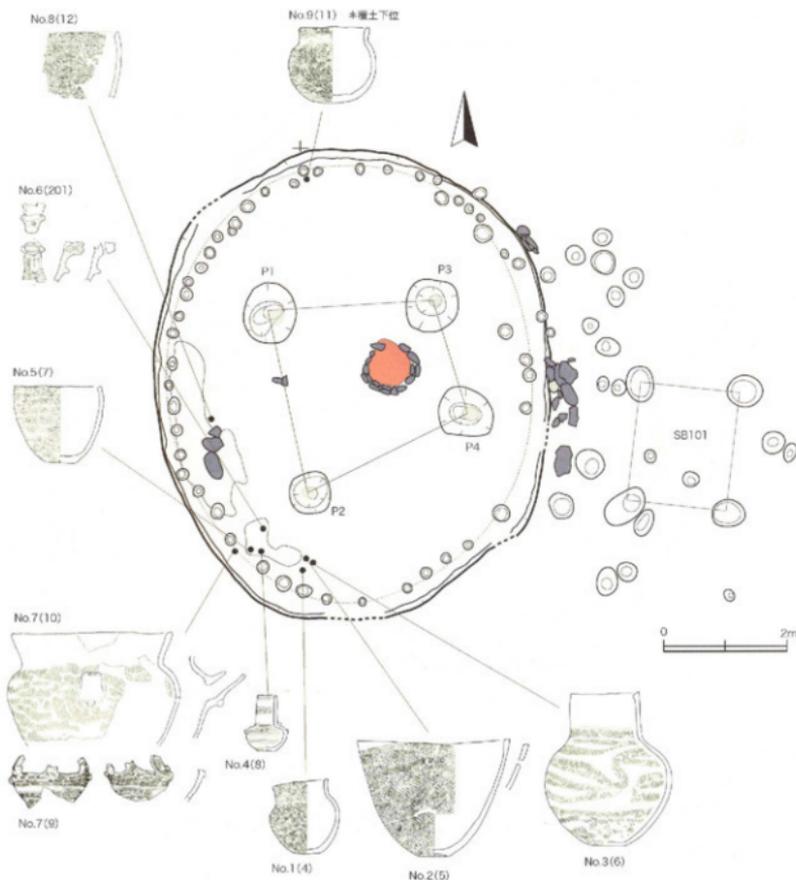
- 1 黒色シルト 【柱表層】
- 2 黒褐色シルト 黄褐色ブロック30%混入 【掘り方埋土】



型穴 M-N・O-P

- 1 褐色成土

第14図 S I 11、S X 01



第15図 S111、S X01、SB101

痕跡は1つのみであったが、底面の柱アタリは2箇所あり、建て替えられている可能性が高い。他の3個では建て替えの痕跡は確認できなかった。主柱穴の4個以外に、壁に沿って巡る小径で浅い柱穴、壁にかかる柱穴を51個確認した。前者(pit5~52)はいわゆる壁柱穴であり、壁立あるいは土留めのための施設と思われる。後者(pit53~55)は本住居に属さない別個のpitかもしれない。〔附属施設〕東側壁のすぐ外側にはS X01配石が位置しており、検出当初は別個の遺構と考えた。礫の配置状況がほぼ本住居のプランと合致していることから、壁の補強や土留め等、何らかの用途を有する附属施設だった可能性が高い。また、斜面下方である東側でpit群を検出した。前述のS X01は一

部途切れる部分があり、当該箇所へ出入口施設が設けられていた可能性を考えたが、柱穴の明確な配置を確認できなかった。

遺物（第18図）〔土器〕堆積土中より約5.4kg分の縄文土器が出土した。遺構の項で述べたように、南西壁寄りの床面で完形・準完形の個体が出土しているが、その他は破片であり器形を復原できたものは少ない。24点を掲載した〔4～27〕。4～10は床面で一括出土した個体であり、後期後葉〔十腰内Ⅳ式〕に属するものである。13～27は堆積土から出土したものである。19は堆積土最上位からの出土で、晩期の鉢形土器である。27は胎土に織継を含む、前期前葉の深鉢の口縁部である。他は後期後葉に属するものと思われる。〔土製品〕床面で動物彩土製品Ⅰ点（201）。〔石器〕石鏃（172）、敲磨器類（189・191～193）。〔石製品〕軽石製装身具Ⅰ点（205）。

時期 床面および堆積土から出土した土器、特に床面上器は当住居跡の時期を反映するものと考えられる。出土土器の様相から、当住居の所属時期は後期後葉〔十腰内Ⅳ式期〕と捉えておく。

S I 12 竪穴住居跡

遺構（第15図）〔位置・検出状況〕ⅢB10 a グリッドにおいて S X 02 配石を検出・精査した後、円形の礎配置を検出したが、S X 02の一部と認識した。しかし当該礎を外す段階で僅かに焼土が伴うことに気づき、竪穴住居の炉跡と認定した。〔重複関係〕直接の切り合い関係は確認できないが、S I 54と隣接することから同住居との重複関係があるものと思われる。新旧関係は不明である。〔形状・規模〕壁はほとんど残っていないため平面形は不明であるが、S I 52と同様に S X 02が当住居の附属施設である場合、北西～西の配置状況から円形基調となると思われる。〔堆積土〕S X 02の精査過程で掘削してしまったため不明である。〔壁・床面〕壁はほとんど残っていない。

〔炉〕石囲炉Ⅰ基を検出した。礎は西側が開いた馬蹄形に配置されている。焼土の形成は弱い。その範囲は炉の全域および開口した西側炉外に張り出している。〔柱穴〕炉周辺および配石付近で15個を検出した。明らかに主柱穴と思われるものはない。〔附属施設〕西側に S X 02が位置する。明確ではないが、当住居の西側壁際に配置されていたものである可能性が考えられる。

遺物（第18図） 削剥および上述の精査過程のため、確認できた出土遺物は少ない。〔土器〕縄文土器（28）。〔石器〕削搔器（180）が pit 2 から出土。

時期 少量ながら後期の土器片が出土しており、後期に属するものと思われる。

S I 13 竪穴住居跡

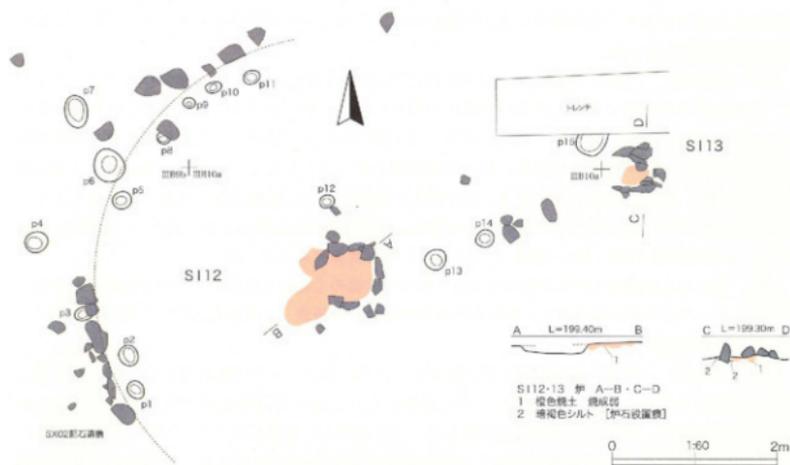
遺構（第16図）〔位置・検出状況〕ⅣB 1 a グリッドにおいて、表土直下のⅣ層上面において炉跡状組石を検出した。竪穴住居の石囲炉跡と判断し住居跡として認定した。残存状況は良くない。〔重複関係〕新旧明確ではないが、位置関係から見て S I 53と重複しているものと思われる。〔形状・規模〕礎は確認できなかったため不明である。〔堆積土〕不明である。表土除去後に炉が検出されたことから、削剥により消失したものと思われる。〔壁・床面〕壁は確認できなかった。床面範囲が判然としないが、炉周辺の床面はⅣ層に相当する。特別に硬化した面は確認されていない。〔炉〕石囲炉である。礎を東西方向平行ぎみに配置している。ごく弱い焼土が形成されている。東側は礎の並びから見て木束閉じていたものかもしれない。西側は開いていた可能性がある。〔柱穴〕当住居に属する柱穴は確認されていないが、S I 53の柱穴中に当住居の柱穴が混じっているかもしれない。

遺物 本住居に伴う遺物は確認できなかった。

時期 周辺の出土土器から後期の可能性が考えられるが、時期の詳細は不明である。

S I 14 竪穴遺構

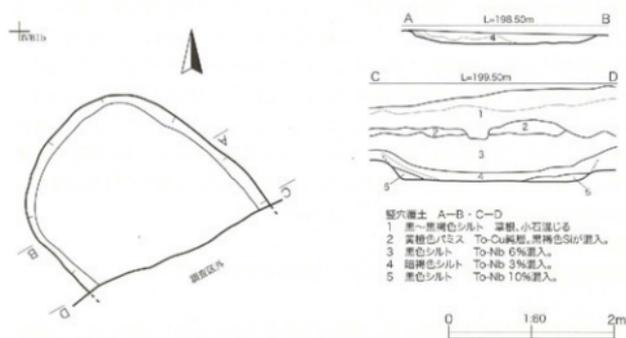
遺構（第17図）〔位置・検出状況〕ⅣB1b グリッド、調査区境界付近のⅤ層面で検出した。〔重関



第16図 S112・13、SX02

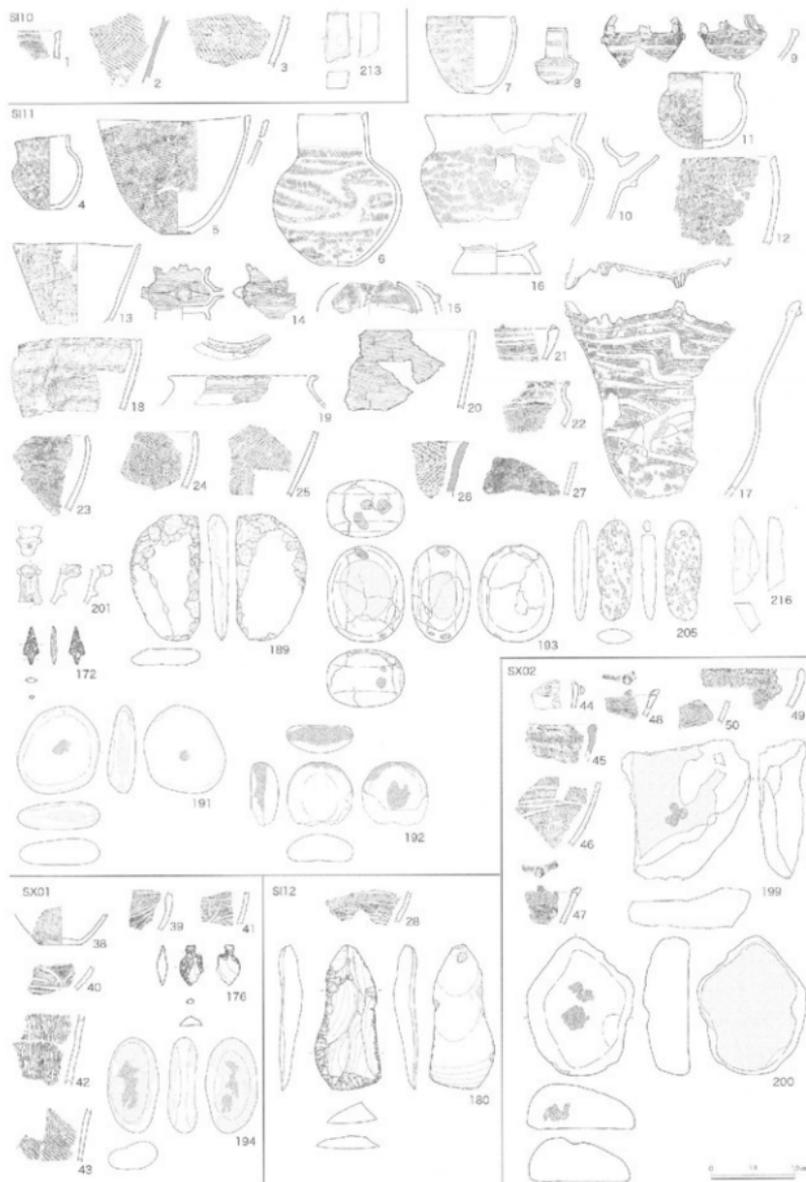
係)重複する遺構はなく、単独で検出された。〔形状・規模〕北側の一部を検出したのみであり全体形状は不明であるが、やや丸みを帯びた隅丸方形を基調とするようである。検出部分では直軸2.5m以上、短軸2.1mである。〔堆積土〕黒～暗褐色シルトが主体である。層中には中振浮石および南部浮石が混在して含まれている。調査区境の断面で確認したところ、中振浮石純層〔Ⅲ層〕直下のⅣ層に被覆されている。〔壁・床面〕掘り込みは浅く、壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。断面で見ると浅皿状を呈している。床面はⅥ層に相当し、僅かに凹凸あるもののほぼ平坦である。〔炉〕確認した範囲では検出されていない。〔柱穴〕検出されていない。

遺物 出土しなかった。



第17図 S114

時期 構築層位から見ると中振浮石降下以前、南部浮石降下以降の遺構であるが、共存する遺物がないため詳細な位置付けが難しい。周辺遺跡のこれまでの調査事例に照し、ここでは早期後半～前期前葉と捉えておく。



第18図 遺構別出土遺物 (1)

部は128×132cmの楕円形である。断面形は逆台形状で、深さは最大36cm、底面もⅥ層中に止まっている。〔堆積土〕南部浮石を含んだ黒褐色土である。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代の遺構と推測されるが、具体の時期は不明である。

SKT 04 陥し穴

遺構（第20図）〔位置・検出状況〕I B10hグリッドのⅤ層面で検出した。当遺構の西側部分（全体の3/4程度）は調査区外（ボックスカルバート設置部分＝浄法寺町教委調査済）に延びている。

〔重複関係〕中世以降の柱穴により截られている。〔形状・規模〕いわゆる溝形の陥し穴の末端部分である。今回確認できたのは全体の1/4程度、長さ約1.1mほどである。やや不整ながら開口部幅は1.0～1.1mほどである。底面は幅15～20cmほどと狭く、短軸側ではラッパ形の断面形状を呈している。通常の溝形陥し穴に比して、やや開口部が広い。〔堆積土〕黒褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代の陥し穴遺構と推定される。時期判断の根拠に乏しいが、形態から判断すればこれまでの調査事例に照らして中期以降のものと思われる。

SKT 05 陥し穴

遺構（第20図）〔位置・検出状況〕Ⅲ B10b・Ⅳ B1bグリッドに跨がっている。Ⅴ層面で検出した。〔形状・規模〕平面はやや隅丸の長方形を呈する。壁は底面から直立しており、断面は箱形である。〔堆積土〕黄褐色ロームブロックを含む黒褐色土を主体としている。西側壁寄りに暗褐色土が流入するが、後世の攪乱か。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代の陥し穴遺構と思われる。具体の時期は不明である。

SKT 06 陥し穴

遺構（第20図）〔位置・検出状況〕Ⅳ A2gグリッドのⅨ層面（八戸火山灰上層）で検出した。〔重複関係〕新期の柱穴に截られている。〔形状・規模〕開口部の平面は長楕円形で、1.2×0.6mと細長い。底面が開口部よりやや狭く、短軸側の断面は逆台形状である。〔堆積土〕主体はロームブロックを含む黒褐色土で、底面付近には地山崩落土層が堆積する。概ねレンズ状の自然堆積の様相を示している。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代の陥し穴遺構と思われる。具体の時期は不明である。

SKT 07 陥し穴

遺構（第20図）〔位置・検出状況〕Ⅲ B2h・gグリッドのⅤ層面で検出した。検出時点では他の溝・柱穴等との重複もあって単独の陥し穴とは気づかず、完掘した後に陥し穴と判明し遺構認定した。〔重複関係〕現代の水道管設置溝、中・近世以降の柱穴と重複し、それらに截られている。〔形状・規模〕細長い溝状の平面形で、長軸約4.1m、短軸36～74cmである。〔堆積土〕上述の積層経過だったため、堆積上の記録を欠いている。調査者の記憶では検出時点では周辺の柱穴と大差ない黒～黒褐色土プランだったと思われるが、詳細は不明である。

遺物 出土していない。

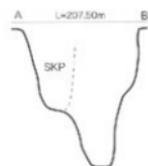
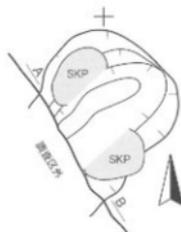
時期 縄文時代の陥し穴遺構である。直截的な時期判断の根拠に乏しく、詳細な記録を欠いているものの、形態的から判断すればこれまでの調査事例に照らして中期以降のものと思われる。

(3) その他の遺構

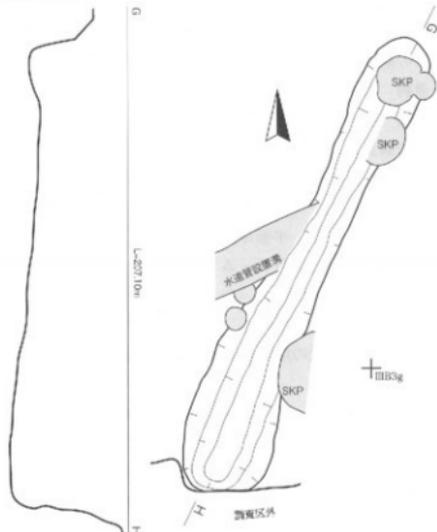
SB 101 掘立柱建物跡

遺構〔第15図〕〔位置〕下段低位面ⅢA9i~9jグリッド、SⅠ11の東側に位置する。同住居東側の他の柱穴を含めて精査したが、現場段階では建物とは気付かなかった。後に整理段階で大径の柱穴が並んでいることに気が付き、建物跡とした。〔規模〕1間四方（総長1.60m×1.96m）の建物である。〔柱穴〕4個検出した。平面は円形および楕円形で、深さ40~55cmである。

SKT04陥し穴



SKT07陥し穴

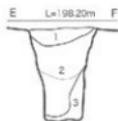
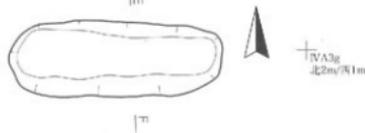


SKT05陥し穴



遺土 C-D
1 赤褐色シルト
2 黒褐色シルト
下位に黄褐色ブロック20%混入

SKT06陥し穴



遺土 E-F
1 赤褐色シルト
2 黒褐色シルト 黄褐色ブロック30%混入
3 黄褐色ロームブロック [地山崩壊土]



第20図 SKT04~07

遺物 出土しなかった。

時期 検出層位からは縄文時代前期より新期の遺構（後期？）と推測される。S I 11に隣接していることから、関連性をもつものかもしれない。

SN 08 焼土

遺構（第21図）〔位置・検出状況〕Ⅲ B 10 a グリッドのⅣ層下位面で検出した。〔重複関係〕他遺構との直接の載り合いはないが、本焼土の上層にS I 12が構築されている。検出当初はS I 12と関係するものである可能性も考えたものの、その構築面にあまりに高低

差があることから別個の遺構とした。〔形状・規模〕焼土は26cm×44cm程の長楕円形の範囲に形成されている。焼土の層厚は6～8cm程である。〔堆積土〕Ⅳ層・黒褐色土を掘削した結果として検出したもので、同層に被覆されていたと思われるが、詳細は不明である。〔付属施設〕周辺で柱穴7個を検出したが、これらが本焼土に伴うのであれば、消失した竪穴住居跡の残骸だった可能性も考えられる。ただし、焼土周辺では床と思われる締まった面は確認できなかった。

遺物 本焼土に伴う遺物は出土しなかったが、周辺から前期の縄文土器が出土している。

時期 遺物を伴わないが、中塚浮石純層より下位で検出されたことから、縄文時代早期後半～前期前葉にあたるものと推測される。

S X 01 配石遺構

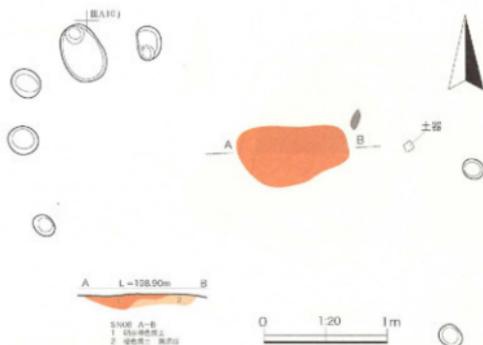
遺構（第14図）〔位置・検出状況〕Ⅲ A 9 i グリッドの基本層序Ⅳ層面で検出した。S C 03遺構面の粗掘りの際に数個の礫が集中していることが分かり、単独の配石遺構と想定した。後にS I 11が検出され、本遺構が同住居に伴う可能性が高いことが判明した。〔重複関係〕S I 11の壁際に位置しており、前述のとおり同住居に付随する施設と推測される。〔形状・規模〕16個の礫を配置している。礫の並びは2つの部分に別れている。主体は南側の礫群で礫12個が带状に配されている。約1.5m離れて北側にも4個が設置されているが少ない。南北の礫群の間には礫が設置された形跡はなく、前述のとおりこの部分がS I 11出入口である可能性あることから、もともと礫がなかったものと思われる。〔堆積土〕礫検出時点で堆積土の殆どを掘削してしまっていたので、詳細不明である。

遺物（第18図）〔土器〕堆積土および礫周辺から縄文土器70点弱・0.97kg分が出土した（38～43）。38～41は後期後葉、42・43は前期の土器である。〔石器〕石匙（176）、敲磨器（194）。

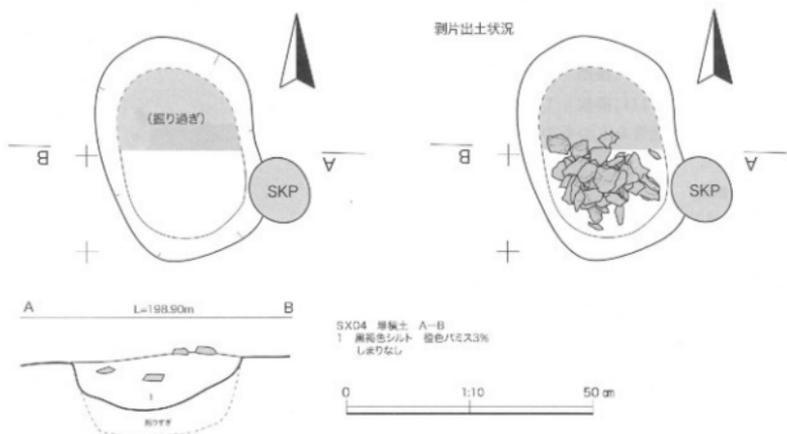
時期 S I 11に付随する遺構である可能性が高いことから縄文時代後期後葉と推測される。

S X 02 配石遺構

遺構（第16図）〔位置・検出状況〕S X 01と同じくⅢ A 9 j～Ⅲ B 9 a グリッドのⅣ層面で検出した。〔重複関係〕S I 12との位置関係から見て、同住居に関連するものと思われるが、明確ではない。〔形状・規模〕礫20個を配置している。南北2つのブロックに分かれており、南側の礫13個は弧状に配された纏まりとして認識できるが、北側の礫は散在的である。北側は原位置を保っていないも



第21図 SN 08



第22図 SX04

のと思われる。本配石は礫検出面がS I 12炉検出面 (=床面想定面)とレベル差ない。SX01はS I 11の壁外部に設置されているが、当配石がS I 12に伴う場合、住居内部に構築されていた可能性が考えられる。〔堆積土〕SX01と同じく、礫検出時点で堆積土の大部分を掘削してしまっており、詳細は不明である。

遺物 (第18図)〔土器〕縄文土器80点弱・0.95kgが出土した(44~50)。45・49は前期、他は後期の土器である。〔石器〕配石使用礫に石皿(199)、磨石(200)が含まれていた。

時期 S I 12に付随する遺構である可能性が高いことから縄文時代後期後葉と推測される。

SX04 剥片埋納遺構

遺構(第22図)〔位置・検出状況〕IV B 1 a グリッドのV層面で複数の剥片の纏まりが検出され、周辺を清浄したところ土坑状のプランを検出した。〔重複関係〕南東壁際で柱穴1個と重複しており、これに載られている。〔形状・規模〕平面形は概ね32×45cmの楕円形を呈しているが、やや歪んでいる。セクションを参照すると断面形は深さ11cmの皿状である。壁はV層に相当するが、底面はその下層のVI層(南部浮石を含む黒色土)にあたっており堆積土(IV層由来の黒褐色土)と殆ど区別がつかなかった。そのため、断面を切る際に北半部分は掘り過ぎてしまい、底面北半部の状態は不詳である。残存する南半部では平坦な底面である。なお、堆積土と「地山」の区別がつきづらかったこと、剥片の分布が北半部で希薄なこと等を踏まえると、土坑自体がもっと小さいものだった(検出時点で平面形を誤認し掘りすぎて広がった)可能性もある(*検出状況は写真図版8を参照)。〔堆積土〕IV層を起源とする黒褐色土である。

遺物(第85・86図)〔石器〕堆積土から石器素材となる剥片54点が出土、18点に接合関係が認められ、接合資料8点が得られた。これらについてはV章で述べる。

時期 土器は共伴していないが、検出層位から見て、縄文時代早期後半~前期前葉の遺構である可能性が高い。

3 中世・近世

(1) 「吉田館」の縄張と地籍

〈縄張〉第Ⅱ章で述べたとおり、吉田館は別称「カイ館」と呼ばれ、中世城館跡として従前から周知されていた。吉田館の縄張りについては、梁部善次郎、沼館愛三らが現地踏査にもつづいた報告を行っている。沼館愛三『南部諸城の研究』（沼館1981、前掲）では、吉田館について現地踏査にもつづく記載があるが、残念ながら図は割愛されている。また、『岩手県中世城館跡分布調査報告書』（岩手県教委1986、前掲）においても吉田館については一覧表での記載はあるが、その詳細については言及されていない。唯一、梁部善次郎『二戸郡・九戸郡内古城館址考』（梁部1971、前掲）においてまとまった記載と図が掲載されている。第23図が同書に掲載された当館跡の概略図である。図示された館範囲は内堀跡と思われる現市道春日筈平線以東の東郭部分であり、西郭については括れられておらず、外堀も見えない。図でいう「吉田部落」・「畑」と記されている部分が西郭にあたる。また下段平場SC02・03部分もまた範囲外とされ、図の表現もデフォルメされて狭く描かれている。図示されている「八幡宮」は現状では図の場所には無く、調査区上段北側に隣接する民家の脇に移設されていた。図中には主郭内の中心エリアではないかと推測される上段平場の南側段差も表現されている。

吉田館の縄張についてその概要を見る（第24図）。館は全体として東西二郭で構成されており、今回調査範囲は東郭部分である。東西の郭は大規模な空堀により分かたれる。西郭は外郭（副郭）と思われ、西一南側縁辺部に堀切がなされて段丘基部から切り離されている。なお、この堀は西隣の桂平Ⅰ遺跡の調査において薬研堀であることが確認された（岩手県埋文：2008年度本報告予定）。東郭部分は上段の主曲輪と思われる平場、およびそれを取巻く数段の狭い帯状曲輪群から成る。上段平場北側の「現道」西脇で虎口・門が確認されており、当館の大手は北側だったと思われる。東側には比高約6mの崖（切岸）を経て、吉田川に面する下段の平場が存在する。ある程度の広さをもつものであるが、内部は現況では低い段差により二分されている。この下段平場の東縁は崖で、自然地形を利用した切岸となっている。なお現況では構成の整地により平坦化して識別不可能であるが、今回調査によって切岸に沿う箱堀の存在が明らかとなった。東郭北側には、腰曲輪や犬走と推測される狭い平場面が複数見られる。一方、南東一南側にも吉田川に落ち込む崖沿いに、現況で通路として利用されている小道があるが、この部分が搦手ではないかと推測される。全体の構成を見ると、山陵に面した南側の防禦が手薄で、搦手からの攻撃を想定していないような印象を受けるが、当地域の館には往々にしてある傾向だったようである。

『岩手県管轄地誌』の「御山村」の記述の中に、御山村清水尻の「館」は吉田某の館跡であるという一節がある。館Ⅱ遺跡の報告書（岩手県埋文2006）に掲載され



(梁部1971から引用)

第23図 吉田館概略図



縮尺 1 : 2000
原図：室野秀文氏作成

第24図 縄張図



*「浄法寺村大字御山字大手全圖」「桂平」「海上田」「大久保」「清水尻」「館」「前田」「大坊」(明治30年調製、二戸市教委・蔵)を合成した。

*図幅の境界が一致しない箇所は、引用者の判断で修正した。

第25図 地籍図

ている絵図「岩手県管轄陸奥国二戸郡御山村」では館Ⅰ遺跡該当部分に「古館」との表記が見られることから、「館」とは不動館東郭部分=館Ⅱ遺跡のことであろう。両史料ともに明治時代のものであり、後世の伝承に基づくものではあるが、不動館の館主が吉田一族であった可能性はきわめて高いものと思われる。すなわち、吉田館と不動館とは吉田氏により普請された一对の城館と捉えられよう。吉田川を挟んで対向し、かつ安比川を挟んで宗家・畠山氏の本城である浄法寺城に正対するこれらの館は、安比川に沿って延びる主街道、および吉田川沿いの脇街道を監視・防備する役割を担ったものだったと推測される。吉田館と同様、不動館も掘手側の防禦はあまり考えられていないようであるが、おそらくその役割に起因するのではないか。

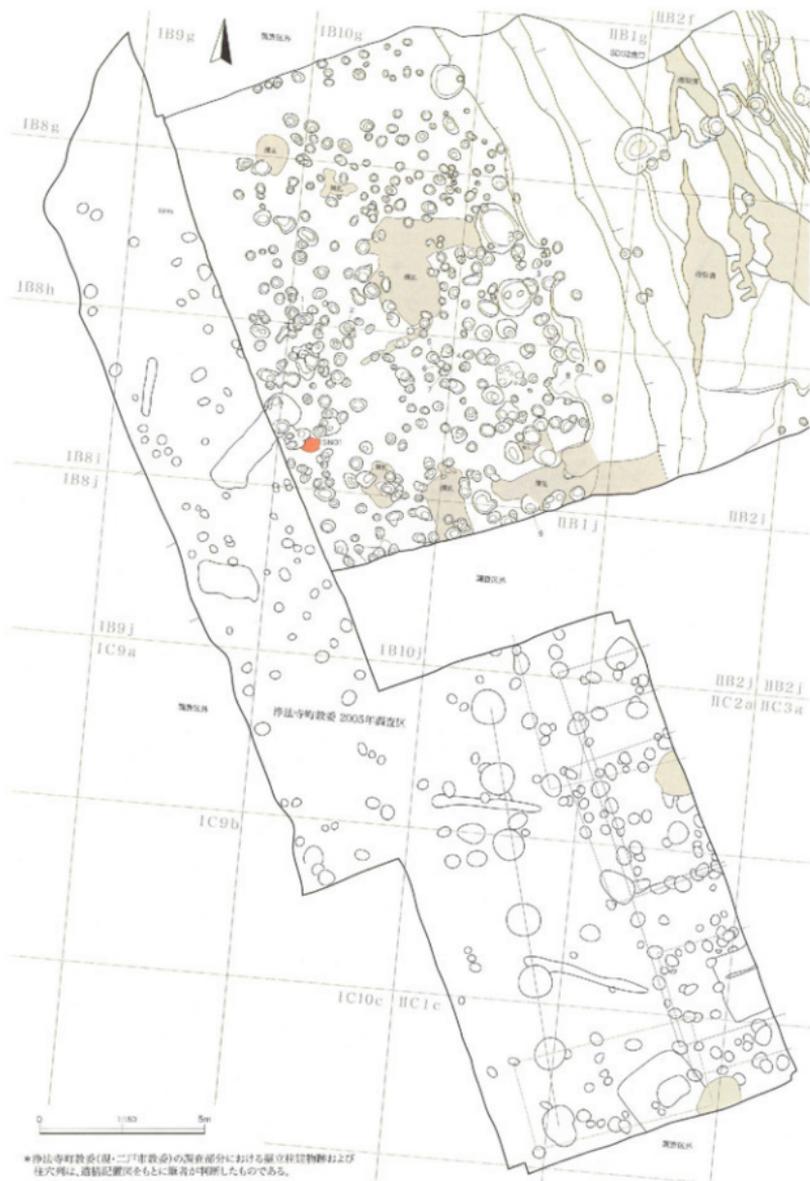
<地籍> 二戸市教委には明治30年に作成された地籍図が保管されている。第25図は「浄法寺村大字御山」のうち、大手・桂平・海上田・大坊・大久保・清水尻・館・前田を合成したものである。図幅中には吉田館と不動館の二つの城館が含まれている。このうち、吉田館に相当する部分を見ると、吉田館は「字大手」と「字桂平」に跨がっている。「大手」という字名から城の大手口の存在が想起されるが、字大手の字界は吉田館東郭を挟んで南北両側に細長く延びており、大手口の存在は南北いずれなのか判然としにくい。大坊・海上田から崖沿いに東へ延び、クランク状に屈曲して館上段曲輪(主郭)へと続いている道が確認できる。この道は現在の地形図と照合すると現在使用されている小道と同一のものと思われ、後述の虎口は既に埋められていたものと考えられる。上段曲輪の南側は細かい地割がなされているが、具体的に何を反映したものか不明である。この部分は低い段差を経て一段高くなっており、上段曲輪の中心部分の可能性がある。館の東郭と西郭を分ける内堀は既に道として利用されている。館の西側縁辺部には細長く狭い地割りがあるが、この部分が桂平Ⅰ遺跡第1次調査(前掲、川又2007)で確認された空堀で、吉田館の外堀にあたるものである。また吉田川に沿って、宅地および畑地となっている狭い帯状の地割が見られる。この部分は帯曲輪であろうか。SD01・03およびSD04は地割りからは確認できず、この時点で既に埋没(整地)により平坦化してしまっているものと思われる。本館跡は地籍図の作成された明治30年時点で主に畑地として利用されているが、既にある程度宅地化が進んでいたことがわかる。今回の調査で近世の遺物も出土していることから館破却後も何者かが館跡に居住していた可能性があり、近世以降、現代まで連続して利用されていたことが推測される。ともあれ、明治30年の地籍図と昭和30年の航空写真(写真図版裏に掲載)とを見比べると殆ど変わらず、少なくとも近世当時の景観が大きく改変されることなく、現在まで保たれていたことがわかる。

(2) 平 場

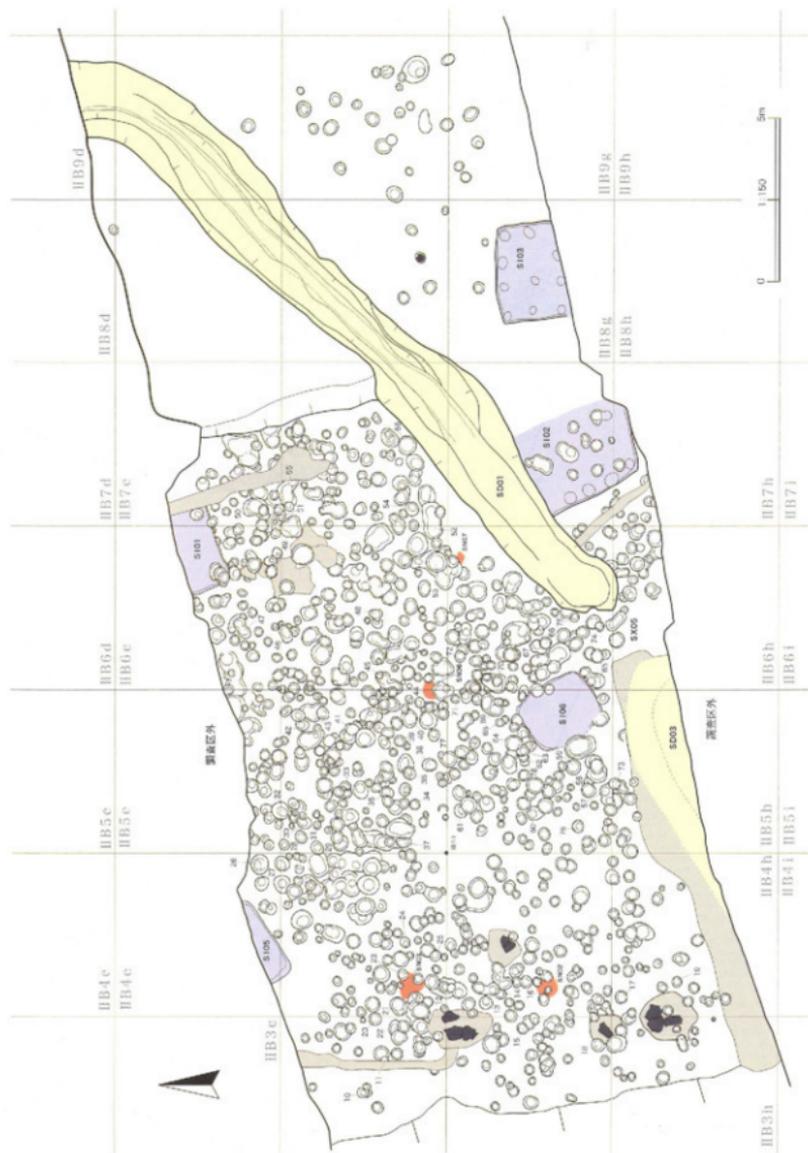
平場3面を検出した。大別すると、S F01切岸とS D04堀により区切られた西側高位面の曲輪と、S D04堀以东の低位面の曲輪の二つである。前者をS C01平場とした。後者については、比高差30~50mほどの低い段差によりさらに高低2面に分けられることから、高位をS C02平場、低位をS C03平場とした。平場面は厚さ30~40cmの攪拌された表土・盛土層に覆われ、その直下で遺構面であるⅤ~Ⅵ層が露出する。表土・盛土層からは縄文土器や土師器の破片が出土した。

S C 01 平場

遺構 吉田館の最上位にあたる平坦面である。本平場は遺構配置から見て、その内部に性格の異なる区画を有するものと考えられることから、S D02虎口以西をS C01-a、S D02とS D01に挟まれた柱穴密集エリアをS C01-b、民家進入路より東側をS C01-c、と便宜的に区分することにする。調査部分は主に宅地として利用されていた場所であり、住宅基礎設置や耕作等の攪乱が全般的に



第26図 SC01-a



第27図 SC01-b

道部分は主郭を区画・防禦する堀〔内堀〕である可能性が高いことから、堀と虎口に挟まれ、やや張り出した形状の平場と解される。当平場面では焼土1基（S N01）、柱穴349個を検出し、それらの柱穴から掘立柱建物跡12棟（S B001～012）を想定した。主屋的な大型建物を作事するには手狭であり、かつ虎口に対する位置関係から、いわゆる「横矢掛り」の平場としての性格を帯びたものと推測される。構築面はⅢ層八戸火山灰上層である。なお、浄法寺町教委が調査した当平場西端部（ボックスカルバート設置部分）および南側隣接地（民家宅地部分）では、竪穴建物跡2棟、土坑2基、柱穴多数が検出されている。柱穴の中には、大径のもの7個が直線的に並ぶ柱穴列（建物跡？欄？）と思われるものがあり、平面図から拾った限りでは掘立柱建物6棟程度が想定できそうである。

S C01-b平場（第27図） S D02虎口以東、ⅡB10ライン付近までの範囲である。当平場面は、上段平場中で最も遺構密度が高く、竪穴建物跡・竪穴遺構5棟（S I01～03・05・06）、空堀跡2条（S D01・02）、焼土4基（S N02・03・06・07）および柱穴926個が検出された。柱穴群から掘立柱建物跡42棟（S B013～054）、門跡1棟（S A02）、柱穴列1条（S A03）を想定した。S X05土橋を挟んで対向するS D01・02の空堀2条が北東-南西方向に当平場を区切っている。また、当平場の東端部分は20～30cmほどの段差があり、東側の低位面では遺構が極端に疎らとなる。この段差が現代の造成によるものか、中世ないしは近世段階のものなのか、判然とはしないが、遺構の遺存状態から見て館破壊後の近世以降の削割によるものと考えられる。構築面はⅢ層である。

S C01-c平場（第28図） 概ねⅢB1ライン以東のS C01平場東側部分で、東端はS F01切岸に接している。当平場面では、竪穴建物跡1棟（S I04）、焼土2基（S N04・05）、柱穴529個が検出され、掘立柱建物跡11棟（S B055～65）、柱穴列2条（S A04・05）を想定した。西隣のS C01-b平場に比して遺構密度は高くないものの、大径の柱穴が多く、それらから比較的大形の建物が想定された。構築面は大部分がⅢ層、東側切岸側の一部がⅣ層八戸火山灰下層である。遺物は遺構堆積土である表土層から出土したものである。

遺物 遺構を覆う表土層から出土しているが、狭義には「遺構内」遺物ではない。〔土器〕縄文土器（70・71）、土師器甕（130～132）、須恵器甕（136）。〔陶磁器〕磁器青花碗（142）・青磁皿（170）、陶器碗（154）・播鉢（162）、土師質土器（164）、瓦質土器（167）。〔石製品〕基石（208）。〔金属製品〕円環状製品（223）、古銭（239・247・261）。

時期 館に伴う遺構であり、構築時期は中世と推測される。

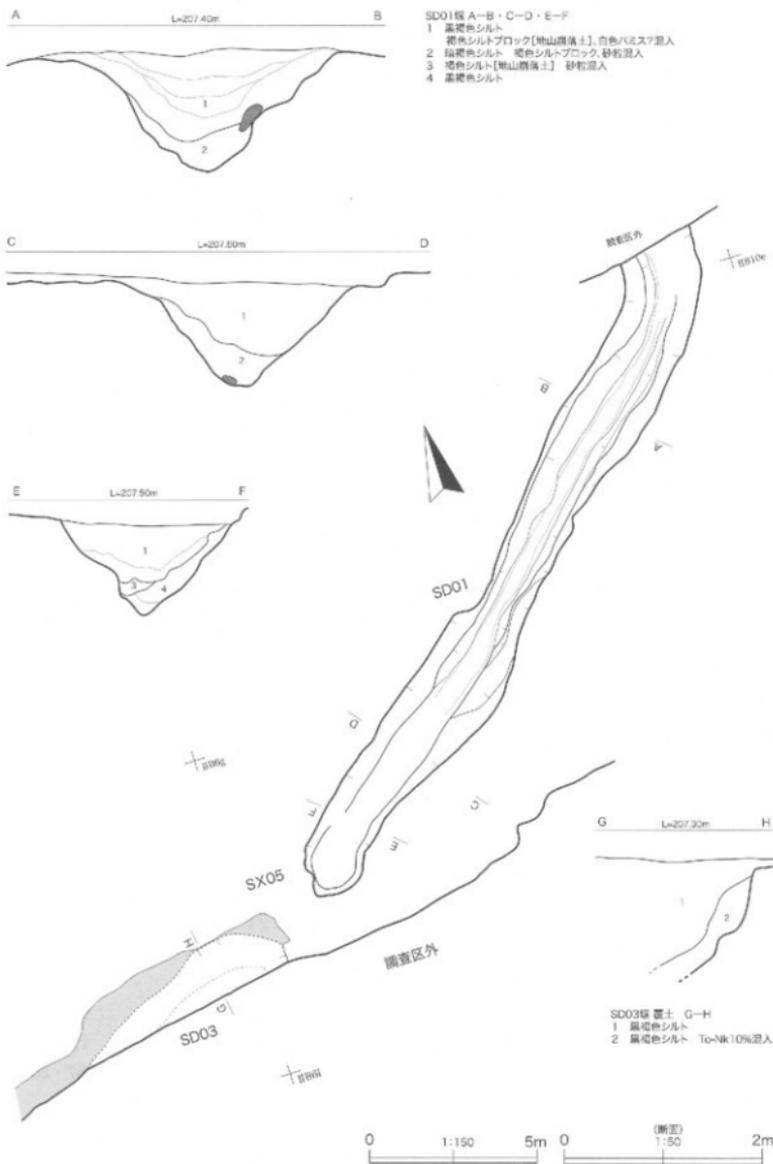
S C 02 平場

遺構（第29図） 平坦面下段西側のS D04に沿った中位の平場である。幅10～12mの狭い帯状の平場で、西側はS D04に接し、東は緩く僅かな段差でS C03へと連続している。遺構面は概ね基本層序Ⅳ層のシラスが露出するが、東側縁辺部分はⅢ層八戸火山灰上層に相当している。平場遺構面はS D04堆積土上面から続く整地層（近世の地業）により被覆されている。本平場面では、空堀1条（S D04）、竪穴建物跡・竪穴遺構3棟（S I07～09）、柱穴276個が検出され、掘立柱建物跡4棟（S B66～69）を想定した。

遺物 遺構を覆う表土層から出土しているが、狭義には「遺構内」遺物ではない。〔土器〕縄文土器（72～81）。〔陶磁器〕磁器青花皿（145）、陶器鉢（155）・播鉢（160・162）、土師質土器（164）。〔石器〕削搔器（181）。〔金属製品〕刀子（220）、古銭（241・249・253～257・259・263）。

時期 館に伴って普請された遺構であり、構築時期は中世と推測される。

S C 03 平場



第31図 SD01・03、SX05

遺構（第30図） 下段低位面の平場である。本平場はごく緩い傾斜面であり、東の吉田川に面する崖へと緩く下っている。平場面は基本層序Ⅱ～Ⅷ層へと、緩傾斜に従って段階的に漸移している。本平場面では、柱穴571個が検出され、掘立柱建物跡10棟（S B70～79）を想定した。

遺物 S C 01・02と同様。〔土器〕縄文土器（82～119）。〔陶磁器〕磁器皿（143）、陶器皿（149～151・158）・碗（156）・指鉢（163）。〔石器〕石鏃（171）、尖頭器（174）、石匙（178）、磨製石斧（182・184～187）、敲磨器（190・196・197）。〔石製品〕蚌石製装身具（206）、碁石（209）、砥石（218）、石臼（219）。〔金属製品〕占銭（258）。

時期 館に伴う遺構であり、構築時期は中世と推測される。

（3）空堀跡

3条検出した。S C 01平場面で2条〔S D 01・03〕、S F 01裾部で1条〔S D 04〕である。上位平場面の2条は平場内の区画を全図するものと思われる。一方、S D 04は切崖と一体となっており、主郭である上位平場に対する区画および防禦的な性格を有するものであり、現況では判然としないが、館の縄張から見ると「内堀」（現市道部分）と連動している可能性が高い。

S D 01 空堀跡

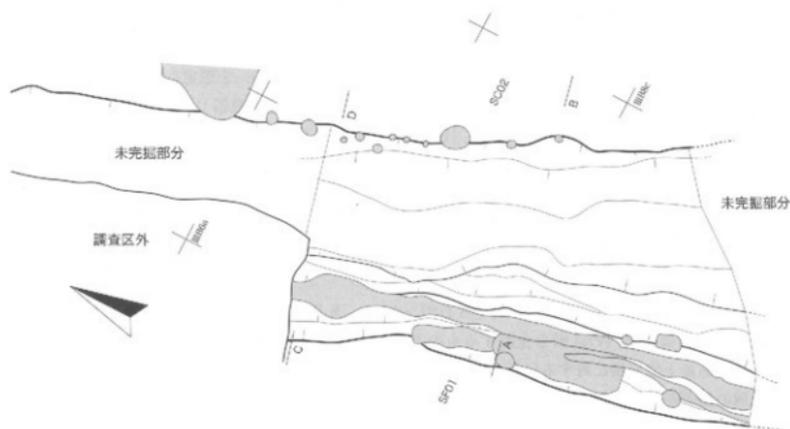
遺構（第31図）〔位置・検出状況〕試掘トレンチT12において黒色土の落ち込みを検出した。黒色土層中から須恵器片が出土したことから、その時点では古代の竪穴住居跡の可能性を考えていた。しかし上段平場の表土除去に際して帯状に延びる黒色プランを検出、先に検出した黒色土の落ち込みが大溝状の遺構であることが判明した。なお、精査時点でその規模・形状から大溝ではなく空堀跡として遺構登録した。〔重複関係〕S I 02竪穴遺構と重複している。堆積土断面では明確ではないが、S D 01堆積土中にS I 02床面らしき痕跡は認められなかったことから、当空堀の方が新期と捉えた。〔規模・形態・方向〕調査区内では主に南西―北東方向に直線的に延びているが、調査区北側境界付近で屈曲している。調査区境のため判然としないが、概ね北西方向へと方向転換しているようであり、全体としてL字状となる可能性がある。検出部分の総長は約12.5mである。法面は八戸火山灰土層、底面は下層シラスにあたる。ただし南西端部は八戸土層の不整合砂層が露出し、精査過程で崩れてしまった。セクション図で見ると、断面形はV字形を呈し、いわゆる薬研堀である。掘幅1.7～2.6m、垂直壁高1.2m、実効法高1.8mである。〔堆積土〕主に地山崩落ブロックを含んだ黒褐色シルトである。自然堆積の様相であり自然に埋没したものと解釈される。

遺物（第35図）〔土器〕堆積土から縄文土器（32～36）、土師器（122～126）、須恵器（134）が出土している。〔石製品〕羽口（203）。〔石器〕敲磨器（195）。

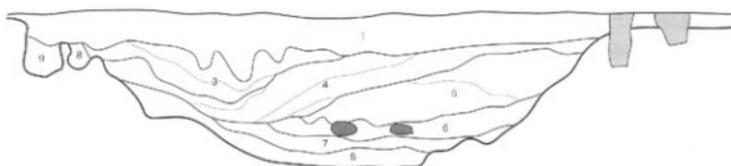
時期 S D 03と対になって上段平場の一部を区画するための堀である。出土遺物は縄文・平安時代のものであるが、館跡に付随する遺構と捉えられることから、中世に属するものと推定される。

S D 03 空堀跡

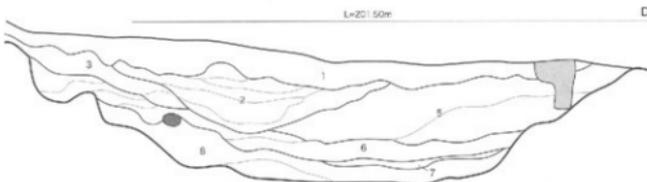
遺構（第31図）〔位置・検出状況〕Ⅱ B 5 h～Ⅱ B 4 hグリッドの調査区境界付近で検出した。プランが攪乱部分と一体化していたため、当初は空堀とは認識せず、攪乱除去後にS D 01と類似する落ち込みを確認し、空堀として認定した。〔重複関係〕縁辺部の大部分を後世の攪乱により破壊されている。〔規模・形態・方向〕調査区境界際であり、かつ攪乱をうけているため明らかではない。また残存部分も八戸土層の不整合砂層にあたるため崩落しやすい。そのためその形態を把握しきれなかったが、S D 01と同様に薬研堀の形態をとり、S D 01と対向して北東―南西方向へと延びているものと推測される。セクション図で見ると、掘幅1.2m以上、垂直壁高1.1m、実効法高1.4mであ



A L=201.50m B



C L=202.00m



SD04遺跡 A-B・C-D

- 1 黒褐色シルト質砂土 灰白色シルス ブロック7%、小石1%混入
- 2 オリーブ黒色シルト 灰白色シルス10%混入
- 3 灰白色シルト質砂土 マトリクスは灰白色シルス
- 4 灰白色シルト灰砂岩質ブロック マトリクスは凝灰色シルス
- 5 凝灰色シルト質砂土
- 6 灰オリーブ色シルト質砂土 傘～人頭大の礫が混入
- 7 黒褐色シルト シラスブロック10%混入
- 8 Gと同質
- 9 黒褐色シルト シラスブロック3%混入 【SD05準換土】

0 平面 1:150 5m

0 断面 1:50 2m

第32図 SD04

る。〔堆積土〕SD01と同様に黒褐色シルトの単層で、自然堆積と捉えられる。

遺物（第35図）〔土器〕不掲載であるが須恵器壺が出土。〔土製品〕羽口（204）。

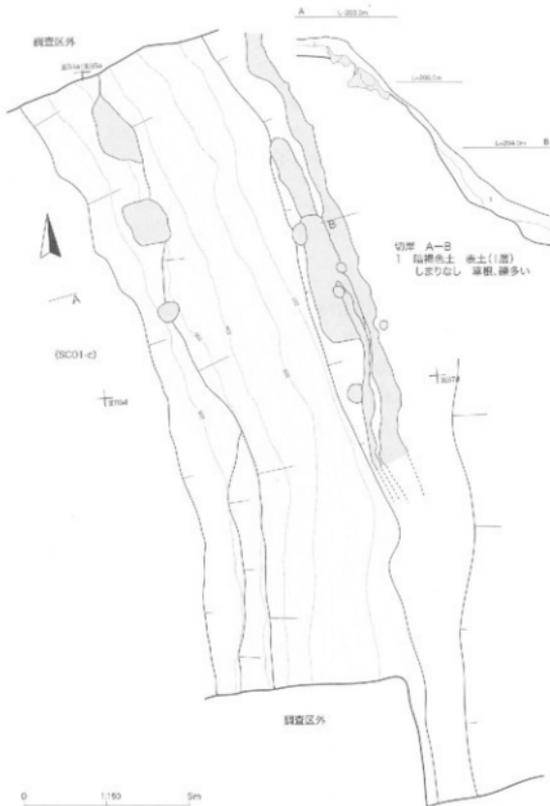
時期 対向するSD01と並存して、上段平場の一部を区画するものと思われる。須恵器が出土したが、館跡に付随する遺構と捉えられることから、中世に属するものと推定される。

SD 04 空堀跡

遺構（第32図）〔位置・検出状況〕SF01切岸の裾部分に接している。埋め戻された混合土の帯状の広がりとして検出した。検出部分のうち、調査範囲の関係で幅狭い北側1/2程度および吉田川に面する崖沿いの南端部分は安全対策上、法を残さねばならず、完掘できなかった。

〔重複関係〕北側は調査区外へ延びている。S107・08より新しく、それらを載っている。近世の地業と思われる整地層に被覆され、

整地層を掘り込む多数の柱穴（近世以降）に載られている。〔規模・形態・方向〕検出部分の全長は約24.5m（精査部分約13m）である。南端部は吉田川に面する崖面で開口していると推測される（未完掘）。また北側は下段平場に沿う崖部分（切岸？）まで達して開口している可能性があるものの、現状では確認できない。断面形は概ね逆台形を呈しており、箱堀である。西側は底面の40～50cm程の段差を経て、外傾して切岸裾部へ接続する。一方、東側法面は底面から直に外傾して立ち上がる。堀幅3.6～4.2m、垂直高1.5m、実効法高1.8mである。堀の大凡の軸線はN-20°-Wである。底面にはレベル差が殆どなく概ね平坦である。〔堆積土〕3層に大別される。最上位（1層）は埋め戻しによる整地層である。版築ではなく全体が八戸火山灰上層ロームとにぶい黄褐色土の混合層で、堅く締まる。この整地層はSC02にも及ぶが、当層を掘り込む柱穴から寛永通寶（古寛永）が出土していることから、この地業の下限は17世紀前半と考えられる。中～下位層はIV層起源のシラスブロック



第33図 SF01

が多量に混入する人為的埋戻し層である。セクション図に示すとおり、中位層が下位層を截っている。精査時点では堀の掘り返しも考えたが、本来の堆積土である下位層が雨裂により抉れたものかもしれない。

遺物 (第35図) 主として最上位の整地層から出土した。〔陶磁器〕瓦質土器火鉢 (166)。〔石製品〕石剣 (207)。

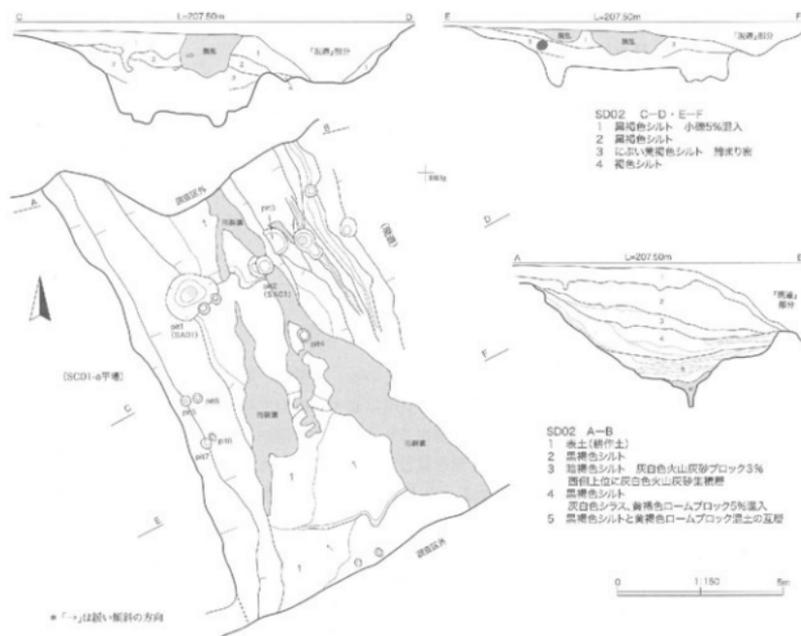
時期 館跡に付随する遺構と捉えられることから、中世に属するものと推定される。

(4) 切岸・虎口・土橋

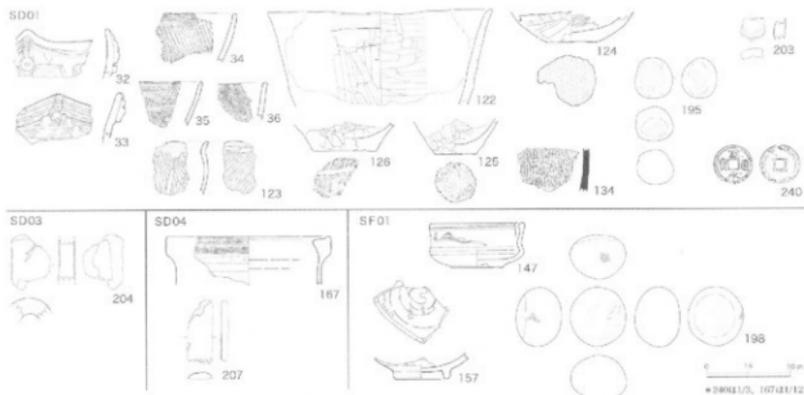
S F01 切岸

遺構 (第33図)

〔位置・検出状況〕上段平場と下段平場の間に位置する。現況でも急斜面となっており、調査当初から切岸として認識できた。〔重複関係〕東側下方でS I 07・08およびS D 05・06が裾部分を截っている。また、同じく裾部分がS D 04と接しており空堀がより新しいものと思われるが、重複というよりは一体化しているものと捉えられる。〔形状・規模〕地山を削削して構築しており、切岸遺構面では上位が八戸火山灰上層、中～下位は同下層が露出している。検出部分の全長は約24.5m、セクションを参照すると垂直壁高5.5m、実効法高8.0mである。削削の角度は上位で緩く約50°、中下位で約60°と急角度で落ち込んでいる。〔堆積上〕主に上段から流入した表土層である。



第34図 SD02



第35図 遺構別出土遺物(2)

遺物(第35図)〔陶磁器〕磁器(147)・陶器(157)。(石器)磨石(198)。

時期 館跡に付随する遺構と捉えられることから、中世に属するものと推定される。

SD 02 虎口跡

遺構(第34図)〔位置・検出状況〕SC01-a 平場の精査過程で、同平場東側1/3ほどで黒褐色土の広がりを検出した。トレンチを設定して掘り下げた結果、この部分が堀状に落ち込んでいることがわかり、「SD02空堀跡」とした。なお、精査過程で当遺構が空堀ではなく虎口であることが判明したが、遺構略号は変更していない。現況では平坦に整地されており、当虎口の存在を全く予想できなかった。〔重複関係〕直接の重複関係ではないが、当虎口東側に隣接して現状の上段への登り口である小道が開削されている。〔形状・規模〕全体として堀状の落ち込みとなっている。西側は法面の立ち上がりを経てSC01-aに連続し、東側は低い墨壁状の高まりを介して現況の小道に接する。東側を中心に深い雨裂溝により破壊されており、詳細が不明な部分も多い。底面の平坦面はpit1~3以南でやや膨らんでおり、底面全体が北側に向かって緩く傾斜している。南側は一段高くなっているが、やはり緩く北側へと傾斜している。〔堆積土〕1層は耕作土、2~4層は人為堆積の埋め戻し層であり、主として西側のSC01-a方向から纏まった単位で流入している。3層はシラスが主体であり、不自然な堆積様相を示す。一方、5層はブロック状のシラスが混入する複数の細分層で構成され、主として東側からの流入と捉えられる。5層についても人為によるものと思われるが、法面の崩落による可能性もあり、はっきりしない。6層は雨裂溝の堆積土であり人為か(補修の痕跡?)。〔壁・底面〕西壁は傾斜角40°で外傾してSC01-a面へと連続し、下方側のセクションA-Bで見ると、実効法高4.5m、垂直墨壁高3mを測る。東壁は外傾して高さ1mほど立ち上がって段をなした後、東脇の上墨状の高まりへと続く。底面東縁を中心として雨裂による深い抉れが見られる。底面は北側1/2が一段低く、かつ北側へ緩く傾斜している。この段差は中央付近でやや膨らんで幅が広がっている。〔附属施設〕底面で4個、法面で5個、南側上段部分で2個の柱穴を検出した。底面で検出したpit1・2は本遺構に付随する門跡を構成するものと推測される(SA01)。また、底面からの登り口

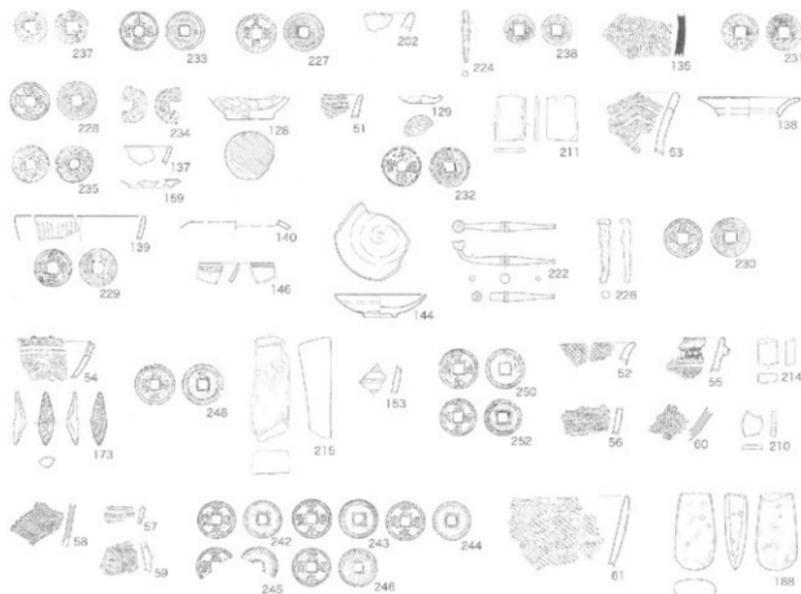
が付設されていた可能性が考えられるが、雨裂による擾乱が激しいため明らかではない。

遺物 当遺構を覆う表土層から陶磁器（147・157）、磨石（198）が出土しているが、確実に伴うもとは云えない。

時期 門を伴った上段平場（主郭）への出入り施設である。堆積土の様相から（少なくとも上位層については）意図的に埋め戻されたと判断できるが、これは館の廃絶にともなう所産と思われる。なお、当虎口が埋め戻された後に、S C01-b 西側縁辺を削って新たに真直ぐな登り口〔現道〕を開削したと思われる。遺物を伴わないため、本虎口が構築され機能した時期を直截的には判断できない。ただし、館全体に係る年代観から見て、機能時期は中世に取まるものと推測される。館の廃絶時期は浄法寺城廃絶とほぼ同時期と推測されることから、本遺構の所属時期の下限は16世紀末頃と思われる。

S X05 土橋

遺構（第27・31図）〔位置・検出状況〕二つの空堀S D01・S D03のプラン検出時点で、それらが連結せずにその間に掘り残し部分があることがわかり、当該部分を土橋と解釈した。II B 6 g グリッド南西隅付近にあたる。〔重複関係〕多数の柱穴が重複しているが、直接的には新旧関係不明であ



▼柱穴〔SKP〕出土遺物

SKP3: 237, SKP5: 235, SKP7: 227, SKP8: 202, SKP12: 224, SKP13: 238, SKP14: 135, SKP16: 231
SKP19: 228, SKP20: 234, SKP27: 235, SKP30: 137・150, SKP32: 128, SKP37: 51, SKP38: 129・232
SKP39: 211, SKP41: 53, SKP46: 138, SKP50: 139・229, SKP53: 140, SKP58: 146, SKP59: 144
SKP60: 222, SKP65: 226, SKP66: 230, SKP70: 54・173, SKP76: 248, SKP78: 215, SKP84: 133
SKP85: 250・252, SKP129: 52, SKP194: 55, SKP109: 214, SKP115: 56, SKP116: 60, SKP126: 210
SKP128: 58, SKP140: 57, SKP142: 59, SKP144: 232~246, SKP146: 61, SKP153: 188

第36図 遺構別出土遺物（3）

る。〔形状・規模〕空堀掘削時に地山ローム（八戸火山灰上層）を掘り残したものである。後世に削平されている可能性はあるものの、確認した部分ではほぼ平坦な面をなしている。その幅は最短部分で1.5mである。〔堆積土〕堆積土断面の記録を欠くが、表上直下で検出したことから、表土層（I層）に被覆されていたと思われる。

遺物 当遺構に伴う遺物は確認されていない。

時期 中世に属するものと推定される。

（5）柱穴群・掘立柱建物跡・門跡・柱穴列

調査区の全域で多数の柱穴が検出された。S C 01-bのS D 01・03による区画内部において、特に密な分布を示している。総数2,651個である。柱穴としたものの中には柱痕・柱アタリが確認できない小径なものも多く、本当に柱穴なのか確信の持てないものも多くある。逆に、小規模な土坑とも解釈できるものもあるが、柱痕・柱アタリが無いものが多いことも相俟って、「大きな柱穴」と「小さな土坑」の分類基準が曖昧で煩雑となるため便宜的に一括して「柱穴」とした。これらの柱穴から建物等の構築物を抽出した結果、掘立柱建物跡76棟、門跡2棟、柱穴列〔塀跡〕4条が確認された。なお、前述のとおり調査経過だったため、これらの建物跡・柱穴列は野外段階ではごく一部しか確認できず、その殆どが室内整理段階において平面図上で検討し組み立てたものである。

柱穴群

遺構（第26～30図） 検出した柱穴の総数は2,651個〔S C 01-aで349個、同bで926個、同cで529個、S C 02で276個、S C 03で571個〕であり、そのうち717個（27.1%）が掘立柱建物跡・柱穴列・門跡に関わるものである。残りの1,934個（72.9%）は建物を想定できなかった。なお、調査では遺物が出土した柱穴にのみ番号を付した（S C 01：S K P 01～86、S C 02：S K P 141～144、S C 03：S K P 103～140・145～153）。開口部径15～90cmと幅があるが、主体は径30cm程度のものである。柱痕跡・柱アタリは径15cm＝約5寸程の円形のものが多い。大径のものはS C 01-cに多く、他の柱穴よりも新しい傾向がある。それらについては近世以降のものか。深さは15～70cmである。

遺物（第36図）〔土器〕堆積土から縄文土器・土師器・須恵器が出土している。掲載分の概略のみ触れる。縄文土器はS K P 37・44・70・104・115・116・126・128・129・140・142・146で出土。S K P 32・38で土師器、14・26で須恵器が出土。S K P 38では中国銭と共伴している。〔陶磁器〕S K P 30・32・34・46・50・53・61で青磁、S K P 50では中国銭と共伴している。S K P 58で漳州窯系青花。S K P 30から美濃大窯産陶器が出土した。〔石器〕S K P 70で石錐？、153で磨製石斧。〔石製品〕S K P 39・78・109・129で出土。〔金属製品〕S K P 12・65で角釘、60で延べ煙管。〔古銭〕S K P 3・5・7・13・16・19・20・27・38・50・66で中国銭および鯉銭、S K P 76・85・144では寛永通寶。S K P 144柱痕部で古寛永5点が一括出土した。

掘立柱建物跡

柱穴群から抽出・想定できた掘立柱建物跡は78棟である。うち1棟は近代以降と推測されることからここでは除外する（S B 078）。柱穴からの出土遺物には、縄文時代・古代・中世・近世の各時代のものがあるが、建物の形態等から見て、想定した掘立柱建物跡の殆どが中世以降に属するものと思われる。柱穴からの出土遺物は少なく、かつすべての出土遺物が一義的にその建物の時期を決定する

ものとは云えないが、中世以降の遺物についてはその建物の時期を反映するものと取って扱えた。さもなくば、殆どの建物が「時期不明」となるからである。中・近世と推測される掘立柱建物跡77棟の分布状況を見ると、S C 01のa地区12棟、同b地区42棟、同c地区11棟、S C 02平場4棟、S C 03平場9棟である(第37・41・42・50・54・88図)。柱穴分布の多寡に照応して、S C 01-b地区に建物跡が密集している。前述のとおり、各建物を構成する柱穴には柱痕跡・柱アクリが確認されないものが多い。そのため、建物の柱間寸法計測にあたっては計測ポイントを柱穴の範囲内で寸法がm単位で小致点以下2桁が「0」または「5」となるよう任意に設定した(故に図示した、1尺=0.303mとした場合の換算値には端数が生じている)。なお、以下の記載においては、建物を構成する柱穴の直接の載り合いについて主に言及し、建物範囲の重複および間接的な載り合いについては極力記載を省いた。特にS C 01-bにおいて顕著であるが、これらを列挙することによる煩雑さを避けるためである。ただし時期判断に際してはその限りではない。建物と他遺構との重複関係、および推測される所属時期については第60図に示した。

S B 001 掘立柱建物跡

遺構(第38図)〔位置〕S C 01-a平場の北西隅に位置している。他の建物との直接的載り合いはない。〔規模〕北側が調査区外へと延びている。また西側の浄法寺町教委調査部分に対応する柱穴が存在することから西側へも延びているものと捉えられた。北側の様相が不明なため全体規模は不明であるが、検出部分では梁行2間(総長4.15m)×桁行4間(総長7.85m)の総柱建物と推測される。主軸方向はN-71°-Eである。〔柱穴〕11個検出した。また浄法寺町教委調査区において、本建物を構成すると思われる柱穴1個が検出されている。平面形は略円形・楕円形、一部不整形のものを含む。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 古代以降と思われるが、詳細な時期は不明である。

S B 002 掘立柱建物跡

遺構(第38図)〔位置〕S C 01-a平場中央北寄りに位置する。他の建物との直接的載り合いはない。〔規模〕梁行2間(総長4.35m)×桁行3間(総長5.75m)の総柱建物である。主軸方向はN-70°-Eである。〔柱穴〕12個検出した。平面形は円形・楕円形である。柱痕は確認されなかった。

遺物 出土していない。

時期 古代以降と思われるが、詳細な時期は不明である。

S B 003 掘立柱建物跡

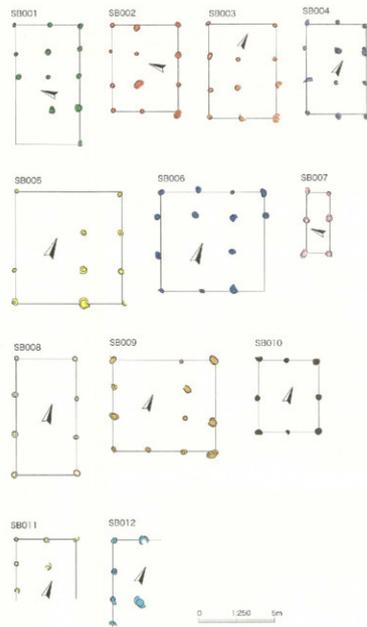
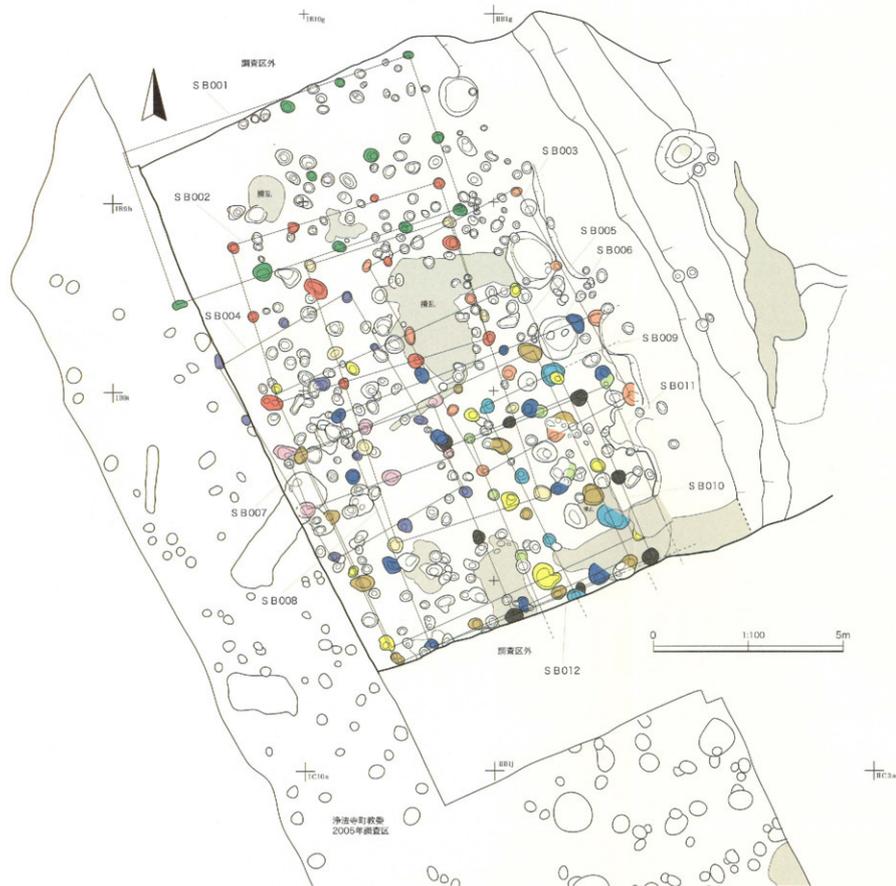
遺構(第38図)〔位置〕S C 01-a平場中央部に位置する。S B 009と柱穴の載り合いがあるとと思われるが(柱穴B4)、明確には捉えられず、新旧不明である。〔規模〕梁行2間(総長4.35m)×桁行3間(総長6.20m)の総柱建物である。主軸方向はN-29°-Wをとる。〔柱穴〕12個検出した。平面形は楕円形である。柱痕は検出されなかった。

遺物 出土していない。

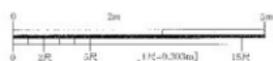
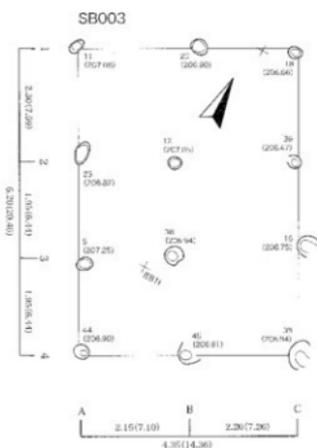
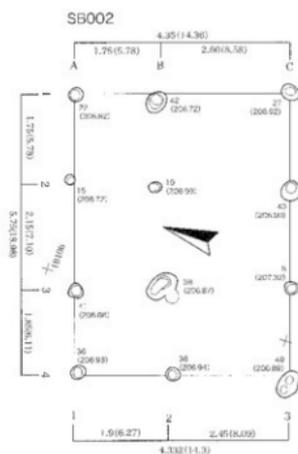
時期 時期不明である。

S B 004 掘立柱建物跡

遺構(38図)〔位置〕S C 01-a平場中央部西寄りに位置する。西側の一部が浄法寺町教委調査部分へと延びており、町教委の調査で本建物を構成すると思われる柱穴が検出されている。S B 008に載られている。S K T 01と重複し、これを載っている。〔規模〕梁行2間(総長3.95m)×桁行3間(総長5.95m)の総柱建物である。主軸方向はN-31°-Wである。〔柱穴〕調査区内では10個



第37図 掘立柱建物跡配置・建物跡集成(1)



● 材数計測の誤差は、m (尺) を示す。
● 柱穴距の数字は、長さ cm (遺構構築：m) を示す。

第38図 S B001~004

検出した。また町教委調査区でも対応する柱穴2個が確認されており、使用した柱穴は合計12個である。平面形は円・楕円形が主であるが、不整形なものもある。柱痕は確認されなかった。

遺物 柱穴2B(SKP1)で縄文土器が出土した。

時期 時期不明である。

SB 005 掘立柱建物跡

遺構(第39図)〔位置〕SC01-a 平場中央～南部に占地する。SB012を載る。また柱穴痕跡が不明瞭であるがSKT01を載っている。〔規模〕梁行2間(総長4.10m)×桁行3間(総長7.50m)である。主軸方向はN-25°-Wである。〔間取り〕1間×3間の2室で構成されている。〔柱穴〕10個検出した。平面形は楕円形および不整形である。柱痕は確認されていない。

遺物(第36図)柱穴2B(SKP5)で永楽通寶(233)が出土。

時期 出土遺物から見て中世(15世紀以降)である。

SB 006 掘立柱建物跡

遺構(第39図)〔位置〕SC01-a 平場南部に位置する。南側のD列が調査区境に接し、かつ東側が「現道」により掘り込まれており、建物がさらに南または東側に延びていた可能性もある。SB010・011を載っている。〔規模〕上記のとおり全体の形状が不明確であるが、検出部分では梁行3間(総長6.90m)×桁行3間(総長6.60m)の建物として把握された。主軸を南北方向と考えれば、軸線はN-22°-Wである。〔間取り〕1間×3間、2間×2間、1間×2間の各1室で構成される。〔柱穴〕13個検出した。平面形は主に楕円形である。柱痕は確認されていない。

遺物 柱穴1D(SKP3)で輪銭(237)、4C(SKP9)で縄文土器が出土した。

時期 出土遺物およびSB010を載ることから、中世の建物跡と推測される。

SB 007 掘立柱建物跡

遺構(第39図)〔位置〕SC01-a 平場中央部西寄りに位置する。SB009に載られ、SB010およびSKT01を載っている。〔規模〕梁行1間(総長1.55m)×桁行2間(総長4.10m)を測る、小形の建物である。主軸方向はN-68°-Eである。〔柱穴〕6個検出した。平面形は主に楕円形で、柱痕は確認されない。

遺物 出土していない。

時期 SB010より新しい建物であり、中世以降である。

SB 008 掘立柱建物跡

遺構(第39図)〔位置〕SC01-a 平場中央部西寄りに占地する。SB004を載る。〔規模〕梁行1間(総長3.90m)×桁行3間(総長7.70m)の建物である。主軸方向はN-18°-Wである。〔柱穴〕8個検出した。平面形は楕円形である。柱痕は未確認である。

遺物 出土していない。

時期 古代以降であるが、具体の時期は不明である。

SB 009 掘立柱建物跡

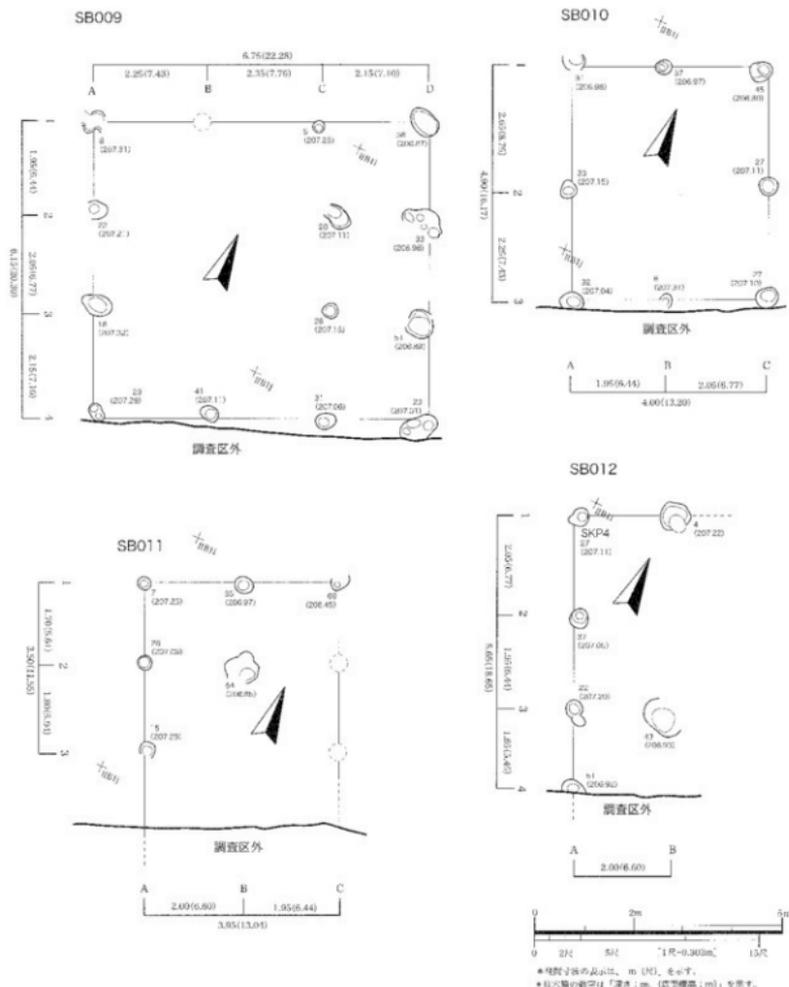
遺構(第40図)〔位置〕SC01-a 平場南半部に占地する。南側D列が調査区境に接しており、さらに南側へと延びているかもしれない。SB007を載っている。〔規模〕調査区外へと延びる可能性があるが、検出部分では梁行3間(総長6.15m)×桁行3間(総長6.75m)の建物である。主軸方向はN-18°-Eである。〔間取り〕2間×3間、1間×3間の各1室からなる。〔柱穴〕13個検出した。平面形は楕円形、柱痕は確認されない。

遺物 出土していない。

時期 S B007およびS B010との重複関係から、中世以降の建物である。

S B 010 掘立柱建物跡

遺構（第40図）〔位置〕S C 01-a 平場南東部に位置する。S B 006・007・012と重複し、それらに載られる。S B 003・004・005・008・009と重複しているが、柱穴の載り合い無く、新旧関係は不明である。〔規模〕築行2間（総長4.00m）×桁行2間（総長4.90m）である。主軸方向はN-



第40図 S B 009~012

22°-Wである。〔柱穴〕8個検出した。平面形は略円形である。柱痕は確認されない。

遺物 出土していない。

時期 S B012との重複関係から、中世と推測される。

S B 011 掘立柱建物跡

遺構（第40図）〔位置〕S C01-a 平場南東部に位置する。南側は調査区外へと延びていると捉えられる。また東側もS D02虎口の掘り込みに接することから、もともと東側にも延びていた可能性も残る。S B003・005・006・008-010・012と重複する。S B006に載られており、本建物がより古い。他の6棟は本建物柱穴との重複関係が観察されず、新旧関係は不明である。〔規模〕上記のとおり全体の規模は不明であるが、検出部分では梁行2間（総長3.95m）×桁行2間（総長3.5m）である。主軸方向はN-23°-Wである。〔柱穴〕6個検出した。平面形はほぼ円形で、柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 S B006との重複関係からみて、中世と推測される。

S B 012 掘立柱建物跡

遺構（第40図）〔位置〕S C01-a 南東部、S D02虎口の掘り込み部分に接している。東側へと延びていたと思われるが、S D02の掘り込みにより消失したものと思われる。S D02・S B005に載られ、S B010を載る。またS B003・006・009・011と重複するが、新旧関係不明である。〔規模〕検出部分では、梁行1間（総長2.00m）×桁行3間（総長5.65m）で、主軸方向はN-27°-Wである。〔柱穴〕6個検出した。平面形はほぼ円形、柱痕は未確認である。

遺物 柱穴1A（SKP04）で縄文土器2点出土。

時期 S B005との重複関係から中世以前である。

S B 013 掘立柱建物跡

遺構（第43図）〔位置〕S C01-b 北東部に位置する。北東隅でS I01と重複していた可能性が高く、S I01堆積土中に柱穴が確認できなかったことから、より古いものと推測される。S N07を載る。〔規模〕梁行2間、桁行4間の総柱建物である。梁間総長5.70m、桁行総長9.20mを測る。主軸方向はN-13°-Wである。〔柱穴〕13個を検出した。一部不整形なものもあるが、概ね楕円形である。

遺物 出土していない。

時期 S I01との重複関係から見て、中世以前である。

S B 014 掘立柱建物跡

遺構（第43図）〔位置〕S C01-b 北東部に位置する。S B021・024、S I01を載り、S B018に載られる。〔規模〕梁行1間（総長3.75m）×桁行3間（総長8.65m）で、主軸方向はN-12°-Wである。〔柱穴〕8個検出した。平面形は楕円形が主で、一部不整形を含む。いずれも柱痕はない。

遺物 出土していない。

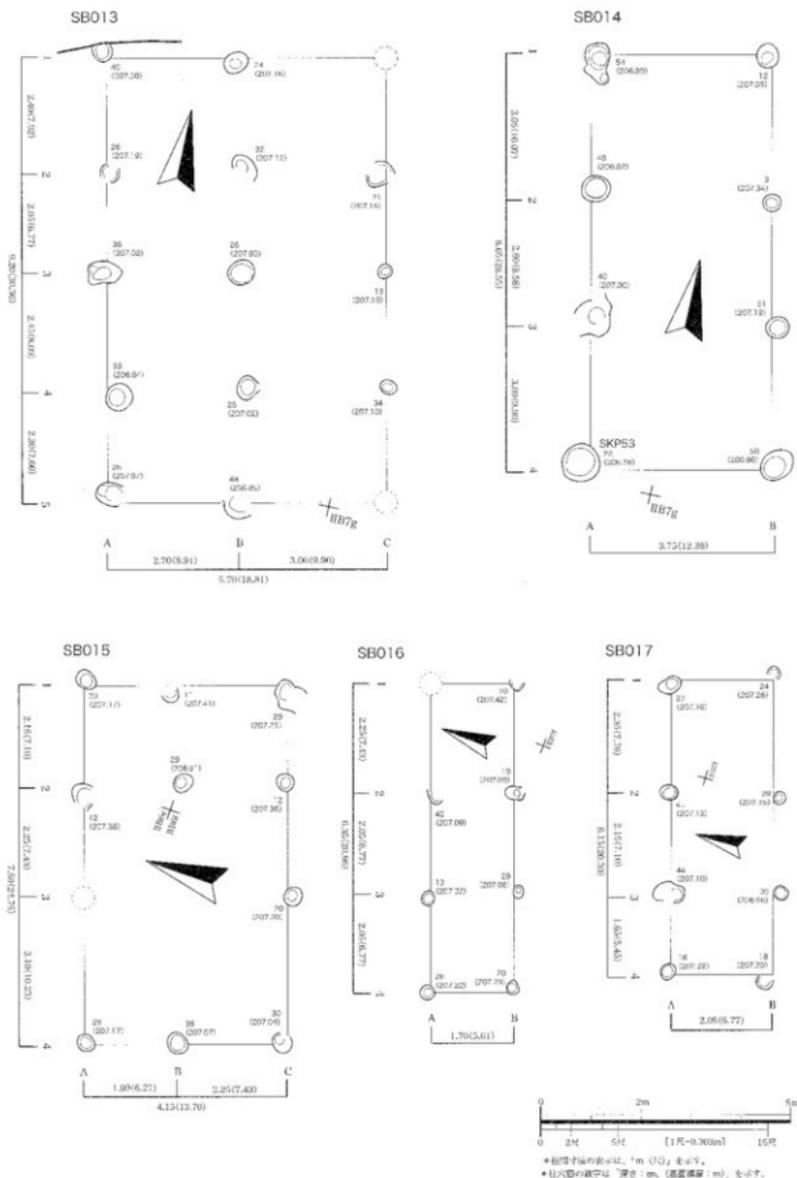
時期 本建物を載るS B018は中世に属するS B015・020より古い。よって本建物は重複関係から中世以前に属するものである。

S B 015 掘立柱建物跡

遺構（第43図）〔位置〕S C01-b 北東部に占地する。S A03に載られ、S B019を載っている。〔規模〕梁行2間（総長4.15m）×桁行3間（総長7.50m）、主軸方向はN-71°-Eと大きく東へと振れている。〔柱穴〕10個検出した。平面形は概ね円形で、柱痕は確認されていない。



第41図 建物跡集成 (2)



第43図 SB013~017

遺物 (第35図) 柱穴4A (SKP53) から青磁破片 (140) が出土。

時期 出土遺物から見て、中世16世紀代である。

SB 016 掘立柱建物跡

遺構 (第43図) [位置] SC01-b 北東隅に位置する。SB020に載られる。SI01にも載られていると思われるが、不確定である。[規模] 梁行1間 (総長1.70m) × 桁行3間 (総長6.35m)。主軸方向はN-69°-Eである。[柱穴] 7個を検出した。楕円形平面の小径なものばかりである。柱痕は確認できない。

遺物 出土していない。

時期 中国産青磁が出土したSB020より古いことから、中世以前の建物である。

SB 017 掘立柱建物跡

遺構 (第43図) [位置] SC01-b 北東に位置する。SB013を切り、SB024に載られる。[規模] 梁行1間 (総長2.05m) × 桁行3間 (総長6.15m)、主軸方向はN-74°-Eである。[柱穴] 8個検出した。平面形は不整な楕円形である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の重複関係から、中世16世紀以前である。

SB 018 掘立柱建物跡

遺構 (第44図) [位置] SC01-b 東側に位置する。SB019に載られる。またSB014と重複し、はっきりしないが載っていると思われる。[規模] 梁行1間 (総長1.80m) × 桁行2間 (総長4.00m) で、主軸方向はN-75°-Eである。[柱穴] 楕円形平面の6個を検出した。柱痕は確認されない。

遺物 出土していない。

時期 本建物を載るSB019が中世のSB015・020より古いことから、中世以前である。

SB 019 掘立柱建物跡

遺構 (第44図) [位置] SC01-b 東側に位置する。SB018と重複し載っている。SB015に載られる。またSB020・014と重複し載られているようであるが、はっきりしない。[規模] 梁行2間 (総長4.40m) × 桁行4間 (総長7.85m) で、主軸方向はN-73°-Eである。[間取り] 2間×3間の1室、およびその南面に1間の庇が取り付く。[柱穴] 13個検出した。平面形は楕円形および不整形で、柱痕は確認されていない。

遺物 柱穴2C (SKP54) で土師器、4B (SKP48)・5A (SKP41) で縄文土器が出土している。

時期 中世に属するSB015・020に載られていることから、本建物も中世以前に属する。

SB 020 掘立柱建物跡

遺構 (第44図) [位置] SC01-b 東側に占地する。SB016・019およびSI01を載っている。[規模] 梁行2間 (総長3.90m) × 桁行4間 (総長7.15m) で、主軸方向はN-13°-Wである。[間取り] 2間×3間の1室、北面に1間の庇が付随している。[柱穴] 11個検出した。平面形は不整な楕円である。柱痕はない。

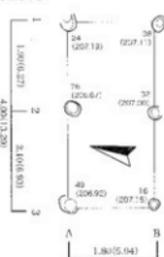
遺物 (第36図) 柱穴2A (SKP46) で青磁皿片 (138) が出土した。

時期 出土遺物から見て中世16世紀代に属するものと推定される。

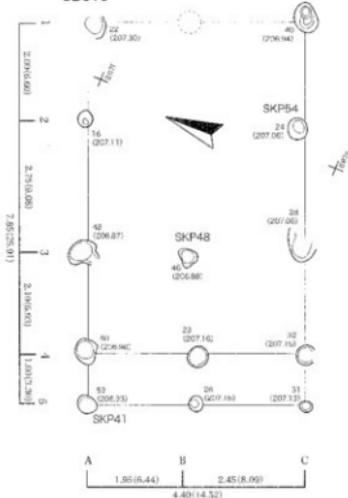
SB 021 掘立柱建物跡

遺構 (第44図) [位置] SC01-b 東側に位置する。SB013を切り、SB014により載られる。

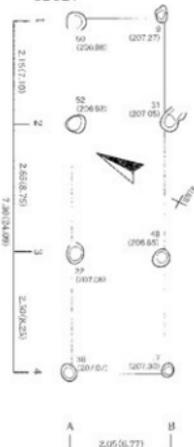
SB018



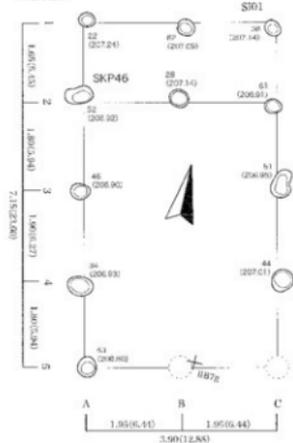
SB019



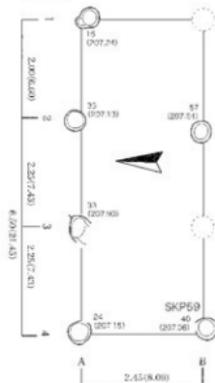
SB021



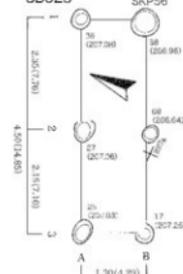
SB020



SB022



SB023



● 右向きは東を指す。
● 数字の数字に「m」は「メートル」を示す。

第44図 SB018~023

〔規模〕梁行1間(総長2.05m)×桁行3間(総長7.30m)である。主軸方向はN-64°-Eをとる。

〔柱穴〕8個検出した。平面形は円形および楕円形である。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の重複関係から、中世以前である。

SB 022 掘立柱建物跡

遺構(第44図)〔位置〕SC01-b 南東寄りに占地する。SI06およびSD01と重複して、明確ではないが、それらにより截られているものと思われる。〔規模〕梁行1間(総長2.45m)×桁行3間(総長6.50m)で、主軸方向はN-89°-Eである。〔柱穴〕6個検出した。平面形は略円形で、いずれも柱痕はない。

遺物(第36図)柱穴4B(SK P59)で白磁皿が出土。

時期 SD01より古い可能性もあり、出土遺物を加味すると、中世～近世と推測される。

SB 023 掘立柱建物跡

遺構(第44図)〔位置〕SC01-b 東側に位置している。SB013と重複し、それより古い。〔規模〕梁行1間(総長1.30m)×桁行2間(総長4.50m)の小形建物で、主軸方向はN-66°-Eである。〔柱穴〕略円形の6個を検出した。柱痕は確認されていない。

遺物 柱穴1B(SK P56)で縄文土器が出土。

時期 建物相互の重複関係から中世以前である。

SB 024 掘立柱建物跡

遺構(第45図)〔位置〕SC01-b 中央付近に位置している。SB014・017・026と截り合い関係にあり、SB014に截られ、後2者を載っている。〔規模〕梁行2間(総長3.55m)×桁行3間(総長5.35m)である。北東隅柱を欠くが、総柱建物と思われる。主軸方向はN-74°-Eである。〔柱穴〕11個検出した。平面形は楕円形基調である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の重複関係から中世以前である。

SB 025 掘立柱建物跡

遺構(第45図)〔位置〕SC01-b 中央東寄りに占地する。SB028を載る。〔規模〕梁行2間(総長4.30m)×桁行3間(総長5.90m)、主軸方向はN-23°-Wである。〔間取り〕2間×2間の建物北面に、1間の庇が付随する。〔柱穴〕10個検出した。平面形は略円形で、柱痕はない。

遺物 柱穴2A(SK P40)で縄文土器が出土した。

時期 16世紀代のSB028より新しく、同じく中世と推測されるSB020より古いことから、中世の範疇に収まる建物である。

SB 026 掘立柱建物跡

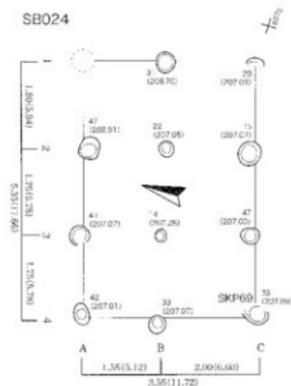
遺構(第45図)〔位置〕SC01-b 中央部北寄りに位置する。SB033・025を載っている(後者については不確定)一方、SB024に載られている。〔規模〕南東隅は調査区境界付近にあたるが、確認部分では2間(総長3.60m)×2間(総長4.00m)の方形平面の建物と思われる。南-北を主軸線とすれば、N-24°-Wと西に偏する。〔柱穴〕7個検出した。平面形は円形基調である。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

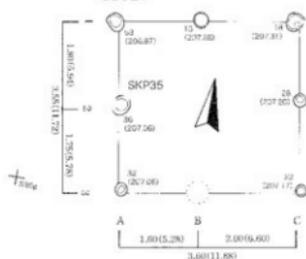
時期 建物相互の重複関係から中世である。

SB 027 掘立柱建物跡

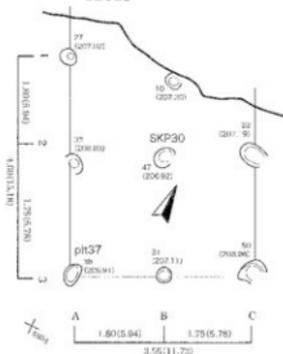
SB024



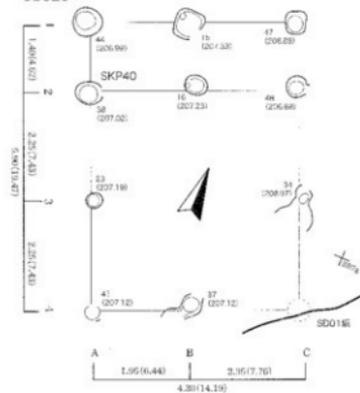
SB027



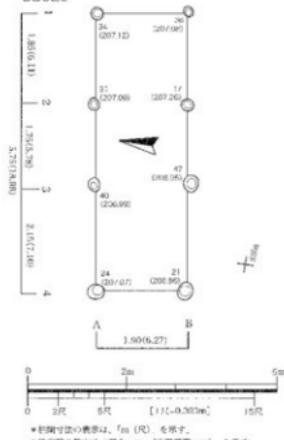
SB028



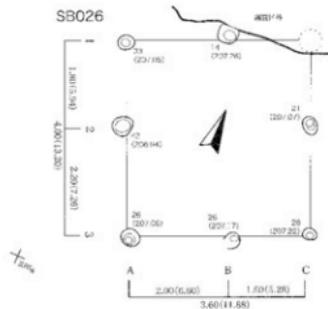
SB025



SB029



SB026



第45図 SB024~029

● 形跡寸法の表示は、m (尺) を示す。
 ● 棒穴の数は14 混土 0m、0m面積 m²、を示す。

遺構（第45図）〔位置〕S C01-b中央付近に位置する。S B028が重複し、本建物が載られる。〔規模〕2間（総長3.60m）×2間（総長3.55m）のほぼ方形平面の建物である。南-北を主軸線とすれば、軸はN-10°-Wである。〔柱穴〕7個検出した。平面形は円形基調で、柱痕はない。

遺物 柱穴2A（SKP35）で土師器が出土した。

時期 本建物を載るS B028は16世紀代であり、それより古期の建物である。

S B 028 掘立柱建物跡

遺構（第45図）〔位置〕S C01-b中央北側に占地する。S B039を載る。またS B019・025により載られる。〔規模〕北側は調査区外へと延びているものと見られる。調査範囲では、梁行2間（総長3.55m）×桁行2間（総長4.60m）以上、である。主軸方向はN-27°-Wである。総柱の建物かもしれない。〔柱穴〕楕円形の柱穴8個を検出した。柱痕はない。

遺物（第36図）柱穴3A（SKP37）で縄文土器（51）、2B（SKP30）で青磁皿（137）・陶器皿（159）が出土した。137は龍泉窯産、159は美濃大窯の灰釉丸皿で、16世紀代のものである。

時期 出土遺物から見て、中世（16世紀代）と推定される。

S B 029 掘立柱建物跡

遺構（第45図）〔位置〕S C01-b中央付近に位置する。S B039と重複し、これを載っている。〔規模〕梁行1間（総長1.90m）×桁行3間（総長5.75m）と東西方向に細長い建物である。主軸方向はN-81°-Eで、ほぼ東西方向に沿う。〔柱穴〕8個検出した。平面形は円形で、柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

S B 030 掘立柱建物跡

遺構（第46図）〔位置〕S C01-b中央南側に、S D01沿いに位置する。S B024およびS N06を載り、S B019・031・035・038により載られる。〔規模〕梁行2間（総長4.00m）×桁行4間（総長7.20m）、主軸方向はN-11°-Wである。柱穴5Bを欠くが、総柱の建物か。〔柱穴〕14個検出した。平面形は殆どが不整形である。柱穴2A、3C、4Cで径10~25cmの円形柱痕が確認された。

遺物（第36図）柱穴3A（SKP61）で中国産青磁（169）が出土した。柱穴3C（SKP44）で縄文土器片（53）が出土した。他に1A（SKP29）、4B（SKP64）、1C（SKP43）で縄文土器が出土している。

時期 青磁片が出土しており、中世16世紀代に属するものと思われる。

S B 031 掘立柱建物跡

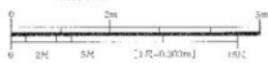
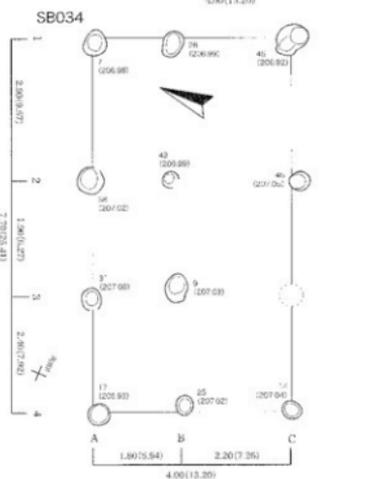
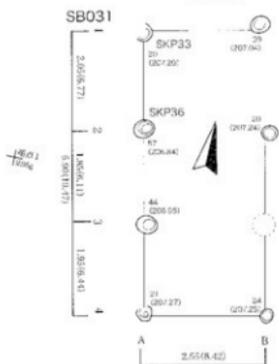
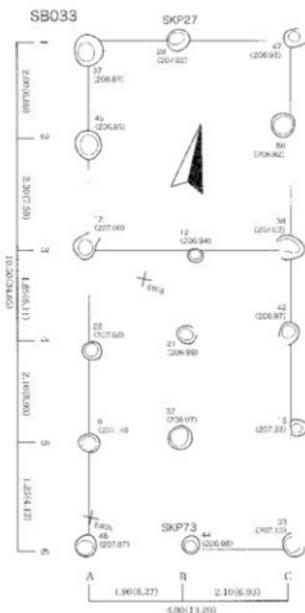
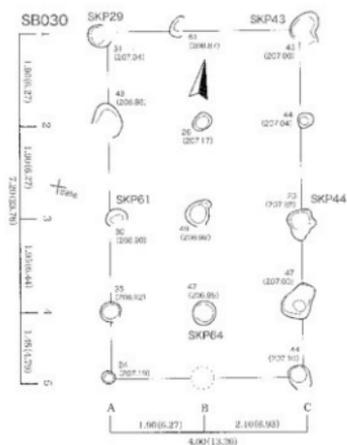
遺構（第46図）〔位置〕S C01-b中央部分に占地している。S B S B033・037・042と切り合い関係にあり、S B033を載り、後2者により載られる。〔規模〕梁行1間（総長2.55m）×桁行3間（総長5.90m）で、主軸方向はN-13°-Wである。〔柱穴〕7個検出した。平面形は略円形である。柱痕はない。

遺物 柱穴1A（SKP33）、2A（SKP36）で縄文土器が出土した。

時期 近世のS B042より古く、近世以前である。

S B 032 掘立柱建物跡

遺構（第46図）〔位置〕S C01-b南側空堀寄りに位置する。S D01と重複して載られるが、他の建物との重複は見られない。〔規模〕南部は調査区外へと延びているものと思われる。確認部分で



※ 在野での発見は、"in (野)" を示す。
 ※ 終穴幅の数字は、1 長さ : 2 幅 (調査供集 : m) を示す。

第46図 SB030~034

は、梁行2間(総長4.25m)、桁行は不明確であるが2間(総長4.45m)以上、と推測される。主軸方向はN-8°-Wである。〔柱穴〕5個検出した。平面形はほぼ円形である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 S D01より古い建物であり、中世以前と推測される。

S B 033 掘立柱建物跡

遺構(第46図)〔位置〕S C01-b中央部を縦貫して占地している。S B038およびS B031・026と載り合い関係で、前者を載り、後2者によって載られる。〔規模〕梁行2間(総長4.00m)×桁行5間(総長10.50m)である。主軸方向はN-12°-Wである。〔間取り〕2間×2間の方形平面1室、2間×3間の総柱部分1室である。〔柱穴〕17個検出した。平面形は略円形である。柱痕は確認されていない。

遺物(第36図) 柱穴1B(S K P27)で無文銭(235)、6B(S K P73)で縄文土器が出土。

時期 無文銭が出土しており、中世に属する可能性がある。

S B 034 掘立柱建物跡

遺構(第46図)〔位置〕S C01-b中央南寄りに位置する。S B030・043を載って、S B038に載られる。〔規模〕梁行2間(総長4.00m)×桁行3間(総長7.70m)、主軸方向はN-67°-Eである。〔柱穴〕11個検出した。平面形は円形および楕円形で、柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の載り合い関係から、中世16世紀代である。

S B 035 掘立柱建物跡

遺構(第47図)〔位置〕S C01-b北西側に占地する。S B030を載り、S B037に載られている。〔規模〕梁行2間(総長3.50m)×桁行3間(総長4.90m)で、主軸方向はN-69°-Eと大きく東へ偏する。〔柱穴〕9個検出した。平面形はほぼ円形、柱痕はない。

遺物 柱穴4B(S K P21)で縄文土器2点が出土した。

時期 16世紀代のS B030を載ることから、本建物は中世に属すると思われる。

S B 036 掘立柱建物跡

遺構(第47図)〔位置〕S C01-b北西隅付近に位置する。他の建物との直接的な載り合いはない。〔規模〕梁行1間(総長1.85m)×桁行2間(総長4.10m)、小形の建物である。主軸方向はN-77°-Eである。〔柱穴〕6個検出した。平面形は略円形である。柱痕は検出されていない。

遺物 柱穴1A(S K P28)で土師器、3B(S K P24)で縄文土器が出土。

時期 不明である。

S B 037 掘立柱建物跡

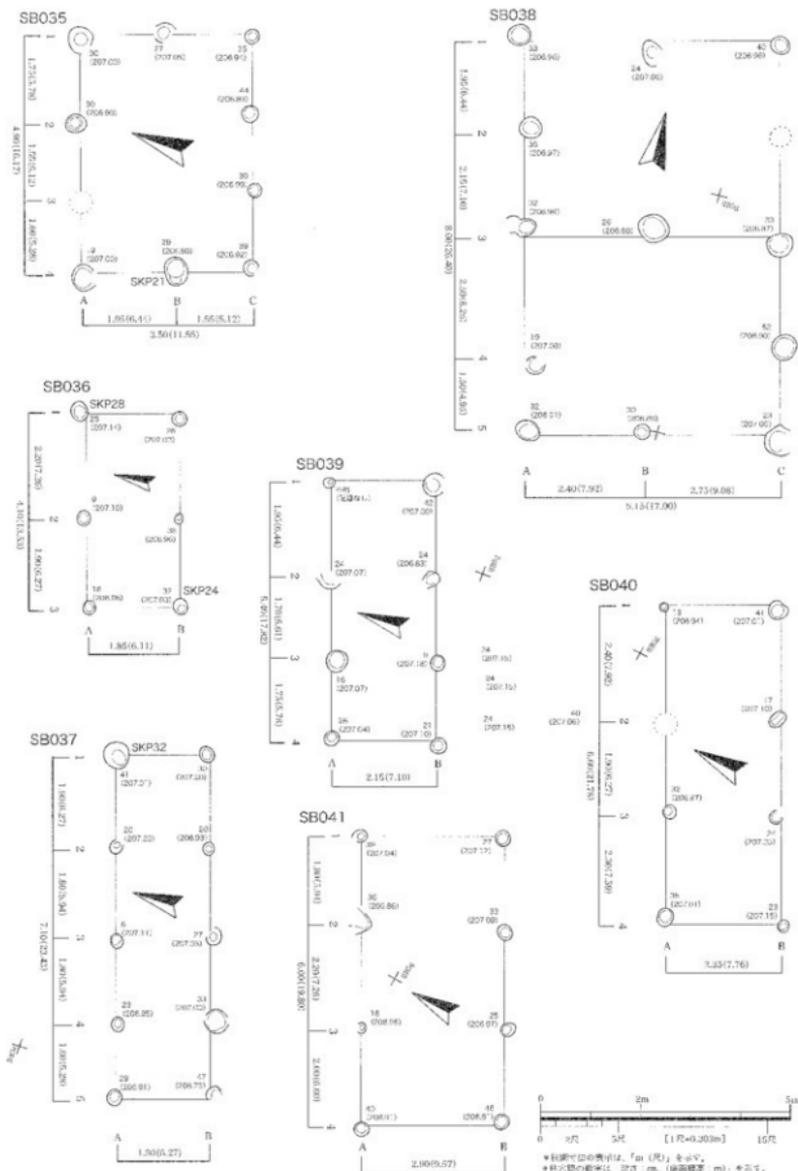
遺構(第47図)〔位置〕S C01-b北西部、調査区境界に沿う形で占地する。S B035を載っている。〔規模〕梁行1間(総長1.90m)×桁行4間(総長7.10m)、東西に細長い建物である。主軸方向はN-72°-Eである。〔柱穴〕ほぼ円形の10個検出した。柱痕はない。

遺物(第36図) 柱穴1A(S K P32)で土師器(128)が出土。砂底の堖である。

時期 出土遺物から見ると古代以降であるが、平面形は古代の建物とは考えづらく、中世以降か。

S B 038 掘立柱建物跡

遺構(第47図)〔位置〕S C01-b西側に占地する。S B025・030・034・044を載り、S B033・048により載られている。〔規模〕梁行2間(総長5.15m)×桁行4間(総長8.00m)、主軸方向はN-14°-Wである。〔間取り〕2間×2間2室に間仕切られている。〔柱穴〕12個検出した。



第47図 S B035~041

平面形は略円形である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 16世紀代のS B030を載り、中世のS B033に載られていることから、中世に属するものであろう。

S B 039 掘立柱建物跡

遺構（第47図）〔位置〕S C01-b西側に位置する。S B044を載り、S B029により載られている。〔規模〕梁行1間（総長2.15m）×桁行3間（総長5.40m）で、主軸方向はN-71°-Eである。

〔柱穴〕円形の8個を検出した。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 重複関係から中世以降である。

S B 040 掘立柱建物跡

遺構（第47図）〔位置〕S C01-b南西寄りに占地している。S N02を載る。S B038により載られているようであるが、不明確である。〔規模〕梁行1間（総長2.35m）×桁行3間（総長6.60m）、主軸方向はN-62°-Eである。〔柱穴〕7個検出した。平面形は円形および楕円形である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 中世のS B033より古く、中世に属するものである。

S B 041 掘立柱建物跡

遺構（第47図）〔位置〕S C01-b中央部西寄りに位置し、S B028と重複して載られている。

〔規模〕梁行1間（総長2.90m）×桁行3間（総長6.00m）である。主軸方向はN-61°-Eをとる。

〔柱穴〕8個検出した。平面形は円形で、柱痕は検出されていない。

遺物 出土していない。

時期 16世紀代のS B028に載られていることから中世・16世紀以前である。

S B 042 掘立柱建物跡

遺構（第48図）〔位置〕S C01-b南側中央、S D03沿いに占地する。S B031を載っている。

〔規模〕梁行1間（総長2.30m）×桁行3間（総長6.30m）である。主軸方向はN-82°-E、ほぼ東西方向を主軸としている。〔柱穴〕楕円形基調の7個を検出した。柱痕はない。

遺物（第36図）3A（S K P60）で延べ煙管（222）が出土した。また柱穴2A（S K P63）で縄文土器が出土。

時期 出土した煙管の年代観から、近世の可能性が高い。

S B 043 掘立柱建物跡

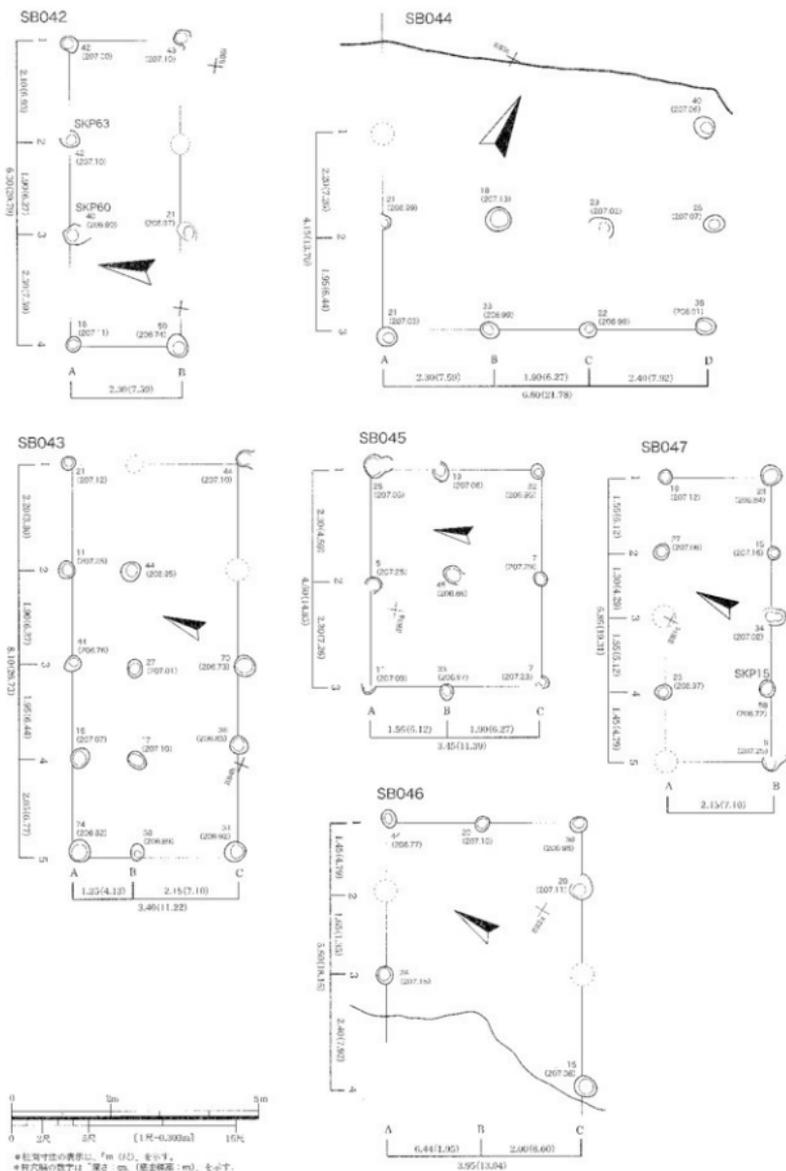
遺構（第48図）〔位置〕S C01-b南西部に位置する。S B033・034・038と載り合い関係にあり、それらによって載られている。〔規模〕梁行2間（総長3.40m）×桁行4間（総長8.10m）、主軸方向はN-68°-Eである。〔副取り〕1間×4間の棟北西面に1間の庇が付いているものと思われる。〔柱穴〕13個検出した。平面形は略円形で、柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 S B033（中世）より古いことから、中世以前である。

S B 044 掘立柱建物跡

遺構（第48図）〔位置〕S C01-b北西調査区境界部分に位置している。S B033・038・039により載られる。〔規模〕北側が調査区外へと延びているものと思われるが、検出部分では梁行3間（総



第48図 S B042~047

長6.60m) × 桁行2間(総長4.15m)以上である。南北方向を主軸と捉えると、主軸はN-29°-Wである。〔柱穴〕9個検出した。平面形は楕円形で、柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 SB033(中世)より古いことから、中世以前である。

SB 045 掘立柱建物跡

遺構(第48図)〔位置〕SC01-b西側に占地する。SB050を載り、SB049により載られる。〔規模〕梁行2間(総長3.45m) × 桁行2間(総長4.50m)、主軸方向はN-81°-E、総柱建物である。〔柱穴〕楕円形の柱穴9個を検出した。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の載り合い関係から見て中世に属すると思われる。

SB 046 掘立柱建物跡

遺構(第48図)〔位置〕SC01-b北西隅に位置する。他の建物との直接の載り合いはない。〔規模〕西側が平場西縁側へと延びていたと思われるが、当該部分が攪乱により崩落しているため、詳細不明である。検出部分は梁行2間(総長3.95m) × 桁行2間(総長5.50m)以上で、主軸方向はN-57°-Eである。〔柱穴〕5個検出した。平面形は略円形である。柱痕は検出されなかった。

遺物 出土していない。

時期

SB 047 掘立柱建物跡

遺構(第48図)〔位置〕SC01-b西部に占地している。SN03を載り、SB050・054により載られている。〔規模〕梁行1間(総長2.15m) × 桁行4間(総長5.85m)、主軸方向はN-63°-Eである。〔柱穴〕8個検出した。平面形は一部不整なものを含むが、円形基調である。柱痕はない。

遺物 柱穴4B(SK P15)で縄文土器2点が出土した。

時期 SB054(中世)より古く、中世以前である。

SB 048 掘立柱建物跡

遺構(第49図)〔位置〕SC01-b西側に位置する。SB051と重複し、載られている。〔規模〕梁行1間(総長1.80m) × 桁行2間(総長4.10m)、主軸方向はN-28°-Wである。〔柱穴〕6個検出した。平面は円形で、柱痕はない。

遺物 柱穴3A(SK P17)で縄文土器が出土した。

時期 建物相互の載り合い関係から見て、中世である。

SB 049 掘立柱建物跡

遺構(第49図)〔位置〕SC01-b西側に占地する。SB045を載り、SB038に載られている。〔規模〕梁行2間(総長3.30m) × 桁行2間(総長3.85m)である。主軸方向はN-27°-Wである。〔柱穴〕8個検出した。平面形は円形および楕円形であり、柱痕は確認されていない。

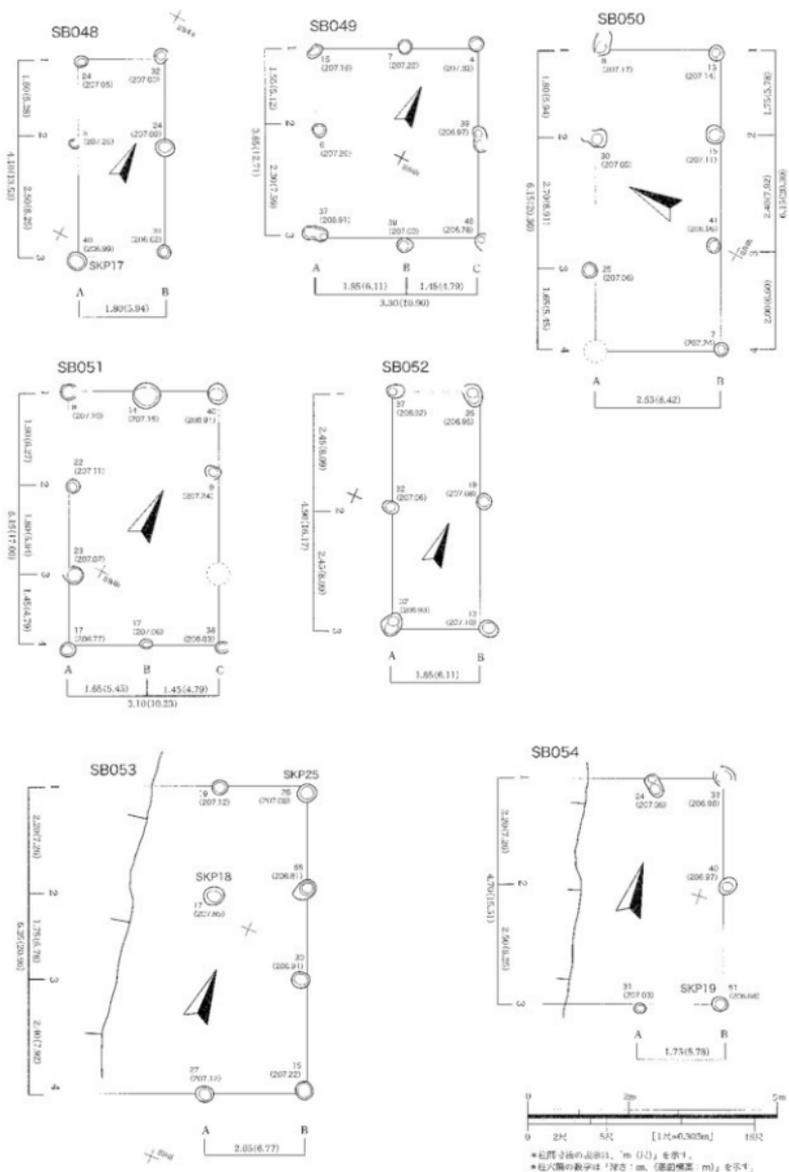
遺物 出土していない。

時期 建物相互の載り合い関係から見て、中世である。

SB 050 掘立柱建物跡

遺構(第49図)〔位置〕SC01-b西側中央付近に位置する。SB045・047を載っている。〔規模〕梁行1間(総長2.55m) × 桁行3間(総長6.15m)、主軸方向はN-62°-Eである。〔柱穴〕7個検出した。平面形は円形および楕円形である。柱痕は検出できなかった。

遺物 出土していない。



第49図 SB048~054

時期 建物相互の載り合い関係から見て、中世の可能性がある。

S B 051 掘立柱建物跡

遺構 (第49図) [位置] S C 01 - b 南西寄りに占地している。S B 048を載っている。[規模] 梁行2間(総長3.10m)×桁行3間(総長5.15m)で、主軸方向はN-29°-Wである。[柱穴] 9個検出した。平面形は略円形である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

S B 052 掘立柱建物跡

遺構 (第49図) [位置] S C 01 - b 南西部に位置する。S B 054・047を載る。[規模] 梁行1間(総長1.85m)×桁行2間(総長4.90m)、主軸方向はN-24°-Wである。[柱穴] 楕円形の柱穴6個を検出した。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 中世のS B 054より新しいことから、中世以降の建物である。

S B 053 掘立柱建物跡

遺構 (第49図) [位置] S C 01 - b 北西部に占地している。他の建物との直接の載り合いがない。[規模] 西側の平場西縁側へと延びていたものと思われるが、当該部分の平場縁辺の崩落により消失したものと思われる。確認部分では、南北を軸線と仮定した場合、梁行1間(総長2.05m)以上×桁行3間(総長6.35m)で、主軸方向はN-24°-Wである。[柱穴] 7個検出した。平面形は概ね円形である。柱痕は確認されていない。

遺物 柱穴2 A (S K P 18)、1 B (S K P 25) から縄文土器が出土。

時期 不明である。

S B 054 掘立柱建物跡

遺構 (第49図) [位置] S C 01 - b 北西部に占地している。S B 047およびS N 03を載り、S B 052に載られる。[規模] S B 053同様、本来西側へと延びていた可能性がある。検出部分では、梁行1間(総長1.75m)以上×桁行2間(総長4.70m)、主軸方向はN-17°-Wである。[柱穴] 5個検出した。平面形は楕円形および不整形で、柱痕はない。

遺物 (第36図) 柱穴3 B (S K P 19) で古銭(228)。北宋・熙寧元寶の鏝銭である。

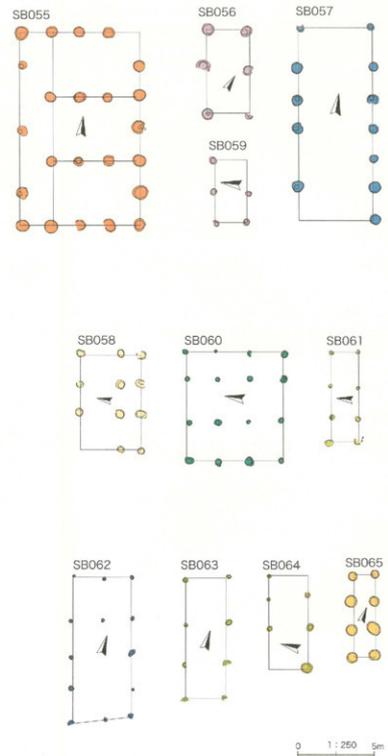
時期 出土遺物から中世に属するものと推測される。

S B 055 掘立柱建物跡

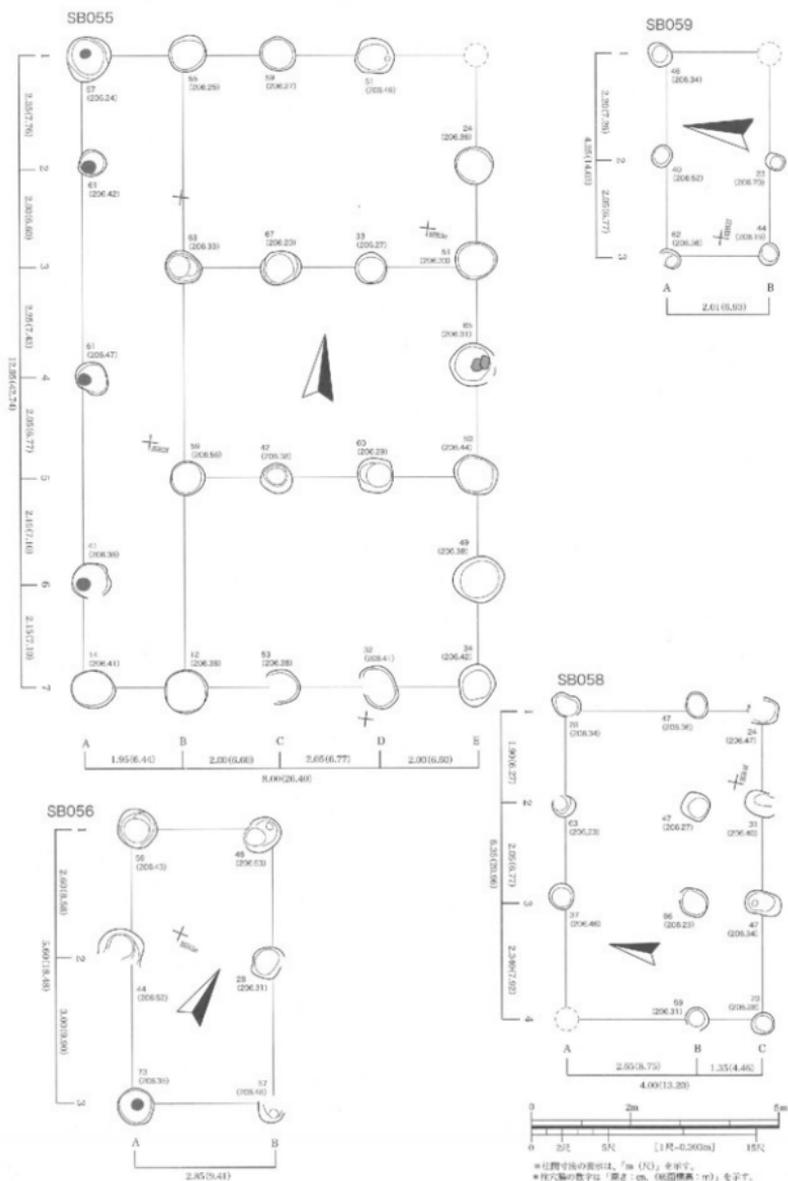
遺構 (第51図) [位置] S C 01 - c 中央部に占地する。S B 058・060・061、S I 04と重複し、これらを載っている。またS B 056・057・059・065、S A 05と重複しているが、載り合い関係に無く、新旧関係不明である。[規模] 梁行3間(総長8.00m)×桁行6間(総長12.95m)、西面に庇が付く建物である。庇を含めた梁行総長7.90mである。庇を含めて梁間の間尺は概ね6.5尺と整正である。主軸方向はほぼ南北方向、N-7°-Wである。[間取り] 3間×2間の3室から構成され、西面に庇または廊下と思われる1間×6間の空間が付随する。[柱穴] 23個検出した。平面形は略円形で、間口部規模は70~85cmと比較的大径である。庇側A1・2・4・6で径20~25cmの円形柱痕が確認された。またE4では底面で根固めと思われる礎が検出されている。

遺物 (第36図) 柱穴6 A (S K P 84) で陶器鉢(153)、3 C (S K P 83) で土師器が出土した。他に5 B (S K P 80)、7 D (S K P 79)、4 E (S K P 82) から縄文土器、陶器片が出土。

時期 重複関係から他の掘立柱建物跡および竪穴建物跡を載っており、より新しい時期の遺構であ



第50図 掘立柱建物跡配置・建物跡集成 (3)



第51図 SB055・056・058・059

る。出土遺物から近世に属する可能性がある。

SB 056 掘立柱建物跡

遺構（第51図）〔位置〕SC01-c 北西部に占地する。SB055・057・060と重複している。SB055に載られる。〔規模〕梁行1間（総長2.85m）×桁行2間（総長5.60m）である。主軸方向はN-33°-Wである。〔柱穴〕円形・楕円形の6個を検出した。A3で径25cmの円形柱痕を確認した。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の葺り合い関係から見て、近世以前の建物である。

SB 057 掘立柱建物跡

遺構（第52図）〔位置〕SC01-c 西側に位置する。SB056、S104を載る。SB055・060と重複するが、新旧関係は不明である。〔規模〕梁行1間（総長4.85m）×桁行6間（総長12.95m）で、主軸方向はN-10°-Wである。〔柱穴〕12個検出した。平面形は円形基調である。A3・4・6で柱痕（径25～35cmの円形）、B3では底面で柱アタリを確認した。

遺物（第36図） 柱穴6A（SKP85）で寛永通寶2点（250・252）。ともに「新寛永」である。4B（SKP81）から縄文土器。

時期 出土遺物から見て近世、18世紀後半以降である。

SB 058 掘立柱建物跡

遺構（第51図）〔位置〕SC01-c 中央部付近に占地する。SA05を載り、SB55に載られる。〔規模〕梁行2間（総長4.00m）×桁3行間（総長6.35m）で、総柱の建物である。主軸方向はN-78°-Eである。〔柱穴〕11個を検出した。平面形は楕円形を基調とする。柱痕は確認できなかった。

遺物 出土していない。

時期 建物相互の葺り合い関係から見て、近世以前である。

SB 059 掘立柱建物跡

遺構（第51図）〔位置〕SC01-c 中央部に位置する。SB055・058・060、SA05と重複する。柱穴の葺り合いがないため、他の建物との新旧関係は不明である。〔規模〕梁行1間（総長2.10m）×桁行2間（総長4.25m）の小形建物である。主軸方向は大きく西に振れており、N-82°-Eをとる。〔柱穴〕楕円形の5個を検出した。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

SB 060 掘立柱建物跡

遺構（第52図）〔位置〕SC01-c 中央西寄りに占地する。SB055・057に載られている。〔規模〕南面3間（総長6.35m）×西面3間（総長7.25m）の総柱建物である。主軸方向はN-80°-Eと大きく東へ振れる。〔柱穴〕16個検出した。平面形は円形および楕円形で、柱穴2Dで径20cmの円形の柱痕を確認した。

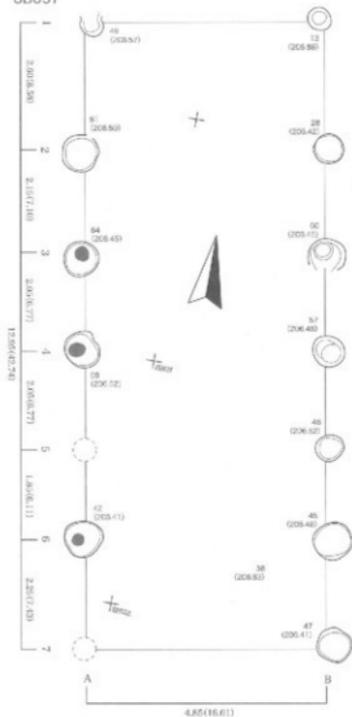
遺物 出土していない。

時期 SB055よりも古いことから見て、近世以前の建物である。

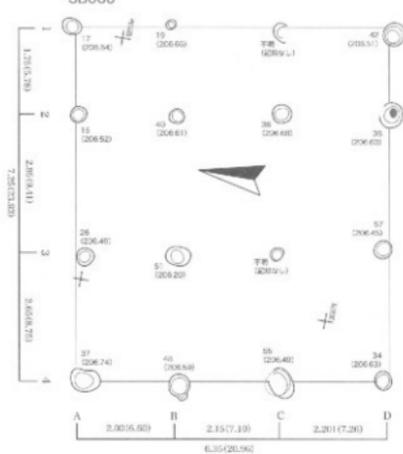
SB 061 掘立柱建物跡

遺構（第52図）〔位置〕SC01-c 中央南側、調査区境界付近に位置している。SB055に載られる。〔規模〕梁行1間（総長1.85m）×桁行3間（総長5.95m）、主軸方向はN-83°-Eである。〔柱穴〕楕円形平面の8個を検出した。柱痕は確認されていない。

SB057



SB060



SB062



遺物 出土していない。

時期 SB055よりも古いことから見て、近世以前の建物である。

SB 062 掘立柱建物跡

遺構 (第52図) [位置] SC01-c 東縁辺、SF01切岸寄りに位置する。[規模] 梁行2間(総長3.90m)×桁行4間であるが、桁幅は東面総長9.30m・西面総長9.80mと異なり歪んでいる。主軸方向はN-18°-Wである。[柱穴] 13個検出した。平面形は円形と不整形のものがある。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

SB 063 掘立柱建物跡

遺構 (第53図) [位置] SC01-c 南東部、SF01切岸寄りに位置し、南端の柱穴A4が調査区域にかかる。さらに南側へと延びる可能性もある。SB62と重複するが、新旧関係は不明である。[規模] 梁行1間(総長2.70m)×桁行3間(総長8.10m)、主軸方向はN-19°-Wをとる。[柱穴] 8個検出した。平面形は楕円形基調で、柱痕は確認されていない。

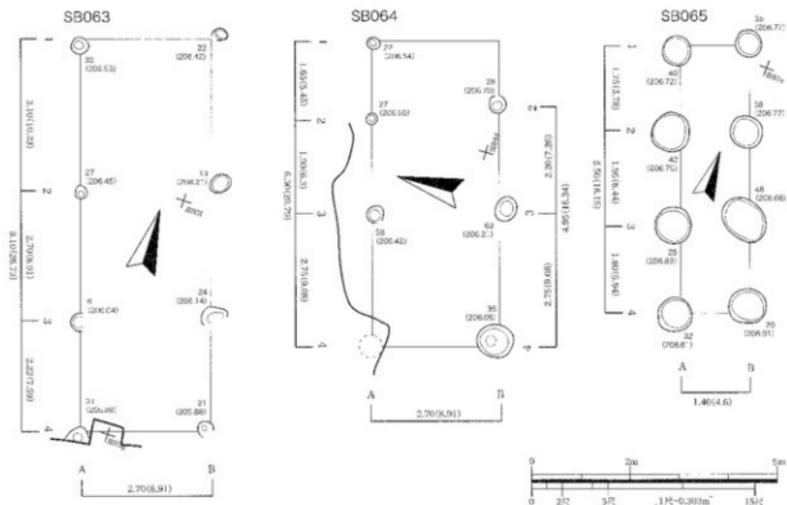
遺物 出土していない。

時期 不明である。

SB 064 掘立柱建物跡

遺構 (第53図) [位置] SC01-c 北東部に占地している。調査区境界に近く、北側調査区外へと延びる可能性ある。他の遺構との重複はない。[規模] 南東隅柱を欠くが、梁行1間(総長2.70m)×桁行3間(総長6.30m)、主軸方向はN-73°-Eと推測される。[柱穴] 円形平面の6個を検出した。B4底面において径20cm円形の柱アタリが確認できた。

遺物 出土していない。



第53図 SB063~065

時期 不明である。

S B 065 掘立柱建物跡

遺構（第53図）〔位置〕S C 01 - c 北西部に位置する。他の遺構との重複はない。〔規模〕梁行1間（総長1.40m）×桁行3間（総長5.50m）、細長い平面形を呈している。主軸方向はN-22°-Wである。〔柱穴〕径60~100cmと大径な8個を検出した。平面形は円形および楕円形である。柱痕は確認されなかった。

遺物 出上していない。

時期 不明である。なお、柱穴掘り方の大きさや他の柱穴との様相の違いから見て、単なる植栽痕の可能性もある。

S B 066 掘立柱建物跡

遺構（第57図）〔位置〕S C 02北側に位置する。S C 02の遺構面（八戸火山灰下層：IX層）で検出した。北西隅が調査区外に延びている。重複する遺構はないが、中央部を擾乱されている。〔規模〕北西の隅柱が調査区外にあり、梁行1間（総長3.70m）×桁行3間（総長6.70m）を呈するものと推測される。主軸方向はN-82°-Wである。〔柱穴〕5個検出した。平面形は円形および楕円形である。柱痕は確認されていない。

遺物 出上していない。

時期 検出面から見て少なくとも中世以降だが、詳細は不明である。

S B 067 掘立柱建物跡

遺構（第57図）〔位置〕S C 02中央付近のIX層面で検出した。S B 068・S D 04と重複しており、本建物が新しい。〔規模〕梁行1間（総長2.20m）×桁2行間（総長3.95m）で、主軸方向はN-16°-Wである。〔柱穴〕6個検出した。平面形は円形である。柱痕は柱穴2Aで確認され、柱痕部分から古銭5点が一括出上している。地鎮的な意味で埋納したものとして理解される。

遺物（第37図） 柱穴2A（S K P 144）柱痕部堆積土で寛永通寶5点（242~246）が出土した。いずれも「古寛永」である。

時期 古銭の出上状況から見て、近世17世紀前半に属するものと推定される。

S B 068 掘立柱建物跡

遺構（第57図）〔位置〕S C 02中央部のIX層面に位置する。柱穴2AがS B 067の柱穴2Aと重複し、截られている。S D 04の堆積土を載っている。〔規模〕梁行1間（総長1.30m）×桁行2間（総長3.65m）で、主軸方向はN-20°-Wをとる。〔柱穴〕5個検出した。平面形は円形で、柱痕は確認されていない。

遺物 出上していない。

時期 S B 067より古く、S D 01より新しいことから考えると、近世に属するもので下限は17世紀前半である。

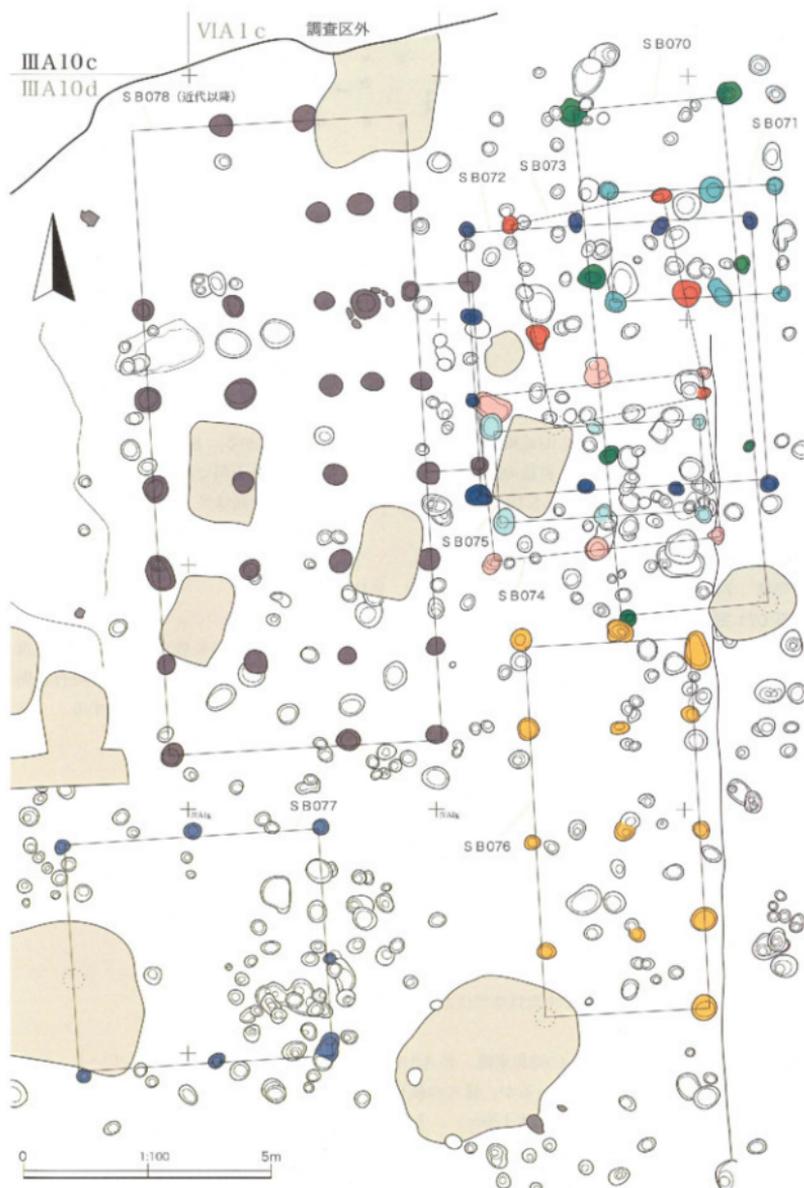
S B 069 掘立柱建物跡

遺構（第57図）〔位置〕S C 02中央付近、主にⅢB7bグリッドに占地する。S D 04の堆積土を載っている。〔規模〕梁行1間（総長1.3m）×桁行2間（総長3.65m）、主軸方向はN-88°-Wである。〔柱穴〕6個検出した。平面形は円形を呈する。柱痕はない。

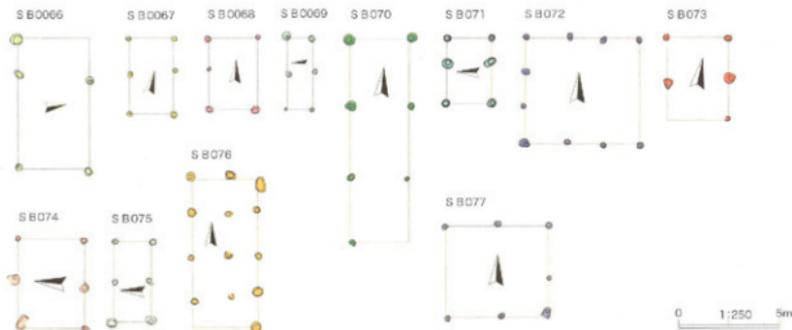
遺物 出上していない。

時期 S D 04との関係から見て、同堀埋没後に構築された中世以降の建物である。

S B 070 掘立柱建物跡



第55図 掘立柱建物跡配置 (5)



第56図 建物跡集成 (4)

遺構 (第57図) [位置] S C 03北東隅、IV A 2 d ~ f グリッドに広がる。S B 076に載られる。S B 071~075と重複するものの、直接の載り合いがないため新旧関係は不明である。[規模] 梁行1間(総長2.95m)×桁行3間(総長10.55m)の細長い建物で、主軸方向はN-5°-Wである。[柱穴] 不整形の7個を検出した。柱痕はない。

遺物 出土していない。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

S B 071 掘立柱建物跡

遺構 (第57図) [位置] S C 03北東隅、IV A 2 e グリッドに位置する。S B 070・072・073と重複するが、載り合いは認められず、新旧不明である。[規模] 梁行1間(総長2.20m)×桁行2間(総長3.4m)、小型の建物である。主軸方向はN-87°-Eで、ほぼ東西方向に軸を有する。[柱穴] 6個検出した。平面形は円形・楕円形を基調とする。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

S B 072 掘立柱建物跡

遺構 (第57図) [位置] S C 03北東隅、IV A 2 d・e グリッドに位置する。S B 074を載る。他にS B 070・071・073・075と重複するが、直接の載り合いは見られない。[規模] 3間四方(総長5.50m×5.80m)のほぼ正方形平面の建物である。主軸方向はN-4°-Wをとる。[柱穴] 10個検出した。平面形は楕円形を基調としている。柱痕は確認されていない。

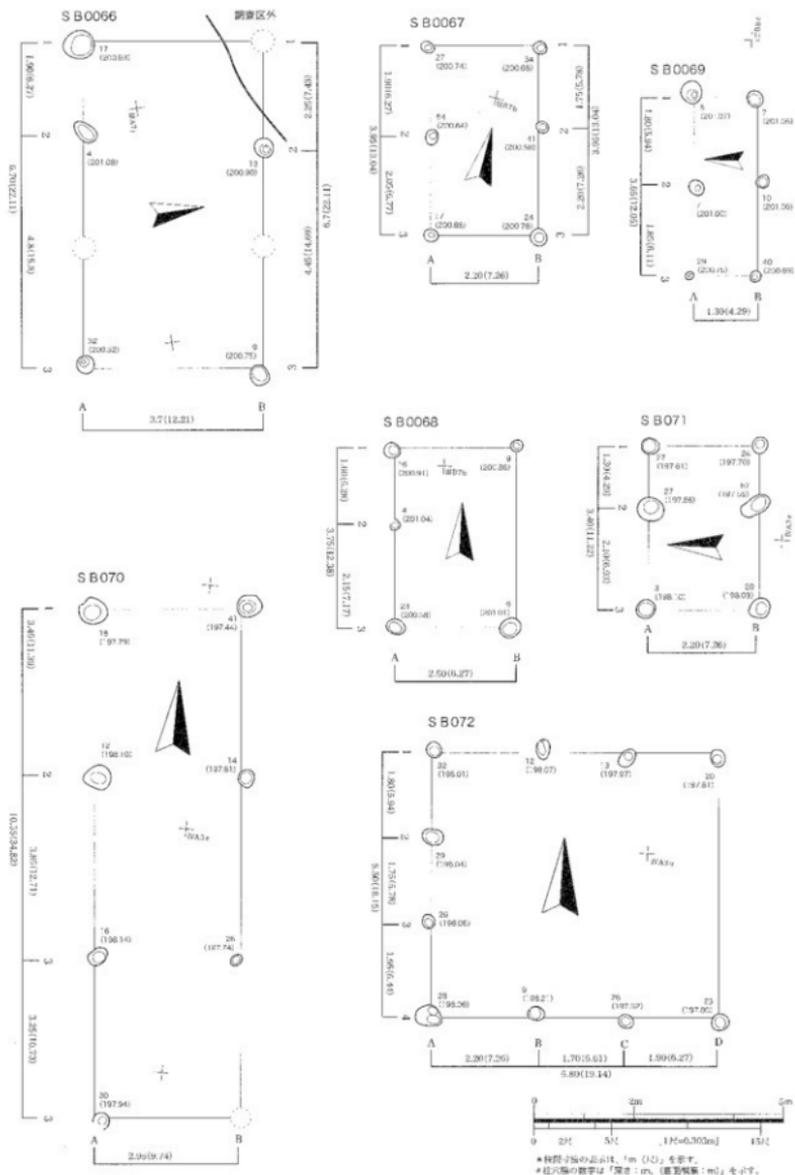
遺物 出土していない。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

S B 073 掘立柱建物跡

遺構 (第58図) [位置] S C 03北東隅、IV A 2 d・2 e グリッドに跨って占地している。S B 070~072・074・075と重複しているが、柱穴の載り合いが無いため新旧不明である。[規模] 梁行1間(総長3.15m)×桁行2間(総長4.20m)、主軸方向はN-12°-Wである。[柱穴] 5個検出した。平面形は楕円形および不整形である。柱痕は確認されていない。

遺物 出土していない。



第57図 S B066~072

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

SB 074 掘立柱建物跡

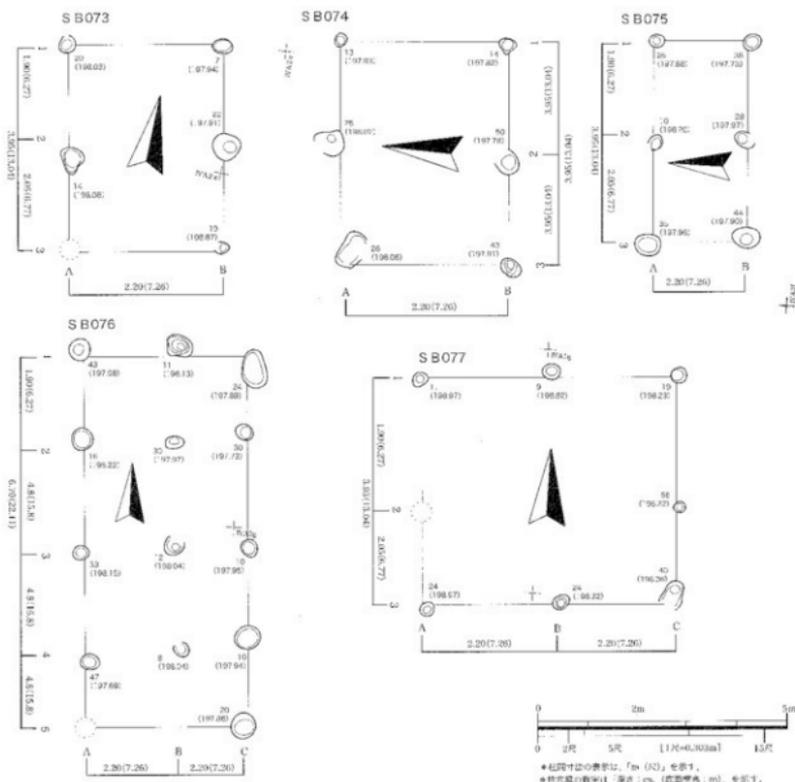
遺構 (第58図) [位置] SC03北東隅、VA2eグリッドに位置する。SB075に載られている。SB070・072・073とも重複するが、新旧関係不明である。[規模] 梁行1間(総長3.3m)×桁行2間(総長m)、主軸方向はN-83°-Wである。[柱穴] 不整な楕円形平面の6個検出した。柱痕は確認されない。

遺物 出土していない。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

SB 075 掘立柱建物跡

遺構 (第58図) [位置] SC03北東隅、VA2eグリッドに位置する。SB070・072・073・074と重複するが、直接の載り合いはない。[規模] 梁行1間(総長1.85m)×桁行2間(総長4.15m)の建物である。主軸方向はN-86°-Wで、ほぼ東西軸をとる。[柱穴] 6個検出した。平面形は円



第58図 SB073~077

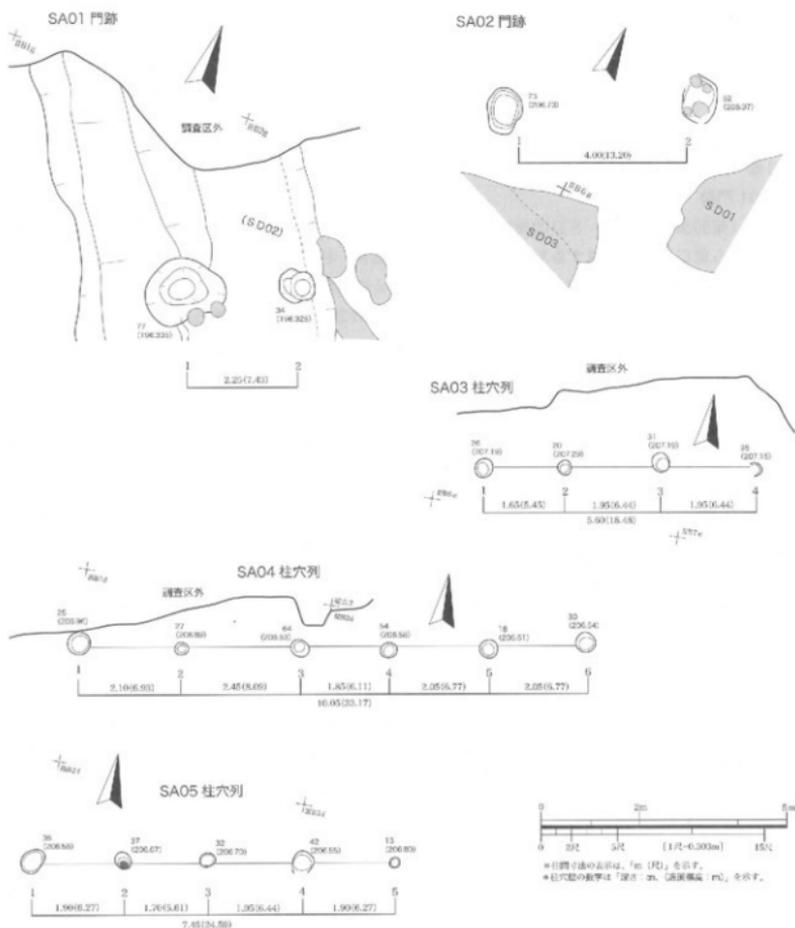
形・楕円形で、柱痕はない。

遺物 出上していない。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

S B 076 掘立柱建物跡

遺構（第58図）〔位置〕S C 03北側、IV A 2 f・gグリッドに跨がって位置する。僅かにS B 040を載っている。〔規模〕梁行2間（総長3.20m）×桁行4間（総長7.65m）の総柱？建物である。主軸方向はN-3°-Wである。〔柱穴〕13個検出した。平面形は楕円形および不整形である。柱痕は確



第59図 SA01~05

認められていない。

遺物 3A (SKP114) で縄文土器が出土している。

時期 平場普請以降の建物で中世以降ではあるが、具体は不明である。

SB 077 掘立柱建物跡

遺構 (第58図) [位置] SC03北側、ⅢA10g~ⅣA1gグリッドに跨がって占地する。他の建物との重複はない。[規模] 2間四方 (総長5.25m×4.70m) の方形平面の建物である。主軸方向はN-4°-Wである。[柱穴] 7個検出した。平面形は円形を基調とするが不整形のものを含む。柱痕は確認されていない。

遺物 (第36図) [土器] 柱穴3C (SKP116) から縄文土器の尖底部 (60) が出土した。

時期 出土遺物から縄文時代前期より新しい。平面型式から見て縄文時代の遺構とは考えづらく、中世以降と推測される。

門跡

2個一対の柱穴2組であり、その位置を加味して「門跡」と判断した。

SA 01 門跡

遺構 (第59図) [位置] SD02虎口跡の底面、虎口東側の墨壁上で大径柱穴を検出し、その規模と位置から虎口の門を構成するものと判断した。[規模] 柱穴2個一対で構成される。柱間寸法は約2.3mである。なお、pit2では不明瞭ながら建て替えの痕跡があった。Pit1には見られないことから、pit1を再利用する形で門の立て替えが行われ、新旧2時期の変遷を辿った可能性がある。[柱穴] 楕円形平面で、規模はそれぞれ1.6m×1.2m、0.7m×0.8mである。2個ともに径25~30cmの円形柱痕が確認された。深さは大きく異なるが、底面水準高はほぼ同じである。

遺物 出土していない。

性格 虎口に伴う門跡である。柱穴の構成から冠木門と推測される。なお、この門以南は虎口内の法幅がやや広がっており、いわゆる「内枿形」の虎口となっている。

時期 虎口に伴う施設であり、中世に属するものである。

SA 02 門跡

遺構 (第59図) [位置] SC01-b平場南側、SD01・03空堀およびSX05土橋の北側に位置している。柱穴の規模 (径が大きい) および空堀・土橋との位置関係等から門跡と考えた。SI06を裁っている。[規模] 大径の柱穴2個で構成される。柱間寸法は約4.0mである。[柱穴] 2個ともに楕円形平面である。柱穴規模はそれぞれ1.0m×0.7m、1.0m×0.6mと似通っている。柱痕は検出されなかった。

遺物 出土していない。

性格 SD01・03による区画エリアへの出入り口に設けられた門跡である。柱穴の構成から冠木門と推測される。

時期 館に伴う施設と推測されることから、構築時期は中世である。

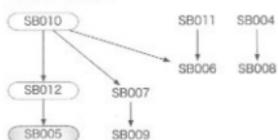
柱穴列

概ね直線的に配列する複数個の柱穴であり、3条を抽出した。

SA 03 柱穴列

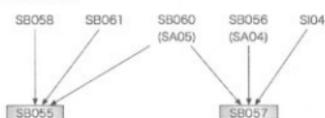
遺構 (第59図) [位置] SC01-b北東部分、ⅡB6eグリッドに位置する。SB015を載る。

<SC01-a平場>



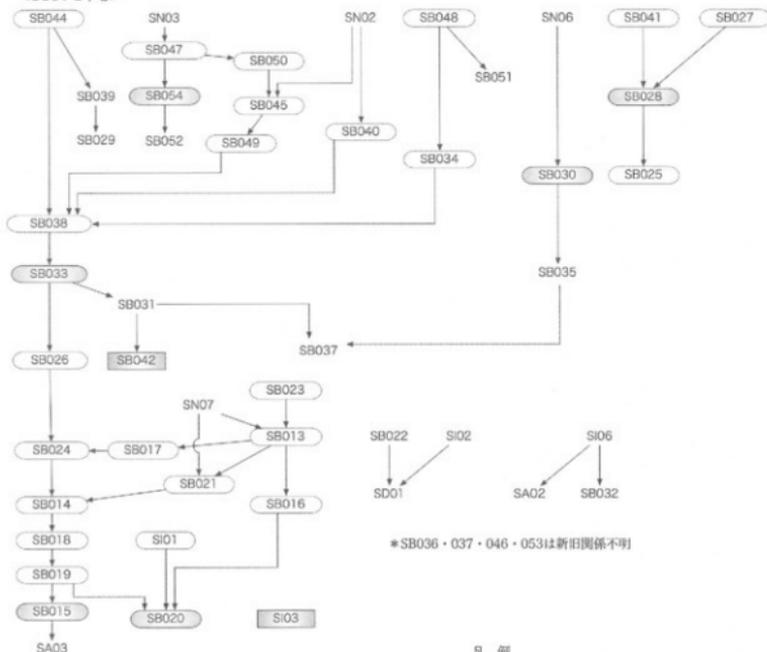
* SB001・002・003は新旧関係不明

<SC01-c平場>



* SB059・062~065は新旧関係不明

<SC01-b平場>



* SB036・037・046・053は新旧関係不明

<SC02平場>



* SB066・069・071・073・077は新旧関係不明

<SC03平場>



凡例

SB000 中世 (遺物あり→ほぼ確実)

SB000 中世 (重複関係から推定)

SB000 近世 (遺物あり→ほぼ確実)

SB000 近世 (重複関係から推定)

SB000 時期不明

第60図 検出遺構重複関係

〔規模〕柱穴4個で構成され、総長5.5m、柱間寸法1.8～2.0m、軸方向はN-80°-Eである。〔柱穴〕平面形は径20～40cmの円形および楕円形である。柱痕は確認できなかった。

遺物 出土していない。

時期 柱穴からの出土遺物がなく時期判断の材料を欠く。青磁破片（肥前産？）が出土したSB015より新しいことから近世以降であるが、時期詳細は不明である。

SA 04 柱穴列

遺構（第59図）〔位置〕SC01-c中央部北縁付近に位置する。〔規模〕柱穴6個で構成されており、総長約10.5m、柱間寸法は1.8～2.5m、軸方向はN-81°-Eである。〔柱穴〕平面形は円形で、径25～40cmと小径である。柱痕はない。

遺物 出土していない。

性格 本柱穴列の南側にはSB056が占地しており、位置関係や軸線から見て同建物に付随する塀を構成するものだった可能性がある。

時期 直接的な時期判断材料を欠いており、時期不明である。なお、SB056に伴う場合は近世以前に属するものとなる。

SA 05 柱穴列

遺構（第59図）〔位置〕SC01-c中央南寄り、II B 2fグリッド付近に位置する。〔規模〕柱穴5個で構成されている。総長約7.5m、柱間寸法は1.8～2.0mである。軸方向はN-80°-Eである。〔柱穴〕平面形は径20～40cmの略円形である。柱穴2で径20cmの円形の柱痕が検出された。

遺物 柱穴1（SKP86）で縄文土器が出土した。

性格 本柱穴列の北側にSB060が占地している。その位置関係や軸線から、同建物跡に付随する塀跡だった可能性がある。

時期 時期判断の根拠が薄く、時期不明である。SB060に伴う場合は近世以前である。

（6）溝 跡

SD 05 溝跡

遺構（第61図）〔位置・検出状況〕SD04空堀とSF01切岸の間に位置する。SD04の精査に際して、堀縁辺部に沿って筋状に延びる暗褐色土のプランを検出した。〔重複関係〕SI07・08と重複しており、それらを載っている。〔規模・形態・方向〕SD04に沿って南北方向に延びている。南側は吉田川沿いの崖まで達して開口しているものと思われるが、当該部分については安全対策上、調査を行っていないため不詳である。確認した部分は延長約15mである。断面は逆台形で、深さは28cmである。堆積土上面では確認できなかったが、底面には柱穴状の凹みが不明瞭ながらも複数見られる。空堀と切岸の間という位置関係を考えれば、防禦性を高めるための布掘りの構跡である可能性が高い。〔堆積土〕シラスブロックを僅かに含む暗褐色土の単層である。

遺物（第65図） 縄文土器（37）。土師器（127）。

時期 SD04空堀に付随する構跡と推測されることから、中世に属するものと考えられる。

SD 06 溝跡

遺構（第61図）〔位置・検出状況〕SD05とともに検出した。SD05と同様にSD04とSF01の間に位置している。〔重複関係〕SI07と重複し、それを載っている。〔規模・形態・方向〕SD05と平行しているが、北側では本溝は消失している。確認した部分の延長は約6.2mである。断面逆台形であるが深さ約8cmと浅く、底面では柱穴状の凹みは確認されていない。〔堆積土〕シラスブロッ

クを僅かに含む暗褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 遺物を欠き、判断材料に乏しい。堀との関連性から中世に属する可能性がある。

SD 07 溝跡

遺構（第61図）〔位置・検出状況〕SD02東側の土塁状の高まり部分に位置する。〔重複関係〕他遺構との載り合いはない。〔規模・形態・方向〕確認部分は北西―南東方向へと延びている。総長6.8m、深さ15cm程である。はっきりしないが、部分的に柱穴状の痕跡があり、布掘りの棚跡の可能性はある。〔堆積土〕シラス混じりの暗褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 具体の時期は不明である。SD02に関連する棚跡とすれば、中世に属する可能性がある。

SD 08 溝跡

遺構（第61図）〔位置・検出状況〕SD02東側の土塁状の高まり部分に位置する。〔重複関係〕新期のpitと重複している。他遺構との載り合いはない。〔規模・形態・方向〕確認部分は北西―南東方向へと延びている。総長6.8m、深さ15cm程である。〔堆積土〕シラス混じりの暗褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 具体の時期は不明である。SD02に関連するものとすれば、中世に属する可能性がある。

（7）竪穴建物跡・竪穴遺構

竪穴遺構は9棟〔竪穴建物跡4棟、竪穴遺構5棟〕を検出した。SC01平場面に6棟、SF01切岸裾部分に2棟、SC02平場面に1棟が分布する。これらの竪穴には炉・カマドは一切付設されていない。両者の平面形は類似しているが、床面の柱穴の有無により分離し、柱穴を伴うものを「竪穴建物跡」、柱穴のないものを「竪穴遺構」とした。

S1 01 竪穴遺構

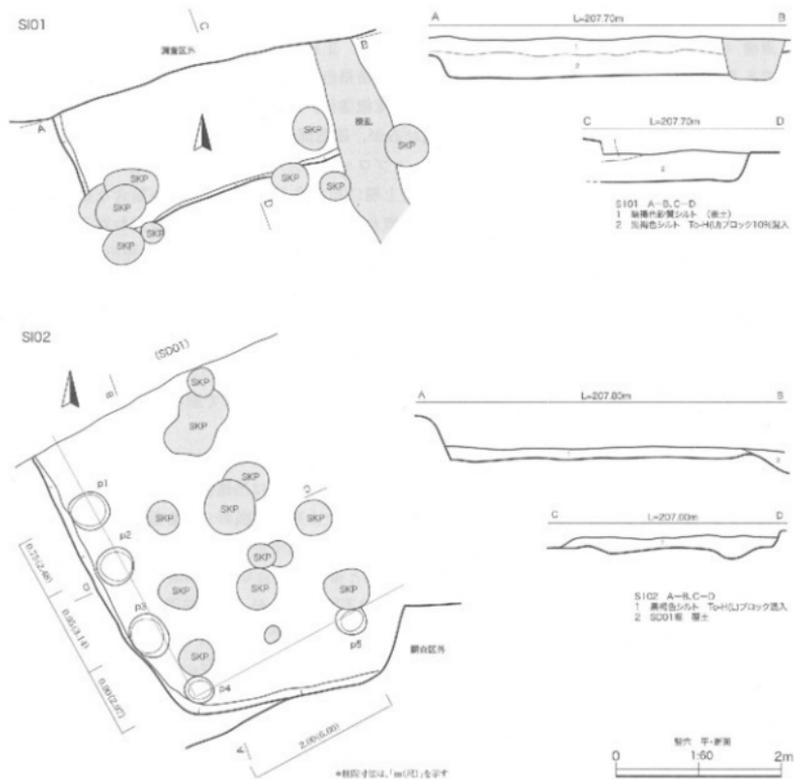
遺構（第62図）〔位置・検出状況〕上段平場SC01-b中央北側、II B 6 e～II B 7 eグリッドに位置する。表土を除去した際、地山ロームブロックを多量に含む黒褐色土のプランを検出した。〔重複関係〕東壁付近が水道管設置溝により破壊されている。また多数の柱穴と重複している。当遺構プラン検出時点で柱穴を識別できなかったことから、それらよりも新しいものと捉えられる。ただし、柱穴と堆積土が似ているため、見落としている可能性もある。〔形状・規模〕北側が調査区外へと延びていることから全体の形状は明らかではないが、確認部分から見て、方形基調であると推測される。規模は検出部分で南北1.7m・東西2.9mを測る。〔堆積土〕堆積土の主体は、地山ロームをブロック状に含んだ黒褐色土上である。人為堆積であり、当遺構は一気に埋め戻されたものと解釈される。〔壁・床面〕壁は八戸火山灰上層に相当し、壁高は20～30cm。床面も準同様八戸火山灰上層に相当するが砂層で、この砂は八戸火山灰上層中に介在するものである（第II章3で既に述べた）。〔柱穴〕検出されていない。ただし床面が砂層だったため、見落とした可能性も否定できない。

遺物 出土していない。

時期 判断根拠に乏しいが、構造や堆積土の様相から中世～近世に属するものと思われる。

S1 02 竪穴遺構

遺構（第62図）〔位置・検出状況〕II B 7 g・hグリッド、SC01-b平場の遺構面（八戸火山灰上層）において検出した。当該グリッドでSD01プランが不整に広がっていることから、竪穴との



第62図 S I 01・02

重複として把握した。〔重複関係〕北側でSD01と重複し載られている。また床面で検出された柱穴群については、これを載っているものと思われるが、堆積土が似ていることから見落とした可能性もあり、不確実である。〔形状・規模〕西側については削割のため、北側はSD01による破壊で、それぞれ壁・床面ともに消失している。残存する部分を参照すると、方形を基調とする平面形状だったものと思われる。検出部分の規模は、南北3.8m・東西2.5mである。〔堆積土〕削平により全体に薄く残るのみであるが、白みがかったバミス粒を含む黒褐色土である。〔壁・床面〕壁は八戸火山灰上層相当で外傾し、壁高10~15cmである。床面には八戸火山灰上層に不整合に混入する細砂層が露出している。〔柱穴〕床面で検出された柱穴状ピットのうち、壁に沿って配された5個が本遺構に伴うものと思われる。

遺物 出土していない。

時期 時期判断の根拠に乏しいが、中世~近世に属する可能性あるものと捉えておく。

S I 03 竪穴建物跡

遺構（第63図）〔位置・検出状況〕S C 01-b 南東側、Ⅱ B 2f グリッド南東隅付近に位置する。地山である黄褐色ロームの小ブロックが多量に混入する暗褐色土の広がりを検出。当初は乱瓦とも思えたが、箱査の結果、竪穴であることが判明した。〔重複関係〕他遺構との重複なく、単独の遺構である。〔形状・規模〕南側が僅かに調査区外に延びるが、確認部分から見て東西3.1m・南北2.2mの方形を呈するものと思われる。〔堆積土〕地山ロームブロックを含んだ暗褐色土の単層で、人為堆積の埋め戻し土である。〔壁・床面〕壁は八戸火山灰上層に相当するが、南壁では不整合な細砂層が露出する。壁高35～40cm、直立気味である。床面は概ね八戸火山灰上層の範疇とは思われるが、やや下層のシラスに近い。南壁寄りの床面では細砂層が露出する。〔柱穴〕床面で10個検出した。p 1～5、p 7～10は壁に沿って配置されており、p 6は床面の中央西寄りに位置している。

遺物（第65図）〔金属製品〕古銭1点（260）のみである。いわゆる雁首銭で、近世に属するものである。

時期 堆積土（＝埋め戻し土）から近世の雁首銭が出土していることから、廃絶時期は近世まで下るであろうが、具体的な年代を推測する根拠が薄い。構築・機能期は中世まで遡る可能性もある。

S I 04 竪穴建物跡

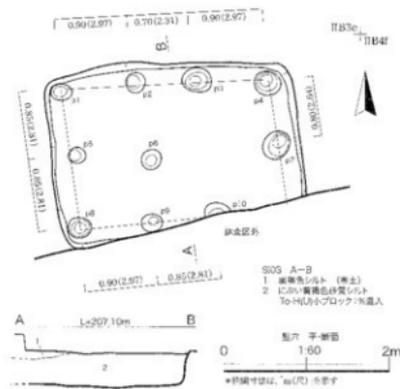
遺構（第64図）〔位置・検出状況〕S C 01-c 平場のⅢ B 2 g グリッドに位置する。〔重複関係〕S B 55・57の柱穴、その他のpit類と重複している。S B 55・57の柱穴は当建物跡プラン検出時点で重複が見えており、当建物跡より確実に新しい。当建物は堆積土と壁・床面の一部を截られている。その他のpit類は検出状況から当建物跡が新しいと捉えているが、堆積土が似ていることから見落としたかもしれず、新旧関係は不確かである。また、S K F 01と重複しており、その南半部を壊している。〔形状・規模〕南側が調査区外へと延びるため全体形は不明であるが、方形基調であろう。検出部分で見ると壁の規模は東西約4.2m×南北2.9m以上、壁高35～50cmである。〔堆積土〕主体は黒褐色～暗褐色を呈する人為堆積層で、黄褐色バミス粒（二ノ倉火山灰か？）を含む。〔壁・床面〕東壁際の床面には浅い溝状の落ち込みがあるが、当建物跡に伴うのか不明である。床面はほぼ八戸火山灰上層のロームに相当するが、一部に八戸下層のシラスが露出している。〔柱穴〕床面で9個検出した。うち、p 1～5（および6）が壁に沿うように配置されている。西側のp 1-2はやや壁から離れて配置されている。

遺物（第67図）〔土器〕縄文土器（29）。早期/物見台式か。〔陶磁器〕陶器碗（152）。近世肥前産の腰鉋碗である。

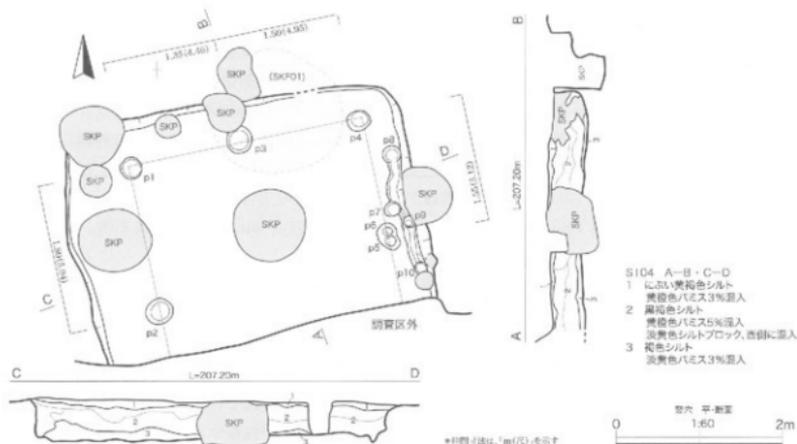
時期 近世陶器片が出土しており、埋没時期は近世と推測される。

S I 05 竪穴遺構

遺構（第65図）〔位置・検出状況〕S C 01-b 平場北西部の調査区境、Ⅱ B 4 g～Ⅱ B 4 f グリッドに跨って位置する。〔重複関係〕重複する遺構はない。〔形状・規模〕南側のごく一部を検出したに過ぎない。確認した部分から考える



第63図 S I 03



第64図 S104

と、方形基調であろうが、全体の形状・規模は不明である。規模は東西2.7m以上×南北0.8m以上で、壁高35cm、地表面から床面までは深さ70cmである。〔堆積土〕細分したがあまり違いはなく、全体として黒褐色土の単層に近い。自然堆積であろう。〔壁・床面〕壁・床面ともに八戸火山灰上層に相当する。西壁はやや外傾、南壁は直立きみで、床面はほぼ平坦である。〔柱穴〕検出されていない。

遺物(第67図)〔土器〕須恵器壺(133)。同一個体と思われる須恵器・長頸壺片4点がまとまって出土したが、結果的に接合しなかったため口縁部破片1点のみ図示した。

時期 他の竪穴遺構と同じく、中世～近世初と捉えたいが、堆積土から須恵器が出土しており、古代の竪穴住居跡である可能性もある(その場合、竈は北壁側か)。

S106 竪穴遺構

遺構(第65図)〔位置・検出状況〕SC01-b 平場中央付近、ⅢB5gグリッド南東隅に位置し、橙色バミス(二ノ倉火山灰?)を疎らに含んだ暗褐色土の小型方形プランを検出した。〔重複関係〕SA02およびその他の柱穴と重複している。〔形状・規模〕南北2.3m×東西1.8mの方形を基調とする。若干の歪み、不整な部分が見られるが、壁の崩落によるものと思われる。〔堆積土〕壁際に地山崩落土が、その上位には暗褐色土が堆積している。自然堆積である。〔壁・床面〕壁は八戸火山灰上層に相当する。上位はロームであるが、中～下位は砂層が露出している。壁高は最大52cm。床面には砂層が露出し、特に堅く締まるわけでもなく、本来の床面の状態は不明である。〔柱穴〕検出されていない。床面が砂だったことで認識できなかったかもしれない。

遺物(第67図)〔土器〕縄文土器(30・31)、土師器壺(121)。

時期 出土遺物は異時期混入と思われる、具体の時期を推測する資料を欠く。形態から見て他の竪穴遺構と同様のものと看做し、ここでは中世～近世としておく。

S107 竪穴建物跡

遺構(第66図)〔位置・検出状況〕調査初期の試掘の際、SF01裾部分に設定したT10において壁

の立ち上がりの一部を確認した。SF01・SD04の精査において、SF01裾を載るブランを確認し堅穴遺構として認定した。〔重複関係〕SF01およびSD04～06と重複し、前者を載り、後者に載られている。また北に隣接するSI08の南側部分を壊している。〔形状・規模〕東側がSD04に載られて、西側の僅かしか残っていない。残存部は南北3.95m、東西1.2mである。〔堆積土〕にぶい黄褐色土の単層である。〔壁・床面〕残存する西壁は、SF01法面を載りつつ床面から外傾して立ち上がる。壁高は35cmである。床面はSD04側へとやや傾斜している。〔柱穴〕床面および想定建物範囲内で10個検出した。これらには隣接・重複するSI08の柱穴を含むものである。当建物跡に付随する柱穴は、配置から見てpit1～7であろう（pit4は不確実）。pit8・9は帰属不明。

遺物 出土しなかった。

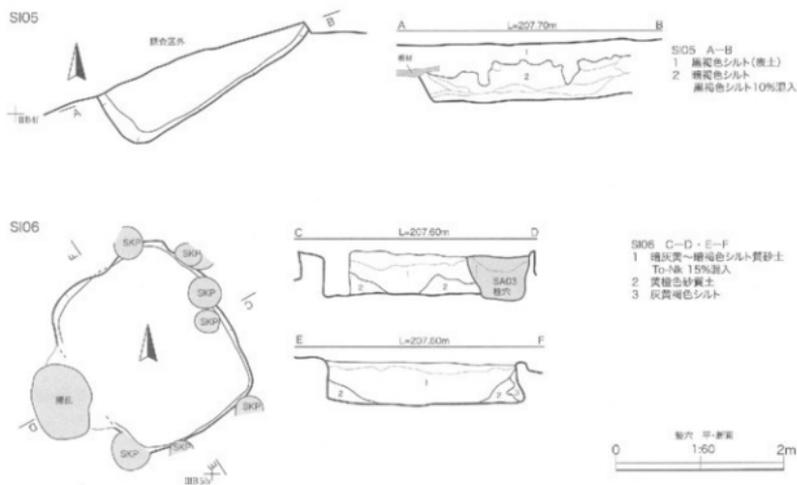
時期 重複関係からSD04より古く、中世に属するものと推測される。

SI08 堅穴建物跡

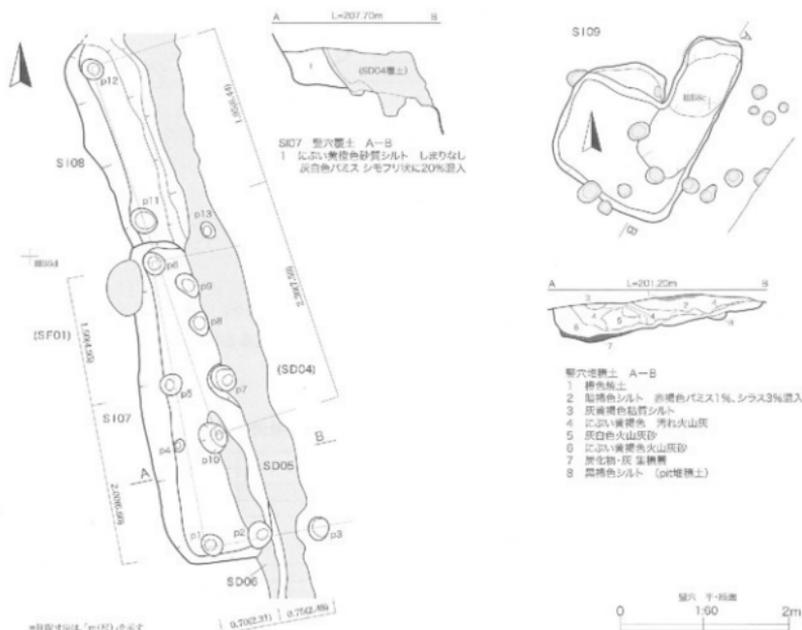
遺構（第66図）〔位置・検出状況〕SF01裾部分で、SI07とともに検出した。当初はSI07と同一のものと考えたが、精査の結果、それとは別の堅穴であることがわかり、SI08として認定した。〔重複関係〕SF01およびSD04と重複しており、前者を載り、後者に載られている。また南側はSI07により載られている。〔形状・規模〕SD04による破壊で西側2.5mほどが残存するのみである。〔堆積土〕上述の調査過程だったため堆積土の記録がなく、詳細は不明である。〔壁・床面〕床面はSI07より高く、約10cmの段差をなしている。ほぼ平坦である。壁はSI07と同様に緩く外傾しており、壁高は約20cmである。〔柱穴〕床面でpit11・12の2個を検出した。また、SI07床面のpit10は位置関係から見て本建物の柱穴と解釈した。

遺物 出土しなかった。

時期 重複関係から中世と捉えられる。



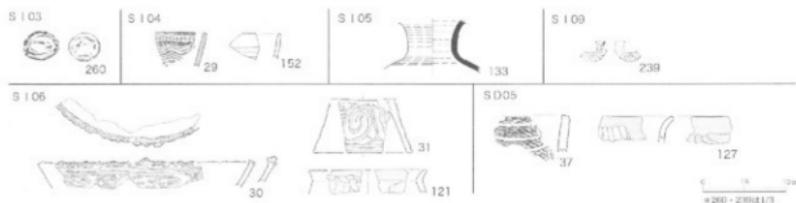
第65図 SI05・06



第66図 S107~09

S109 竪穴遺構

遺構〔第66図〕〔位置・検出状況〕調査区下段高位面、ⅢB9c～ⅢB9dグリッドに位置する。SC02の近世整地層を除去した際、焼土を含んだ黒褐色土の溝状プランを検出し、カマド状遺構に類するものと考えた。しかし精査の過程で掘り広がり、結果的に方形の小型竪穴状掘り込みが付随することがわかった。調査時は他の竪穴遺構と様相が異なっていたため性格不明遺構としていたが、整理段階で竪穴遺構として一括することとした。〔重複関係〕近世と思われる柱穴に載られている。〔形状・規模〕溝状の掘り込み部分と、それに付随する方形の竪穴状掘り込みからなる。異なる遺構の重複の可能性も考えたが、断面で見る限りでは判然とせず、一体のものとして判断した。竪穴部分は $1.7\text{m} \times 1.5\text{m}$ の方形平面であるが、北側に張出し様の浅い掘り込みが付く。溝状部分は長さ 1.1m ・幅 0.65m で、竪穴部東隅付近から北東方向へと張出している。〔堆積土〕最初に検出した溝状掘り込み部分の断面のみ記録したため、竪穴状掘り込み部分の堆積土については詳細不明である。溝状掘り込み部分の最上位（検出面）には厚さ 5cm の焼土層が形成されている。〔壁・床面〕竪穴状部分の床面には凹凸があって中央付近が盛り上がっている。壁は床面から緩く立ち上がった後、外傾する。溝状部分の床面（底面）は北東方向へと傾斜し、先端部分で最も深くなる。先端部分では底面が広がって壁は内彎している。〔柱穴〕床面5個、周辺で9個が検出されたが本遺構より新期のものであり、本遺構に伴うものではない。



第67図 遺構別出土遺物(4)

遺物(第67図)〔金属製品〕堆積土から無文銭1点(236)が出土した。

時期 近世の整地層に被覆されていること、および出土遺物から見ると中世の遺構である。

(8) 焼土遺構

調査区上段において7基検出した。検出層位は、いずれも平場遺構面の八戸火山灰上層である。

遺構名	位置	平面形	層厚	備考
SN01	SC01-a/IA10hグリッド	不整形 40×30cm	6cm	
SN02	SC01-b/II B4gグリッド	楕円形 64×60cm	16cm	
SN03	SC01-b/II B4iグリッド	三角形 70×64cm	12cm	
SN04	SC01-c/III B2dグリッド	不整形 116×68cm	10cm	
SN05	SC01-c/III B2eグリッド	楕円形 44×26cm	6cm	
SN06	SC01-b/II B6fグリッド	楕円形 50×32cm	8cm	
SN07	SC01-b/II B6gグリッド	不整形 30×25cm	1cm	焼成弱

これらに伴う遺物はなく、時期を特定する資料を欠く。すべて柱穴に載られており、平場着請前に存在していたより古い遺構の跡や竈の痕跡という可能性もあるが明らかではない。

4 近代以降

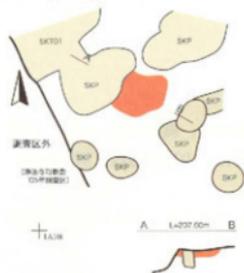
SB 078 掘立柱建物跡

遺構(第55図)〔位置〕下段平場面北側、表土直下で検出した。〔規模〕梁行3間×桁行7間、21間の建物である。〔柱穴〕略円形の柱穴32個で構成される。開口部径60~70cm、深さ15~25cmである。このうち29個に砕石が埋め込まれていた。遺物なし。時期 柱穴堆積土の様相から見て、近代以降に建てられた家屋跡(母屋?)である。

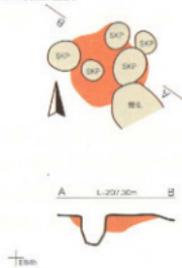
土蔵跡

調査区下段高位面段際に設定した試掘トレンチT-5において、表土直下で石組遺構を検出した(写真図版9)。上方に平坦面を揃えた礫が方形に配列されており、その内部に拳大~人頭大の礫が敷き詰められていた(一部は県教委生文課の試掘トレンチで破壊されている)。当初は近世以前の遺構の可能性を考えたが、近隣住民からの聞き取りにより倉の基礎・地下構造部分であることが判明した。この倉は明治時代に建てられ、戦後比較的最近まで現存していたもので、近代~現代の「遺構」である。図化は省略した。

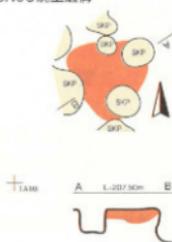
SN01 焼土遺構



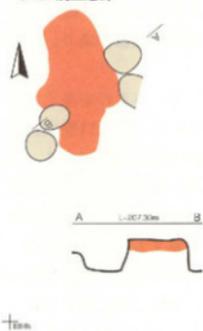
SN02 焼土遺構



SN03 焼土遺構



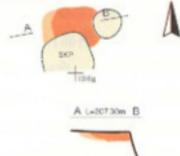
SN04 焼土遺構



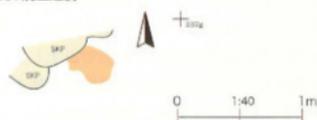
SN05 焼土遺構



SN06 焼土遺構



SN07 焼土遺構



第68図 S N01~07

V 遺 物

1 概 要

縄文時代、古代、中世、近世～近代の遺物が出土した。縄文時代の遺物は、縄文土器、石器、石製品がある。古代の遺物は土師器、須恵器が出土した。中世～近世の遺物は、中国産磁器、国産陶器、瓦質土器、土師質土器、土製品、石製品、鉄製品、銭貨がある。

ここでは遺構内出土遺物を含めて種別で一括し、概要と特徴点について述べる。個々の遺物の詳細は観察表に記載した。

2 土器・陶磁器

(1) 縄 文 土 器

〔出土状況〕縄文土器は総量で約26.74kg分が出土した。内訳は、完形・準完形6個体、破片1,369点〔口縁部122点、胴部1,206点、底部41点〕である。早期、前期、後期、晩期の土器があり、量的には後期後葉が多く、次いで前期前葉～中葉、それ以外は少ない。

遺構内出土土器（第69～71図1～61） 中世以降の遺構堆積上から出土しているものが多く、S I 52堅穴住居跡出土土器を除けば、本来的な意味での遺構内出土遺物は少ない。S I 11堅穴住居跡：床面で完形および準完形の土器4～10が出土しており、後期後葉の一括性の高い資料である。13は器厚の薄い鉢形土器であり、内面にごく僅かの赤色顔料付着が認められる。堆積土からは4単位波状口縁の深鉢（17）や香炉形土器（14）が出土した。床面、堆積土ともに瘤の貼付は注口土器と思われるものを除くと殆ど見られない。S I 06堅穴遺構：遺構自体は中世に属するものであるが、30・31が堆積土に混入する形で出土した。30は晩期中葉の浅鉢口縁部で、口唇には食い違う2条の突起列が付され、胴部には雲形文が描かれている。31は台付鉢の台部分で、棒状工具による沈線・刺突文が展開している。時期は明確ではないが後期ではないかと推測される。S D 01堀：中世の遺構であるが、堆積土から32～36が出土した。32・33は後期前葉の深鉢口縁部である。波状口縁の波頂部から刻み・刺突をとまなう貼付隆帯が貼付される。34～36は粗製深鉢の口縁部破片で、後期に属するものと思われる。S D 05溝：37が出土した。沈線文が施されており、後期に属するものである。S X 01配石：堆積土から38～43が出土。42・43が前期後葉、39～41は後期後葉、38が晩期である。S X 02配石：堆積土からは44～50が出土している。45・49?が前期、その他は後期中葉～後葉である。柱穴堆積上：51～61が出土した。56は早期、51・52・55・58・60は前期、53・57・59は後期、54が晩期に属するものである。

遺構外出土土器（第72・73図62～120） 調査区東側、S C 02・03平場の遺構面以下のIV～VI層から、前期前葉～中葉および後期の土器が出土した。主にIV A 1hグリッドからの出土が顕著であるが纏まった出土様相という訳ではなく、疎らで散発的に出土する状況であった。接合した資料は少なく、大部分が破片資料に止まる。実測個体では、62～64・66・68・69は前期、65は後期、67は後～晩期の資料である。68・69は底部内面にも地文が施されている。

〔時期・型式〕本遺跡の出土土器は量的には少ないものの、その所属時期は早期中葉・後葉、前期前葉・中葉、後期前葉・中葉?・後葉、晩期中葉と時間幅が比較的広い。先に述べた出土土器を時期

SI51



SI52 (1)



第69圖 出土遺物 (1) 縄文土器

SI52 (2)



SI53



28

SI04



29

SI06



31



30

SD01



32



34



33



35



36

SD05



37

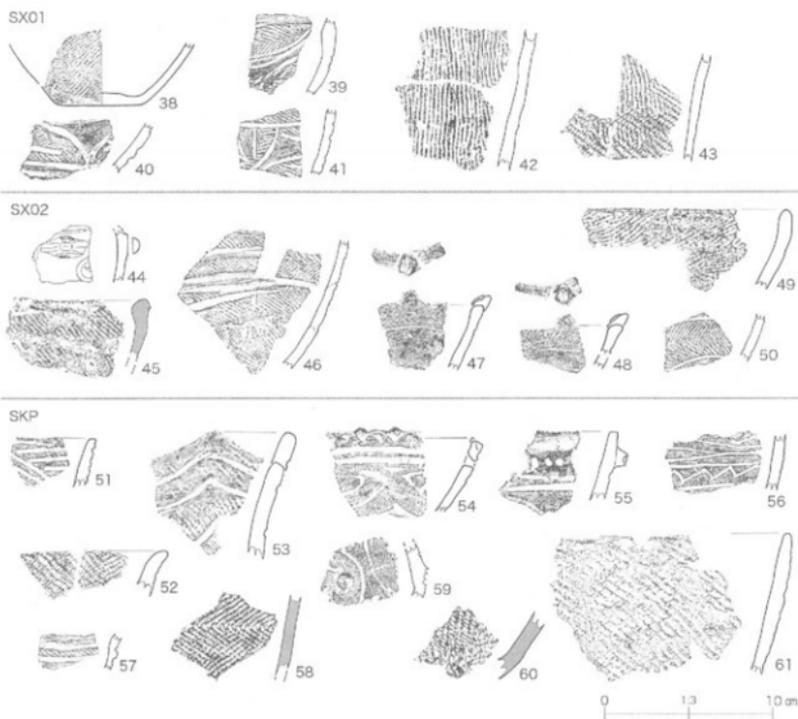
0 1:3 10 cm

第70図 出土遺物 (2) 縄文土器

的・型的に位置づけておく。

<早期> 前業：大新町 a 式。南部浮石層より下位の VI 層から出土した 1 点のみである (119)。V 字状モチーフに横沈線を付した押型文が施されている。この類の土器は盛岡市大新町遺跡で出土しており、日計式に後続する大新町 a 式とされている (盛岡市教委1998、神原2006)。後業：貝殻腹縁圧痕と連続する鋸歯状沈線が施された 56・72・106 で、物見台式に相当する。

<前期> 前業：胎土に多量の繊維を含む繊維土器である。そのうち、114 および 77・80 は東北地方南部における大木 1 式に相当するものと思われる (註 1)。114 は口縁部から胴部にかけて重畳するループ文が施されている。左記以外の 2・27・45・51・55・58・60・63・66・76・86・89・91・101・111・134? 等は早稲田 6 類に相当するものと思われる。60・66 は尖底部、63 は胴部下半尖底部付近の破片である。なお、押し引き沈線の口縁部破片である 29 は、長七谷地 3 群土器か。中業：口縁部に摺糸文を施す 90・98・99 等は大木 2 a 式か。網目状摺糸文の 93 は大木 2 b 式か。口縁部に隆帯が付される 55 については大木 3 式の可能性がある。円筒下層 a 式 (28・29・30・33)。後業：円筒下層 c 式 (76・86)。小破片であるが、内面調整が丁寧な縦位ミガキであり、内面に凹凸の残る円筒下層 a 式とは趣が異なる。



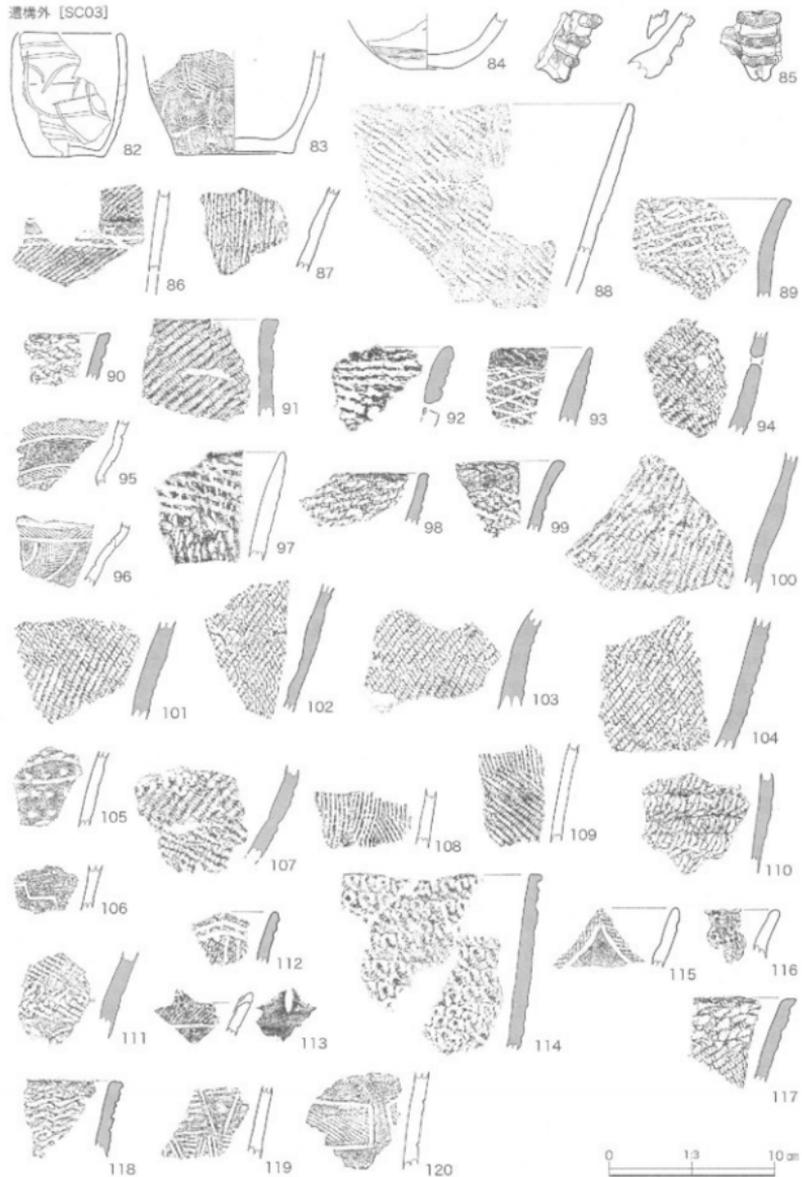
第71図 出土遺物 (3) 縄文土器

遺構外 [SC01・03]



第72図 出土遺物(4) 縄文土器

遺構外 [SC03]



第73図 出土遺物 (5) 縄文土器

<後期> 前葉：壺形式(32・33)。波状縁の波頂部直下に隆帯を貼付し、刺突や刻み、沈線等で加飾するものである。十腰内Ⅰ式(77)。細目の沈線文が施されるものである。中葉：十腰内Ⅲ式(28・46・50・95・96)。いずれも破片であり、不確定。後葉：十腰内Ⅳ式。S I 52の床面出土土器(1~10)および堆積土出土土器の一部(11~15、17)。十腰内Ⅴ式(13)。無文・薄手の鉢形で、赤色の付着物が残る。

<晩期> 中葉：大洞C式。S I 52堆積土上位(19)、S I 06堆積土(30)、柱穴堆積土(53)の3点。

(2) 土師器・須恵器

今回の調査では明らかに古代に属すると判断できる遺構はなく、中世以降の平場・堅穴・堀・柱穴等の堆積土から出土したもののばかりである。出土地点は上に高位調査区(S C 01面)が多く、当該部分に古代の遺構が存在していたものの普請により消失した可能性が示唆される。

<土師器> 出土した土師器は甕を主体とし、他に坏および罏(鍋)と思われるものがある。小破片ながら約130点出土しており、12点を掲載した。S I 06 堅穴遺構：中世の遺構であるが、堆積土から甕の口縁部破片121が出土した。S D 01 堀：堆積土から122~126が出土。122は口縁が外傾する器形から罏と捉えられる(松本1990)。他は長胴甕である。124は底面全体に砂粒が付着しており、いわゆる「砂底」の土師器である(註2)。125・126は木葉底で、126では底部についた木葉の主筋に沿って、工具による鋭角な切り込みが入れられている。S D 05 溝：甕の口縁127が出土。柱穴：128・129が出土。128の甕は底部外面にハケメ、体部は内外面ともにヘラナデ調整。129は底部外面に再調整のヘラケズリが入る。器形から見ると坏か。遺構外：S C 01 堆積土〔盛土〕から130~131が出土。132は底部再調整のヘラケズリ。これらは大雑把には平安時代に属する資料であることは確実だが、出土土師器に坏が殆ど含まれず、甕の口縁部破片も少ないため具体的な年代ははっきりしない。坏が僅少な組成であることから平安時代後半期、かつ罏が付伴することからその下限は10世紀末頃と大まかには考えられるのではないかと(註3)。

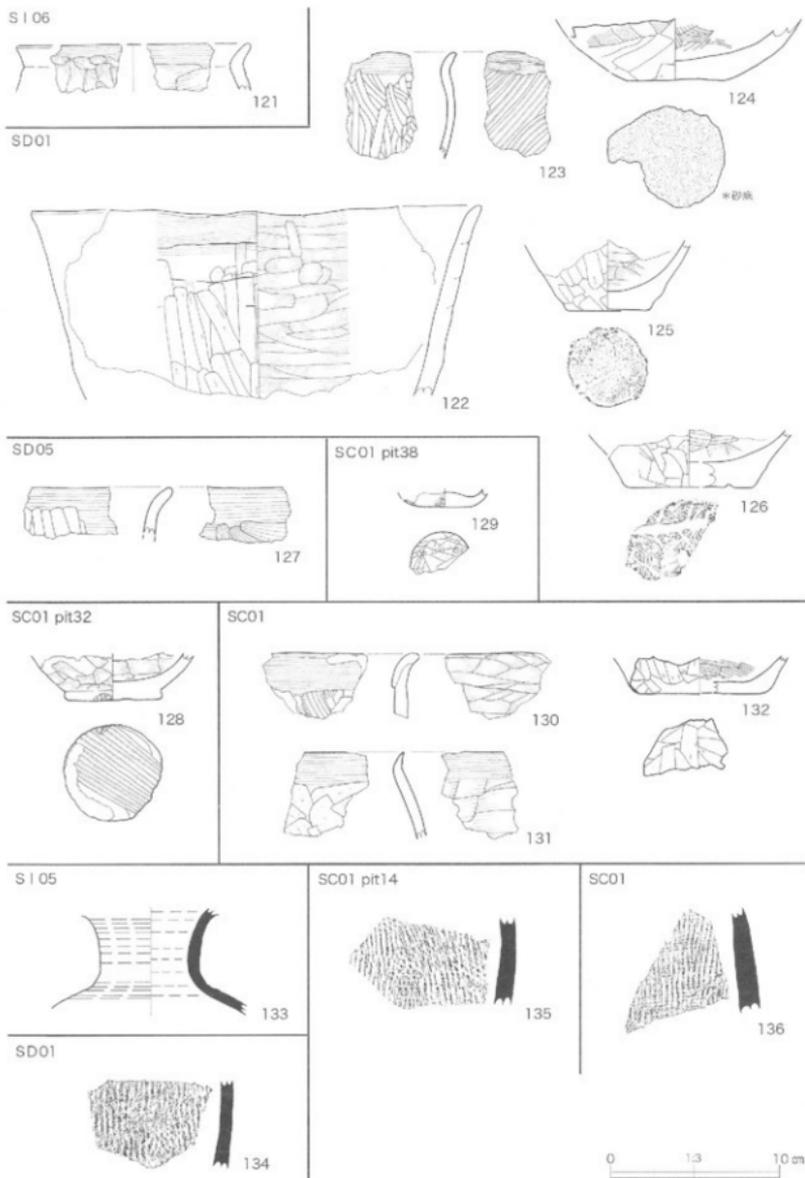
<須恵器> S I 05およびS I 01面の空堀・柱穴堆積土から16点出土しており、そのうち4点を掲載した。133はS I 05 堅穴遺構から出土したもので、長頸瓶の頸部破片である。なお、S I 05からは他に133と接合しないものの同一個体と思われる破片4点が出土している。134~136は大甕の体部破片である。

(3) 陶磁器

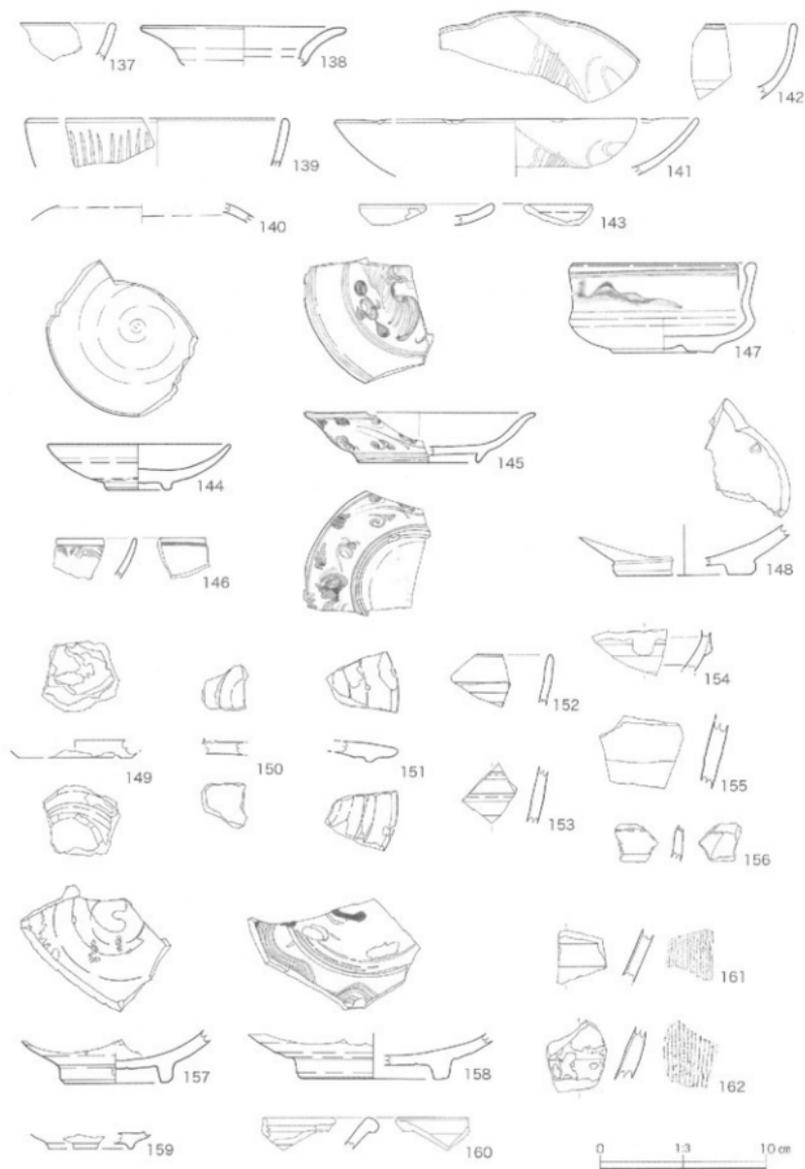
中国産磁器、国産陶磁器が出土した。出土した資料は小破片が多く、産地・年代の同定が難しいものばかりである。可能な限り、産地等について一応の見解は記すが、情報が余りに少ないため不確定要素が多いことを付記しておく(註4)。また168~170は、小破片で図化が難しいことから写真掲載としたものである。

137~146は磁器である。青磁(137~143・168~170)、白磁(144)、青花〔染付〕(145・146)等がある。139・142・143・168・169は龍泉窯産青磁と推測される。139は染付の蓮弁文を施されており、15世紀末の年代観を与えられる。170については近世以降の国産品(肥前産?)か。144の白磁は時期・産地ともに不明である。青花(染付)のうち、146の丸皿は16世紀後半の漳州窯系と思われる。145の端反皿については確実ではないが、漳州窯系か。

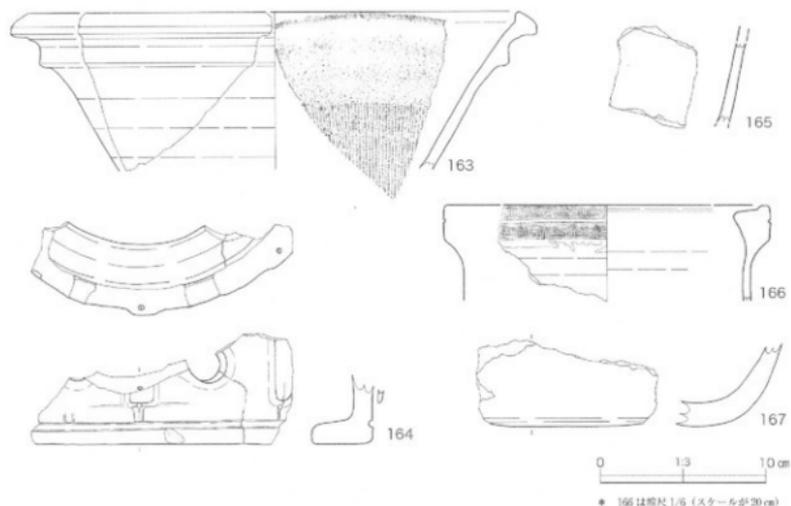
147~163は陶器で、いずれも国産品であろう。そのうち、147~151については美濃産の可能性



第74図 出土遺物(6) 土師器・須恵器



第75図 出土遺物 (7) 陶磁器



第76図 出土遺物(8) 陶磁器・土師質土器・瓦質土器

が高い。149・150は碗類の底部(畳付)破片で、美濃大窯後半期(Ⅲ～Ⅳ期:16世紀後半)に属する。151は土瓶類の蓋で、美濃登窯期のもので近世に属する。152～158は肥前産陶器か。152は腰箱碗の口縁部。154は碗の腰付近くで、灰釉の流し掛け。158は皿で、内面には目跡2箇所(胎土目?)が残る。内面は軸の掛け分けで、内面中央は灰釉、周縁は鉄釉。櫛目状工具による掻き落としが見られる。外面は無釉露胎である。160～163は播鉢である。160・161は出土状況・軸の様相から同一個体と思われる。肥前産か。162・163は産地不明である。

(4) 土師質土器

2点(164・165)が出土した。164は何らかの器種の台部分にあたるものである。円形の透かし孔2箇所、細い縦位貫通孔(紐通穴?)2箇所が見られる。全体形が類推できないので具体の器種は不明である。165は器表面に煤が付着した薄手の破片で、碗形土器の破片か。

(5) 瓦質土器

166・167の2点出土した。166は口縁部が凸帯状に肥厚し、口縁に沿って雷文帯2段が巡っている。167は底部破片で、底面は鍋底状に平坦である。166と167は接点がないものの、同一個体、もしくは同一器種の破片である。器種は明確ではないが、おそらく火鉢に類するものと思われる。産地・年代ともに不明であるが、166に類似する瓦質土器が花巻市笹間館跡で出土しており、15～16世紀代との年代観が与えられている(高橋1988)。

註

- (1) 東北地方北部における表筒式においてもループ文の施文が認められることから、同式の可能性もある。
- (2) 「砂底」土器は底部外面に砂粒を付着させた土師器・須恵器で、その分布圏は東北地方北部から北海道道南に限定される

(横田 1997)。器種は主に土器が多いが、埴・埴等の他器種でも見られる。岩手県内における「砂底」の出土例は安比川・馬淵川流域で特に多く、浄法寺町内では本遺跡に近い桂平Ⅱ遺跡の他、飛鳥台地Ⅰ、広沖、五塚Ⅰ・Ⅱ、田余内Ⅰの各遺跡で「砂底」の土器器型が出土している。なお、横田氏は「砂底」と土器器型の分布圏が重なり合うことから、両者が関連性をもつことを示唆している(横田・前掲書)。

(3) 松本建彦氏によれば、当地域において埴は9世紀前半に出現し、11～12世紀に鉄鍋が普及するとともに消滅したと指摘されている(松本 1990:72頁)。

(4) 瀬戸美濃系陶器および貿易陶磁器の一部については、瀬戸市埋蔵文化財センターの岡本直久氏、金子健一氏、河合君近氏に鑑定をいただいたが、上述のとおり情報少なすぎゆえ各氏の見解が異なる点もあった。記載にあたってはこれらの見解を参考としたが、千葉が独自に判断したものもあり、本文記載に誤記ある場合は「葉にその責がある」。

参考文献

今井 敦 1997 『青磁』中国の陶磁4、平凡社

神原雄一郎 2006 『盛岡における縄文時代早期前葉から中葉にかけての土器』『縄文時代早期中葉土器群の再検討-資料集-』海峽土器編年研究会

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』

熊谷常正 1983 『岩手県における縄文時代前期土器群の成立』『岩手県立博物館研究報告』第1号

横田 隆 1997 『底部に砂粒を付着させる土器とその分布範囲について』『殷典・律令国家・日本海-シンポジウムⅡ-資料集-』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会

高桑弘美 2003 『5 瓦質土器』『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会編、高志書院

高橋与右衛門 1988 『瓦質土器』『館陶磁器発掘調査報告書』岩文振理文調報 第124集、岩手県文

西田宏子・出川智朗 1997 『明末清初の民窯』中国の陶磁10、平凡社

長谷部実爾・今井敦 1995 『日本出土の中国陶磁』中国の陶磁12、平凡社

藤沢良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史編 Ⅳ』

星雅之・茅野嘉雄 2006 『十和田中環テフラからみた円筒下層A式土器成立期の土器様相』『植生史研究 特別第2号-三内丸山遺跡の生態系史』日本植生史学会

本興 宏 1987 『縄文時代後期初頭土器群の研究(1)』『よねしろ考古』第3号

松本建彦 1990 『東北北部の平安時代のなべ』『紀要Ⅹ』岩手県埋蔵文化財センター

三浦謙一 2007 『北東北3県における縄文時代草創期・早期の様相 -その1-』『紀要ⅩⅩⅥ』岩手県埋蔵文化財センター

武藤康弘 1988 『東北地方北部の前期縄文土器群の編年学的研究』考古学雑誌74-2

武藤康弘 1991 『東北地方北部の前期縄文土器群の編年学的研究Ⅱ』考古学雑誌76-3

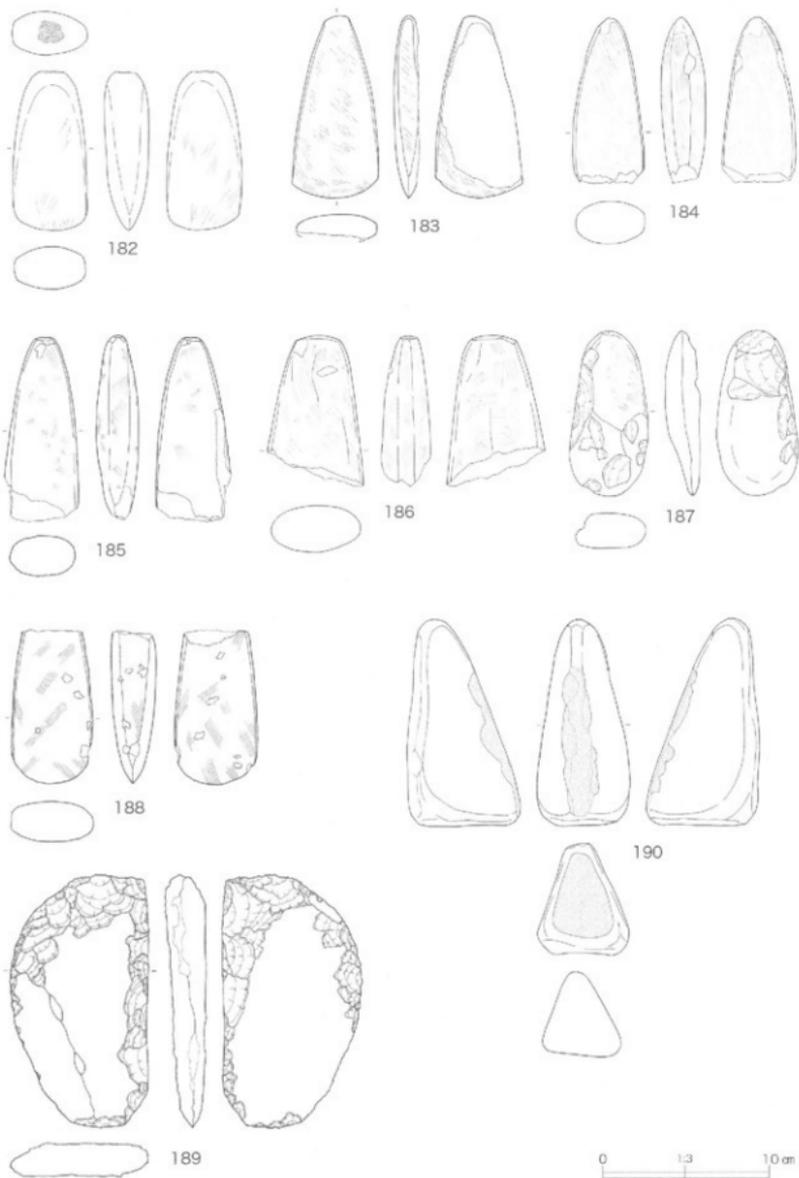
盛岡市教委 1998 『大館遺跡群 大館町遺跡・大新町遺跡-平成8年度・9年度発掘調査概報-』

3 石 器

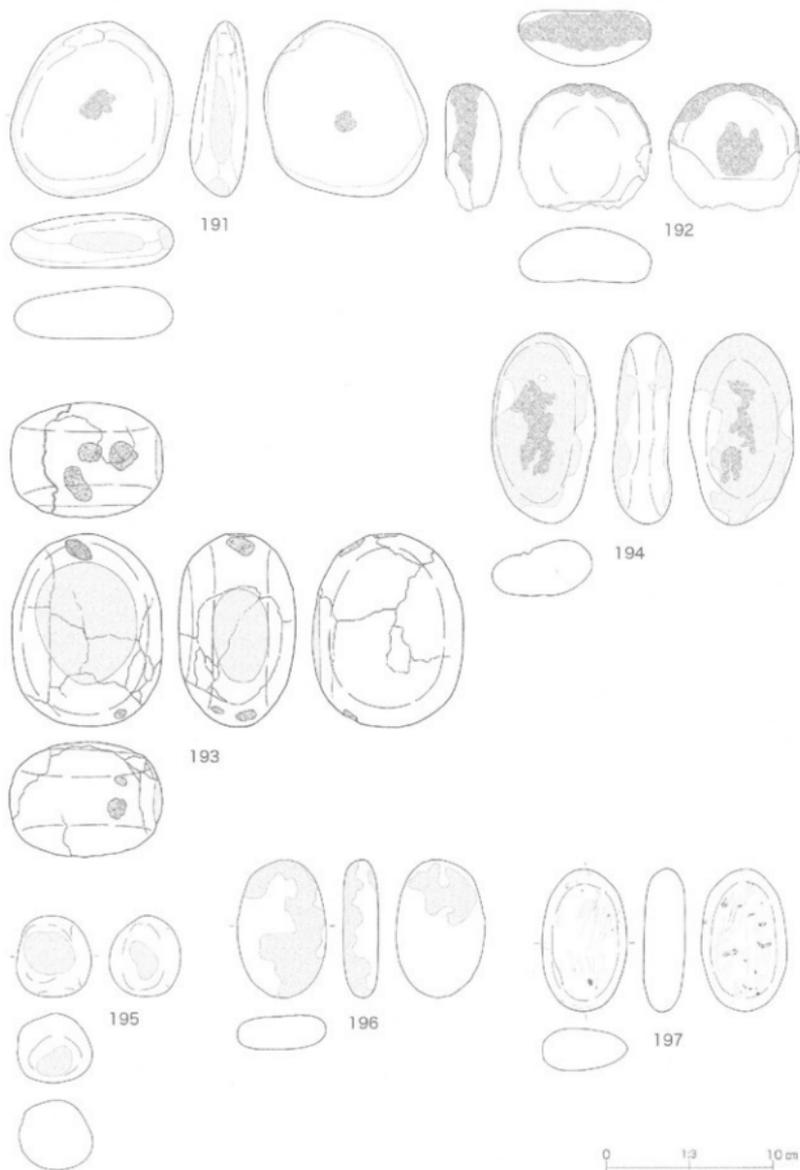
65点出土しており、30点を掲載した。また他に剥片約30点が出土している(SX04出土剥片を除く)。いずれも縄文時代のもと思われる。第77図(171~181)は剥片石器である。石鏃:171・172。小形の右著鏃である。石錐:173で、石鏃の可能性もある。尖頭器:174。尖端がやや鈍いが、形状から尖頭器とした。石匙:175~178。いずれも縦形である。石筥:179。削器:180・181。第78~80図(182~200)は礫石器である。磨製石斧:182~188。183は裏面全体、184~186は刃部、188は基部を欠失している。187は敲打痕が残り、研磨も不充分なもので、製作工程での未完成品と見られる。敲磨器類:189~198。189はいわゆる半円状扁平打製石器である。扁平礫の片側縁に、



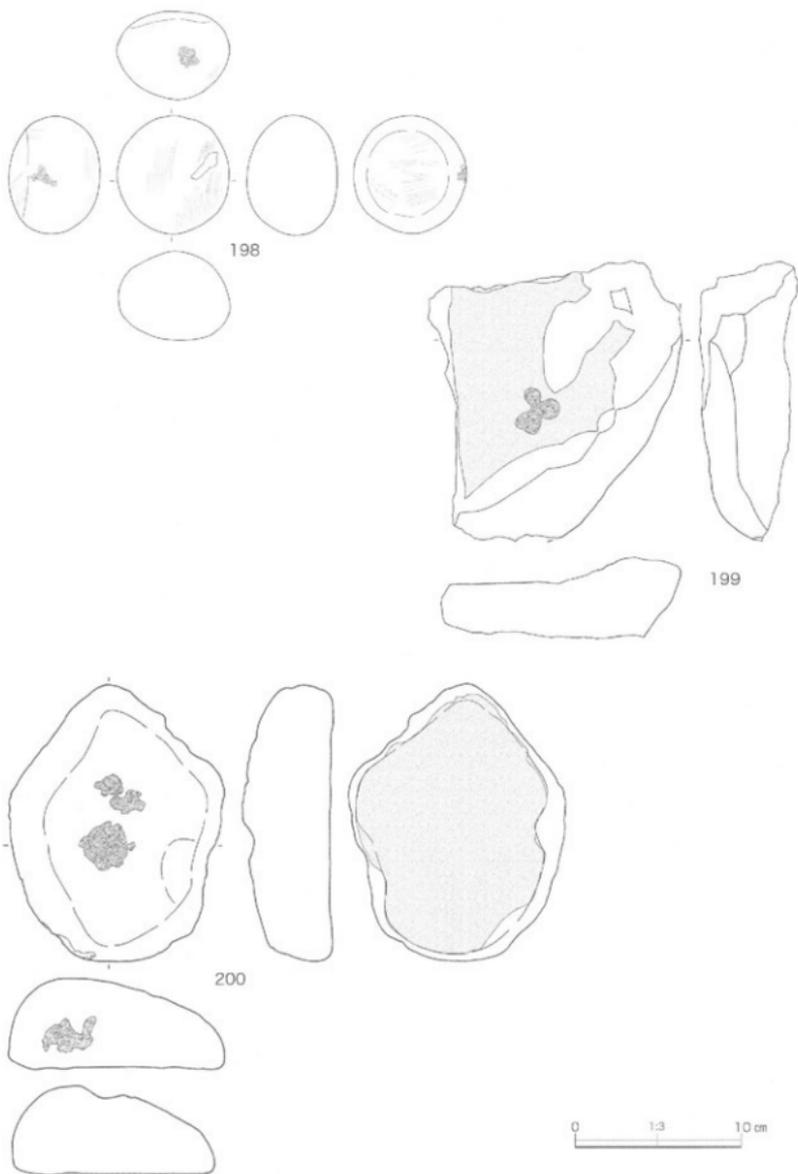
第77図 出土遺物(9)石器



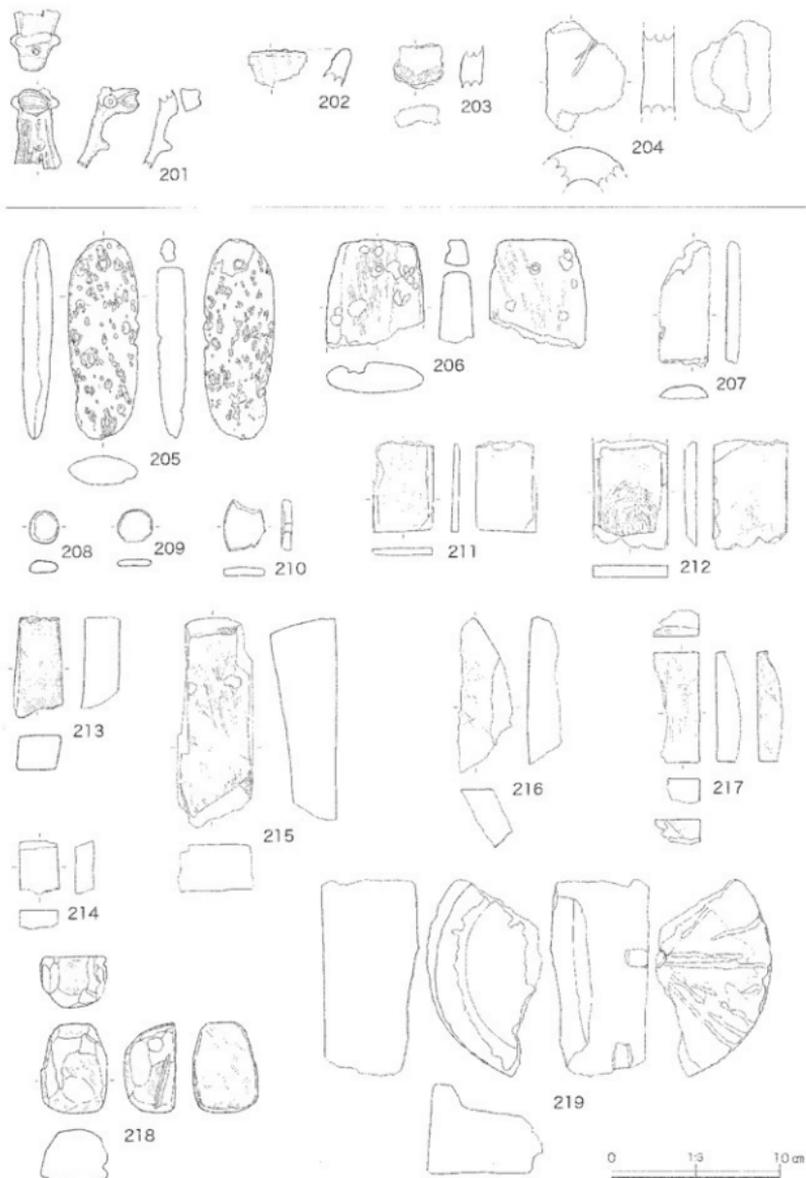
第78図 出土遺物 (10) 石器



第79図 出土遺物 (11) 石器



第80図 出土遺物 (12) 石器



第81図 出土遺物 (13) 土製品・石製品

剥離による幅広い機能面（磨り面）を作り出している。当該器種は円筒土器文化圏に特有なものとされている。本遺跡でも円筒下層a式土器が出土していることから、それらに伴う石器であろう。190は三角錐状の礫の偏縁を使用した磨石であり、いわゆる特殊磨石と呼称されるものである。191～198は円礫や楕円礫を使用したもので、磨り・敲き・凹み等の使用痕跡が見受けられる。石皿・台石：199は石皿、200は台石と便宜的に分けたが、形態的にはあまり違いがない。ともに磨りおよび敲き痕跡がある。

4 土製品

4点出土した（第81図201～204）。201はS I 11堅穴住居跡の床面出土である。下半部が欠失しており全体形が不明であるが、目・口・耳と見える部分（＝頭部？）があり、何らかの動物を象形した動物形土製品と解される。頭頂部にも欠損した跡があり、角があったとも思える。鹿を表現したものか。202は表面に金属質（銅？）の附着が見られる土製品破片である。胎土は陶質である。小破片で器種は明らかではないが、増埒の可能性が高いものと捉えた。203・204は羽口の破片である。201は縄文時代、202～204は古代以降に属するものである。

5 石製品

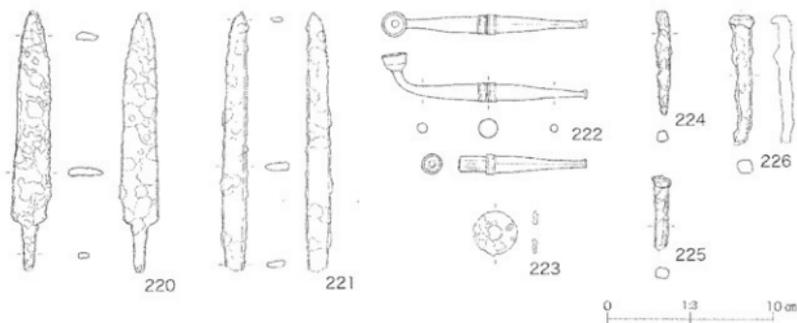
15点出土した（第81図205～219）。205・206は軽石製装身具である。205はほぼ完形、206は下側が欠損している。2点ともに、研磨により整形され、長軸片側に貫通孔1個が穿たれている。正面視は、205が長楕円形、206はやや角張っており、形状は異なる。207は石剣か。折損により上下、節理によって裏面全体が欠失している。残存部分は丁寧に研磨されている。器種は明らかではないが、石質を加味すると石剣類と思われる。208・209は小形扁平な黒色の石製品で、碁石と思われる。碁石状の製品は本遺跡周辺では浄法寺城跡で出土例があり（中村2003）、また土製品ではあるが館Ⅱ遺跡でも出土している。210は中央に貫通孔を有する扁平な円形石製品である。211・212は板状石製品である。片面両側縁が段状となり、その間に調整によるものか無数の擦痕が見られる。213～218は砥石である。213～216は1面のみ、217は2面、218は全面に擦痕がある。219は石臼の上臼部である。欠損しており、全体の1/4程度しか残っていないが、中心付近に軸受孔、側面に挽木孔が確認できる。使用に伴う摩滅により、臼面の溝は不明瞭となっているが、一部痕跡が残る部分で見ると3本単位の溝が刻まれていたようである。205～207は縄文時代、208～219は中世近世のものと考えられる。

参考文献

中村 裕 2003 「浄法寺城跡」『中世雑部世界と南部氏』七戸町教育委員会編、高志書院

6 金属製品

刀子、煙管、釘、鎌、和鋏など約50点出土しているが、大部分が表土層からの出土で、時期は明確ではないが中世以降、近現代までのものである。うち7点を掲載した（第82図）。220・221は刀子である。220は完形に近く、刀身に厚みがあるナイフ形を呈しており、刃渡り13cm、莖部長2.5cm程である。221は莖側が欠損しており、全長不明である。刀身は細身の平造りである。222は煙管で、ラウ



第82図 出土遺物(14) 金属製品

を切断して雁首と吸口を溶着した「延べ煙管」である。全体の形状や補強帯の存在から見て、古泉弘氏の編年(古泉1987)における第4期=18世紀前半代に比定される。223は器種不明の鉄製品で、円環状を呈する。鉦銭に類似するが、明らかにそれとは印象が異なっている。224~226は釘である。224は角釘、225・226は折頭釘か。

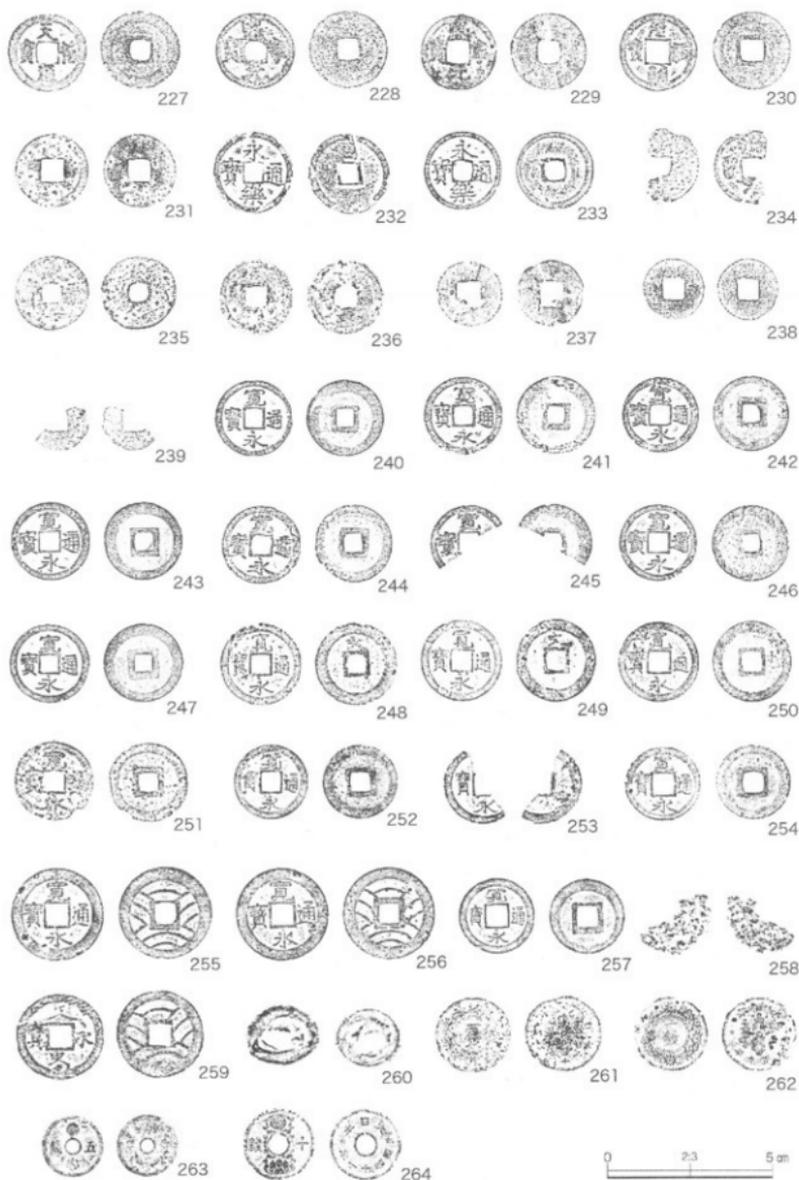
参考文献

- 古泉 弘 1987 『江戸の考古学I 考古学ライブラリー48、ニューサイエンス社』
 榎方武城 2004 『日本の甲冑・武具』 東京美術

7 銭 貨

38点出土した(第83図)。中世に属すると思われるもの13点(227~239)、近世に属するもの21点(240~260)、近代4点(261~264)である。中世の銭貨は主としてS C01平場の柱穴堆積土から出土している一方、近世の銭貨は下段平場から出土している。

227~234は中国の渡来銭、もしくはその鋳写銭である。227は天禧通寶(初鋳1017年)、228・229は熙寧元寶(初鋳1068年)、230は元祐通寶(初鋳1086年)で、いずれも北宋代の中国銭である。231は銘不明瞭ではあるが、字体から見て北宋銭「聖宋元寶」(初鋳1101年)の鋳写と思われる。232・233は本銭で明代の「永樂通寶」(初鋳1408年)である。234は小形・軽量、約半分が欠失しているが「永」の銘が見えることから永樂通寶の鋳写銭と思われる。235・236は無文銭、237~239は輪銭である。本銭は232・233、それ以外はいわゆる鉦銭である。236はS X03堆積上、239はS C01の擾乱層から出土し、その他はS C01の柱穴堆積土から出土している。以上は中世~近世初頭に属するものと推測される。240~257は寛永通寶である。240~247は銅一文銭「古寛永」(寛永通寶1期; 初鋳1636年)である。242~246の5点はS C02pit44の柱痕部堆積土から一括出土している。地鎮的な儀礼によるものか。249~254は銅一文銭「新寛永」である。うち、248・249は背に文銘を有する2期「文銭」(初鋳1697年)、その他は3期(初鋳1767年)に属するものである。255・256は真鍮四文銭、257は鉄一文銭である。前者は11波の背紋から18世紀後半、後者は18世中頃に属するものである。258は鉄銭であるが錆化著しく、銘は読み取れない。寛永通寶鉄一文銭か。259は文久永



第83圖 出土遺物 (15) 錢貨

寶四文銭（初鑄1863年）である。260はいわゆる雁首銭である。榊管の雁首を押し潰したもので、本来的な銭貨ではなく用途不明とされている。以下は近代に属するものである。261・262は一銭硬貨である。261は「大正11年」、262は「大正9年」の銘がそれぞれ記されている。263は五銭硬貨、264は十銭硬貨である。前者は銘不明瞭であるが、後者には「昭和11年」と記されている。

参考文献

- 永井久美男 2002 『新編 中世出土銭の分類図版』高志書院
 兵衛理蔵銭調査会 1998 『近世の出土銭Ⅱ—分類図版編—』

8 接合剥片

SX04埋納遺構から石器素材剥片54点が出土した。これらの剥片の石質はすべて頁岩で、剥離面の色調や残存する自然面の様相が似ていることから同一母岩から剥離されたものと思われた。そこでこれら剥片について接合を試みたところ、接合ブロック8点が得られた（第84～86図）。なお、接合資料7の2点は剥離後の折損によるものである。接合した剥片数は、3点接合したものの2（接合資料5・8）、その他は2点接合であり、当初の予想より接合状況は良好ではない。接合した剥片のみ同化し、その他の剥片については同化しなかった。

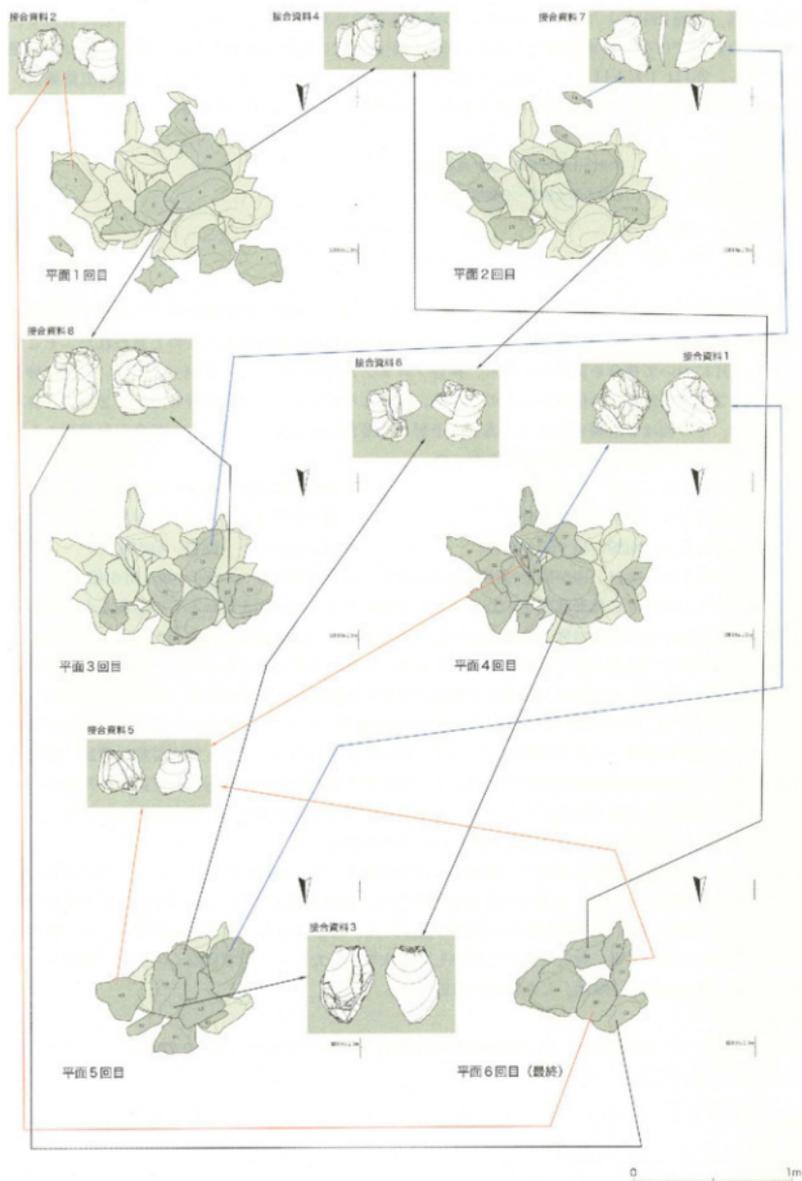
- | | |
|------------------------------|-----------------------|
| <接合資料1> No28・42が接合。 | <接合資料2> No7・49が接合。 |
| <接合資料3> No26・39が接合。 | <接合資料4> No10・54が接合。 |
| <接合資料5> No29・40・50が接合。 | <接合資料6> No11・41が接合。 |
| <接合資料7> No14・19が接合（折損によるもの）。 | <接合資料8> No4・24・51が接合。 |

埋納されていた剥片には形状調整のための細かな連続する剥離が加えられるものもあるが、押圧剥離等の調整は見られず刃部は作り出されていない。一部剥片には擦痕らしきものが観察されるが、報告者の観察の限りでは使用痕とは判断できず不確定である。剥離の状況を見ると、接合資料1を除いて打面転換しているものはない（折損による接合資料7は除外）。ほぼ同じ面・方向から加撃している。接合資料1は、No.28を剥離した後、約45°打面を転換してNo.46を剥ぎ取っている。接合資料ではある程度剥片の形状・大きさが安定している。県内の接合資料としては、半石町桜松遺跡、盛岡市湯沢遺跡、北上市石曾根遺跡の例が著名である。桜松例と湯沢例では打面転換せず同一の打面から安定した剥片剥ぎ取りが行われている。一方、石曾根例は頻繁な打面調整・転換が行われており、母岩の風化の度合いに起因するものと推測されている（酒井1992）。

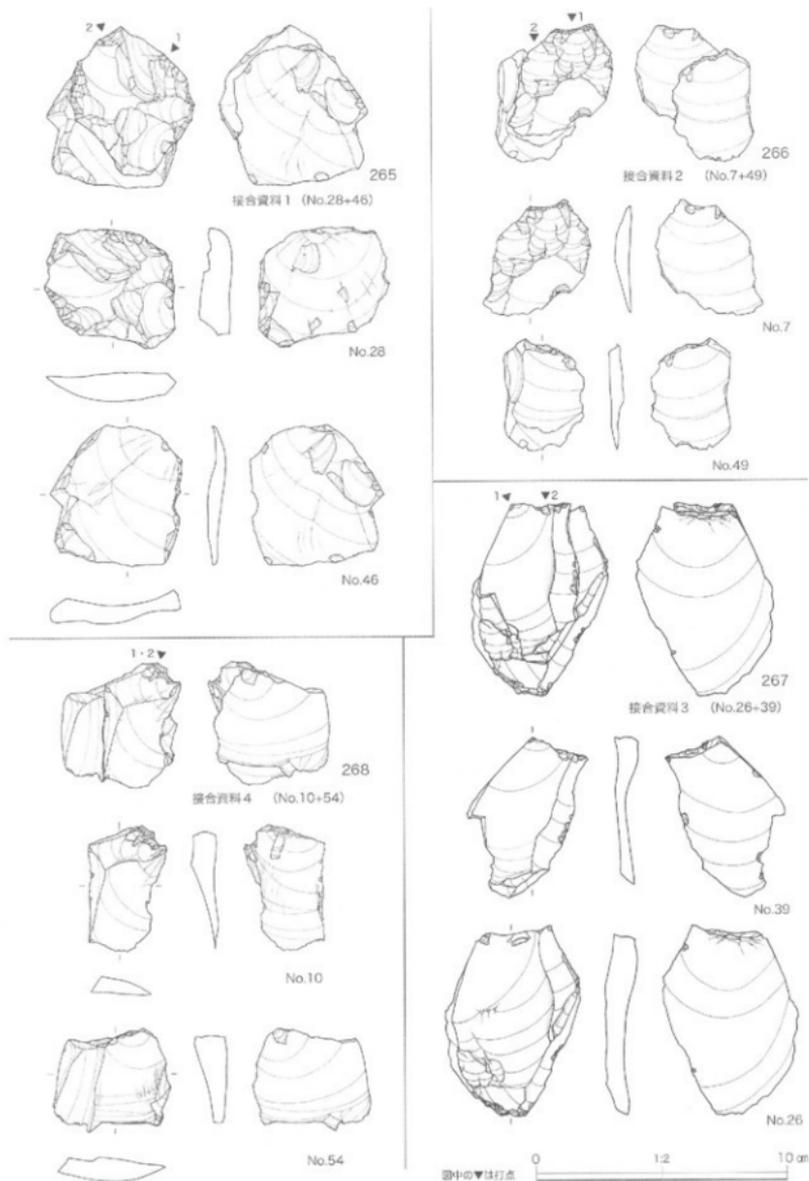
接合した剥片の位置関係を見ると、隣接する剥片が接合している訳ではなく、バラバラに置かれた剥片が接合したものである。極端な例は接合資料2で、比較的縁辺上位にあったNo.7と中央部最下位のNo.49が接合した。他の接合資料も程度の差はあれ、同様である。接合割合が低く、かつ接合剥片の位置関係に鑑みても、付近で原石を粗割して順次埋納したという訳ではなく、別所で粗割り・選別した後、持ち込んで「埋納」した状況が想定される。

参考文献

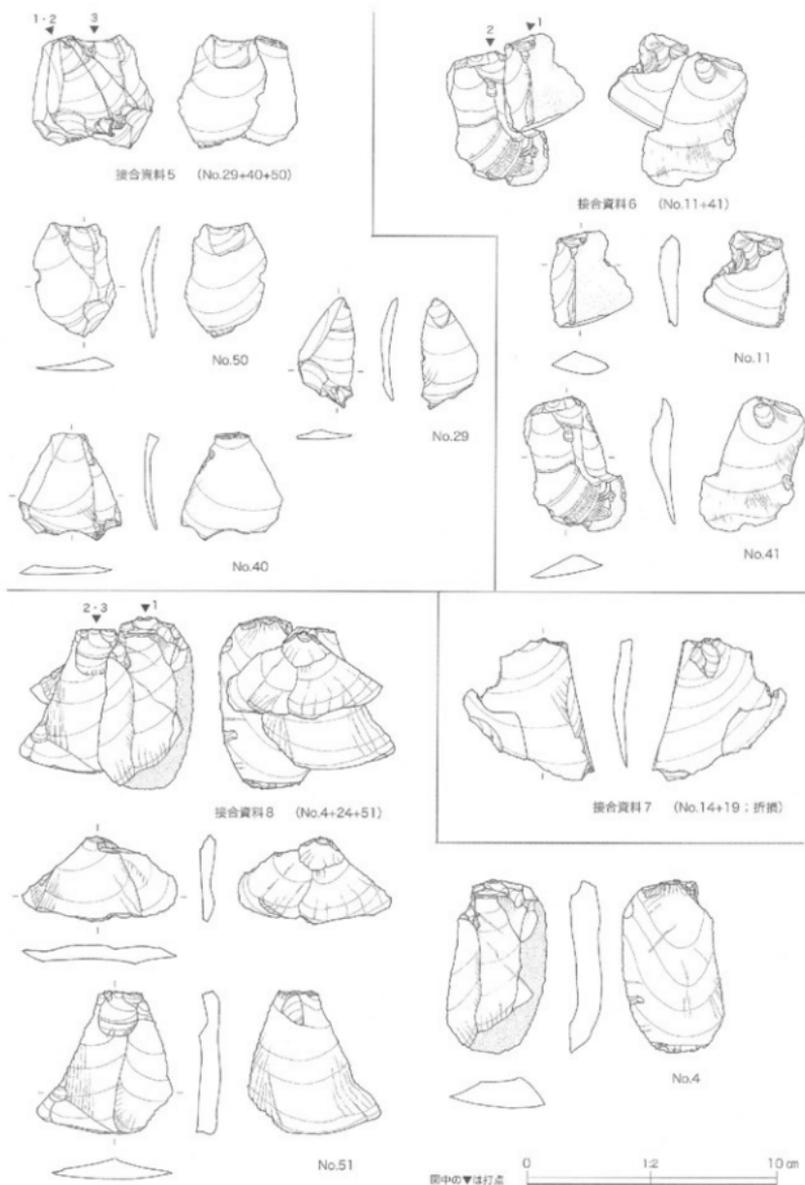
- 酒井宗孝 1992 「3. 接合剥片資料」『石曾根遺跡発掘調査報告書』岩文振型文調帳 第165集、岩手県歴史文



第84図 SX04 剥片接合関係



第85図 出土遺物 (16) 接合剥片



第86図 出土遺物 (17) 接合剥片

第1表 遺物観察表(1) 縄文土器

No.	出土地点	層位	器種	文様・特徴・施文・原番号	時期形式
1	S 110	埴輪土	埴	磨り削し縄文。内面は絶えずナデ。0段多縄 L.R.	前期
2	S 110	埴輪土	埴鉢	短気筒状縄文。内面断段は溝で内。0段多縄 L.R. + R.L.。編織含む。	前期/早期6器?
3	S 110	埴輪土	埴	丸。0段多縄 L.R.	前期
4	S 111/土器No1	内面	埴鉢	本底気筒状縄文。L.R. + R.L.	後期後葉+中期内式
5	S 111/土器No2	内面	埴鉢	本底気筒状縄文。施文単位間。磨り削し一定。口内は内面凸。L.R. + R.L.	後期後葉+中期内式
6	S 111/土器No3	内面	埴鉢	口内は内面凸。内面が厚。磨り削し縄文。帯内に縦長気筒の気筒縄文。やや断段。0段多縄 L.R. + R.L.	後期後葉+中期内式
7	S 111/土器No5	内面	埴鉢	本底気筒状縄文。内面は磨り削し。L.R. + R.L.	後期後葉+中期内式
8	S 111/土器No4	内面	埴	小形。丁寧な作り。多段断段。二又の磨り4単位×2段。	後期後葉+中期内式
9	S 111/土器No7	内面	埴形	透かしある形状次第。二又磨り削。R.L.。0段多縄 L.R.。 *透かしした破片の広さは全く異なる(黄褐色と黒褐色)	後期後葉+中期内式
10	S 111/土器No7 奥東部。北東部	内面 埴輪土	埴口	埴口部下に磨り削。L.R.	後期後葉+中期内式
11	S 111/土器No9	内面直上	埴	外面はガキ、無文。全体に黒色の付着物。	後期後葉+中期内式
12	S 111/土器No8	内面直上	埴鉢	口内は内面凸。L.R.	後期
13	S C02/A 3 B・ S 111	埴輪土	埴鉢	外面ナデ。厚手硬質が強い。内面に赤色付着物(肥料?)ごく微量残る。	後期後葉+中期内式
14	S 111	埴輪土	名呼器	流石文。突起。透かし孔11射。	後期後葉+中期内式
15	S 111/北東	埴輪土	作口?	二又磨り削。磨り削し縄文(磨り削状)。	後期後葉+中期内式?
16	S 111/西	埴輪土	作付鉢	0段多縄 L.R.。内面ナデ。	後期後葉
17	S 111/北西	埴輪土	埴鉢	埴口に突段+丸形。磨り削し断段文(クワンク)形)に本底気筒状縄文を充満。0段多縄 L.R. + R.L.	後期/中期内式
18	S 111/南東。北西	埴輪土	埴鉢	本底気筒の縦断。大きな断面。	後期/中期内式
19	S 111/西	埴輪土	流鉢	口唇に2列の突起。雲形文。L.R.	後期中葉+大淵C1式
20	S 111/北東	埴輪土	埴鉢	磨り削し突段+丸形によるナデ。	後期
21	S 111/北西	埴輪土	流鉢	口縁厚。突った磨り削。雲形文。0段多縄 L.R.	後期/中期内式?
22	S 111/北西	埴輪土	作口	0段多縄 L.R.。0段多縄 L.R.。 *0段多縄 L.R.。0段多縄 L.R.。 *0段多縄 L.R.。0段多縄 L.R.。	後期
23	S 111/北西	埴輪土	流鉢	顔面目の強い流石文。内面に付着。	後期前葉?
24	S 111/南東。北西	埴輪土	埴鉢	無文。表面にハジケ(縦断による?)。	後期
25	S 111/北東部	埴輪土	流鉢	本底気筒状縄文。一經ナデ。L.R. + R.L.	後期
26	S 111/北西 S C03/p129	埴輪土 埴輪土	埴鉢	磨り削し断段文。L.R.。0段多縄 L.R.	後期
27	S 111/北西 S C02/A 2 j	埴輪土 埴輪土	流鉢	本底気筒状縄文。1磨り削。R.L.。0段多縄 L.R.。本底気筒ナデ。縦断多量。	前期/中期6器
28	S 111/北西 S C02/A 2 j	埴輪土 埴輪土	埴鉢	磨り削し断段文。本底気筒状縄文+磨り削し。0段多縄 L.R.	後期/中期内式?
29	S 104/南東部	埴輪土	埴鉢	口唇に磨り削し引出し多縄2条。車輪する山形流鉢。	早期/物見形式
30	S 106/南東 S C01/p170	埴輪土 埴輪土	流鉢	口唇に小突起2列。雲形文。0段多縄 L.R.	後期中葉
31	S 106/北東	埴輪土	作付鉢	流石文の流石文。無断段。	後期前葉?
32	S D01/西	埴輪土	埴鉢	流石文。流石部に磨り削し突起。流石文。0段多縄 L.R.	後期前葉/流石式
33	S D01	埴輪土	埴鉢	流石文。磨り削し突起に3段の突起。流石文。L.R.	後期前葉/流石式
34	S D01	埴輪土	埴鉢	L.R.。磨り削し。	後期
35	S D01 西端部	埴輪土	埴鉢	0段多縄 L.R.。内面付着。	後期
36	S D01	埴輪土	埴鉢	平口。二磨り削。斜行縄文。0段多縄 L.R.	後期
37	S D05	埴輪土	埴鉢	無文+内面。L.R.	後期
38	S X01	埴輪土	埴	断段2条を重畳して施文。L.R. + R.L.	後期?
39	S X01	埴輪土	埴鉢	本底気筒区間に磨り削しによる断段文を充満。磨り削し。0段多縄 L.R. + R.L.	後期/中期内式?
41	S X01	埴輪土	埴鉢	本底気筒区間に磨り削しによる断段文を充満。磨り削し。0段多縄 L.R. + R.L.	後期/中期内式?
42	S X02	埴輪土	埴鉢	断段文。車輪断段1期 L.R.	後期?
43	S X01	埴輪土	埴鉢	下半に断段文+上半に斜行する断段文。車輪断段1期 L.R. + R.L.	後期?
44	S X02	埴輪土	埴口?	磨り削しある形状付。流石文。	後期?
45	S X02	埴輪土	埴鉢	磨り削し突起に1磨り削。斜行縄文。R.L.。縦断多量。	前期/中期6器
46	S X02	埴輪土	埴鉢	磨り削し断段文。本底気筒状縄文。0段多縄 L.R. + R.L.	後期/中期内式?
47	S X02	埴輪土	埴鉢	口縁厚。突った磨り削(二又)。雲形文。0段多縄 L.R.	後期/中期内式?
48	S X02	埴輪土	埴鉢	口縁厚。突った磨り削(二又)。雲形文。0段多縄 L.R.	後期/中期内式?
49	S C03/SK131 S X02	埴輪土 埴輪土	埴鉢	無断段。0段多量。	後期
50	S X02	埴輪土	埴鉢	断段文。0段多縄 L.R. + R.L.	後期/中期内式?
51	S C03/SK127	埴輪土	埴鉢	断段+磨り削し突起し流石。縦断含む。	前期/早期6器?
52	S C03/SK129	埴輪土	埴鉢	断段の断段本底気筒状縄文。内面ナデ付着。L.R. + R.L.。縦断含む。	前期/大木2式
53	S C03/SK141	埴輪土	埴鉢	断段気筒の流石状縄文。施文+3段の山形流鉢+断段面に磨り削し。R.L.	前期/中期内式?
54	S C03/SK176	埴輪土	埴	口唇に磨り削し突起2条。車輪断段の断段文。磨り削し。0段多縄 L.R.	後期/大淵C1式?
55	S C03/SK104	埴輪土	埴鉢	磨り削し突起。竹筒器具による内面断段。断段+断段内面。	前期/大木3式?
56	S C03/SK115	埴輪土	埴鉢	ごく細い山形流鉢。	早期/中期内式
57	S C03/SK149	埴輪土	埴鉢	断段断段の区間。0段多縄 L.R.	後期/中期内式?
58	S C03/SK128	埴輪土	埴鉢	断段断段区間。L.R.。0段多縄 L.R.。縦断多量を含む。	後期/早期6器?
59	S C03/SK142	埴輪土	埴口?	断段文。磨り削。L.R.。0段多縄 L.R.	後期/中期内式?
60	S C03/SK116	埴輪土	埴鉢	穴に1。突段部を全断面(孔状?)。全面に施文。L.R.。縦断含む。	前期/早期6器
61	S C03/SK146	埴輪土	埴鉢	R.L.	後期
62	A A 1	土器上層	埴鉢	小形。内面磨り削。0段多縄 L.R.。縦断多量を含む。	前期/中期下層式
63	A A 1 b	土器中層	埴鉢	本底気筒。L.R. + R.L.。縦断含む。	前期/中期6器
64	A A 1 b	土器下層	埴鉢	断段文。車輪断段1期 L.R.。縦断多量を含む。	前期/中期下層式

No.	山土地点	層位	器種	文様・特徴・施文原形等	時期型式
65	ⅡA 1 h	Ⅳ層	漆鉢	地文・押の襷文。I.R.、I.R.結節。	後期?
66	ⅡA 1 h	Ⅳ層	漆鉢	染土跡。R.L.、縦線含む。	前期/早稲田6型
67	S C03/ⅡA 3 g	Ⅱ層	甕	0段多様L.R.	後期/早稲田6型
68	S C02/ⅡA 3 h・ⅡA 1 h	Ⅱ層上段	漆鉢	流布の表裏に地文。今やありなし。R.L.、縦線多量を含む。	前期/内野下型 a 式
69	ⅡA 1 h	Ⅱ層上段	漆鉢	流布の表裏に地文。ややありなし。R.L.、縦線多量を含む。	前期/内野下型 a 式
70	S C01/東夷地区 S C03-控丸	控丸型	漆鉢	類似ナデ→細い沈線文。	後期/十層内D式?
71	S C01-h	表土→Ⅱ層上	漆鉢	I.R.	後期
72	S C02-前期	漆樽胴	漆鉢	ごく細い沈線文。沈線面に1段横線付着。	前期
73	S C02/ⅡA 3 h・ⅡA 1 h	Ⅱ層上段	漆鉢	人冠帯状文。帯内に異種帯体による羽状間文。0段多様L.R.-0段多様L.R.	後期
74	S C02/ⅡA 3 h・ⅡA 1 h	Ⅱ層上段	漆鉢	木葉状の罫り帯付着。0段多様L.R.	後期/早稲田6型
75	S C02	埴土(表土)	漆鉢	円筒に二文の軋付突起を取付く。口縁に沿って段位の赤褐色羽状間文。R.L.、I.R.	後期/十層内V式?
76	S C02-中央付着	埴樽胴	漆鉢	地味羽状間文。R.L.+0段多様L.R.、縦線多量を含む。	前期/早稲田6型?
77	S C02-中央付着	埴樽胴	漆鉢	前車羽状間文。内面付着。0段多様L.R.+I.R.、縦線多量を含む。	前期/大木2式?
78	S C02-中央付着	埴樽胴	漆鉢	羽行間文。帯の他流布羽状間文。L.R.、R.L.+I.R.、縦線多量を含む。	前期/早稲田6型?
79	S C02-中央付着	埴樽胴	漆鉢	羽行間文。0段多様L.R.、0段多様L.R.、縦線多量を含む。	前期/大木2式?
80	S C02-中央付着	埴樽胴	漆鉢	地味羽状間文。0段多様L.R.+I.R.、縦線多量を含む。	前期/大木2式?
81	S C02-中央付着	埴樽胴	漆鉢	地味羽状間文。R.L.+I.R.	前期
82	S C03-控丸	控丸型	漆鉢	ごく細い沈線文。	後期/早稲田6型
83	S C03-控丸	表土→Ⅱ層上	漆鉢	L.R.	後期
84	S C03	表土→Ⅱ層上	漆鉢	ごく細い沈線文。0段多様L.R.	後期
85	S C02-中央付着	埴樽胴	漆鉢	罫付の帯付着付着。0段多様L.R.	後期/早稲田6型?
86	S C02-中央付着	埴樽胴	漆鉢	罫付の帯付着付着×3条。0段多様L.R.	前期/早稲田6型?
87	S C02-中央付着	埴樽胴	漆鉢	赤系文。多輪帯付着1部R.	後期
88	ⅡA 1 f	Ⅱ層上段	漆鉢	0段多様L.R.	後期
89	ⅡA 1 h	Ⅱ層上段	漆鉢	口縁に赤系文4条。単輪帯付着1部。R.L.	前期/早稲田6型
90	ⅡA 1 h	Ⅱ層上段	漆鉢	不整然赤文。	前期/大木2式
91	ⅡA 1 i	Ⅳ層	漆鉢	0段多様L.R.、縦線多量を含む。	前期/早稲田6型
92	ⅡA 1 h	Ⅳ層	漆鉢	単位法前回転の「小要路赤文」。縦線多量を含む。	前期/早稲田6型
93	ⅡA 1 h	Ⅳ層	漆鉢	単位法前赤文。単輪帯付着R.、縦線含む。	前期/早稲田6型
94	ⅡA 1 h	Ⅱ層上段	漆鉢	罫行間文。帯付着。R.L.、縦線多量を含む。	前期/早稲田6型
95	ⅡB 1 a	Ⅱ層上段	漆鉢	罫り帯に赤系文。帯内に羽状間文充填(用れている)。I.R.、R.L.	後期/十層内D式?
96	ⅡB 1 a	Ⅱ層上段	漆鉢	段位の赤系文。区画内に合わせて、異種帯体非帯体家羽状間文を光曜→罫り。L.R.、R.L.	後期/十層内D式?
97	ⅡA 2 i	Ⅳ層	漆鉢	厚減きしい。縦糸赤系文→口縁に赤系赤系文。単輪帯付着R.+単輪帯付着L.	前期/早稲田6型
98	S C03/ⅡA 2 j	Ⅱ層上段	漆鉢	不整然赤文。縦線含む。	前期/大木2式
99	S C03/ⅡA 2 j	Ⅱ層上段	漆鉢	不整然赤文。縦線含む。	前期/大木2式
100	ⅡA 2 j	Ⅳ層	漆鉢	L.R.、縦線多量を含む。	前期/早稲田6型
101	ⅡA 2 j	Ⅳ層	漆鉢	L.R.、縦線多量を含む。	前期/早稲田6型
102	S C03/ⅡA 2 j	Ⅱ層上段	漆鉢	L.R.、縦線多量を含む。	前期/早稲田6型
103	S C03/ⅡA 2 j	埴樽胴	漆鉢	L.R.	前期/早稲田6型
104	S C03/ⅡA 2 j	埴樽胴	漆鉢	L.R.	前期/早稲田6型
105	S C03/ⅡA 2 j	Ⅳ層	漆鉢	帯付着L具の判文。内面に赤系多量に付着。罫+段半罫りL.R.、半輪結節。縦線含む。	前期/早稲田6型
106	S C02/ⅡA 3 h	Ⅳ層	漆鉢	縦糸に受帯帯体の沈線文。異種帯付着。	空前/早稲田6型
107	S C02/ⅡA 3 h	Ⅳ層	漆鉢	羽行間文(帯結節?)。内面に赤系付着。染土跡。R.L.、0段多様L.R.、縦線多量を含む。	前期/早稲田6型
108	S 111西夷地区	Ⅱ層	漆鉢	赤系文。単輪帯付着1部L.	後期?
109	S 111西夷地区	Ⅱ層	漆鉢	1部に縦線赤系文→上段に罫行間文。単輪帯付着L.+R.L.	後期?
110	S C02/北越	埴樽胴	漆鉢	罫期未定ルーフ文? 0段多様L.、縦線多量を含む。	前期/大木1式
111	S C02/北越	埴樽胴	漆鉢	罫位の結束羽状間文。L.R.+R.L.	前期/早稲田6型?
112	S C02/北越	埴樽胴	漆鉢	段位結節。寛状L具による半円結節文沈線文。縦線含む。	前期?
113	S C02/南越	埴樽胴	漆鉢	1段結節。尖った罫り帯(二文)。帯状文。0段多様L.R.	後期/十層内V式?
114	S C03	埴樽胴	漆鉢	罫期未定ルーフ文。0段多様L.L.、縦線多量を含む。	前期/大木1式
115	S 08岡岡	Ⅱ層	漆鉢	1段結節。L具に沿って赤系羽状間文。罫。罫り罫り。0段多様L.L.	後期/早稲田6型
116	S C03	控丸型	漆鉢	L具の判文。罫上付着。外輪帯付着。	前期/大木2式
117	S C03	控丸型	漆鉢	細い沈線文。罫期未定ルーフ文。L具と半輪結節。縦線含む。	前期/大木2式?
118	S C03	表土→Ⅱ層上	漆鉢	不整然赤文。罫り帯付着1部L.	前期/大木2式?
119	S C03	控丸型	漆鉢	罫行間文+羽状間文の判文。罫。罫り罫り。0段多様L.L.	前期/早稲田6型/大木1式
120	控丸	控丸型	漆鉢	段列学的沈線面→端文光曜→沈線引き直し。内面には帯付着。L.R.	後期/十層内D式?

第2表 遺物観察表 (2) 土師器・須恵器

No.	出土地点	層位	器種	器面簡略
121	S 1 06/北西角	堆積土	土師器・壺	外面：ナダ。内面：ナダ。
122	S D 01	堆積土	土師器・壺	外面：ナダ。口コナダ。内面：ナダ。縦線刻線。
123	S D 01	堆積土	土師器・壺	外面：ミガヒ。口コナダ。内面：ハケメ。ナダ。
124	S D 01	堆積土	土師器・壺	外面：ナダ。砂底。内面：ハケメ。
125	S D 01	堆積土	土師器・壺	外面：ナダ。木炭灰。内面：ナダ。
126	S D 01/西端	堆積土	土師器・壺	外面：ナダ。木炭灰・硝子。内面：ナダ。ハケメ。
127	S D 03	堆積土	土師器・壺	外面：ナダ。内面：ナダ。
128	S C 01/SKP32	堆積土	土師器・壺	外面：ナダ。ハケメ。内面：ナダ。
129	S C 01/SKP28	堆積土	土師器・壺	外面：ナダ。内面：ナダ。
130	S C 01 - e	堆積土 (表上)	土師器・壺	外面：ハケメ。口コナダ。内面：ナダ。
131	S C 01 - e	堆積土 (表上)	土師器・壺	外面：ナダ。口コナダ。内面：ナダ。
132	S C 01/灰層下-12	灰土? (S D 01堆積土?)	土師器・壺	外面：ナダ。内面：ナダ。
133	S T 05	堆積土	須恵器・壺	外面：口コナダ。内面：口コナダ。
134	S D 01	堆積土上面	須恵器・壺	外面：タタキメ。内面：ナダ。
135	S C 01/SKP14	堆積土	須恵器・壺	外面：タタキメ。内面：ナダ。
136	S C 01 - e	灰土	須恵器・壺	外面：タタキメ。内面：ナダ。

第3表 遺物観察表 (3) 陶磁器

No.	出土地点	層位	器種	箱、絵付	時期
137	S C 01/SKP30	堆積土	磁器・青磁皿	青磁。中国産品。	中世/15世紀末?
138	S C 01/SKP46	堆積土	磁器・青磁皿	青磁。中国産?	不明
139	S C 01/SKP50	堆積土	磁器・青磁皿	青磁。中国産品。	中世/15世紀末
140	S C 01/SKP33	堆積土	磁器・青磁器?	青磁。中国産?	不明
141	S C 02/土師a付古	古寺跡土層	磁器・青磁皿	青磁。肥前産。	近世
142	S C 01 - e	表土層	磁器・青磁皿	青磁。染付。中国産品。	中世/15世紀末
143	S C 03 北側	表土層	磁器・青磁皿?	青磁。中国産品。	中世/15世紀末
144	S C 01/SKP29	堆積土	磁器・白磁皿	高台座・高台に灰粒。産地不明。	近世?
145	S C 02	表土層	磁器・青磁皿灰皿	灰皿。染付。高台内は無釉。蓋部。中国産品?	中世/16世紀後半?
146	S C 01/SKP28	堆積土	磁器・青花皿	灰皿。染付。中国産品。	中世/16世紀後半
147	S F 01	表土層	陶器・灰付鉢	灰付。鉄赤絵。高台付に砂粒付着。肥前産。	
148	S C 02	表土層 (断)	磁器・鉢	灰皿。産地不明。	
149	S C 03	表土層	陶器・皿	浅鉢。見立ミソ染付。高台内は露胎。縦線刻線 (トナリ鉢?)。横溝付。	中世/16世紀後半
150	S C 03	灰土	陶器・皿	灰鉢。見立みの輪びり割れ。高台内は露胎。	中世/16世紀後半
151	S C 03 南	表土層	陶器・壺	外面露胎「瀬戸鉢」。内面無釉。蓋部。表裏空室1間。	近世/17世紀初
152	S 1 01 南東	堆積土	陶器・碗	上層は灰皿。裏面は鉄赤。鉄脚。肥前産。	近世/17末-18世紀後半
153	S C 01 - b/SKP84	堆積土	陶器・鉢?	灰鉢。内面は露胎。	不明
154	S C 01 - e	表土層	陶器・碗	灰白鉢。肥前産?	近世以降
155	S C 02	表土層	陶器・鉢?	灰鉢。産地不明。	不明
156	S C 03 南	土層	陶器・碗	灰鉢。肥前産?	近世以降
157	S F 01	堆積土	陶器・鉢	灰鉢。肥前産。	近世
158	S C 03	灰層下	陶器・皿	見立みの透明釉。白化粧。掻き落とし。灰鉢。1鉢2器呼 (胎土目)。外 面無釉。蓋部。肥前産。	近世
159	S C 01/SKP30	堆積土	陶器・皿	灰鉢丸皿。裏面大層後下層。	中世/16世紀後半
160	S C 02	表土層	陶器・鉢	灰鉢。肥前産。	近世/17世紀
161	S C 02	表土層	陶器・漆鉢	灰鉢。肥前産。	近世/17世紀
162	S C 01 - e	表土層	陶器・漆鉢	灰鉢。産地不明。	不明
163	S C 03 南東部	土層上位	陶器・漆鉢	産地不明。	近世以降
164	灰層下9	表土層	土師器土器・不明	灰 (白?) 器。無胎。透かし孔および貫通孔2。産地不明。	中世以降
165	S C 01/SKP141	堆積土	土師器土器・鉢?	無胎。産地不明。	中世以降
166	S D 01	灰層面	瓦質土器・灰鉢	灰鉢。1脚に雷文帯×2本。胴?付着。産地不明。	中世以降
167	S C 01 - e	灰層土 (表上)	瓦質土器・灰鉢	無胎。胴に同一雷文帯。産地不明。	中世以降
168	S C 01/SKP34	堆積土	磁器・磁器不明	青磁。中国産品? ※写真掲載。	中世/15世紀末?
169	S C 01/SKP34	堆積土	磁器・磁器不明	青磁。産地不明。中国産品? ※写真掲載。	中世/15世紀末?
170	灰層下10	表土層	磁器・青磁皿	青磁。肥前産? ※写真掲載。	近世

第4表 遺物観察表(4) 石器

No.	出土地点	層位	器種	特徴	石質	石片産地	
171	S 08東北	IV層	石錐	小形、有茎、長さ1.8cm、幅1.0cm、厚0.3cm、重量0.31g。	陸奥頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
172	S T11 市西部	沖積層	石錐	有茎、片割痕跡が認められ、長さ3.1cm、幅1.2cm、厚2.0cm、重量1.04g。	陸奥頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
173	S C01/S&KP70	埋藏土	石錐	有茎? 黒色付着物、長さ4.2cm、幅1.3cm、厚0.9cm、重量0.83g。	陸奥頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
174	S C02	埋藏土	石錐	尖頭細く、有茎なし、長さ13.2cm、幅3.1cm、厚5.1cm、重量52.62g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
175	S C02/S&KP17	埋藏土	石錐	有茎、長さ4.8cm、幅2.1cm、厚0.5cm、重量4.80g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
176	S X01	沖積土	石錐	埋藏、刃部欠損、長さ3.6cm、幅2.8cm、厚0.7cm、重量3.47g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
177	S X02	北西部	石錐	埋藏、刃部欠損、長さ5.3cm、幅1.5cm、厚0.5cm、重量6.34g。	陸奥頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
178	S C02	埋藏土	石錐	埋藏、長さ3.7cm、幅2.1cm、厚0.4cm、重量1.73g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
179	S C03	中央東	埋藏土	埋藏、右側部に刃跡し、長さ7.7cm、幅4.6cm、厚2.2cm、重量75.04g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
180	S T12/p02	埋藏土	石錐	埋藏、長さ11.8cm、幅5.3cm、厚0.9cm、重量63.43g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
181	S C02	南端	埋藏土	埋藏、長さ6.8cm、幅3.2cm、厚0.1cm、重量15.31g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
182	B A3b~5	V層	石錐	刃部欠損、長さ9.7cm、幅4.6cm、厚2.5cm、重量202.59g。	頁岩	中生代白垩紀・北上山脈	
183	S X01	埋藏土	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ11.5cm、幅4.3cm、厚2.4cm、重量121.84g。	粘板岩	古・中生代白垩紀・北上山脈	
184	S C03	東部	IV層	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ11.5cm、幅4.3cm、厚2.4cm、重量121.84g。	粘板岩	古・中生代白垩紀・北上山脈
185	B A3b~5	V層	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ11.3cm、幅4.5cm、厚2.5cm、重量182.06g。	頁岩	中生代白垩紀・北上山脈	
186	B 10a	IV層	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ6.9cm、幅5.9cm、厚2.2cm、重量199.26g。	粘板岩	古・中生代白垩紀・北上山脈	
187	S C03	表1~1層上位	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ10.1cm、幅4.9cm、厚2.2cm、重量137.32g。	頁岩	中生代白垩紀・北上山脈	
188	S C02/S&KP153	埋藏土	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ6.9cm、幅5.0cm、厚2.2cm、重量208.45g。	頁岩	中生代白垩紀・北上山脈	
189	S T11	(掘り)	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ18.5cm、幅8.5cm、厚3.2cm、重量391.51g。	頁岩	中生代白垩紀・北上山脈	
190	S C02	北端	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ12.8cm、幅6.8cm、厚3.4cm、重量515.99g。	頁岩	中生代白垩紀・北上山脈	
191	S T11	沖積	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ11.5cm、幅4.3cm、厚2.4cm、重量121.84g。	粘板岩	古・中生代白垩紀・北上山脈	
192	S T11	埋藏土	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ7.8cm、幅6.0cm、厚3.4cm、重量303.66g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
193	S T11	伊弉丹	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ11.3cm、幅6.0cm、厚3.6cm、重量1072.80g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
194	S X01	埋藏土	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ11.7cm、幅6.5cm、厚3.4cm、重量214.74g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
195	S D01	埋藏土	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ5.6cm、幅4.6cm、厚2.4cm、重量143.79g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
196	S C03	埋藏土 (IV層)	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ8.5cm、幅5.5cm、厚2.2cm、重量137.41g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
197	S C02	埋藏	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ8.7cm、幅5.3cm、厚2.2cm、重量187.28g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
198	試掘T10	表1	埋藏土	埋藏、刃部欠損、長さ7.2cm、幅6.7cm、厚3.5cm、重量380.34g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
199	S X02	灰石層成層	石錐	埋藏、一級磨り? 有茎、長さ17.0cm、幅11.4cm、厚3.6cm、重量1,245.30g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
200	S X02	灰石層成層	石錐	埋藏、一級磨り? 有茎、長さ18.0cm、幅12.9cm、厚3.5cm、重量1,419.28g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
201	S X04	埋藏土 No.28	埋片	埋藏資料1。取り上げ4回目。重量34.40g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
202	S X04	埋藏土 No.6	埋片	埋藏資料1。取り上げ5回目。重量32.87g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
203	S X04	埋藏土 No.29	埋片	埋藏資料2。取り上げ6回目。重量6.79g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
204	S X04	埋藏土 No.7	埋片	埋藏資料2。取り上げ7回目。重量10.14g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
205	S X04	埋藏土 No.26	埋片	埋藏資料2。取り上げ4回目。重量47.96g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
206	S X04	埋藏土 No.39	埋片	埋藏資料2。取り上げ5回目。重量17.09g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
207	S X04	埋藏土 No.10	埋片	埋藏資料2。取り上げ7回目。重量13.02g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
208	S X04	埋藏土 No.54	埋片	埋藏資料2。取り上げ6回目。重量21.51g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
209	S X04	埋藏土 No.29	埋片	埋藏資料2。取り上げ7回目。重量4.09g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
210	S X04	埋藏土 No.10	埋片	埋藏資料2。取り上げ7回目。重量6.05g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
211	S X04	埋藏土 No.50	埋片	埋藏資料2。取り上げ6回目。重量6.58g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
212	S X04	埋藏土 No.11	埋片	埋藏資料2。取り上げ7回目。重量9.85g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
213	S X04	埋藏土 No.41	埋片	埋藏資料2。取り上げ7回目。重量13.97g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
214	S X04	埋藏土 No.13	埋片	埋藏資料2。取り上げ7回目。重量15.71g (0.19g欠)	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
215	S X04	埋藏土 No.19	埋片	埋藏資料2。取り上げ3回目。重量13.00g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
216	S X04	埋藏土 No.21	埋片	埋藏資料2。取り上げ3回目。重量2.79g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
217	S X04	埋藏土 No.4	埋片	埋藏資料2。取り上げ7回目。重量38.84g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	
218	S X04	埋藏土 No.31	埋片	埋藏資料2。取り上げ6回目。重量21.57g。	頁岩	新生代新第三紀・奥羽山脈	

第5表 遺物観察表(5) 土製品

No.	出土地点	層位	器種	特徴	時期
201	S T11/遺物No.6	埋藏土	動物形土製品	鹿? を模したもので、腹部に縦の溝が、側面に横の溝が、R.L・L.R. 横、重量16.12g。	縄文後期
202	S C01/S&KP8	埋藏土	土埴	表面に赤褐色の(炭粉色、赤褐色)。胎土は陶質、重量7.9g。	古代以降
203	S D01	埋藏土	皿I	重量10.89g。	古代以降
204	S D03	埋藏土	皿II	重量66.8g。	古代以降

第6表 遺物観察表(6) 石製品

No.	出土地点	単位	器種	特徴	石質	産地	時期
205	S T 11 南西	雑種上	随形製身石	直径11.8cm。全周磨面。重量25.01g。	磁石	新石器第四紀/藤原山	縄文後期
206	S C 03 南西	雑種中(表下)土	球形輪軸身石	直径11.6cm。全周磨面。欠底。重量19.10g。	磁石	新石器第四紀/藤原山	縄文後期
207	S D 04	雑種上(表上)	石錐	錐部短。前後より狭面欠底。重量28.77g。	頁岩	宮一(中)代/北上山	古代以降
208	S C 01 B 15a	B層赤色土	磁石	扁平。小形厚。重量2.99g。	頁岩	六-中生代/北上山	古代以降
209	試掘 T-4	表土層	磁石	扁平。小形厚。一部欠底? 重量3.01g。	頁岩	宮一(中)代/北上山	古代以降
210	S C 03/SKP136	雑種土	板状輪軸身石	円形。欠底。重量2.84g。	磁石	新石器第三紀/藤原山	古代以降
211	S C 01/SKP129	雑種土	板状石製石	四角形に欠あり。両面に磨面。重量17.14g。	板状頁岩	宮一(中)代/北上山	古代以降
212	S T 01台立	表土層	石製杖石製石	四角形に欠あり。両面に磨面。重量13.29g。	磁石	六-中生代/北上山	古代以降
213	S T 10	雑種土	磁石	扁平。重量44.14g。	板状頁岩	新石器第一紀/藤原山	縄文後期?
214	S C 03/SKP9	雑種土	磁石	細板。重量35.65g。	磁石	新石器第一紀/藤原山	古代以降
215	S C 01-b/SKP78	雑種土	磁石	細板。使用面が磨面。全周磨面。重量300.07g。	頁岩	新石器第一紀/藤原山	古代以降
216	S T 11 南西	雑種土	磁石	細板。重量73.52g。	頁岩	新石器第一紀/藤原山	縄文後期?
217	S T 01付足	表土層	磁石	細板。重量34.80g。	頁岩	新石器第一紀/藤原山	古代以降
218	S C 03	赤川(砂子)	磁石	四角に磨面。重量9.90g。	板状頁岩	新石器第四紀/藤原山	古代以降
219	S C 03 北西	雑種土	石臼	磨盤19の寸。欠底。使用面が磨面。洗水孔。軸径1.3cm。高さ10cm。重量2.881kg。	安山岩	新石器第四紀/藤原山	古代以降

第7表 遺物観察表(7) 金属製品

No.	出土地点	単位	器種	特徴	時期
220	試掘 T 7	表土層	刀子	先端部欠底。長さ(15.9)cm。幅2.1cm。厚3.03mm。	不明
221	S T 11(表) 雑種土	雑種土	刀子	前身の刀身。基部(茎)欠陥。長さ(15.9)cm。幅1.7cm。厚3.05mm。	(不明)
222	S C 03/SKP90	雑種土	鎌首	鉄製「逆」型。欠底不全。磨面全周。磨面全周(約3/4)部分に鉄製。長さ12.5cm。幅1.5cm。厚1.17cm。重量13.67g。	金銀(18世紀前半)
223	S C 01-c 雑種土	表土層	円形板状鏡	直径10cmに約1/4の部分を欠底。長さ2.6cm。重量3.67g。	不明
224	S C 01/SKP12	雑種土	釘	鉄製釘部。長さ7.41g。	不明
225	S C 02 東側	表土層	釘	物類の鉄製釘部。長さ2.88g。	不明
226	S C 01/SKP95	雑種土	釘	物類の鉄製釘部。長さ8.49g。	不明
227	S C 01/SKP97	雑種土	小鏡	円鏡。大鏡裏面(中)・北(表)鏡。直径2.62g。	中世一前期
228	S C 01/SKP19	雑種土	小鏡	円鏡。中央欠底(中)・北(表)鏡。直径1.608cm。重量2.285g。	中世一前期
229	S C 01/SKP90	雑種土	小鏡	円鏡。中央欠底(中)・北(表)鏡。直径1.608cm。重量2.22g。	中世一前期
230	S C 01/SKP66	雑種土	小鏡	円鏡。中央欠底(中)・北(表)鏡。直径1.086cm。重量2.284g。	中世一前期
231	S C 01/SKP16	雑種土	小鏡	円鏡。後「C」型。中央欠底(北)表鏡。直径1.91cm。重量1.70g。	中世一前期
232	S C 01/SKP98	雑種土	小鏡	円鏡。中央欠底(中)・北(表)鏡。直径1.408cm。小鏡。重量2.44g。	中世一前期
233	S C 01/SKP5	雑種土	小鏡	円鏡。中央欠底(中)・北(表)鏡。直径1.408cm。小鏡。重量2.81g。	中世一前期
234	S C 01/SKP20	雑種土	小鏡	円鏡。長さ1.7cm。直径1.4cm。重量0.84g。	中世一前期
235	S C 01/SKP27	雑種土	小鏡	円鏡。長さ1.7cm。直径1.4cm。重量0.84g。	中世一前期
236	S T 09	雑種土下位	小鏡	円鏡。中央欠底。重量1.72g。	中世一前期
237	S C 01/SKP3	雑種土	小鏡	円鏡。中央欠底。重量0.99g。	中世一前期
238	S C 01/SKP13	雑種土	小鏡	円鏡。中央欠底。重量0.91g。	中世一前期
239	S C 01	雑種土	小鏡	円鏡。重量0.26g。	中世一前期
240	S D 01	雑種土	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「古電水」。直径1.637cm。重量2.86g。	古鏡(17世紀)
241	番 A 9 1 ~	雑種土層	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「古電水」。直径1.637cm。重量3.15g。	古鏡(17世紀)
242	S C 02/SKP144	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「古電水」。直径1.638cm。5点一組出土。重量2.97g。	古鏡(17世紀)
243	S C 02/SKP144	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「古電水」。直径1.638cm。5点一組出土。重量2.97g。	古鏡(17世紀)
244	S C 02/SKP144	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「古電水」。直径1.638cm。5点一組出土。重量2.58g。	古鏡(17世紀)
245	S C 02/SKP141	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「古電水」。直径1.638cm。5点一組出土。重量1.02g。	古鏡(17世紀)
246	S C 02/SKP144	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「古電水」。直径1.638cm。5点一組出土。重量2.46g。	古鏡(17世紀)
247	S C 01-c 雑種土	雑種土(表土)	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「古電水」。直径1.634cm。重量3.52g。	古鏡(17世紀)
248	S C 01-c/SKP75	雑種土	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水・文鏡」。直径1.697cm。重量3.26g。	古鏡(17世紀)
249	S C 02	雑種土	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水・文鏡」。直径1.697cm。重量2.65g。	古鏡(17世紀)
250	S C 01-b/SKP85	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水」。直径1.767cm。重量1.95g。	古鏡(18世紀)
251	S C 01/SKP74	雑種土	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水」。直径1.767cm。重量3.26g。	古鏡(18世紀)
252	S C 01-b/SKP86	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水」。直径1.767cm。重量2.27g。	古鏡(18世紀)
253	番 A 9 1 ~ 付足	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水」。直径1.767cm。重量1.69g。	古鏡(18世紀)
254	S C 02	雑種土	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水」。直径1.767cm。重量2.43g。	古鏡(18世紀)
255	S C 02	雑種土	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水」。直径1.767cm。重量4.29g。	古鏡(18世紀)
256	9 1 ~ 付足	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水」。直径1.767cm。重量1.43g。	古鏡(18世紀)
257	試掘 T 9 (S C 02)	表土層	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水」。直径1.767cm。重量2.20g。	古鏡(18世紀)
258	S C 03北子部	雑種土(磨面)	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水・文鏡」。直径1.43cm。重量1.43g。	古鏡
259	S C 02	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水・文鏡」。直径1.43cm。重量3.95g。	古鏡(19世紀)
260	S T 03 南東	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水・文鏡」。直径1.43cm。重量2.03g。	古鏡
261	S C 01-c 雑種土	表土層	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水・文鏡」。直径1.43cm。重量2.73g。	古鏡
262	S C 02 南東	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水・文鏡」。直径1.43cm。重量3.49g。	古鏡
263	S C 02	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水・文鏡」。直径1.43cm。重量2.81g。	古鏡
264	S C 02 南東	雑種土層上	小鏡	中央欠底。同一文鏡1組「新電水・文鏡」。直径1.43cm。重量3.67g。	古鏡

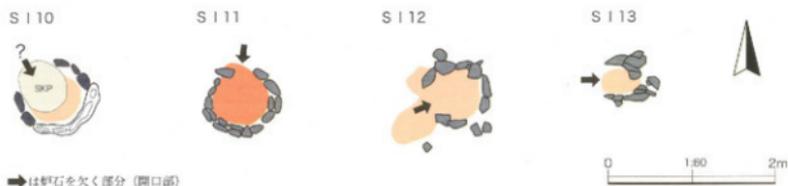
VI 総括と考察

1 縄文時代

(1) 遺構

検出した遺構は竪穴住居跡・竪穴遺構5棟、掘立柱建物跡1棟、土坑7基、配石遺構2基、剥片埋納遺構1基である。このうち竪穴住居跡・竪穴遺構については後期4棟、早期～前期前半1棟である。後期の竪穴住居跡2棟は壁が確認できず、かつうち1棟については炉跡を確認したに過ぎない。そこで全体形状がある程度わかる2棟（S I 10・11）を中心として、後期の竪穴住居跡の各属性について見る。

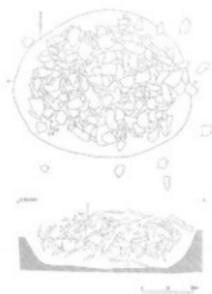
平面形：S I 11は南北に拉げた楕円形状である。S I 10は壁が全周しないが、残存部分の様相から見て、S I 11同様に楕円形基調だったと思われる。柱穴：S I 11で主柱穴4個を確認した。主柱穴4個は炉を囲んで台形状に配置されており、うち一個については建て替えの可能性も考えられる（掘り方の形状、底面の柱アタリの状況から）。その他の3棟では柱穴自体ははっきりしない。炉：検出した4棟ともに石囲炉である（第87図）。S I 11・12は炉石を円形に配している〔S I 11では一部で二重の囲いになっている〕が、ともに一端が開いた馬蹄形である。S I 11では北側が、S I 12では西側が開いており、この開いた部分では炉の外側まで焼土範囲が延びている。炉石を欠くこの部分が炉の焚き口のような使われ方をしたのではないかと推測される。一方、S I 10は炉石の残存状況が良くなかったが、炉石設置痕からみてやはり円形基調の炉石配置である。ただし、炉の北西部分が新期の柱穴により破壊されており、この部分に炉石があったのか確認できなかった。S I 11・12同様に馬蹄形だったものかもしれない。S I 13の炉は残存部で見ると楕円形というよりも、東西に長軸をとる方形ぎみの炉石配置である。ただし、この炉も西側で炉石が途切れて開き、馬蹄形と云えなくもない。以上のとおり、後期の4棟の炉はいずれも馬蹄形の炉石配置だった、もしくはその可能性がある、ということになる。これらの4棟のうちS I 11は床面一括出土土器から見て十腰内Ⅳ式期に位置づけられる。S I 10・12についても出土遺物が少ないが、少なくとも後期、S I 11とそれほど時期差がないものと思われ、調査者は3棟が後期後葉ではないかと推測している。岩手県北部における縄文時代後期後葉の住居跡の炉は、一般的は炉石を設置しない地床炉が多く見られる。岩手県北部における後期後葉/十腰内Ⅳ・Ⅴ式期における石囲炉の類例としては、九戸郡軽米町大日向Ⅱ遺跡で石囲炉をもつ該期竪穴住居跡8棟が検出されている。出入口施設：後期中葉～末葉の竪穴住居跡でよく見られる「出入口状遺構」については、いずれの住居跡でも明らかではなかった。配石遺構：S I 11とS I 12の2棟には配石が伴う。S I 11では斜面下方側の壁に沿って配石がなされてい



第87図 竪穴住居跡 炉跡集成

る(SX01)。一方、壁が不明瞭なS I 12は不確定ではあるが、配石が斜面上方側の壁に沿っていたものと思われる(SX02)。配石の役割については、住居壁に沿うことから、土留めの可能性も考えられるが、確証は得られなかった。また、SX01には一部途切れる箇所があり、上記の「出入口」に関連して考えればこの部分が「出入口」に相当するかもしれない。

また、SX04剥片埋納遺構は楕円形土坑に剥片54点を収めたもので、検出層位から見て早期後葉～前期前葉に属する。阿部勝則氏の論考(阿部2003)によれば、県内における「剥片集中遺構」は105例あり、時期は早期後葉～晩期と時期幅は広いが、中期64例・後期13例と中期～後期が多く、本遺構と同時期の早期～前期は10例と少ない。また土坑への出土例は廃棄されたものが多く、土坑への埋納という形態は零石町桜松遺跡(中川1982)のJ-10ピットがあるのみである。J-10ピットでは0.72×0.61mの楕円形土坑に剥片877点と石器10点が埋納されていた。田中英司氏によれば、全国的に見ても確実な土坑への埋納例は、他に秋田県北の林Ⅱ遺跡例が挙げられるのみである(田中1995)。



第88回 桜松遺跡のデゴ

(2) 遺物

縄文土器、石器、土製品があるが、総量少なく、主体は縄文土器である。

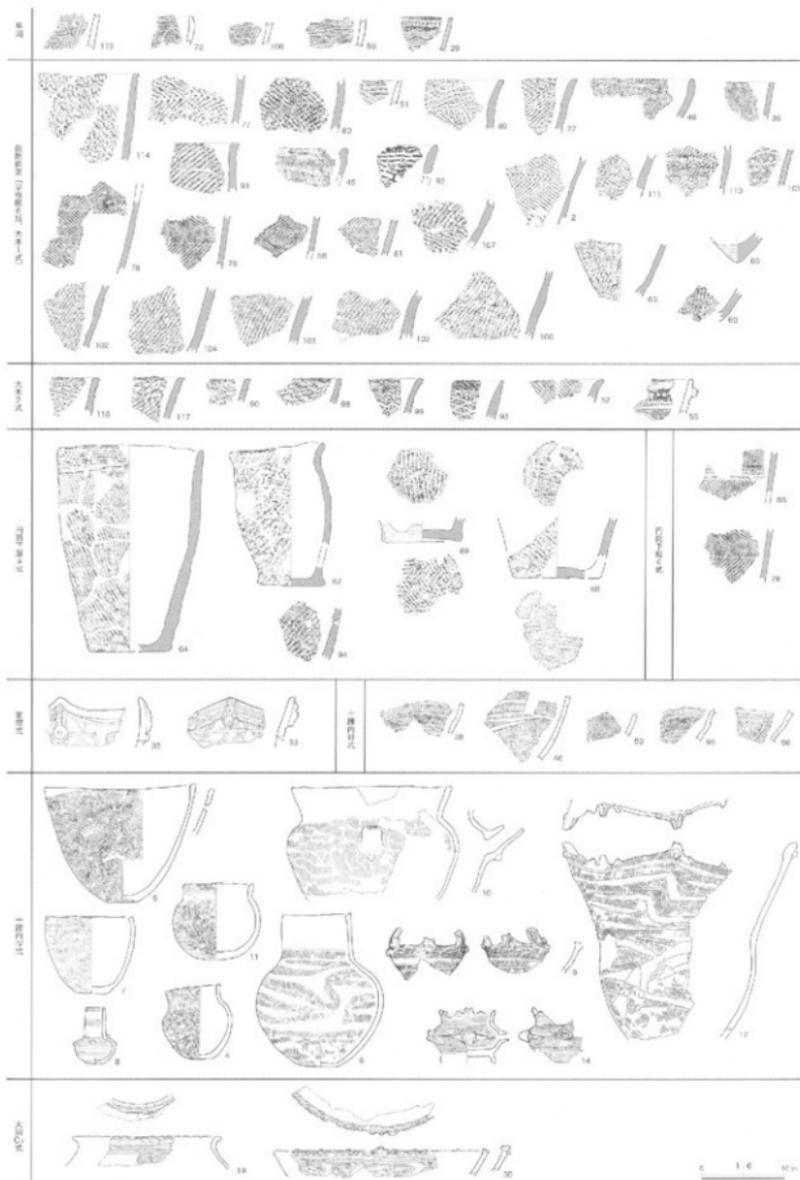
縄文土器はS I 11堆積土および中世の普請の影響が少なかった調査区「下段」中央～南東側のⅡ・Ⅳ層から主に出土している。破片資料が多いため断言できない面もあるが、次の型式に相当するものである。早期：大新町a式(押)、物見台式。前期前葉：早稲田6類[深塚田式]、大木1式、(表館式?)。前期中葉：大木2式、円筒下層a式、(大木3式?)。前期後葉：円筒下層c式。後期前葉：葎室式。後期中葉：十腰内Ⅲ式?。後期後葉：十腰内Ⅳ式。晩期中葉：大洞C式。時期幅は広く、早・前・後・晩期のものが含まれている。このうち一定の纏まりをもつのは前期の早稲田6類と後期後葉の十腰内Ⅳ式である。前者は中掬浮石層直下の黒色土層(Ⅳ層)から出土しており、胎土に繊維を多量に含む土器群である。また、押型文を特徴とする大新町a式(押)は攪乱層から1点出土したのみであるが、盛岡市周辺に分布する同式土器が県北部安比川水系まで伝播していたことを示す事例となった。なお、本遺跡の北約1.2kmの飛鳥台地Ⅰ遺跡では大新町a式に先行する日計式土器が出土している。

参考文献

- | | | |
|-------|------|---|
| 阿部勝則 | 2003 | 『岩手県における縄文時代中期の剥片集中遺構について』[紀要XⅫ] 岩手県埋文 |
| 中川重紀 | 1982 | 『桜松遺跡』[御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書] 岩文埋報第29集、岩手県埋文 |
| 田中英司 | 1995 | 『日本先史時代のデゴ』考古学雑誌、80-2 |
| 岩手県埋文 | 1988 | 『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第120集 |

2 古 代

調査では中世の堀跡・竪穴遺構の覆土から平安時代の土師器・須恵器が出土したが、該期遺構は検出されず、あくまで遺物散布地の域を出ない。ただし、遺構に伴わない形で該期土器が「散布」され



第89図 縄文土器分類集成

ているとは考えづらい。本遺跡の西側には桂平Ⅰ遺跡が隣接している。平成18年度に行われた調査では、覆土に十和田aテフラおよび白頭山苦小牧テフラを含む堅穴住居跡16棟が検出されており、10世紀代の集落跡であることが判明している（川又2007）。本遺跡の西半部高位面は桂平Ⅰ遺跡と同一地形面であることに鑑みても、中世の普請による削平以前に桂平Ⅰ遺跡と連続あるいは別個の集落遺跡が存在していた可能性は高いものと考えられる（註1）。

註

（1）調査区南側隣接地の横浜健太郎氏によれば、上段平場で須志磐破片が採取されたとのことであった。現物を実見したところ長頭壺と思われる底部破片であった。現物は他の遺物とともに当センターで保管している。

3 中世・近世

（1）遺構

中世城館にともなう遺構が検出された。普請：平場、空堀、切岸、虎口、土橋。作事：掘立柱建物
中世城館にともなう遺構が検出された。普請：平場、空堀、切岸、虎口、土橋。作事：掘立柱建物跡、
堅穴建物跡・堅穴遺構、柱穴列（欄跡）、門跡、溝跡（堀跡）。ここでは特徴点や問題点について要点を指摘しておく。

平場は、大きくは上下2段3面である。上段のSC01は本館跡の中心曲輪にあたる部分であり、その内部は空堀・掘立柱建物・堅穴建物の配置等に鑑みて、さらに細分された空間分節が行われているものと推測される。特にb地区における、2条の空堀と土橋により区画された部分には掘立柱建物の過密な分布が見られる。それらすべてが中世・城館期のものとは云えないものの、尋常ではない場の使われ方が際立っている。この部分は上段平場の中でも居住空間に相当するかもしれないが、それを跡付ける陶磁器類等の遺物が出土しないため、確証はない。なお、空堀区画の間口部にあたる土橋部分には冠木門が設置されている。a地区は虎口と内堀に挟まれ、虎口に対して側面をとる位置であることから、虎口防禦のための、いわゆる「横矢掛け」の平場であると解される。一方、下段平場は高位・低位の2面に分かれているが、段差は低く不明瞭なもので、ほとんど一体化している。上段に比して、建物等の遺構は圧倒的に少ない。ともにSD04空堀の東側（←外側）であり、下段平場は館の外郭部分にあたると思われる。低位面のSC03ではそもそも普請による削平の痕跡はあるものの、平場面は東に向かって緩く傾斜し、普請が不十分な状態であることは明白である。館の規模拡張に伴う急拵えで未完成の「平場」だったものかもしれない。同様の状況は東隣の館Ⅱ遺跡（不動館）の「障場」でも見られる。あるいは、始めからそれほどしっかりとした平場を作る必要がなかった、という可能性もある。なお、第24図に示すとおり「吉田館」は大きくは西郭（仮に曲輪Aとする）と東郭で構成され、さらに東郭がSF01・SD04を境として上段（曲輪B：SC01）・下段（曲輪C：SC02・03）の2面の曲輪に分かれており、都合3つの曲輪で構成される。佐々木浩一氏によれば、中世後期の東北北部における城館のほとんどが「曲輪を並べる」タイプに帰属する（佐々木2002）。「吉田館」の場合も小規模な曲輪を東西方向に並べる配置であり、佐々木分類における「A-3」型に相当するものである。3つの曲輪のうち、曲輪A・Cにより挟み込まれている曲輪Bが主曲輪に相当するものと思われる。

空堀は3条検出された。土橋を挟んで対向するSD01・03は上段平場面を区画する役割をもつものと推測される。一方、下段のSD04は箱堀で、上段曲輪面の防禦を担うものであろう。SD04はSF01切岸と一体化しており、切岸との間には布掘りの欄の可能性のあるSD05溝が設けられており、切岸+欄+

空堀というセットによる強固な防禦線が想定される。また、虎口は1箇所、寇木門が設置されている。ところで、空堀・虎口については、現況では全く確認できないほど埋没していた。これは人為的な埋め戻しの所産で、空堀・虎口の埋め戻し・整地およびその後の通路付け替えが行われた可能性が高い。これは、館の防禦性を喪失させる行為である。八戸市根城跡では、本丸虎口が単純な構造へと大規模改変されている事例がある（栗村・佐々木2001）。城館を棄却する際の具体的な方法としては、城館の防禦の要であり、かつ象徴である施設の破壊—空堀の埋め戻し、虎口や門の破壊等—が行われるようである。本遺跡の場合も館としての機能を喪失せしめる破却行為「城破り」の様相を示しているものと捉えられる。

竪立柱建物跡は78棟である。そのうち、上段平場SC01面の建物については平面形態から4類型に分類可能である。

- ①身舎の梁行が2間以上で間仕切柱があるもの（6棟）=SB015・019・033・038・055・062、
- ②身舎の梁行が2間以上で間仕切柱がないもの（11棟）=SB006・009・010・020・025～027・035・046・049・051
- ③身舎の梁行が2間以上で総柱のもの（15棟）=SB001～004・011・013・024・028・030・032・034・043～045・060
- ④身舎の梁行が1間の竪柱建物（30棟）=SB005・007・008・014・016～018・021～023・029・031・036・037・039～042・047・048・050・052・056～059・061・063～065

これらの建物群は概ね中世～近世に属するものと推測されるが、当然ながら個々の建物間には時期差がある。本来は同時期に存在した建物のグルーピングと変遷の各フェイズを解明せねばならないが、今回はそれに至らなかった。

竪穴建物跡・竪穴遺構は9棟検出された。平面形はいずれも方形基調であるが、SI03・06は比較的小型であり、規模に差異がある。床面に柱穴が配置されるもの5棟、ないもの4棟であるが、柱穴の有無と規模の間には相関性はない。これらの竪穴建物・竪穴遺構の堆積土はロームやシラスのブロックを含む場合が多く、人為堆積・埋め戻しと捉えられる。

（2）遺物

中世に属する遺物は中国産磁器、国産陶器、銭貨がある。中国産磁器には龍泉窯産青磁碗・皿、漳州窯産青花碗などがある。国産陶器は大窯後半期の美濃産皿と思われる底部破片が出土している。これら陶磁器は小破片かつ少量ではあるが、大きくは16世紀代に位置づけられるものである。また、中国銭および模倣銭と思われる銭貨13点が出土した。中国銭は北宋銭3種4点（天禧通寶・熙寧元寶・元祐通寶）と明銭1種2点（永樂通寶）があるが、永樂銭以外は銅銭である。他に無文銭、輪銭が出上している。

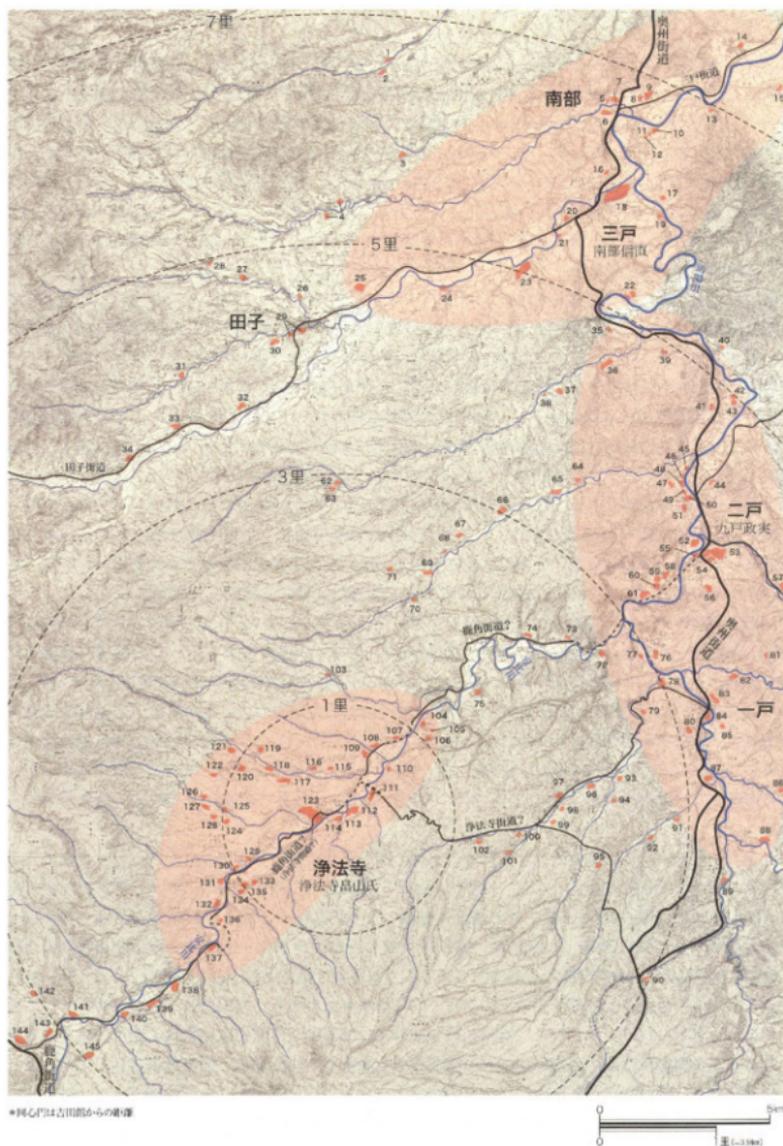
本遺跡に近い浄法寺城跡は内容確認調査が数次にわたって行われており、中国産青磁・白磁の碗・皿、瀬戸大窯期の端反皿・腰折皿・内湾皿・折縁菊皿などの陶磁器類、銭貨（唐銭・宋銭・明銭）などの14世紀～17世紀初頭と捉えられる遺物が出土した。本遺跡と浄法寺城は少なくとも16世紀代には安比川を挟んで存在していたはずである。今回の調査には主郭のうち主殿エリア（上段平場南側？）が含まれないことを加味しても、本遺跡の該期遺物量が浄法寺城に比して絶対的に少ないことは、熊部郡中の中規模領主である宗家・浄法寺島山氏とその庶流である吉田氏の勢力関係を如実に示しているものと思われる。

(3) 遺 跡

現在の岩手県二戸郡から青森県三戸郡にかけての中世城館分布を見ると、旧街道や河川沿いに実に多くの館跡が存在している。第90図に当地域における144箇所(144箇所)の城館跡および中世遺跡を示した(註1)。当地域には馬淵川が南から北へと貫流し、その支流である安比川・十文字川・白鳥川・海上川・熊原川等が合流している。平野の少ない当地域ではこれらの川筋に沿って街道が敷かれている(註2)。盛岡方面から奥州街道(奥州道中)が北へと延び、それに脇街道が連結しており、図幅内に示したものは三戸街道(八戸～三戸)、田子街道(鹿角街道?；三戸～田子～鹿角)、八戸街道(二戸～軽米～八戸)、「鹿角街道」〔浄法寺街道?；二戸～浄法寺～曲田～鹿角街道(盛岡～鹿角)に連結〕、「浄法寺街道」(一戸～浄法寺)などがある(註3)。

図示したとおり、中世城館の分布には「南部・三戸」、「二戸・一戸」、「浄法寺」という三つの中心地域がある。16世紀後葉における三戸の南部信直と二戸の九戸政実ら反信直勢の対立状況の中、安比川流域を支配地としていた浄法寺氏は地理的には九戸勢力圏の側面を衝く位置にあり、三戸南部の対九戸戦略の前線として重要な地域だったとも考えられる。かかる軍事的緊張状況を背景とするためか浄法寺町内には館跡が多く、27箇所(27箇所)の城館が確認されている。そのうち、現時点で調査が行われたものは浄法寺氏居城である浄法寺城(123)、支城である館Ⅱ遺跡(112；不動館)・太田向館(125)および本遺跡「吉田館」(114)のみで、詳細は不明である(註4)。浄法寺の館は安比川沿いの谷底平野が眺望できる高位の段丘面に点在している。浄法寺には二戸・一戸方面と花輪・鹿角方面を結ぶ「鹿角街道」が通り、さらに天台寺南側を通過し、山中を抜けて出町を経由して一戸城へと至る「浄法寺街道」もある。浄法寺城(121)を中心とする館はその街道沿いに配置されていたようである。二戸・一戸方面と鹿角方面との交通の要衝である安比川流域を支配していく中で、街道の抑えとして浄法寺氏が一族・郎党を配したのもだったのであろう。浄法寺の狭い河谷は長渡路・八幡館・滝見橋・大清水付近でその幅が極度に狭まり天険要害をなし、その要所へ街道や河川を挟み込むように対向して館が置かれており(註5)、全体として難攻易守の形勢となっている(註6)。吉田館の場合は主たる街道ではないが、東の不動館との連携の下、鹿角街道へと連結する脇街道を防備・監視する役割を負うものだったと推測される。ところで、天正20(1592)年、豊臣秀吉の命により南部領内の48城中36城が「破却」され、浄法寺城も廃城となった。町内に分布する館の多くはこの時点で「破却」されたものと思われ、吉田館は少なくともこの時点で「破却」されたであろう。

今回の調査では、吉田館の館主とされる吉田氏に関して何らの情報も得られなかった。ここで吉田氏に関して若干の補足を加えておく。菅野文夫氏によれば、天正10(1582)年の三戸南部の跡目相続に関する重臣会議(註7)の際、この評定に参加した三戸南部の一族・重臣はおよそ3つのグループに大別される(菅野2006)。東政勝・南長義・北信愛および石龜・毛馬内・楯山の諸氏らの「御一族」、次に後世「甲州御譜第」と称されることとなる石井・桜庭氏ら「譜代の家臣」、そして、下級家臣としての中規模領主庶子や小領主のグループで構成されており、吉田氏はこの第3グループに属していたと考えられる。すなわち、吉田氏は浄法寺氏の庶流として吉田館に依拠した小領主であるとともに、三戸南部家臣団中に組み込まれて南部氏の下級家臣という別の一面を併せ持っていた、ということになる。浄法寺氏は九戸の乱では三戸南部方に立ってはいるがあくまで外様であり、必ずしも利害が完全に一致している訳ではない。南部氏と浄法寺氏の狭間立って、吉田氏の立場はきわめて微妙なものだったのではないか。天正18(1590)年の九戸の乱において、吉田兵部は九戸勢に組し



第90図 禰郡の中世城館・遺跡の分布

第8表 雑部郡の中世城跡①

No	地名・遺跡名	所在地	備考(城主、遺構など)
1	大土丸城	新藤村	
2	熊田	新藤村	
3	熊沢館	上戸町	城主: 熊沢惣左衛門。
4	岡守館・熊原	三戸町	城主: 岡守弥七郎。棟は白漆。
5	小内館	海内町	天正年間、城主: 小内小四郎。
6	馬場館	南宮町	天正(1579)年、南部信綱が築城。城主: 馬場右左衛門。
7	黒野寺館 (本三ノ館)	南宮町	南部11代(昌)~24代(晴政、晴成、天文8年)家臣の改火により消失。
8	佐藤館	南宮町	城主: 佐藤氏。
9	千賀ノ城	南宮町	隆久3(1593)年、南部光行が築城。
10	大内館	南宮町	菅原氏居館。
11	熊田館	南宮町	菅原氏居館。
12	中山橋	南宮町	南部氏居館。
13	幸石館	南宮町	天正年間(1573~92年)、城主: 幸石定吉の居館。
14	畑内館	南宮町	隆久2(1491)年、南部光行の叔父阿部一左衛門の居館あり。
15	土名久草館	南宮町	城主: 土名久草(工藤)氏→菅氏(清部一門)?
16	岡守河館	上戸町	城主: 岡守河正定。平場、堀。
17	栗山館	三戸町	城主: 栗山吉康(南部信直の舅)。堀。
18	一戸城	三戸町	同前時代の遺構が穴成。16世紀後半以降、南部宗家の居城。
19	藤内館	三戸町	城主: 藤内氏(北氏一統)。
20	金原館	三戸町	城主: 石原清三郎。
21	京兆館	上戸町	城主: 菅原石原?
22	日時館	三戸町	城主: 日時氏前。
23	幸川館	三戸町	城主: 幸川又右衛門。
24	千内館	三戸町	城主: 千内氏。
25	日ノ沢館	田子町	城主: 日ノ沢左衛門? 平場、堀。
26	種子館	田子町	城主: 種子隆吉家門。
27	海地館	田子町	城主: 佐々木氏?
28	富水館	田子町	
29	田子館	田子町	城主: 佐々木左左衛門。南部信直、宗家継承者の居館。
30	藤内館	田子町	
31	相米館	田子町	城主: 相米氏。
32	原館 (工藤館)	田子町	城主: 原氏。
33	石地館	田子町	城主: 石地氏。
34	茂市館	田子町	城主: 茂市弥七。
35	海内館	三戸町	城主: 小笠原(海内)氏。天正の頃で消失。管理文書(155・159)年。
36	藤上館	三戸町	堀あり。
37	月形館	三戸町	堀あり。平場、堀。
38	荒谷館	三戸町	堀あり。
39	野々上館	三戸町	堀あり。

No	地名・遺跡名	所在地	備考(城主、遺構など)
40	下由井館	三戸町	
41	四ノ原 (幸田一統)	三戸町	堀、曲輪、土塁。上・中・下段の3段。西ノ次、惣山氏、安田一統。
42	津ノ	三戸町	堀・土塁跡あり。管理文書(159)年。
43	八ノ尾	三戸町	堀・土塁跡あり。管理文書(158)年。
44	藤野館 (小藤氏館)	三戸町	堀・土塁。城主: 藤野氏。
45	長尾D	三戸町	堀・土塁跡あり。1。管理文書(158)年。
46	長尾C	三戸町	堀・土塁跡あり。2。管理文書(158)年。
47	長々水館 (水原館)	三戸町	城主: 佐々木氏。堀。
48	河内口	三戸町	堀・土塁跡あり。1。管理文書(158)年。
49	幸の上	三戸町	堀・土塁跡あり。1。管理文書(158)年。
50	新田(新田ノ)	三戸町	管理文書(156・159)年。
51	下野	三戸町	堀・土塁跡あり。3。第1住居跡(中ノ土塁)。管理文書(158)年。
52	小樽館	三戸町	三戸町改委開館。
53	九ノ尾	三戸町	九ノ尾氏居館。堀・土塁。遺物跡など。二ノ土塁改委開館。
54	右野小館	三戸町	堀・土塁跡あり。遺跡、堀あり。九ノ尾氏居館。二ノ土塁改委開館。
55	藤野	三戸町	土塁(遺跡): 九ノ尾氏居の一。二ノ土塁改委開館。
56	村野館	三戸町	
57	藤本館 (川原館)	三戸町	遺跡、堀。
58	藤本館	三戸町	鎌倉時代の居館跡。堀、堀。管理文書(158)年。二ノ土塁改委開館。
59	右野所館	三戸町	平場、堀。
60	上野	三戸町	堀・土塁跡あり。1。堀。管理文書(158)年。右野所館と関連あり。
61	赤野館	三戸町	堀。
62	藤本館	三戸町	堀、平場。河ノ尾家臣の根拠地。
63	藤本松原館	三戸町	堀、平場。
64	下野水館	三戸町	曲輪、堀。城主: 下野氏。
65	上野水館	三戸町	
66	田中館	三戸町	城主: 田中藤正。曲輪、堀。
67	上野水館	三戸町	城主: 上野氏。
68	藤本館	三戸町	
69	藤本館	三戸町	曲輪、堀。
70	足利所	三戸町	城主: 足利氏(四ノ尾一門)→九ノ尾の居館。後野家臣・後野氏居館。
71	本出館	三戸町	
72	藤野	三戸町	堀、平場。
73	長尾館	三戸町	城主: 長尾左衛門。九ノ尾。
74	大内館	三戸町	
75	藤本館	三戸町	城主: 藤本藤正。九ノ尾。
76	藤本館	三戸町	
77	八木沢館	三戸町	曲輪。
78	藤ノ口館	三戸町	遺跡。

第9表 糠部郡の中世城館跡②

No	館名・遺跡名	所在地	備考(城主、遺構など)
79	小滝館	一ノ町	曲輪、遺構、堀。
80	西込土塀(マノ)	一ノ町	城主：西込寺氏。九戸方。塚部、堀。
81	松原館	一ノ町	
82	松山館	一ノ町	館主：松山氏。九戸方。曲輪、堀。
83	〱〱〱城	一ノ町	北野、八幡宮、淨土館、茶室加の総称。館主：戸氏。戸町政委調査。
84	野田館	一ノ町	
85	〱〱〱下野	一ノ町	寺曲輪、塚穴遺物跡。器量文調査259葉。一戸町政委調査。
86	〱〱〱飯反野	一ノ町	館主：飯反寺所門。平橋、堀。
87	〱〱〱芝ノ越	一ノ町	曲輪、築山堀、塹壕。
88	〱〱〱尾張城	一ノ町	館主：尾張重政(九戸氏一葉)。大正16年築城。一ノ町政委調査。
89	〱〱〱五月館	一ノ町	館主：小島伊兵衛(九戸の志で結城城に帰城)。行理文調査424葉。
90	新沼林館Ⅱ	一ノ町	
91	女薬師館	一ノ町	館主：女薬師。曲輪、築山堀、堀。
92	女薬師内館	一ノ町	
93	中里館	一ノ町	館主：中里大内。遺跡、堀。
94	小友館	一ノ町	曲輪、堀。館主：月家氏。浄法寺氏一族の菩提寺とも云われている。
95	平石家館	一ノ町	
96	月館	一ノ町	館主：月館直成立兵衛。遺跡、一基堀。
97	榎枝館	一ノ町	平野、平橋、堀。
98	月館中野Ⅱ	一ノ町	岡部、築山、堀、土塀。
99	内ノ沢館	一ノ町	
100	栗山館	一ノ町	
101	岩清水館	一ノ町	平野、二重堀。
102	西ノ町館	一ノ町	館主：西野与次郎。曲輪、堀。
103	川又館	二ノ市 浄法寺町	館主：川又上殿。3基?。空堀。
104	長渡館	二ノ市 浄法寺町	2基。空堀。
105	エノ館	二ノ市 浄法寺町	石段先端の遺跡。空堀。
106	〱〱〱瓦真館	二ノ市 浄法寺町	平野。空堀(二重堀)。
107	津川館	二ノ市 浄法寺町	館主：津川宗正。平野。空堀。
108	富沢館	二ノ市 浄法寺町	方形館。全周する空堀。
109	松原館	二ノ市 浄法寺町	方形館跡。平野。 館主：松原重隆(浄法寺一葉)。
110	コラスノ館	二ノ市 浄法寺町	天台寺南西側。浄法寺町政委調査。堀?(半荘合の跡の跡不明)。
111	飛鳥台Ⅰ	二ノ市 浄法寺町	築穴建物3。岩屋文調査120葉。
112	館Ⅱ	二ノ市 浄法寺町	曲輪、堀・土塀、土塀。塚穴遺物跡。掘立柱建物跡など。不動尊の塚野部分に相当。行理文調査49葉。

No	館名・遺跡名	所在地	備考(城主、遺構など)
113	小倉館	二ノ市 浄法寺町	4基(第Ⅱ遺跡含む)。空堀、土塀。
114	吉田館(カノ)	二ノ市 浄法寺町	館主：吉田兵部。浄法寺町政委調査。報告遺跡。
115	栗谷館(メカケ館)	二ノ市 浄法寺町	館主：栗谷右衛門。方形館。空堀。
116	辻手館	二ノ市 浄法寺町	"ツノ館"。
117	小野内館	二ノ市 浄法寺町	
118	アヱ館	二ノ市 浄法寺町	
119	並川日館	二ノ市 浄法寺町	平野。空堀。
120	田子内館	二ノ市 浄法寺町	平野。空堀。
121	磯田内館	二ノ市 浄法寺町	
122	深瀬館	二ノ市 浄法寺町	館主「セキロジエモンクメノス」。
123	浄法寺城	二ノ市 浄法寺町	浄法寺氏の居城。曲輪、堀、掘立柱建物など。町政委調査。
124	太田館	二ノ市 浄法寺町	館主：太田氏(浄法寺一葉)。空堀。
125	太田内館	二ノ市 浄法寺町	方形館。浄法寺町政委調査。掘立柱建物、築穴建物。空堀など。
126	上杉内館	二ノ市 浄法寺町	方形館。空堀、土塀。
127	小杉内館	二ノ市 浄法寺町	2基。空堀。
128	タテシロ館	二ノ市 浄法寺町	
129	大森館	二ノ市 浄法寺町	館主：大森氏。平野。遺構、空堀。要部1971・文化庁1984等に記載があるが、遺構調査には付録されていない。
130	小泉館	二ノ市 浄法寺町	
131	下谷地館	二ノ市 浄法寺町	
132	大清水館	二ノ市 浄法寺町	館主：大清水氏。3基。空堀。
133	土庫Ⅱ	二ノ市 浄法寺町	築穴建物20。住居跡2。掘立柱建物1。岩屋文調査別表。
134	五庫Ⅰ	二ノ市 浄法寺町	築穴建物跡。行理文調査97葉。
135	駒ヶ堀館	二ノ市 浄法寺町	遺跡。堀。駒ヶ堀氏(浄法寺一葉)。
136	柿ノ木平館	二ノ市 浄法寺町	平野。空堀。
137	下藤館	二ノ市 浄法寺町	近所九郎の平野。掘跡、空堀。
138	下ノ田館	八幡平市 田・安代町	
139	北ノ城館	八幡平市 田・安代町	堀。行理文調査438葉。
140	八幡館	八幡平市 田・安代町	
141	森ノ古館	八幡平市 田・安代町	
142	日名館	八幡平市 田・安代町	
143	〱〱〱有矢館	八幡平市 田・安代町	築穴建物跡。行理文調査303葉。
144	上の山館	八幡平市 田・安代町	築穴建物跡。行理文調査40葉。
145	小堀館	八幡平市 田・安代町	

て行動したことは史料にあり、史実らしい。先の評定の際に吉田氏がどういう立場に立ったのかわからないが、信直の三ノ丁南部家督相続後何れかの時点で九戸方へと転向したと思われるが、はたして宗家である浄法寺島山氏の意向が働いたものだったのであろうか。浄法寺氏は九戸の乱では信直派に立ったが、終始一貫信直を積極的に支援した訳ではなく、南部と九戸を天秤にかけて不透明な情勢

の中で生き残りを図る日和見の姿勢も垣間見える。ともあれ吉田兵部は九戸城籠城者のリストには見当たらず、乱後の吉田氏の動向については具体的資料を欠くため詳らかではない。三戸南部の下級家臣でありながら信直に違反したことから、おそらくは領地没収・断絶となったものと推測できる。今回の調査では館破却（城削り）について、S D 02・01の埋没状況等にそれらしき痕跡が見られるものの明確ではない。なお、近世以降も本遺跡が生活の場として利用されていたことは出土遺物から跡付けられるが、はたして吉田氏ないしはその末裔が居住していたものか定かではない。

註

- 1) 抽出に際して複数の文献を参照したが、文献による記載の有無があるもの、名称のみで内容不詳なものもあるが、その「館」も便宜的に一括して示している。
- 2) 街道の道筋は、『岩手県「歴史の道」調査報告』（岩手県教委 1979・1980・1981）、『奥州街道』（2002）、『北奥路程記』（岩手県文化財愛護協会 2002）、『二戸郡誌』（1977）等を参照し、一部については推定の上、作図した。
- 3) 街道の名称についてはそれぞれの地域で異なっており、一定していない。『鹿角街道』や『浄法寺街道』についても具体的にどの街道を指すのか、史料により異同がある。『二戸郡誌』（1977）によれば、『浄法寺街道』とは、一戸と浄法寺を結ぶ街道で、一戸・鳥海から浄法寺岡山へ越えて浄法寺宮沢で鹿角街道（現・県道二戸五（市）線）へ合流するものである。全長三里二十九町（約14.86 km）、幅二～四間（約2.6～7.3 m）の大道で、菅江真澄が一戸へと通った道である。一方、『北奥路程記』では、二戸福岡から荒原曲田（現八幡平市）へ至る、全長8里34町（34.91 km）、幅2間（2.6 m）の道、現在の県道を『浄法寺街道』と称している（岩手県教委 1981）。ここでは、江戸時代の絵図の記載等を参照して、前者の説を採用して便宜的に浄法寺街道と呼ぶこととする。なお、この『浄法寺街道』沿いには、月館（96）、岩清水館（99）、中里館（93）、小友館（94）など多くの城館が配置されており、浄法寺を経由して鹿角方面と一戸・二戸方面を結ぶ当街道の重要性が窺い知れる。
- 4) 太田向館は旧太田小学校校舎建設に先立って平成2年に調査が行われた。調査成果については未報告であるが、分布調査報告書中の記述を参照すると丘頂基部を掘切した連郭式城館であり、掘立柱建物・欠欠遺構・堀などが検出されたい（浄法寺町教委 1991）。掲載されている航空写真を見る限りにおいては、複数条の堀と柱穴多数が確認できる。また、「館」といえるのか不確かではあるが、天台寺別当杜寿院屋敷跡と伝えられるコラスカ館が旧浄法寺町教委により調査されており、縄文時代草創期の瓜形土器が出土したことは広く知られる。（中村 2000）。しかし、中興？を含む調査の詳細は未報告であり不明である。伝聞によれば、堀が検出されているとのことである。
- 5) 浄法寺城－吉田館－不動館、松岡館－宮沢館などで見られる。
- 6) 沼館、前掲書、197～198頁。
- 7) 浄法寺氏がこの評定に参列したとする史料があることから、筆者は館Ⅱ遺跡論文（岩手県理文 2006）において浄法寺氏がこの評定に参加していたと述べたが、正しくない。ここで訂正する。南部氏下級家臣であった吉田氏とは異なり、浄法寺氏は三戸南部の一族でも家臣でもないことから参列した可能性は低く、上記史料は後世の脚色である可能性が高い。

参考文献

※ 紙幅の関係で参照した調査報告書の大部分は割愛した。

- | | | |
|-------|------|---|
| 青森県 | 2000 | 『青森県史 資料編 考古4』 |
| 青森県教委 | 1983 | 『青森県の中世城館』北海道・東北地方の中世城館①北海道・青森・秋田 東洋書林、所収 |
| 一戸町教委 | 2007 | 『奥州街道調査報告書』一戸町文化財調査報告書第59集 |
| 岩手県 | 1961 | 『岩手県史 第3巻』 |
| 岩手県教委 | 1979 | 『奥州道中』、『鹿角街道』岩手県「歴史の道」調査報告 |
| 岩手県教委 | 1981 | 『浄法寺・八戸街道』岩手県「歴史の道」調査報告 |
| 岩手県教委 | 1986 | 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集 |
| 岩手県理文 | 2006 | 『館Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第497集 |

菅野文夫	2006	「中世城部の一断面」 細井計・編 『東北史を読み直す』 吉川弘文館
栗村知弘・佐々木浩一	2001	「根城跡」 藤本・伊藤編 『城破りの考古学』 吉川弘文館
佐々木浩一	2001	「柱穴群から建物跡へ」 『掘立と堅穴 中世遺構論の課題』 東北中世考古学会編、高志書院
佐々木浩一	2002	「扇の要」 『海と考古学とロマン』 市川金丸先生古希記念献呈論文集
浄法寺町	1997	『浄法寺町史(上巻)』
浄法寺町教委	1976	『浄法寺町史(資料編)』
浄法寺町教委	1991	『岩手県二戸郡浄法寺町 遺跡詳細分布調査報告Ⅰ(大字浄法寺地区)』
浄法寺町教委	1996	『浄法寺町遺跡地図(1995年版)』
浄法寺町教委	1998	『浄法寺城跡 平成9年町内遺跡詳細分布調査概報』
中村 裕	2000	「コアスカ館」 『岩手未来への道産 遺跡は語る 旧石器～古墳時代』 岩手日報社
二戸市	2000	『二戸市史 第1巻』
二戸郡誌編集委員会	1977	『二戸郡誌(縮刷版)』 名著出版会
八戸市教委	1996	「根城 本丸の発掘調査」 八戸市埋蔵文化財調査報告書54集

4 ま と め

調査成果は次のとおりである。

①吉田館遺跡は縄文時代、古代、中・近世の複合遺跡である。

②縄文時代においては、後期の堅穴住居跡を複数棟検出し、それにもなう後期後葉の遺物が出土したことから、該期の集落跡であることが確認された。また、早期～前期前半と推測される住居跡状の堅穴遺構を検出するとともに、少量ながら早・前期の遺物が出土しており、該期の集落跡である可能性がある。

③中層浮石層より下位で石器素材剥片の埋納遺構(デポ)を検出し、出土剥片から接合資料8点が得られた。層位から縄文時代早期～前期前半に属するものと推定される。掘り込みを伴うデポは類例の少ない遺構であり、貴重な資料を追加できた。

④古代については遺構が検出されず、少量の土師器・須恵器が出土したのみであるが、本来は該期の遺構が存在していた可能性は高い。

⑤城館にもなう普請・作事の遺構が検出され、ごく少量ではあるが中世の陶磁器・古銭が出土したことで、当遺跡が16世紀代を中心とする中世城館跡であることが確認された。2段3面の平場で検出された遺構は、空堀、切岸、虎口、土橋〔以上は普請〕、掘立柱建物跡、堅穴建物跡・堅穴遺構、柱穴列(横跡)、門跡、溝跡(塀跡)、柱穴群〔以上は作事〕がある。

⑥上段平場の夥しい柱穴は、吉田館が長期に亘る城館であったことを示唆している。上段平場では多数の掘立柱建物が重複しており、数段階の縄張変遷が存在していることは確実であるが、今回は詳細を明らかにできなかった。

⑦空堀や虎口についてはその堆積土の様相から、人為的な埋め戻し行為が想定される。これは館の破却、いわゆる「城破り」が行われた所産ではないかと推測される。

⑧本遺跡の城館「吉田館」の館主が吉田氏であることを積極的に裏付ける確証は得られなかった。

写真図版



吉田館遺跡周辺航空写真（上が北；昭和30年撮影）



吉田館遺跡 俯瞰（北西から）

※ 1 は不動館遺跡



遺跡近景（東/吉田川対岸から）



調査区下段 調査前（南から）

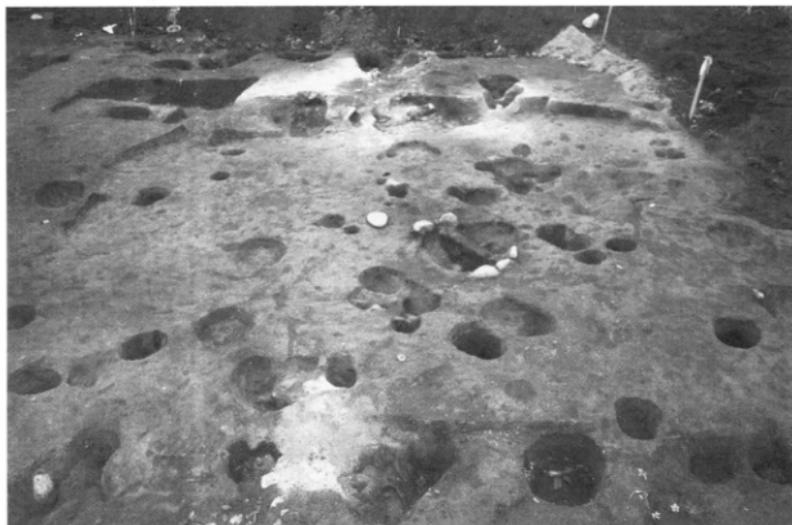


堆積土層断面（下段東側；北西から）



堆積土層断面（下段東側；北東から）

写真図版1 遺跡俯瞰・近景ほか



S 110 全景 (東から)



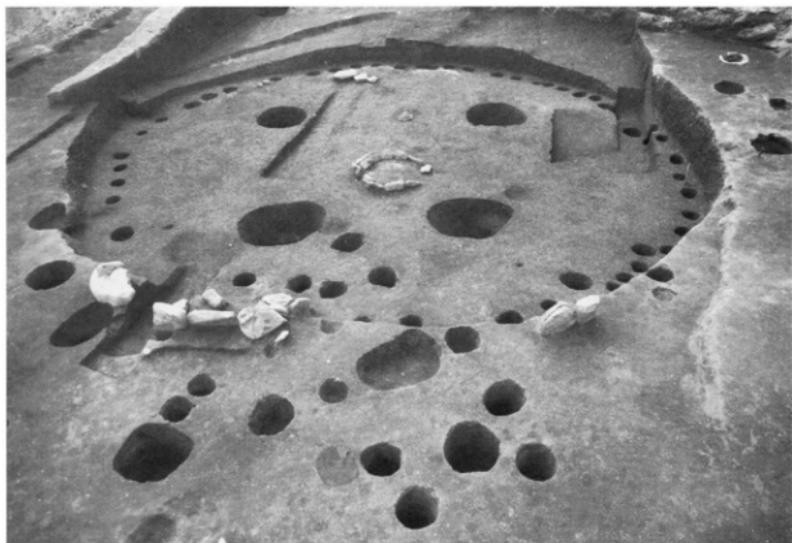
S 110 堆積土断面 (南から)



S 110 炉 (南東から)



S 110 炉断面 (南東から)



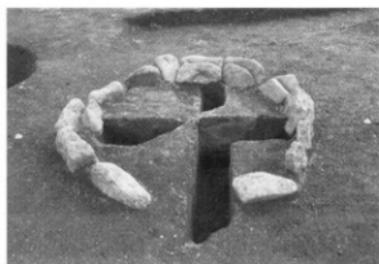
S 111 全景 (東から)



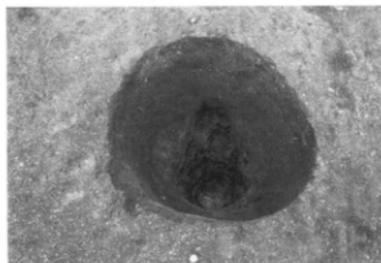
S 111 堆積土断面 (南から)



S 111 炉 (東から)



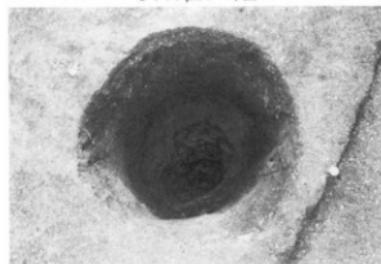
S 111 炉 断面 (北から)



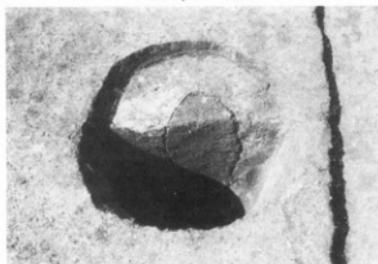
S I 11 pit 1 平面



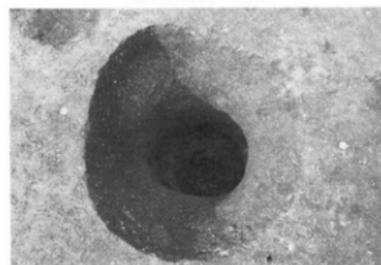
S I 11 pit 1 断面



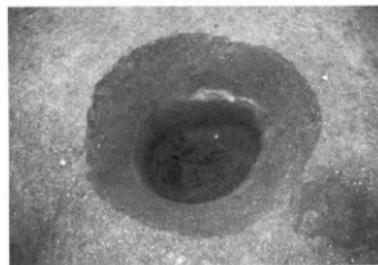
S I 11 pit 2 平面



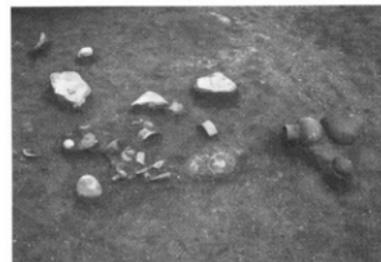
S I 11 pit 2 断面



S I 11 pit 3 平面



S I 11 pit 4 平面



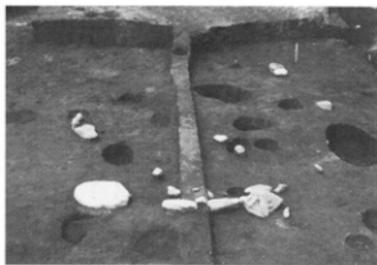
S I 11 床面遺物出土状況 (4~10他)



S I 11 遺物出土状況 (11の土器)



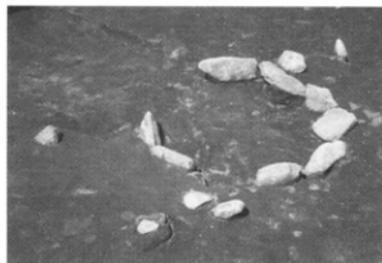
S 111 遺物出土状況 (14の土器)



SX01 全景 (東から)



S 112・SX02 全景 (東から)



S 112 炉 (南東から)



精査状況



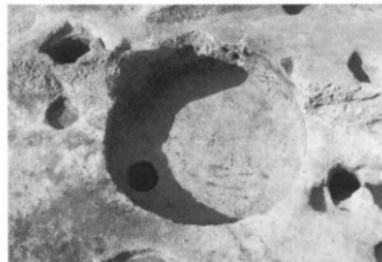
S 113 平面 (上が西)



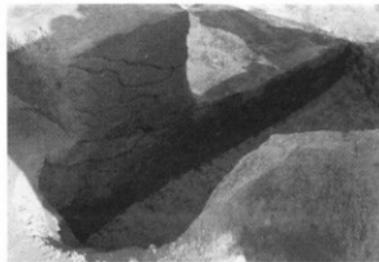
S 113 断面 (東から)



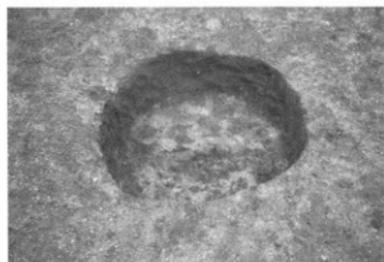
S 114 全景 (北から)



SKF01 全景 (南から)



SKF01 堆積土段面 (西から)



S K 02 全景 (西から)



S K 03 全景



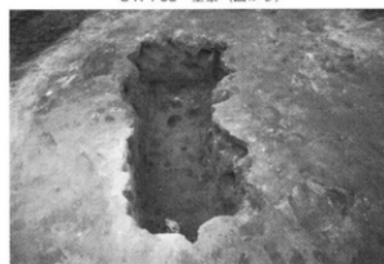
S K T 04 全景 (東から)



S K 03 堆積土断面 (北から)



S K T 05 全景 (西から)



S K T 06 全景 (北から)

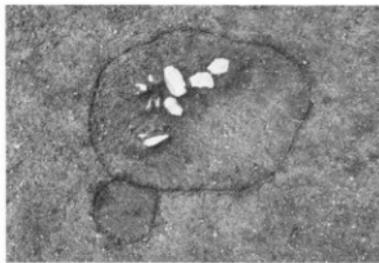


S K T 07 全景 (南から)

写真図版7 S K 02・03、S K T 04・05・06・07



SN08 平面 (南東から)



SX04 検出状況



SX04 完掘全景 (北西から)



SX04 堆積土断面 (北から)



SX04 剥片出土状況①



SX04 剥片出土状況②



SX04 剥片出土状況③



SX04 剥片出土状況④



S X 04 剥片出土状況⑤



S X 04 剥片出土状況⑥



土蔵跡 全景 (西から)



現況地形測量 作業中



SC 01西半部 (直上から：上が北)



SC01東半部とSC02 (西上から:上が北)



SC01-a 全景 (南東から)



SC01-a 柱穴群・SD02 検出状況



SC01-a 精査状況



SC01-b 柱穴群・SD01 検出状況①



SC01-b 柱穴群・SD01 検出状況②



SC01-b 西半部

写真図版 11 SC01



SC01-b 東半部 柱穴群



SC01-c 西半部 (北西から)

写真図版 12 SC 01



SC01-c 東半部 (南から)



SC02 全景 (南から；整地層除去後)

写真図版 13 SC 01・02



SC03 全景（北から）

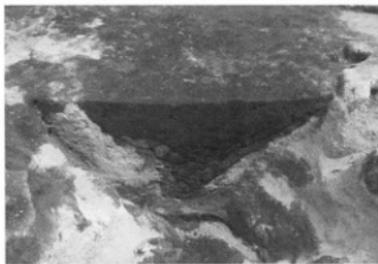


SD01 全景（南西から）

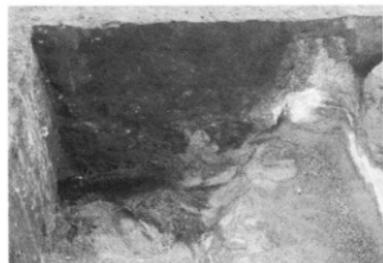
写真図版 14 SC03、SD01



SD01 堆積土断面 (北東から)



SD01 堆積土断面 (東から)



SD03 堆積土断面 (北から)



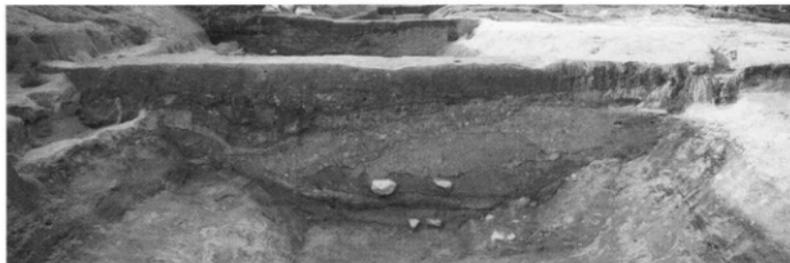
SD01 全景 (南西から)



SD03 全景 (南西から)



SD04 全景 (南から)



SD04 堆積土断面 (南から)



SD04 堆積土断面 (南から)



SF01 全景（北東から）



SD02 全景（南から）

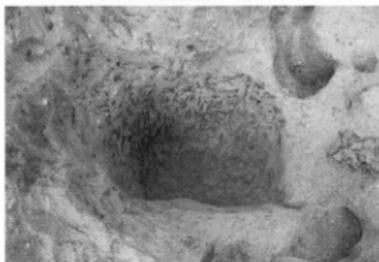
写真図版 17 SF 01、SD 02



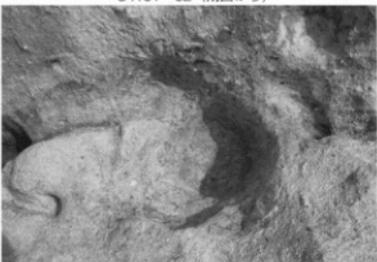
SD02 堆積土断面 (南から)



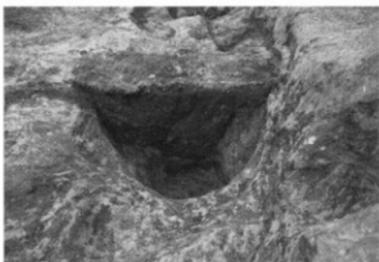
SA01・02 (南西から)



SA01・02 pit 1



SA01・02 pit 2



SA01・02 pit 1 堆積土断面



SA01・02 pit 2 堆積土断面



SD05・06 (南東から)



SD07・08 (南西から)



S 101 全景 (南から)



S 102 全景 (東から)

写真図版 19 S 101・02



S 103 全景 (西から)



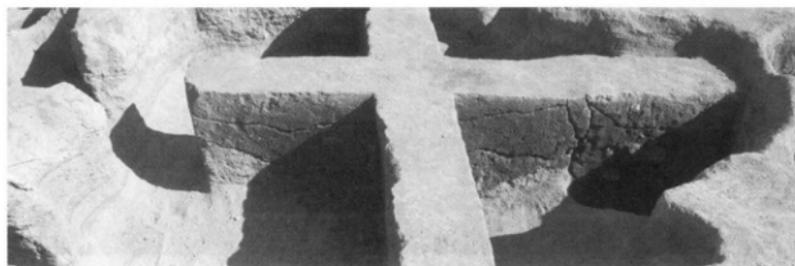
S 104 全景 (西から)



S 104 堆積土断面 (南東から)

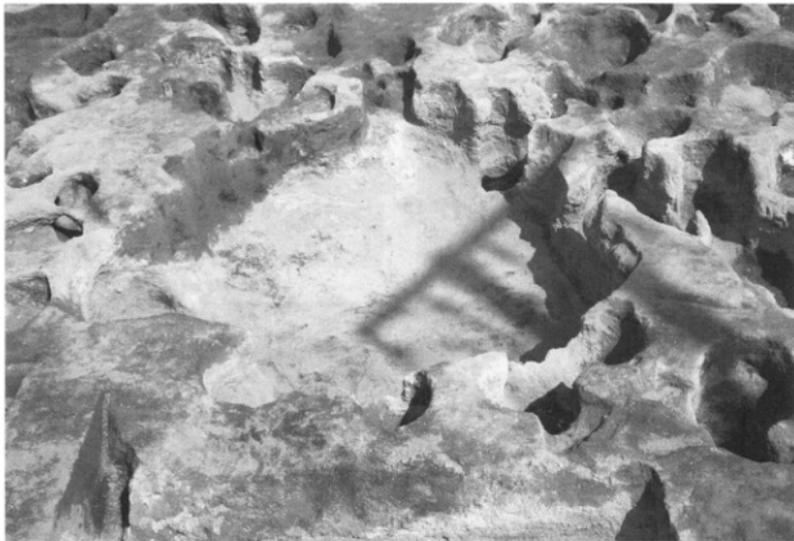


S 105 全景 (南西から)



S 106 堆積土断面 (北西から)

写真図版 21 S 104・05・06



S 106 全景 (南から)



S 107・08 全景 (南東から)

写真図版 22 S 106・07・08



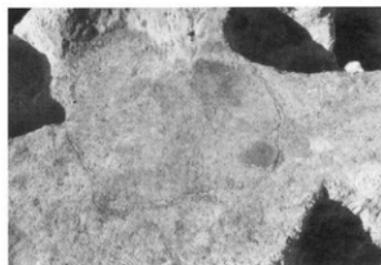
S 107・08 (北東から)



S 107 堆積土断面 (南から)



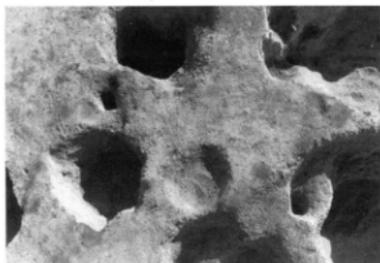
S 109 全景 (北東から)



SN01 (上が北)



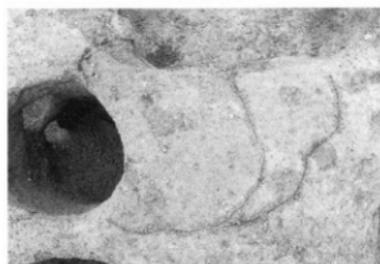
SN02 (上が南)



SN03 (上が南)



SN04 (南から)



SN06 (上が南)



虎口跡の「現道」(南/上段側から)



吉田川に面する崖部分(切崖?；北東から)



同左 確認トレンチ



現地公開① (2006/07/27)



現地公開②

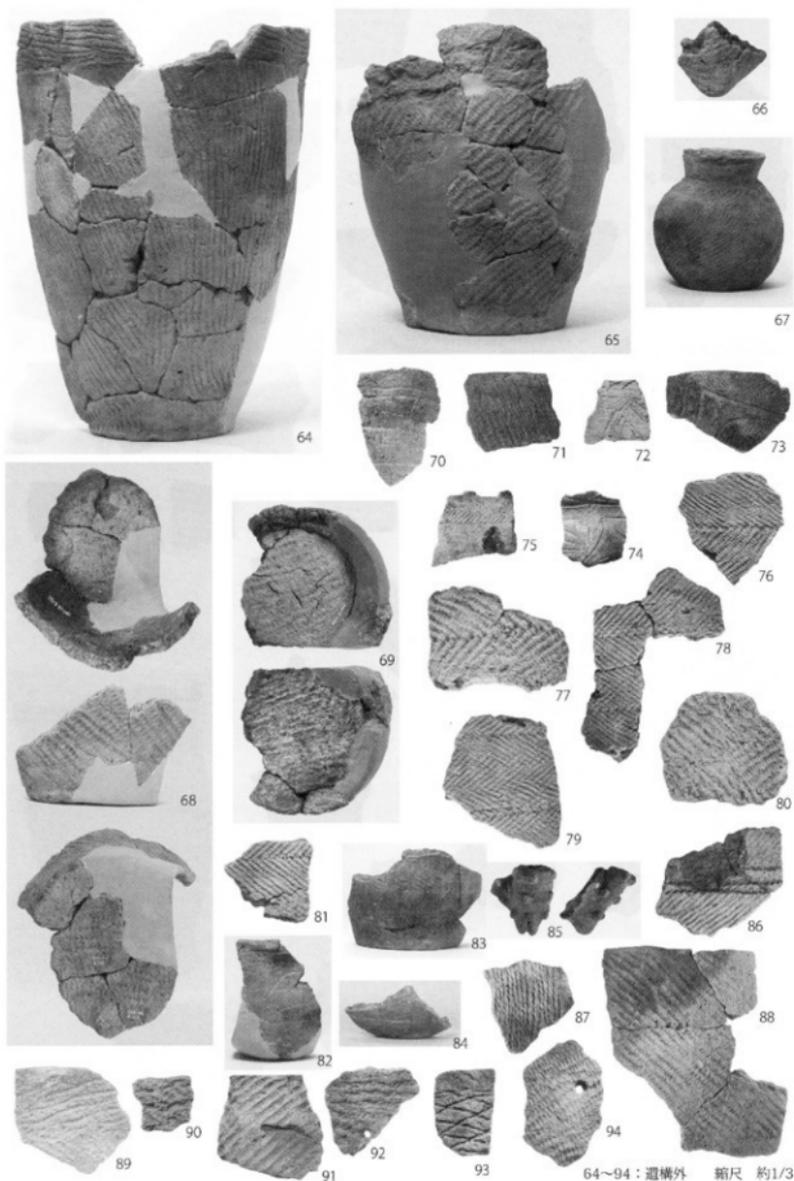


写真図版 25 出土遺物 (1)

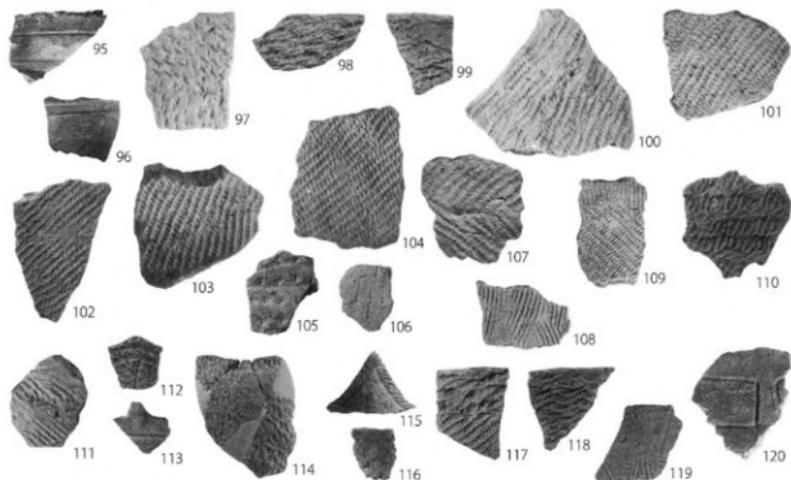


19~27: S I 11 28: S I 12 29: S I 04
 30・31: S I 06 32~36: S D 01 37: S D 05
 38~43: S X 01 44~50: S X 02 51~61: S K P
 62・63: 遺構外 縮尺 約1/3

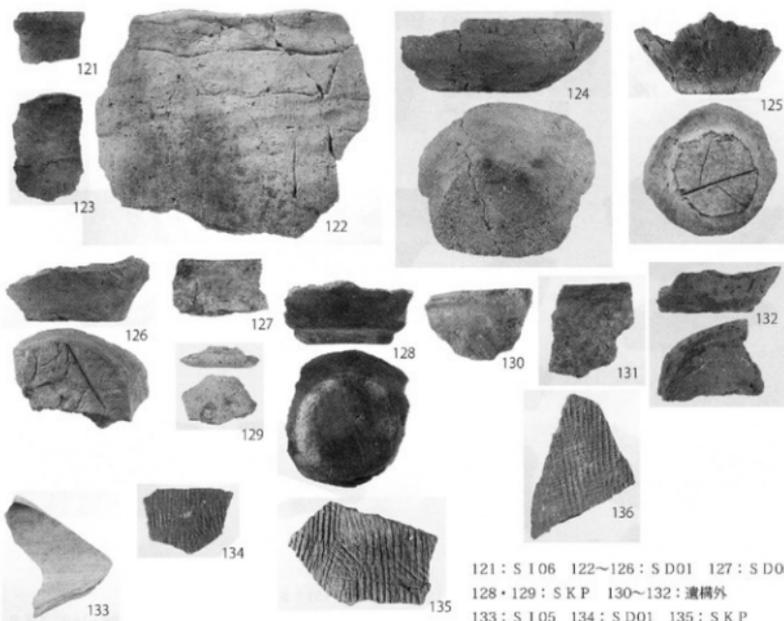
写真図版 26 出土遺物 (2)



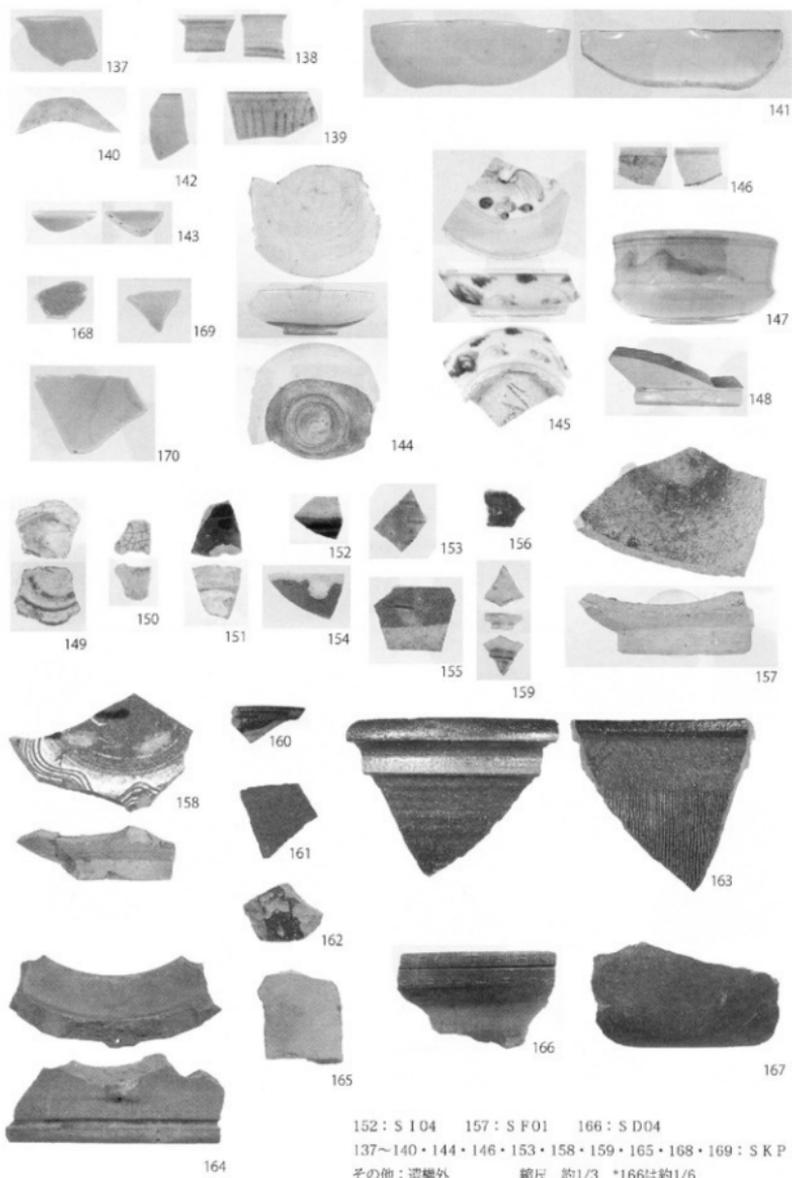
写真図版 27 出土遺物 (3)



95~120: 遺構外 縮尺 約1/3



121: S 106 122~126: S D01 127: S D05
 128・129: S K P 130~132: 遺構外
 133: S 105 134: S D01 135: S K P
 136: 遺構外 縮尺 約1/3

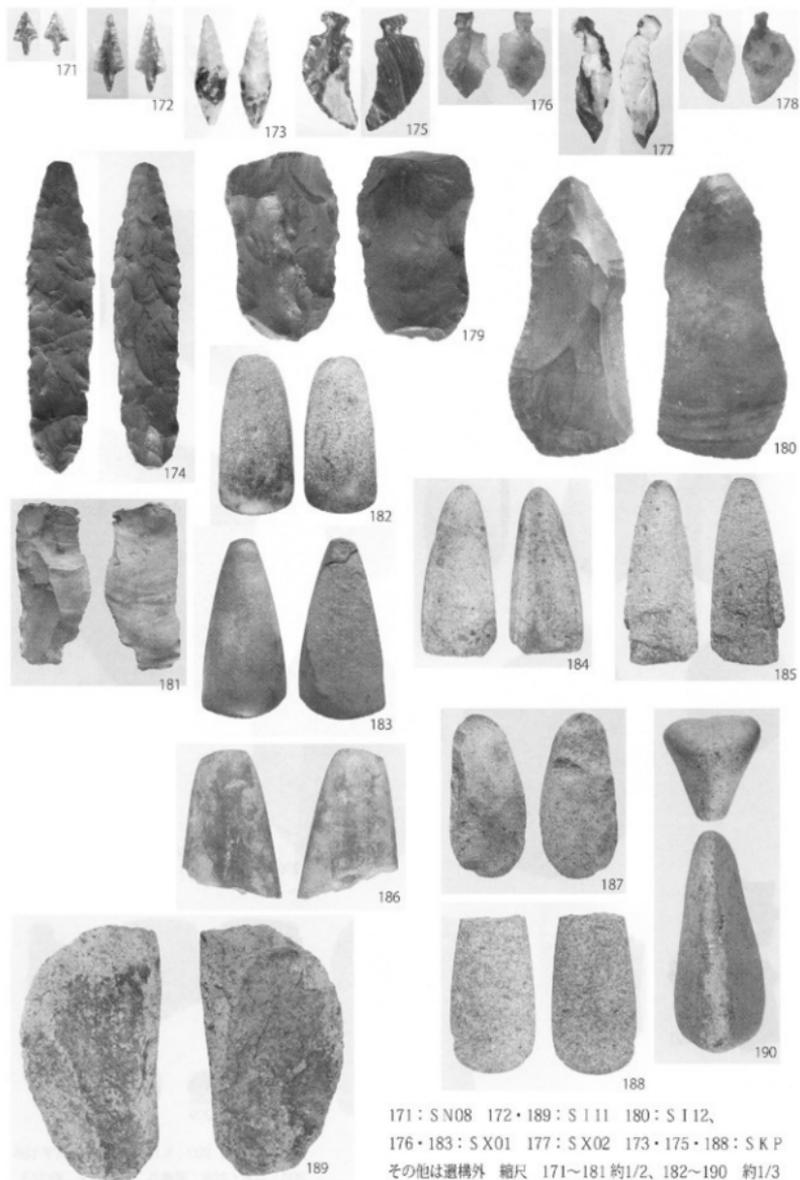


152 : S I 04 157 : S F 01 166 : S D 04

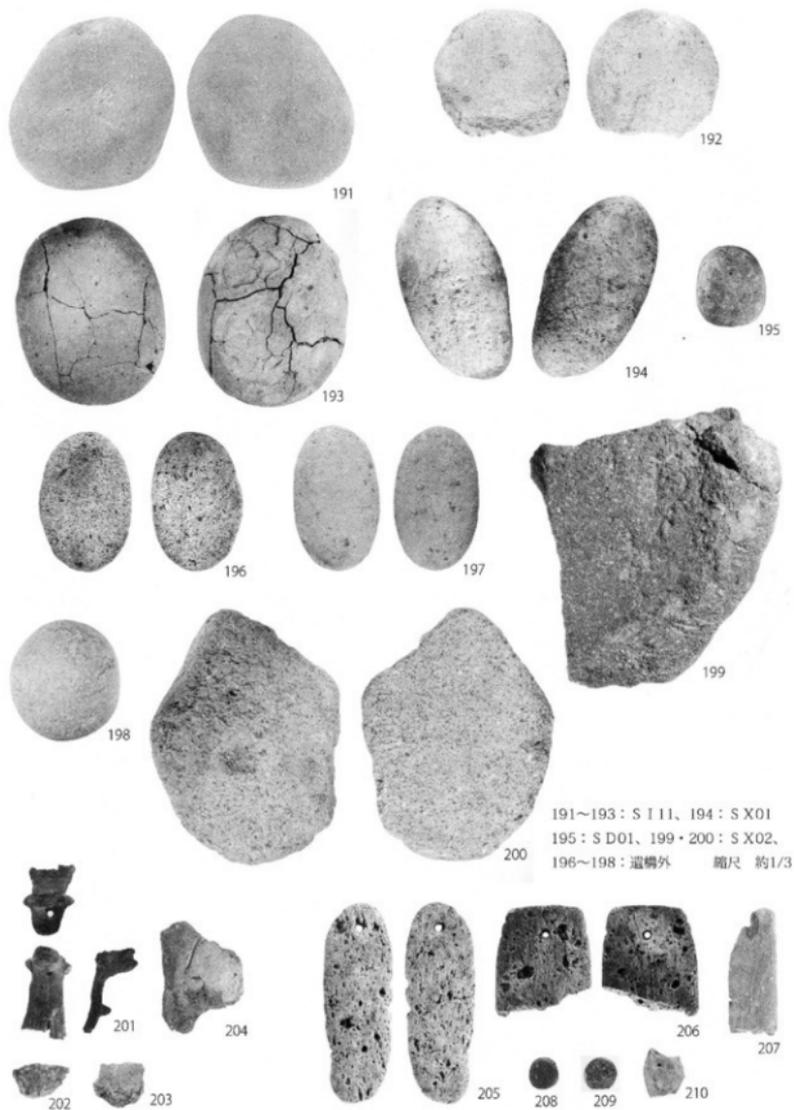
137~140・144・146・153・158・159・165・168・169 : S K P

その他 : 遺構外 縮尺 約1/3 *166は約1/6

写真図版 29 出土遺物 (5)



写真図版 30 出土遺物 (6)

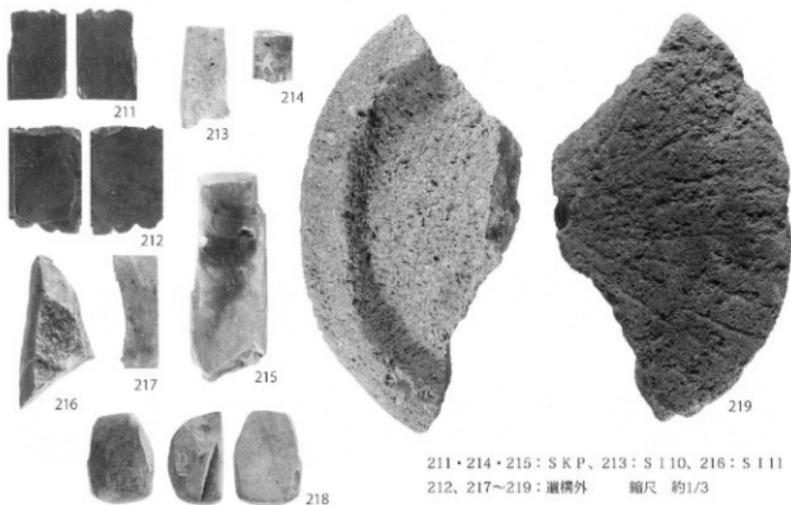


191~193 : S I 11, 194 : S X 01
195 : S D 01, 199・200 : S X 02,
196~198 : 遺構外 縮尺 約 1/3

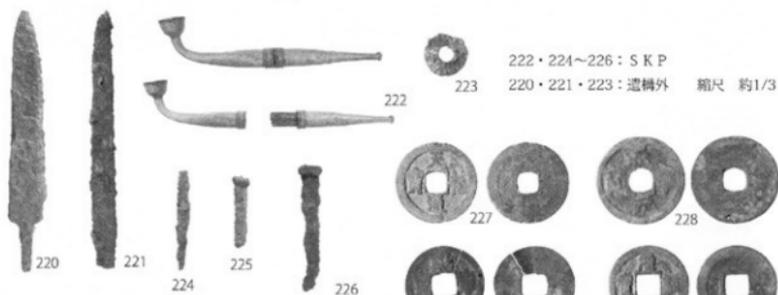
201 : S I 11, 202 : S K P 8, 203 : S D 01
204 : S D 03 縮尺 約 1/3

205 : S I 11, 207 : S D 04, 210 : S K P 126
206・208・209 : 遺構外 縮尺 約 1/3

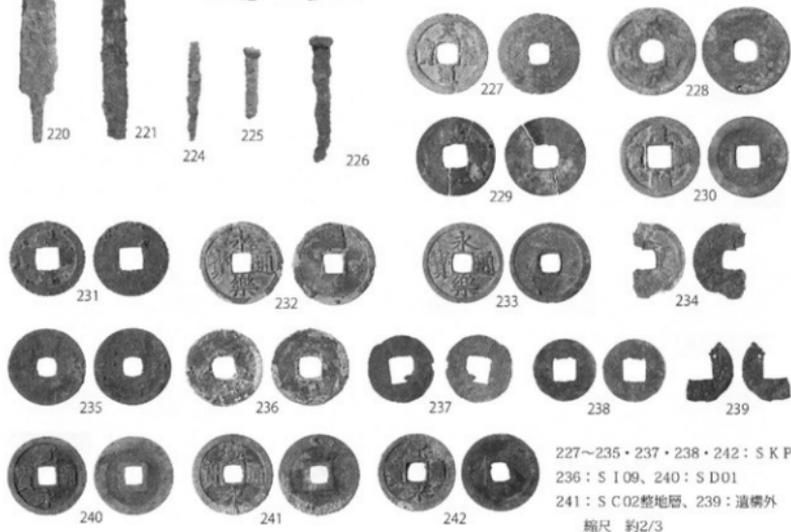
写真図版 31 出土遺物 (7)



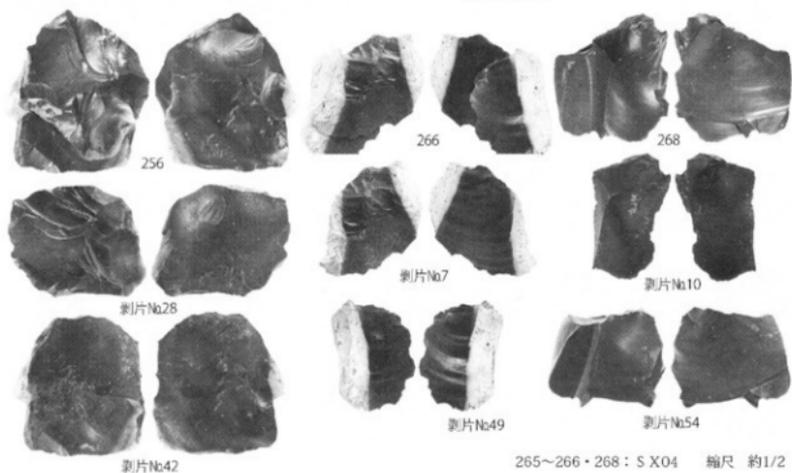
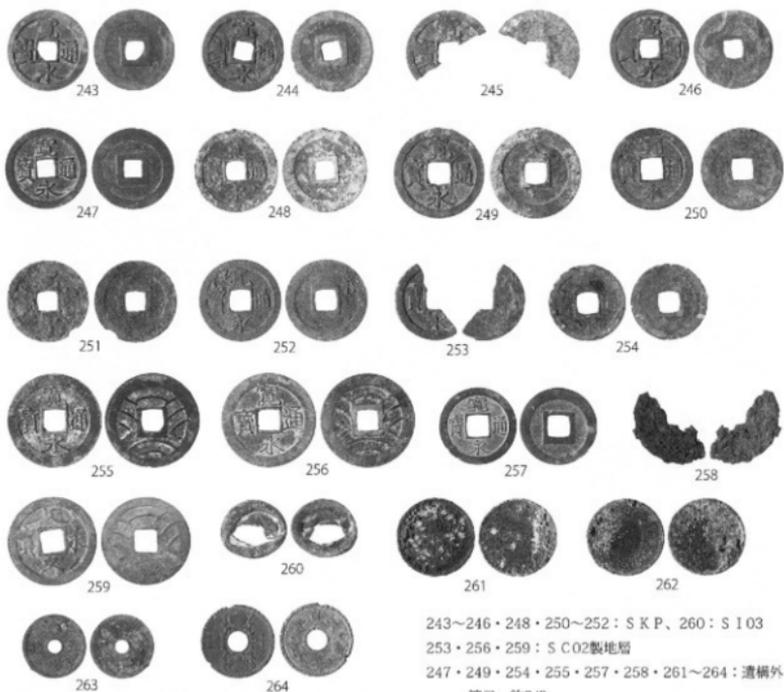
211・214・215：S K P、213：S I 10、216：S I 11
212、217～219：遺構外 縮尺 約1/3



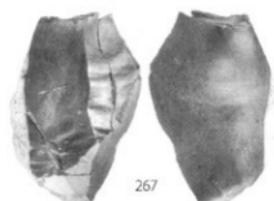
222・224～226：S K P
220・221・223：遺構外 縮尺 約1/3



227～235・237・238・242：S K P
236：S I 09、240：S D 01
241：S C 02整地層、239：遺構外
縮尺 約2/3



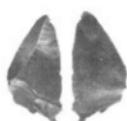
写真図版 33 出土遺物 (9)



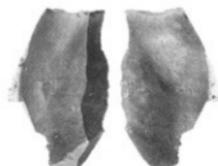
267



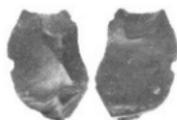
269



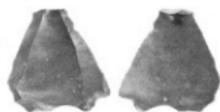
剥片No29



剥片No39



剥片No50



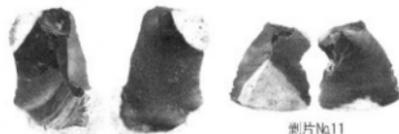
剥片No40



剥片No26

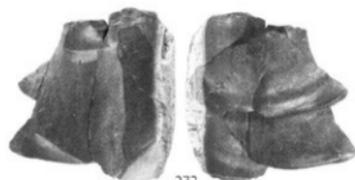


270

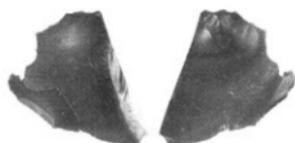


剥片No11

剥片No41



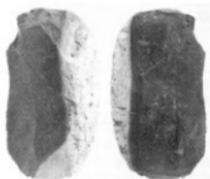
272



271



剥片No51



剥片No4



剥片No14



剥片No24



剥片No19

267・269～272：S X 04 縮尺 約1/2

写真図版 34 出土遺物 (10)

報告書抄録

ふりがな	よしだだていせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	吉田館遺跡発掘調査報告書							
副書名	主要地方道二戸五市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第520集							
編著者名	千葉正彦							
編集機関	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	平成20年 3月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° 〃 〃	東経 ° 〃 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉田館遺跡 9-1ほか	岩手県二戸市 浄法寺町大手	03213	JE37-0090	40度 10分 56秒	141度 9分 40秒	2006.05.16 ～ 2006.10.06	3,345㎡	県道改良（浄法寺バイパス建設）に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
吉田館遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡（後期） 4棟 竪穴遺構 1棟 掘立柱建物跡 1棟 土坑類 7基 配石遺構 2基 焼土遺構 1基 割片埋納遺構 1基 柱穴群	縄文土器 （早期後葉、前期前葉、後期後葉、晚期中葉） 土製品 石器 石製品	竪穴住居跡2棟は配石遺構を伴う。 土器の主体は後期後葉（十腰内B式）および前期前葉（早稲田6型）。			
	散布地	古代	土師器、須恵器					
	城館跡	中世	平場 3面 堀跡 3条 虎口 1箇所 切岸 1面 土橋 1箇所 竪穴建物跡 4棟 竪穴遺構 5棟 掘立柱建物跡 77棟 門跡 2棟 柱穴列 3条 溝跡 4条 焼土遺構 7基 柱穴群	中産磁器 （青磁、白磁、青黄磁器） 国産陶器 土師質土器 瓦質土器 古銭（中国銭、橋跡銭） 石製品（紙石、墓石等）	館の主郭の一部を調査。 柱穴総数は2,600個以上。 左記遺構には近世以降のものを含む可能性あり。 青磁は龍泉窯産、陶器は美濃人窯産が含まれる。			
	集落跡?	近世			国産陶磁器 古銭			
集落跡	近代	掘立柱建物跡 1棟 土蔵跡 1棟		古銭				
要約 吉田館遺跡は安比川右岸台地上に普請された中世城館跡である。館造営に伴う普請と作事痕跡が確認され、量的には少ないながらも中世に属する遺物が出土した。高位の平場は空堀と切岸によって区画されており、吉田館の主郭と解される。特に2条の空堀により区画された内部で掘立柱建物や土橋を構成する多数の柱穴を検出している。陶磁器や古銭（北宋銭・明銭）など出土遺物の年代観に鑑みると、館は16世紀代に機能したと推測される。一方、普請の影響の少ない低位平場部分を中心として縄文時代の集落跡および貯り場が確認された。住居跡は後期後葉および早期～前期初期のもので、後期の住居跡には配石を伴うものがある。また知例の少ない割片埋納遺構（アボ）を検出した。出土した縄文土器は後期後葉を主体に、早・前・後・晩期までのものが含まれている。								

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第520集

吉田館遺跡発掘調査報告書

主要地方道二戸五日市線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成20年3月10日

発行 平成20年3月14日

発行 ㈱岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

印刷 ㈲ジロー印刷企画
〒020-0066 岩手県盛岡市上田2丁目17-4
電話 (019) 651-6644

